

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

Minecraft ～ある冒険家の旅路～

### 【作者名】

セッキー・Jr

### 【あらすじ】

少年は旅に出た。父のように強くなるために、  
そして 世界を見るために。

## 1：プロローグ

一人の少年がその父に聞く。

「・・・パパ、パパってむかし、せかいをみてきたんでしょ？」

「ああそうさ。パパは世界のあちこちに行っているいろんなものを見てきたんだ！」

そしてくつきょうな男が語る。

「雪に包まれた森、植物がほとんど生えない砂漠、動物の豊かな森林、険しい山岳地帯・・・」

実は地の果てや宇宙彼方の星にも行ってきたんだぞ！」

「ほんとうに?！」

「本当だ!!変な宇宙人もいたぞ。こんな顔の!！」

そういつて一人の男は両方の目じりを横に引っ張った。

「あはははは!へーんなの!！」

少年は爆笑した。

「ねえねえ、もつときかせてよ!！」

「それはだめだ!！」

「ええー。なんだよお。」

「・・・続きは、おまえが大きくなってから自分の目で見るんだ。」

「・・・うん!ぼく、おとうさんみたいなぼうけんしたい!！」

「ははは。よしよし、おまえならきつとなれる。なんせパパの子どもだ!！」

そしてその夜、

男はリビングでなにか荷物をまとめているようだ。

妻がその様子を見守る。

テレビはついたままで、音声が流れていた。

(ある冒険家が無人島に古代遺跡を発見したという連絡がありました。)

その男は興奮した口調でこう伝えていました。



## 2：少年の旅の始まり

「えーと……どこにしまったかなあ……前やったゲーム……」  
少年はチェストに首を突っ込んで探している。  
母はあきれた顔をしながら言った。

「またゲームやるつもりなの？……あなたもう高校生でしょ？ちゃんと勉強」

「分かったって！いつも言われてるから……！あった！」

少年はチェストからゲームを手を取った。

そしてゲームと一緒にとれたものがあつた。

「……？なにこれ……『冒険日誌』？」

「！……それはあなたのお父さんが書いたものよ……」

「お父さん？冒険日誌？」

………！

少年は思い出した。

「……おやつのおアイス、食べるの忘」

「いやなんでなのよ!?それ見たら他の事思い出すでしょ普通！」

「なにが？なにも思い出せないよ？……そうだ、それよりゲームゲー

ム！」

少年はゲームをやり始めた。

母はただため息をつくだけだった。

その夜。

少年は夕食を食べてから自室にこもった。

「ふう、食った食った！」

ふと少年はまたゲームをやるうとチェストの中身を見た。

そこにはさっきの冒険日誌。

「……お母さんにはあんなこと言ったけど……実際なにかつかかるんだよなあ？」

少年は沈黙した。

しばらくしてから少年は部屋を見渡した。

「……お母さんは……いないと……」

また少年は沈黙する。

「……よし……」

少年は勢いよく本を開いた。

中身を読み進めると、少年の頭の中から何かが無数に広がってきた。

白に包まれた森林、肌色が無限に広がる砂漠、緑と黄、赤が美しく混ざり合う森林……

そして自慢気に話す男と、それを瞳を輝かせながら聴く少年。

それと　詳しくは覚えていないが、少年に語りかける優しく響

く声。

どこかさびしさもあった声。

なんだ……!?なんで見たこともないのに……想像できるんだ……

?

その時、一枚の紙が落ちてきた。

筆跡は「お父さん」と思われる人のものだろう。

乱雑だが、その字は丁寧なものでもあった。

一つの言葉だけであった。

「強くなれ、そして、世界の果てまで自分で確かめるんだ。」

少年は激しく後悔した。

俺は何をやっているんだ!?

なぜこんな大切なことを忘れていた!?

俺は父が大好きだった。

そして父と同じくらい冒険好きだった。

冒険が……したかったのだ。

翌日の朝、少年は荷物をまとめた。  
そしてリビングへいった。

「ああ、おはよ。今日は早いわね。朝ごはんできてるわよ。」  
「母さん!」

「えっ……!?!」

「俺、俺!」

「……旅に出る!」

しばらく母は黙っていたが、ついに話した。

「……教科書の準備はもうしたの?」

「だから母さん!」

「あなたには今もっと大切なことがあるでしょ!」

母は目を大きく開きながら言った。

「俺は……世界を見に行くんだ!」

「勉強のほうか」

「俺は!お父さんのように強くなるんだ!」

母はまた黙った。

母から大粒の涙がぼろぼろと流れた。

「か、母さん?」「ごめん。」

「……大きくなったわね。お母さんはすごくうれしい  
母は涙を拭いてから笑顔でいった。

「……缶詰めやトランシーバーはどこにあったかな?」

「……母さん!」

「あなたの強い意志をとめるつもりはないわ、ただし……」

「もう、私になにも失わさせないでね。」

「……はい！母さん！」

母は大きく手を振り、

「行ってらっしゃい！」

少年は駆けていった。

そして少ししたところできまり、  
息を大きく吸った。

「すうーっ……」

「いつてきまーす!!」

これは少年の旅路を記した物語である。

### 3：1日目の出来事

「えーと、クラフトボックスにこんな配置で・・・できた!」  
少年は海を旅するため木を伐採し、小さなボートを作った。

「後は海に浮かべて・・・いざ出発!」  
少年はボートに飛び乗った。

50年後・・・

一人の老人は海の上だった。  
ズタズタになった小さなリュックを背負っていた。

「はあ、もう少しだ・・・陸が見えてくるだろう・・・」

と言った瞬間、老人は小さなボートの上でうごかなくなってしま  
t・・・

「うわああああああああああ!!!」

・・・という夢だった

「はあ、はあ、夢かあ・・・」  
少年は陸を待っているうちに眠ってしまったようだ。  
あたりは真っ暗になっている。

夜空にはたくさんの星が散らばっている。



その星を見ながら、少年は思った。

「父さんも……」うちゃって星空を見てたのかなあ……」  
優しく、そして強かった父を心に浮かべた少年の瞳には

知らぬ間に、一粒のしずくがつつたっていた。

次々としずくと共にあふれ出す思い出。

「父さん……絶対死んでいないよね？……強い父さんなら……!!」

ジチジチ……

「!？」

少年の背後から忍び寄る謎の鳴き声。

いや、背後だけではない、左右からも違う鳴き声が聞こえる。  
ヴオオオオ……

カラン……コロン……

チャアアアア!!

一匹の蜘蛛が少年に襲い掛かった。

「うわぁー!」  
ビリリッ!!

少年の服の袖が少し破けた。

ピュッ!!

「うわわわわ」

一つの矢が少年の顔をかすった。  
切り傷から血がたれる。

「さびい……逃げろ!!」

少年はボートを全力でこいだ。

少年は謎の緑の影を見た。

シュー……

？

ここは……

すでに太陽は昇り、明るくなっていた。

目の前には砂浜が広がっている。

持ち物がすべてなくなっている。

背後では砂浜がえぐられていた。

服の焦げた部分をはたきながら、少年は思い出した。

たしか父さんの昔言っていた話では……

海の向こうの真つ暗な島には凶暴なモンスターが現れるんだ……

とあるモンスターは背後から忍び寄り崩壊を招き……

とあるモンスターは住人の家のドアを壊し襲い……

とあるモンスターは遠距離からの攻撃で惑わし……

とある科学の超電磁砲……

「なにそれ？」

「あー、ああ。これはもう少しお前が大人になったら分かるだろう。」

（ま、間違った……！）続きを言おう。」

とあるモンスターは……

終わりの世界から現れ、目を合わすと恐ろしい表情で襲うものがある。

「モンスターかぁ・・・もっと身を整えなきゃなあ・・・」

その時。

「ワン！」

「?・・・犬？」

## 4：終わりの世界

「?・・・犬?」

少年の目の前にいたのは鋭い目をした一匹の狼であった。

「ああ、あつちにあるタイガのバイオームからきたのか。よしよし、はいおっ」

「ガルルルル!」

「うわわ! 噛みつくな! いてててててて!」

その時、どこかから野太く、力強い声が聞こえてきた。

「俺は犬じゃねえ!」

「・・・?」

少年はあたりを見回した。

声から推測される男性の姿はどこにもない。

少年は首をかしげながら、自分の右耳を手のひらでたたいた。

「うっん・・・モンスターに襲われて耳がどうかしてしまったかなあ・・・」

「おい・・・」

目の前にいる狼から聞こえてくる。

少年は沈黙した。

「・・・」

狼も応答をまった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「キャ・・・」

「キエアアアアアア!! シャベッタアアアアアアアア!!!」

「第一声それ!?お前絶対ニコニコ動画毎日見てるだろ!」

「俺はライモン、昔は冒険家だったんだ。」

「え……いや……その姿でそれ言われてもなあ……信じられねえよ……」

「ハハハ……まあそうだろうな。昔は人の姿だったんだがな……」

「……なんでその姿になったんだ?」

「それは……」

「これは昔の冒険家の話。」

冒険家は洞窟を探索していた。

「松明も残り少ない……かといってもう後戻りは難しい……ん?」

目の前に見えたのは謎の石レンガで囲まれた空間だった。

「こんな洞窟の奥深くに人工的な空間があるだと……!」

そして少しいくと謎の黒い光を放つ門があった。

その周りには十二個の独特の光沢を放つ玉がはめ込まれていた。

「……」

その門に近づいた冒険家は……

「う、うわああああ!!」

漆黒の門へと吸い込まれてしまったのだ。

目が覚めるとそこは黒い柱が無数に立つ怪しい場所だった。

謎の紫色の目を持った長身の生物も無数にいたのだ。

無数の紫色がこちらを見ている。

「な……なんだ!?あいつらは……」

冒険家は怖くなり門から帰ろうとした。

が。

すでに門の上にはその生物がいたのだ。

「い……いつのまに……?」

その生物は口を開かずに話した。

「ココハ……シラレテハナラナイセカイ……」

「セカイハ……モウジキイツシヨクトナル……」

「オマエヲ……ナカマトトモニサセナイ……」

そしてとても低い声が後ろから聞こえてきた。

「ソウ……シラレテハイケナイ……」

冒険家が後ろを向いた時、もう遅かったのだった。

謎の巨大な物体に頭を強打されたのだ。

目が覚めるとそこは青空と森の中。

地上に戻っていたのだ。

体に異変を感じる。

足で立つことができないのだ。

四足であるかなければいけなかったのだ。

「・・・というわけだ。幸い、声を狼に完全に変えることはできなかったよつだがな。」

少年ははっとした。

終わりの世界から現れるモンスター。

ライモンが言っている謎の世界はたぶん、終わりの世界だろう。

父が向かった場所・・・The Endである。

「俺はその遺跡を再度探している。地上に戻った地点はまったく分からない場所だったからな。」

「本当にひどい目にあっただんだな・・・よしよし」

「おい！お、俺をなでるんじゃないやねえ！」

「あ、ごめん・・・犬だからつい・・・」

「だから俺は犬じゃねえっつーの！お・お・か・み！・・・まったく、おれは子供でもないし犬でもない、狼で四十さ・・・えふんえふん。」  
「え・・・!!」

「えーまじ四十歳？キモイ！四十歳が許されるのは、小学生までだよなー！キャハハハ！」

「文章わけわからんし！やっぱりお前ニコニコ動画観てるだろ！」

「本題に戻そう・・・おれはこの狼の体じゃまたやられてしまうだろう。」

そついうとライモンは前足と前足を無理やり合わせた。

「頼む・・・協力するから・・・な？」

「そつ言われてもな・・・俺は一人で旅をしたいんだけど」

「僕と契約して魔法少女になってよ！」  
「オマエも観てんじゃねーかよ！」

「こうしてライモンが仲間となった。



## 5：洞窟

少年がライモンと出会ってから3日……

「で、できたぁ……！」

すでに自宅が完成していたのだった。

「うむ……なかなかの出来だ。豆腐ハウスじゃないし。」

「作るって楽しいな！」

「ああ……俺もこの体になる前までいろいろ作ってきたな……」

少年と狼はずっと家を見つめていた。

「……ところで次はどうすればいいかな？」

「お前本当に何も知らないんだな……」

「だって入門書までなくなってたんだぜ？」

「まあ……次にするとすれば洞窟探索だな、まずは木炭をもっとつくらなきゃな。」

「松明は必要だしね。」

少年は森でたくさんの木を刈り取り、焼いて、松明を3スタックほど用意した。

「あそこに洞窟があるぞ。行ってみよう！」

「ちよっと待った。お前……」

「剣……持ってるか？」

「剣？」

「お前素手で戦おうとしたの!? 馬鹿なの!？」

「俺のパンチはピストルのように……」

「某大海賊時代をモチーフにしたコミックの序盤の主人公の真似しな

くていいからー！」

「いいか、洞窟は暗いだけじゃない、モンスターがうじゃうじゃいるんだ。

だからこそ万全の準備で行かなければ鉱石なんて絶対に取れないぞ。」

「へえ……てことは……食料も必要ってことか！」

「お前ってやつぁ……」

ライモンはため息をついた。

「いざー！リベンジー！」

「いやお前さつき洞窟の前しか来なかっただろう。」

「よし……入るぞー！」

少年と狼は奥へと進んでいった。

松明をおきながら進んでいくこと半日。

集まった鉱石は鉄と石炭のみ。

「なかなか見つからないな……」

「この洞窟はもしかやはずれだったのか？」

「!?なんかくるぞ!?」

カラン……コロン……

「この足音は……スケルトンだ！」

スケルトン。

遠距離まで攻撃の出来る弓矢を持っている。

その命中率はほぼ90%といっても過言ではないだろう。

「くそ……いつが出てくるとは……」  
「どうする?」

「……とりあえず剣で攻撃だ!」

「うおおおおお!」

カラン!……カラッ!

ビュッ!

「ぐほ!」

「大丈夫か?」

「……大丈夫だ、問題ない。」

某ゲームの真似をしながら少年は2回、モンスターに剣を振り下ろした。

カラッ……!

「やった!倒した!」

「おお!骨骨!」

ライモンは骨にかぶりついた。

「お前……ほんと犬だな……」

「しょ……しょうがねえだろ!本能的に動いちゃうんだよ!」

その後。

奥地からは数々の種類の鉱石。

ラピスラズリ、レッドストーン、金……

ダイヤも6つ、見つかった。

モンスターも次々と倒し、

黒曜石も手に入れた。

洞窟はまだ続いてしたが、少年は洞窟を後にした。

ここはとある廃坑。

チェストの中をモンスター達が整理しながら、

雑談していた。

「おい、このごろ、新しい気候帯が地殻変動で出来たんだってさ。」

「へえ、どんな気候帯だい？」

「なにしろ天までそびえたつ樹が生えて、新種の生物も出始めたらしいぜ？」

「へえ……今度いつてみよつや。」

「ああ……ところで、この廃坑の北にある洞窟、犬を連れた人間がほぼ制覇しちゃったらしいぜ」

「まじで!? あんな広い洞窟も明るく照らされちゃったのか……」

「あそこのモンスターがほとんど倒されたらしい……」

ガヤガヤ……ガヤガヤ……

その中で一人、黙り込んでいるスケルトン。

帽子を被っている。

「……ほう……人間か……懐かしい……」

そのスケルトンから独り言がこぼれた。

## 6：クールスナイパー

「資源はだいたいそろった。次は食糧を簡単に手に入れるようにするぞー！」

「どゆこと？」

「・・・農耕だ！」

「・・・の、のうごう!?・・・なにが濃いのか？」

「そっちの濃厚じゃない、農耕だ！」

「ええ〜？農耕ってあの無精ひげと麦藁帽のおじさんが

『今年はキャベツがよくとれる年だっぺー！』

『んだ、んだ、んだすー！』

とかやってるあれでしょ！なんか格好悪いよ・・・」

Minecraftにキャベツはありません

「えっと・・・とりあえず田舎の人たちに謝れ。そして農耕は以外に楽しそうぞー」

「・・・さあさあ、百聞は一見にしかず、百見は一行にしかず。やっ

てみるぞー！」

「おー・・・」

はじめは気に乗らなかつた少年も、日がたつていくうちに農業の面白さにのめりこんでいった。

水をやり、骨粉をまき、収穫し・・・

100日がたったある日・・・

「あははははははー！あははははははは！農業っていいねー！」  
「そうだなー！俺たちのおかげでこの世界が救われているって感じたなー！」

「あははははははははははー。」

「ビュッ！                  バスッ！」

「あぁん!!」

ライモンは「お察してください」のような叫び声で叫んだ。

「どうした!?セクスイーな声でさげんで!？」

「俺のケツに……」

「!!……これは……スケルトンの矢だ!」

「やっと見つけたよ！君が隣の洞窟を制覇した勇者かい？」

「ちやちや皮肉そうな口調で近づいてきたのは一匹のスケルトンだった。」

「農業！くるうー！いい小麦じゃないか！おいしいパンが焼けそうだ！」

でも自分の仲間の粉を使って育てるなんて、許せなく思っな〜」

「しゅめんなさい。」

「いいていいて！Don't worry!自然の摂理だからね〜」

「でも、僕が君と勝負して、勝ったらその小麦を全て僕が貰っよ〜」

ライモンはワン、ワンとほえながら、

「ほほ〜……いい度胸じゃねえか……うちの相棒をなめるなよー!」

「ほくが思った、君のほつがその子の相棒だと思っな〜……飼っ方向

性で。」

「ムキキラー！こいつむかつく！おい！やっちまえ！」

「ま、まじで！俺、絶対無理だよ！！」

「大丈夫だ、」

「俺はおまえを信じてる。」

少年はハツとした。

ライモンはあっちから俺のことを「相棒」と呼んでくれた・・・俺は信頼されている、信じられているんだ！

「・・・よし！」少年はソードを構えた。

「やるのかい？君はソードで戦うんだねえ・・・ただしスケルトンは鋭い目を見せた。」

「・・・手加減はないからねえ！」  
ビュビュビュビュ！！

次々と矢が少年に向かってくる。

「ぐっ！！」

少年は肩に2本矢を受けた。

「ハハハハ！それで終わるなんて、つまらないね！よくそんなんでも冒険家になるうっと思っただねえ！」

「こいで終わる？」

ザザザザッ！

「おおっあれは・・・！」

「何!? 2本の矢を受けてあんなに走れるはずはない！倒れるぞ！」

ザクッ！シャッ！

「ぐっ！！」

スケルトンの体は後ろに飛ばされた。そして倒れた。それと同時に、少年も倒れた。

「おまえもThe Endにいったのか!？」

ライモンは驚きの声をあげる。

「……ああ、俺は昔、村では名高い、弓の名手だったんだ……異名もつくほどだった。狙ったものは逃さない、『蜜蜂のジヨー』つてな。」

「でもさあ、なんでスケルトンと仲良くしてんだよ。」

「自然の摂理、だ。廃坑のなかではモンスターに従うしかない体だ。スケルトンは涙をこぼした。

「……自分の冒険家という信念を馬鹿にしてもな……!」

犬もつられて涙が出た。

信念を捻じ曲げられたものたちは泣く。

少年はいい言葉が見つからず、黙り込むだけであった。

夕方、スケルトンは廃坑に帰っていった。

ライモンももう涙を流していない。

帰り際のジヨーの言葉が聞こえてくる。



「よし……充分ないた。……今日はありがとよー！」

「……ああ、いいんだ。俺も話し合える仲間と出会えて嬉しい。」

ライモンは涙を拭いた。

「君も本当にありがと。俺を倒してくれた。こんな奴は初めてだ  
」！

「ああ、もうお別れだね。」

「俺は口下手でね……自分の気持ちが言えないんだ……最後は嘘で  
別れよう……」

「もう絶対！絶対こねえからな！」

「ああくん！絶対何回もくるな！」

ジョーは愛情のたくさんこもった嘘で別れた。

「お前らなんて！大嫌いだあああ！」

少年とライモンはこれに答えた。

「俺もだあああ！」

## 7：守られし村（前編）

少年は牧場を作っている最中であつた。

近くの草原から茶色や灰色、白の毛の羊、

白と黒のマーブル模様の牛や鶏を、小麦を手につれてきていた。

「ほらほらこつちこつち・・・ライモン、

お前こつち観てると羊を追いかける犬みたいだな。」

「だあから俺は犬じゃねえ、鋭い牙持つ狼だつーの！」

「犬」は力強くほえながら、牙を見せつけた。

「つい間違つちやうんだよなあ・・・まあいいか！」

「よくねえ」「じゃ、また第二軍つれてくるから！」

・・・つてかさえぎるんじゃねーよ！」

少年は草原へ走っていった・・・ッ！

と思つた瞬間、興奮しながらこつちへ戻つてきた。

「おい！こつち来てみるよ！」

「おい、どうしたんだよ・・・」

少年が指差す。

そこにあつたのは家であつた。

もちろん少年が建てたのではないし、何軒も立ち並んでいたのだ。

「人も住んでいるみたいだぞ・・・」

「こいつは驚いた・・・まさかこんな大草原の中にポツンと・・・」

近づくとやっぱり村のようだった。

するとそこに、しゃがれた老人の声がきこえてきた。

「ようこそ旅人のお方様。」

「あ……どうも……」

「ワン！」

ライモンは驚かせてはいけないと狼のふりをしているらしい。

「みなさん、旅人のお方様がいらっしやいましたよ！」

家の中からはたくさんの人が出てくる。

肉屋も、神官も、子供たちも……

「」「ようこそ……ストート村へ……」

「わー！ワンコだぁー！」

「すっげー！はじめてみた！」

「ほらパン、いる？」

（早く行ってくんねーかな……）

ライモンは子供に囲まれていた。

「お手！お手！」

「ちんちん！ちんちん！」

「ブレイクダンス！」

（おい！いくらなんでもブレイクダンスはできねえだろ！）

「はやくやってよー！」

「ねえねえ！」

「ワンコー！」

（……ああもう……）

「俺はワンコ……モガッ！」

少年は犬の口を押さえた。

「あれ……？ワンコじゃべったー？」

少年はごまかした。

「お・・・俺はワンコが好きなんだー  
子供たちは首をかしげた。」

「・・・へんなお兄ちゃん！」

「旅人のお方様！休憩の準備が整いましたぞ！」

「あ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

「モガガ！モガッ！」

「ストート村？」

「その名前は私が名づけたものです。この村は

ゾンビの来襲、雨風に何度も耐え抜きながら発展した村なのです。」

「なるほど・・・」

「ここは鍛冶屋のバルコニー。少年と狼はくつろいでいた。

ライモンは犬のえさをがっがっ頬張っている・・・ふりをしている  
のだろうか？

「ゴツッ・・・ゴツッ・・・ゴツッ・・・ゴツッ・・・」

「!?!」の鈍い音は!?!」

ドアが勢いよく開いた。

「敵襲だ！狼、いけえ！」

「ワワワワン！」

「待ってください！それはこの村の守護者なんです！」

「・・・守護者!?!」

「これは50年も昔の出来事・・・」

村長はその頃10歳という村の子供であった。  
そして、誰ともなじめない、臆病な子供でもあった。  
しかし、それと同時に、器用な手も持っていた。  
そのため、いつも一人、さびしく花を摘み、花で輪を作ったりして  
いたのだ。

そんなある日。村の採掘者が崖を掘っていた時・・・  
「……………これは……………！鉄の人形！」

巨大な鉄の人形。このニュースは村中に広まった。

それからまたある日、臆病な子供は母親からキノコを採ってくるよ  
うにと

命じられた。

「あかキノコかあ……………どこにあったかなあ……………」  
少年が考えながら歩いていると、そこには採掘者の掘った洞窟が  
あった。

「てっのおにんぎょひびきをってどんなのかなあ……………？」  
少年は洞窟へと歩を進めていった。

その背後からの赤い視線に気づかないまま……………

## 8…守られし村（中編）

幼き子供は洞窟へと向かう。

奥へ、奥へ、奥へ……

そこには鉄の人形がずっしりと座っていた。

「これかぁ……」

そこに、水脈から垂れてきたのだろうか。

水滴がちょうど人形の目のあたりに落ちた。

幼き子供にはそれが一人で泣いていたように見えた。

「だいじょうぶだよ。なかないで。これ、あげるからさ。」  
と言って、子供は一輪の花を見せた。

ビチュン……

金属音が聞こえたその途端、人形の目は赤く光った。  
そして轟音が響き渡る。

ゴトゴトゴトゴト……

「!?な・・・なんだ!」

人形は立ち上がった。

「わあー!」

子供はしりもちをついた。

手からこぼれた花を、人形は手に取った。

花をいろいろな方向から見て首をかしげている。

「分からないの?・・・それは「はな」っていうんだよ。

えーと・・・きれいで、かわいくて・・・」

子供は説明の言葉をかんがえて・・・

「・・・すきなひとにわたすものなんだよ!」

「・・・スキ・・・バ・・・ギト?」

「ちがうよ、す・き・な・ひ・と!」

「・・・スキ・・・ナ・・・ビョ?」

「おいしいだよなあ・・・す・き・な・ひ・と!」

「ガン・・・モ・・・ドキ?」

「なんかすごいはなれちゃった!なんでしってただよ!」

「ぼく・・・きみのこと・・・すき・・・だから・・・ともだちに・・・なる・・・」

「トモダチ・・・」

人形は考えながら、ひらめき、

洞窟に生えていたキノコを渡した。

「あ、ありがとう！・・・それは「はな」「じゃなくて」「きのこ」ってい  
うんだよー！」

「キ・・・ノ・・・コ？」

「アハハハハ！またまちがってる！」

洞窟から笑い声が響く。

「じゃあ、もうかえらなくちゃ！またあしたくるよー！」

「・・・アシタ・・・？」

「日がおちて、また、のぼったときだよ」

「ヒ・・・ツキ・・・ヒ・・・」

「そう！日がおちて、月がのぼっておちて、日がのぼるときー！」

「・・・アシタ！」

「うん！あした！」

子供はキノコをもって、洞窟から去って行った。

「うわぁあああああー！」

人形は振り向く。洞窟の手前のほうだ。

人形は走る。轟音を響かせながら・・・

「トモダチ・・・アブ・・・バイ！」

3匹の蜘蛛が子供を襲う。

「ギシユウー！」

「うわっ！」

子供の服が破ける。

「えーん！えーん！ー！」

まだ10歳の子供は泣く。



「ギシュシュシュ!!」

「グシュ!」

「わああああん!」

「ゴオオオオン!

「クシュウウ・・・」

「ギャシュウウ・・・」

「人形!」

「トモダチ・・・マメル!」

鉄のパンチが舞う。

ガン!

ゴッ!

「クシュウウウウ・・・」

子供は見入っていた。

「このおにんぎょうさんはゆづきがあるんだ・・・!」

「ぼくもこんなゆづきもちたい!」

「なみだがとまらないよ・・・」

「・・・ありがとう!」

子供は人形に飛びついた。

それから何ヶ月たっただろう。

周りの目も気にしないまま、

子供は毎日人形に会いに行き、  
名前もつけた。

友を守る正義の怪物。「ゴーレム」と。

子供はゴーレムと共に言葉を学び、

積み木で遊び、花の輪の作り方を教えたりしていた。

そんな幸せの毎日。まだ幼き子供にはそれが永遠に続く……と思っ  
ていたのだ。

それから1年。

子供は少年と呼ぶほうがふさわしい年齢になった。

探掘者は毎日自分たちの仕事場の洞窟に

少年が来ることに非常に気になった。

「おい、あの小僧はまた洞窟に入っているのか。」

「なんだろうな、『こっちにきちやだめ！』って言いやがる。」

「まさか金がダイヤでも見つけたから、

毎日少しづつ素手で掘っているんじゃないか？」

「俺が見てくるよ。」

探掘者は少年のいる洞窟に入ってしまった。

「おい！ビッグニュースだ！」

「なんだ!」「どうしたんだよ!」「

「鉄の人形が……動いてやがる!」

「「「な、なんだってー!?」「」」

「まさかあの人形がうごくなんてなー!」

「びつくりだな!」

「そ・こ・で・だ。うまい話がある。

あの人形を隣町のおもちゃ屋に売ってくるんだ!」

「なるほど!動く人形!これは大富豪が買ってくれるだろう!」

「しめしめ・・・さっそく明日の夜・・・決行だ!」

「じゃ!またあした!」

「ジャ・・・ネ・・・!」

少年は洞窟から去っていったと同時に、

探掘者は洞窟の奥へと向かった。

人影を見たと同時に、ゴーレムは動かないふりをしていた。

「動かないふりをしなくても大丈夫だ・・・一緒に話そうじゃないか。」

「・・・」

「もうお前が動くことはばれているんだよ!」

「・・・オマエハ・・・ダレダ・・・」

「ただの通りすがりの探掘者・・・いや、

もうすぐ大富豪となる男、ととらえてもいい!」

「ドウイウ・・・トダ・・・?」

「何・・・って・・・もうすぐお前は大富豪の家でこき使われるってことだよ・・・」

俺がお前を売るんだからよ!ハハハハハハ!」

「……トモガ……イル……ワレト……オナジ……ヒトリ……  
……ダカラ……イクモンカ……！」

「おいおい！あいつを友だと思ってるのか？」

採掘者は人形に指をむけながら罵った。

「人形が人間と友達になれるわけないじゃないか！

人形つてのは人間に「遊ばれる」ためにあるものさ！

馬鹿らしい、馬鹿らしい！ハハハハハハハハ！」

ゴーレムは目を大きく見開いた。

「あいつは「一人」だからお前と友達になれるって

「ただ妄想」していただけなんだよ！それをお前は気がついてない！

脳みそなんてろくに入ってるない馬鹿だからな！」

ゴーレムの表情は険しくなる。

「……タダノ……モウソウ……ジャ……ナイ……アノコハ……

ワタシヲ……コンナスガタノワタシト……シタシク……シテ

クレター！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「え、え？」

ゴーレムは叫んだ。

「……オマエナンカニキメテモライタクナンカナイ！」

「ひい……」

採掘者は涙目になりながら、

「そ、それがどうした！……ここの怖くなんかないぞお！  
覚えてろ！おまえなんかスタンガンで一発だ！  
へーん！メメー！（ママーー！）」  
と去っていった。

ゴーレムはオーバーヒートし、一夜が過ぎた。

「ワレ……ニンゲント……トモニ……イキラレル……？」

「ど、どうしたの？来た時にオーバーヒートしてたし……

扇風機あてつづけたら直ったけど……」

「キノウ……バカニサレタンダ……」

ゴーレムは昨日の出来事を話した。

ゴーレムの話は終わり、少年は沈黙したままであった。

「……クヤシカッタ……クヤシイ……」

ゴーレムは涙を流す。

数分かして、少年はあまりの悔しさに歯を食いしばった。

「……この村を一緒に出よう！君を売らせはしない！

今日の夕暮れ時がチャンスだ！」

少年の目には勇気が宿っていた。

夕暮れ時。

一人の少年と巨大な物体。

一人の少年は周囲を見渡し、巨大な物体に手招きした。  
巨大な物体は後をつく。

そのまま、広い草原へと駆け出していった。

少年は木材を置き、小屋を作った。

松明もすっかりおいた。

「ちょっと狭いけどここが僕たちの新しい家だ！」

「……………」

ゴーレムはうつむいたままだ。

(人形つてのは人間に「遊ばれる」ためにあるものさ！)

(お前と友達になれるって「ただ妄想」していただけなんだよ！)

(人形が人間と友達になれるわけじゃないじゃないか！)

昨日の言葉がコンピュータに響く。

「……………大丈夫だよ！」

少年は笑顔で言う。

「僕等は心が通じ合っているじゃないか！」

「……………ウ……………ウ……………」

「……………アリガトウ！」

ゴーレムは少年を抱きしめた。

「ちよ、おま、苦しい、ガホ！」

「……………！……………チヨット？……………ダイジョウブデスカー!？」

ゴーレムは泡のはいた少年にあせていた。

## 9：守られし村（後編）

少年と鉄の人形の二人だけの生活が始まった。

二人で木を切ったり、食糧を確保したり、

鉱石をたくさん採り、ある夜にはゾンビと戦い・・・

そんな毎日の忙しい日々の中・・・

「・・・カマド・・・ココ・・・デ・・・イイ・・・？」

「うん、そこにおいとして。俺は牛を狩ってくるよ・・・」

ゴーレムには少年の体が一瞬ぐらつくのを見た。

次の瞬間。

少年はふらっと体が横に傾き、

そのまま床に倒れてしまった。

「・・・ワレ・・・ノ・・・トモ・・・!」  
ゴーレムは少年に駆け寄り、額に手を当てた。

ひどい熱である。ゴーレムはどうしていいのかわからなかったが、ひとまずベッドに寝かせ、氷を叩き割り、額にのせた。

「ダイ・・・ジヨウ・・・ブ・・・?」

「ああ・・・ただの熱だ・・・ハア・・・ハア・・・」

「ワレ・・・イチバン・・・ワルイ・・・ワレガ・・・キラワレテ

「うるさー!」

・・・!

「ゴーレムは一喝され、ひるんだ。

「君は何も悪くない!自分を責めるんじゃない!

嫌われることが悪いなんて誰が決めた!?

もし天が決めたというなら・・・!

この世を創りあげた者が決めたとしたなら・・・!

俺は違う世界に生まれたほうが数倍、数百倍良かった・・・!」

ワレハ・・・コノコノタメ・・・ナニガ・・・デキルノダロウカ・・・

コノコハ・・・マエマデ・・・トテモ・・・オクビヨウ・・・

コノヨハ・・・ワレヲ・・・ハイジヨ・・・シタ・・・



ユウイツ・・・コノコハ・・・ワレヲ・・・ミトメタ・・・  
シナセテハ・・・イケナイノダ・・・！

それから二日経った。

ゴーレムは看病を続けたが、

一向に良くなる気配はなかった。

むしろ、熱はあがるばかりだった・・・

三日目の夜。

とうとうゴーレムは決意した。

このままではこの少年は良くなるはずがない。

・・・医者をつねるのだ。

ゴーレムは村まで全速力で走った。

矢は飛び交い、後ろでは爆破音がなり、蜘蛛も飛び掛る。

その攻撃全てをなぎ払い、ついに村に着いた。

だが・・・忘れていたのだ。

そこに立ちはだかっていたのは採掘者たちであった。

「よぉ・・・向こうのほうでガタンゴトンと音がしたと思ったら・・・

やはりお前だったのか・・・」

右手にはスタンガン。一人の採掘者が指を動かす度に、

青白く光る電流が走る。

「ハハ！よくここまで一人で生きてきたものだ・・・！

だがここまでだな・・・お前は天国で一人さびしく生きていくんだ

からよ！

・・・おっと、天国に行っている時点でもう死んでるか・・・」

「ハハハハハハハハハハ！」

採掘者たちは笑う。

「・・・ナニガ・・・オカシイ・・・!!」

ゴーレムの目はどんどん明るくひかり、  
何かの噴出す音が間接から聞こえる。

「トモガ・・・ヒトリニナルコトノ・・・ナニガオカシイ！」

ゴーレムは突進していった。

「馬鹿な奴め！この電流でお前はイチコロだ！」

ビリッ!!

「・・・キギキギ・・・」

ゴーレムから機械音が聞こえてきた。

少し動きが鈍くなっている。

「これでどうだああああー」

一人の採掘者がゴーレムに向かってピッケルが飛んでくる。

グシャ！

「うわぁぁぁぁー！」

採掘者はぶっ飛ばされた。

「……………？」

「何だこのガキイ!？」

どうやら採掘者に向かって8人ほどの少年たちが卵を投げつけたらしい。

「…………俺らはいつが何で洞窟に入ったか知ってた。」

あいつは友達がいなかったからなんだ。

俺らには話す勇気がなかっただけなんだ…………!

「だからこれが…………挨拶代わりに思う…………！」

少年たちはオリジナルの木の剣を振りかぶって採掘者たちへ向かっていった。

「…………トモとしての!？」

「お人形さん、あなたは医者へ向かって!？」

「…………アリガトウ…………！」

ゴーレムは医者へ向かった。

バタン！

「だ、誰だい君は！」

「おい！ここはお前みたいナブリキ人形が来る場所じゃねえぞ！」

「ここは人間の病院だ！」

「・・・君は・・・あの洞窟の人形かね!？」

ゴーレムは短く、「ううって、床につつぶした。」

「トモ・・・タスケテ・・・」

医者は言う。

「・・・急患だ。君、診察を代わってくれないか。」

患者の一人がどなる。

「おい！人間をほったらかしてブリキ人形に従うのかよ！」

「そんな不公平じゃねえか！」

「だまれ！」

医者もどなる。

「彼は人間じゃない・・・ただ彼は・・・患者の家族であることは確かだ！」

患者は打ちのめされると同時に、周りの厳しい視線にも気がついた。

「・・・さあ、患者のいるところへ案内してくれ。」

患者は納得のいかない表情で、腕を組みながらしぶしぶ座った。

医者とゴーレムは、モンスターの間をかくぐってようやく草原へ  
でた。

しかし、雨が降り始めたのだ。

ぽつん、ぽつん……

ザー……

ビリビリビリ！

ゴーレムの体から電流が漏れ出す。

「君！大丈夫か！案内がなければ患者も危ういぞ！」

ゴーレムは前を指した。

「……トモ……」

プツン……

「……！そんな……！」

朝日が昇り、指を指した方向には一軒の小さな家があった。

熱の原因は食中毒であった。

鶏の生肉を食べたからであった。

医者によれば、あと一日で死ぬところだったらしい。

一人の勇気ある戦士がいなければ死んでいた。

だが、彼は今、ここにいないのだ。

「あの時、私は泣き崩れました。」

たった一人の友達。それを私は失ったのですから。」

「そういえば採掘者はどうなったんですか？」

「あやつらは無論のこと、少年たちに勝ちました。」

村で裁判も行われ、少年たちや、私も判決に立ちあわせたのですが、証拠がない、これだけで泡になりました。

私は友を認めない、そんな村が嫌いだったのでしょうか。

私や少年たちは、遠くへ旅立ったのです。

新しい村を作るために。

・・・今思えば、彼が少年たちとめぐり合わせてくれたのです。」

「あれは新しいゴーレムなんですか？」

「いや、その「友達」、そのものです。」

電源を変えたり、部品の交換で修理したのです。

機能はもとのまま使えます。ただ・・・

記憶はないのです。」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

「・・・・・・・・彼はあの日々を覚えているのでしょうか。」

「・・・・・・・・あれは現実だと思っただけなのではないか・・・・・・・・！」

村長はうつむいた。

「・・・・・・・・現実ですよ・・・・・・・・！」

「え・・・・・・・・？」

「ゴーレムがこちらへ寄ってくる。」

一歩。

一歩。

一歩。

一歩。

彼は差し伸べた。

「……ゴゴ……ガギ……！」

彼はきつと、友達といったのだろう。

彼の差し伸べる「花」がそう語っていた。

## 10：砂嵐の男（前編）

少年と狼はストート村の村長とゴーレム、村民に挨拶をし、去っていくところであった。

「ありがとう、あなたのおかげでゴーレムはあのことを覚えていた

ことが分かりました。本当に、ありがとう。」

「いえ、・・・俺なんかよりも感謝すべきなのは

ゴーレムに向けてだと思えます。」

彼は記憶の壊れた片隅から、

精一杯、あなたとの思い出を思い出したんですから。」

「・・・そうですね。」

村長はしわのある手で涙をぬぐった。

「何か足りない資材があれば、言って下さい。」

「わたくしにおまかせを。」

とあって、村民をかき分けながら前に出てきたのは、めがねをかけた一人の少年であった。

少年とライモンは心の中でこう思っていた。

（うわぁ〜ついに出ちゃったよべたなガリベンキャラ・・・）

（まさか本当にいるとはな〜べたなキャラは後でつまりく原因に・・・）

「だ、だれがべたなキャラですか！」

「あ、あれ？口に出してたの？」



「僕たちが今ほしいのは砂や砂岩なんだ。砂漠ってこの近くにある」  
「？」

「はい、ここですね。」

めがねは地図の中心を指差した。

「ふむふむここから北の方に……大きな砂漠があります！」

「本当だ。ここにいけばたくさん手に入りそうだ。……ありがとう！」

「はい、あなたもたくさん色の世界、見られるといいですね！」

「ああ……そういえばライモンは……？」

「ライモン？」

「ああ、犬……いや狼の名前だよ。どこだ？」

扉をあけてライモンを呼んだ。

「バタン！」

「おーい、ライ……!!」

「はっ!?!」

ライモンは犬用のエサをがつつ食べていた。

「だっておいしかったんだもんよ〜！」

「うるせーよ！今日でどんだけ食べてんだよ〜！」

朝と昼もあわせて4回じゃねーか！健康にわるいぞ〜！」

「じゃあもつとおいしく肉を焼いてくれよ……てかこの『ろ

は生肉じゃねーか！なんでだよ〜！」

「だってめんど……石炭の節約だよ。」

「おい……さっき何か言おつと……あ、見えてきたぞ!」……おい〜

「!」

目の前には肌色のキャンパスの続く景色だった。

「よし〜掘れ掘れ〜！」

「掘れ掘れ」

(・・・こいつパンツレスリングとか見てんのかよ！)

少年は心の中で叫びつつ、砂を掘り始めた。

「あれ!? あっちに何かあるぞ?」

「ああ、サボテンだな。砂漠にしか生えてない植物だ。」

「ふーん・・・」

少年は近づいてみよつとする。

「おい! そんなに近づいたら・・・!」

「痛ててててててててててててててててててて!」

「言わんこつちやないぜ!」

「ふう、痛かったあ〜」

「サボテンは触れると傷ついてしまうんだよ・・・」

「・・・気をつけないとな。」

「!・・・あっちにあるのは?」

「またサボテン?」

「違う・・・家だ・・・」

「・・・家? ここは砂漠の中心だぞ!」

「・・・とにかく行ってみるか。」

少年と狼は家に向けて夕暮れのなかを進んだ。

「・・・ここだ・・・」

石で単調に作られた家である。そばには沢山の水がたまっている

オアシスだ。

木も育てられ、りんごが実っている。

「なんなんだ・・・」

少年がチャイムと呼ばれるボタンを押す・・・

ボタン！

「・・・え？」

砂を踏む感触がなくなった。

歩けないし、走れない。

なんなんだ？

と思い、下を見ると・・・

下の砂がなくなっていた。

「うわああああああ！」

「今俺も行く！」

犬と少年は暗い穴へと落ちていった。

11：砂嵐の男（中編）

ゴォ……

ゴォォォォ……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴォォォォォォォォォォ！！

バシャアアアアアーン！

「ぶはー！」

「下に水があったから良かったが……」

「ゴゴは何なんだ？」

べつじやら岩盤近くまで掘ってあるらしい。下のほうから  
絶え間なくでる磁気を感じる。

「じゅええ……ゴゴはマグマが近くにあるからか  
硫黄のにおいがぶんぶんするぜ……」

「そこにドアがあるんだが・・・」

石に囲まれた不審なドア。鉄製らしい。

「だめだ・・・あっち側からしか開かないらしい。」

「こっちから声が聞こえるぞ。」

長い長い道を行くとそこには・・・

「あれ？岩盤近くじゃなかったのか？空があるぞ。」

そこにはいつもの風景。木が張り、花が咲き、牛や豚もいるではないか。

「もっわけが分からない・・・」

「いや、ちょっとまって。これを見てみる。」

狼は勢いよく向こうの空へ駆け出した。

「おい、ちょっと待てよ・・・ってあれ？」

空がどんどん大きくなる。

地上がなくなってしまった。

そして狼は・・・空に跳ね返された。

ポフンツ・・・

「・・・これは空色と白の羊毛でできている空だ。」

「え!？」

確かに目の前の空に触ると柔らかい。

「おお、あなた方も迷い込んでしまいましたか。」

そこにいたのは村長・・・といってもストート村の村長ではない。違う村の村長だ。砂漠に住む人なのだろうか。肌の色が黒い。

「あなたたちは？」

「私たちは砂漠の中にある村の者です。」

そしてここはムフェックリーの研究所です。」

「私たちは砂漠で日々を楽しく過ごしていました・・・」

しかしちょうど五年前、ムフェックリー博士と名乗る男は私たちを研究所へ招き入れました。そこでこの罠にはまったのです。

ムフェックリーは、あなたたちにはこれからここで暮らしてもらおうとだけ言い、鉄のドアの向こうに去っていきました。」

「何という奴なんだ！そいつはこんなに大勢の人たちを騙したってことか！」

「はい、幸い、食べ物や資源には困ることはないのですが、私たちは本当の太陽と月の光を浴びてみたいのです。・・・ちょうど来たようですよ。」

鉄のドアが一瞬開き、一人の男が姿を現した。

肌は黒く、髪は茶髪、白衣を身に着けている。

「諸君の期待している太陽光、月光のことだが、

後ほど、天井をガラス張りにしたいと思う。」

「ふざけんな！そこまでするなら俺たちを外へ出しやがれ！」

「そうだそうだ！何のために俺たちを閉じ込めているんだ！ムフェックリー！」

「言っているでしょう・・・？閉じ込めているんじゃない、守っているのだよ。」

「ぐっ・・・」

「そこまでだ！」

「おや？新たな村人が生まれたのですか？よしよしここまで大きくなつたとは……」

「俺は通りすがりの旅人だ！」

「旅人……！」

ムフェックリーは旅人の右手を引っ張り、走つた。

「ワンワン！」

ガブツ！

「ぐっ……！」

ムフェックリーは噛まれた腿の痛みをこらえ、鉄のドアの向こうへ少年と狼をつれていった。

「私はムフェックリー。この研究所の所長……といつても私しかいないのだがな。」

「そんなのは知っている！お前は村人たちを騙したんだ！いますぐ村人を解放しろ！」

少年は渡された紅茶を飲まずに話した。

「村人は解放できん……彼らは狙われているのだ。」  
「狙われている？」

ゴオオオオオ・・・

砂嵐が吹いている。その中を小さな子供は歩いている。

「ハア・・・ハア・・・」

子供はお使いに買ってきたりんごをこぼし、倒れた。

ザザザザザ・・・！

少年の左の砂が吸い込まれていく。

蟻地獄ができたらしい。

「わーわぁぁぁぁぁぁー！」

少年は叫んだが、砂嵐でかすかに響くだけであった。

ぼくはもうしぬんだ・・・

ありがとう、かあさん・・・

こっちは？

子供はベッドで寝ていた。

「おや気がついたかい？だんながねえ、砂に半分埋もれてたあなたを助けたんだよ・・・何をしてたんだいぼつや？」

知らないおばさんがいた。

「おつかい・・・」

「まったく・・・これから砂嵐の恐ろしさを知っておくんだね！」

「あ、ありがとうございます・・・」

「・・・シチュー、食べるかい？」



少年は泣きながらシチューを食べていた。

かすかにしか聞こえない砂嵐のなかで、  
かすかにしか見えない砂嵐の中で、  
自分を救い出してくれたのだ。

時は経ち、ここは学校である。

一人の老人が青年に声をかける。

「えー次はこのたび、貴校を卒業し、若くして見事博士号をとった学生  
です。」

「ムフェックリー君。」

「はい！」

ムフェックリーはそれから研究に没頭し、  
毎日フラスコを掲げては、コンピューターと面を向けていた。

ムフェックリーは近年に騒がれている  
住宅街の倒壊を研究していた。

なぜか住宅の一部分が抜き取られ、家はどんどん  
家となくなりつつあるのだ。  
パーツの行方は分かっていない。  
ただ分かっていることが一つ。



話題には触れていなかったが、その隣には謎の光る玉のようなものが映されていた。

「やっぱりこれは……」

翌日、若き博士は研究発表会でこの話題を提示した。

「……すなわち、ここ近辺の住宅の倒壊は宇宙人が原因で……」

ハハハハハハハ……

これだから若者は……

あほらしい！

いかれてやがる！

そんなばかな……

ふざけているの

か！

夢の見すぎだ……

フフフフ……

嘘ならもっと上手いのを作れよ！

あちこちから怒号と笑い声が響く。

「ちゃんと証拠もあるのです！これは宇宙人の落としたものです！」  
前に拾った謎の光沢をもつ玉。

一人の科学者が前に出る。

「これが証拠？ばかばかしい……ただの大きなビー玉じゃないか！  
……宇宙人だってたった三秒で証明できる。ただの嘘、背の高い人、見間違い。」

ギャツハツハツハツハ！

いいぞー！

よく言った！

もっと

いってやれ！

フフフフフフフ……

ハハハハハハハハ！

若き博士は歯を食い縛った。

博士たちも、テレビも、新聞も、

誰一人意味の分からないことを言う博士を笑った。

若き博士は負けずに言い張った。

しだいに友人も近寄らなくなった。

マスコミもついに目を向けなくなった。

研究発表会も出場禁止。

誰からも嫌われる博士。

見放したわれわれは彼をこう呼ぶ。「砂嵐の男」と・・・

## 12：砂嵐の男（後編）

ムフェックリーはその後も一人、研究に明け暮れていた。研究を進めてくうちに、いろいろなことが分かったのだ。

宇宙人は水を嫌うこと、宇宙人は資源を別の空間に運んでいくこと。

遺跡の絵画にそっくりな炎の粉が雪国で発見されたこと。

その炎の粉と水晶を練り合わせることで、特有の光をもつ物質になるじゅう。

沢山の人からの証言を元に、宇宙人の出現場所を記していた。

「じゅうねは・・・」

宇宙人の出現場所が、砂嵐の中の村に日に日に近づいてきている。

住人達が危ない・・・！

科学者はどうするか考えた。

屁理屈ばかりを述べる科学者に頼んでも意味はない。

・・・強硬手段だ。

ムフェックリー博士は村人を先の見えない岩盤付近に住まわせた。

「だからって！お前はやりすぎだ！」

「分かってる！」

科学者は叫ぶ。

「分かっているんだ・・・私は嫌われている・・・嫌われ者なんだ・・・でも・・・」

「たとえ嫌われても！自分の恩人達を死なせたくはないんだ！」

「住人達には今日・・・話してみるさ・・・いつかいつかと待っていた

ら時が過ぎてしまった・・・」

ムフエックリー博士は地下へ降りていった。

「はあ・・・これだからまじめな奴は・・・」

「・・・」

ライモンは皮肉を言ったが、少年はただ黙っていた。

科学者は淡々と話していた。

宇宙人のことを。

信じてもらえない宇宙人の話を。

今話は終わった。

皆は沈黙していた。

途端に、一人の男性が笑い出した。

「ハハハハハハハハハ!!!」

やはり信じてもらえなかったのだ・・・

「宇宙人がなんだ!」

科学者は驚き、顔を上げる。

「そつだよ! あんた。宇宙人なんて来たところでなんだい!  
ただ小麦を荒らしにきた豚を追い払うもんじゃないか!」

「全くだな!」

「ぼく強いんだかな!」

「宇宙人? 俺の汗がしみこんで作られたソードで一発  
だ! てやんでい!」  
「戦おう! 共に!」

「ハハハハハ!」

皆は笑った。

科学者とは違う、優しい笑い方だった。

科学者は泣いた。



信じてくれるものがいたのだ。

砂嵐が通る。

その過ぎた後には無数の芽が生えた。

重い砂を掻き分けて育ったその芽は……

とても、強かった。

砂嵐の男と、無数の芽の住人達である。

鉄のドアの前の少年と狼は言う。

「よかったねー!」

「ふう……まあなー!」

ここは地よ。

村人は防具とソードをもっている。

ある村人は赤い粉をばら撒いている。

ムフェックリー博士は戦うことにしたのだ。

「俺はこの人たちと一緒に戦い続けるよ。」

「がんばれよ！」

「・・・ああ！」

少年と狼はその砂漠を後にした。

### 13・雪国の裁き（前編）

「あ、そうだ。俺らさ、雪国を探しているんだけど・・・」

別れ際、ムフェックリーに問う。

「雪国なら、あっちの方角にあったぞ。そこで私は謎の炎の粉を見つけたんだ。」

・・・君はThe Endにも行くんだろっ？」

とあって、博士はかばんから謎の光る玉を沢山取り出した。

「これは・・・？」

「これはその謎の炎の粉を宇宙人のだした玉に練り合わせたものだ。」

この目のように光る光沢。これを私達はEnder Eye・・・終わりの者の目と呼んでいる。」

「エンダー・アイ・・・」

「この玉は遺跡の絵画にあったとおりのもの・・・だと思っただ。」

確信はできない・・・だが、」

ムフェックリー博士は袋に入れた沢山のエンダー・アイを少年に渡した。

「君が行くというのなら、確かめてほしいんだ。」

確かめる・・・懐かしい響きに少年は思いを馳せた。

(自分の目で確かめるんだ。)

父の力強い声だ。

The Endに行けば、きっと父さんもいるはずだ。

死んでなんか・・・絶対にない！

少年は信じていた。

父は死んでいないのだ。

絶対に・・・

「・・・分かった。ありがとう！」

「気をつけるよ！」

「ああ！」

少年はムフェックリー博士に手を振った。

「あゝ熱い！」

「そんなに毛皮着てるからじゃないの。脱げば？」

「ああ、そうする・・・って脱げるわけねえよ！」

砂漠をもう何時間歩いただろう。

目に見えるのは発色の良い緑のサボテンと、焼け付くような砂の肌色だけだ。

「しかし本当に広い砂漠だなあ。・・・家を建てようか。」

「そうだな、・・・せつかく砂岩や砂があるわけだし、オシャレにいいところだ。」

少年は汗をかきながら、砂岩を並べ続けていた。

「はあ・・・ライモン、手伝ってよー！」

「俺はただお前にブロック渡すことしかできねえんだって。」

とあって、いつの間にかビーチパラソルを広げ、ボーカロイドの情報誌を読んでいた。憎たらしい。

「どこに持ってたんだよビーチパラソル！」

「小説の裏を覗くことになるが実は

「わあああああ！止めて！話さないで！」

少年は砂岩をさっきより速く並べていた。

松明を立てた。

「よしできた！」

作ったのは宮殿をイメージしたオシャレな家。

窓にはガラスを張った。

その隣にはクリーパーをあしらった謎の砂オブジェ。

「なんでクリーパーのオブジェ作ったんだよ……」

「かわいいからだ！（キラリッ）」

「でも不吉すぎるだろJK（常識的に考えて）」

「大丈夫だって！何もこないって……というフラグを立てておいて……！」

何の変哲もない朝を迎えた。

「いやあよく寝た……」

「でもすげえ暑くて寝付けなかったぜ……」

狼はあくびをかいた。

「あ！見えたぞ！」

そこにあつたのは黄色と緑だけでなく、深緑の木の上に白が積もっている景色。」

雪国だ。

「やったやった！雪だ雪だ！」

「ライモンやけにつれしそつだな。」

「・・・そうか！犬は喜び庭駆け回るとか言う歌詞の童謡があつたな。」

「・・・俺は犬じゃねえ！」

犬が叫んだところでタイガバイオームに踏み入った。

「また村だ。」

見ると村人達がいた。

子供達は雪で遊び、

老人達は鍛冶屋の火で温もりながら雑談していた。

青年達は畑仕事や鍛冶の仕事をしていた。

「あ！けるべるすはっけん！」

「たいちょうめいれいだ！こつげき！」

「・・・へ・・・？」

子供達は雪球を相手ではなく狼に向けた。

「わわわわわー！止めー！」

狼は逃げ惑う。

少年は腹を抱えて笑う。

「これでどうだー！ワンワンー！」

ライモンはやめろといっているながらも楽しんでいるようだ。

狼は口に雪を含み、少年達に当てた。

「わあー！」

子供達が逃げ惑う。

「きゃははははー！」

子供達も笑う。

少年はそれを見て楽しくなった。

「大変だ！裁きだ！裁きだあー！」

村人達はざわめく。



「なにしてるの!? 家に入って! さあ、早く!」

お母さん達は子供達を家に入れる。

「どどどどどどしたんだ!」

「……とにかく行ってみるぞ!」

少年と狼は村人達が走る方向へ走り出した。

燃えている。

白い雪とは対照的に黒い煙が舞い上がっている。

家が燃えているのだ。

「水をもってこい! はやく!」

村人達のバケツリレーが始まった。

「あ……! ミイ……? ミイ!」

「どうしたんですか!」

「私の娘が……助けて……!」

「ワンワン!」

狼は炎の中へ消える。

「ライモンー！」

中から小さな女の子と狼が出てきた。

女の子の服を口に啜えている。

「ミィ・・・！」

「ママー！うええええんー！」

女の子はお母さんに抱きついた。

バシャァン！

水をかける。

幾重にも幾重にも水を重ねる。

だが炎は消えることは無かった。

結局、誰もが無事ではあったが、家は全焼だった。

「ちっきはありがとうございましたー！」

「わんわんー！ありがとうっ！」

狼は照れる。

「いえいえ、この狼がやってくれたことです。礼ならこの狼に言っておきなさい。」

「じゃあ、ほとんど燃えちゃったんだけど・・・骨でいいかしら！」

狼は渡される前に口に啜えた。

「・・・ところで・・・さっき村人が『裁きだー！』って言っていたのですが

どついでいっことですか？」

「それは・・・」

村の一児の母は語る。

「この村には昔から信仰しているものがある。

それは地の果てに住むという「富と災を与えし鬼」・・・

不運の続いた年には収穫をもたらし・・・

悪い者がいれば災いを与えた。

その姿はいろいろ伝えられているが・・・

知られているのは意外なことに、金の剣をもつ醜い豚の姿らしい。醜い豚の姿だが、正義の心をもつ優しい鬼なのだ。

しかし・・・二年前から、「富と災を与えし鬼」は「悪魔」と化した。一年ごとに貢物をささげなければ、災いを起こすという強欲な悪魔と化した。

富は一個も与えようとしなくなった。

人は日に日に信仰を避けた。

豊作も無く、ついには生贄をささげるようになった・・・

「それが今日の災いなのです。・・・おかしいですよね・・・神聖な者を怖がる生活なんて・・・」

少年は黙っていた。

「何も私達は抵抗ができないのです・・・！相手が悪魔なのですから・・・」

少女はさびしそうに母親を見る。

「ママママ・・・なんでおめめからなみだでてるの？」

「……さあ、もう遅いから寝なさい。おやすみ。」

と行って、母親は娘の額に口付けをした。

「なあ、」

骨を口から離れたライモンは問う。

「お前は……鬼を許せるか……？」

## 14：雪国の裁き（後編）

「お前は……鬼を許せるか……？」

ライモンは問う。

「俺は許せない。俺達がこの村に入った時の、あの子供達の雪合戦の時の笑顔を見たか……？」

「……」

「俺もあの笑顔に癒された。砂漠の疲れだって……一気に吹き飛んだ！  
それに比べ、騒動の時の子供達の顔はおびえてた。」

「……」

「……そんな子供達の笑顔を消す者なんて……神聖に扱えるか！」

「……でも相手は鬼だ。どうにもできないだろ？」

「……俺が信じているのはだれだと思っ？」

「え？」

「俺だけじゃない、ムフェックリーの奴もそうだ！お前も……信じている相手がいるだろう？」

父さん？

「そいつだって、お前を信じていると思っぞ……そして、お前の帰り

を待っている人も。」

「そう、信じている相手がこんなについて、あきらめていいのか？」

「……」

少年は黙った。

俺は、ライモンだけに信じられているんじゃないんだ。

母さんだって、俺の帰りを「信じている。」

ムフェックリー博士は、俺がThe Endに行くことを「信じている。」

父さんも

俺は 『信じられている。』

「そうだな。俺は期待にこたえなきゃダメなんだ！」

「その意気だ！」

「よーしくぞあー！」

「おおー！」

少年と狼は歩き出し……

出そつとおもったが……

「……どこに行くんだ？」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

少年と狼は成す術もなく、

立っていることしか、できなかったのだ……

そんな宿舎の中で立っていた少年に、

窓の外がコンコンと鳴った。

「……………」

「なんだ……………」

ガラガラ……

窓を開けると、そこには少年がいた。

「ずっと外で聞いてたんだ……あんちゃん、鬼たいじにいくんだろ  
」!

「ああ……そうだけど………」



「おいら、知ってるんだ！その犬がしゃべること！」

「「な、なんだってー!?」」

「まちがえた・・・このことはおいといて、地の果てに行く方法！」

「ど、どうやっていくんだ!?」

喋ることがばれた狼はたずねる。

「ゲートを使うんだ。この村の北にある教会の裏にあるんだ！」

「ほ、本当に!?案内してくれ！」

「そのかわり・・・」

「ぼくも連れてってくれ！」

「へ？」

「強くなりたいんだ！あんちゃんみたいに！」

聞けばその子供は、さっきの話に感動していたらしい。

だから、ここにいるのも嫌になってしまったらしい。

そして、村の役になりたいらしい。

「いいけど・・・危険だってことはわきまえておいてよっ」

「ああ、もちろんだ！おいら、ワクワクすっぞ！」

「ちょ、それは言っちゃだめえー」

少年は叫んだ。

「ここがゲートだよ。」

木の防具をつけた子供は説明する。

黒曜石で淡々と囲まれた建造物。

なんともまがまがしい。

「ここを通り抜ければいいんだな？」

「まだだよ。このごろおいら気づいたんだけど・・・  
キセキが起「くらなきゃだめなんだー」

「キセキ・・・？」

「まあ気長に待とうっ」

一日が過ぎ、二日が過ぎ、六日が過ぎた。  
空は薄暗い。

「なかなかこないなあ……？」

「オイオイ……まだこねえのかよ！」

「犬君、気長にまとうよ。キセキだから！」

「俺は犬じゃねえ！」

叫んだ時、後ろで轟音が響く。

ピシャァン！

雷が鳴ったのだ。

ゲートに火がともされる。

紫色に光る。

「おおおおおおお！」

「きたあああ！」

「やったあああ！」

二人と一匹は喜んだ。

「よし……早速いくぞ！」

「おおー!」「あぁー!」

少年達は紫の炎の中へと向かっていった。

「ついた……!地の果てだ!」

「ここが地の果て……!」

赤い岩が広がる。遠くで灼熱の橙色をした溶岩の海が音を立てる。

少年達は赤い岩を踏みながら進む。

空には幽霊達がさまよっている。

幽霊達がこちらを見つけたようだ。

「タス……ケテ……」

ポオ・・・!

言葉は炎の玉に変わりこちらへ向かう。

「口から炎の玉!？」

「うわー!」

少年達は伏せる。

バアアン!

後ろの床が崩れる。

「イキタイ・・・イキタイ・・・イキノコリタイ・・・!」

ポオ・・・ポオ・・・ポオ・・・!!

「やめろお!」

ドオン!

「うわー!」

「じいっは・・・厄介すぎぬー!」

地の果てはみるみる壊れていく。

まるでクレーターのようになり、穴ぼこだらけだ。

バアアン!

ポオン!

「ストオーツプ!!!!」

少年は急停止した。

それに続き、後の狼と子供も停止した。

前の床が崩れ、下には溶岩が広がっているのが見える。

「あ、あぶねえ……」

「クルシミタクナイ……!」

ポオツ!!

炎の玉がこちらへ向かってくる。

「ダメだ……よけられない!」

「「「うわあああああああああああ!」」」

ガキイン!

前には……豚?

豚が炎の玉を剣で素早く跳ね返した。

跳ね返した玉は幽霊に当たった。

「プシユウウー」

そのまま、マグマの海へと落ちていった。

豚は言う。

「我は……正義を貫く地の戦士なり！」

## 15：醜い戦士

幽霊達は空を舞う。

少年達は豚の後に続いて地の果てを歩いていた。

少年と狼、子供はひそひそ話し合っていた。

(ねえ、おいら全然悪い悪魔に見えないんだけど・・・)

(俺もだ。見た目は確かにグロテスクだけどさあ

・・・ライモン、あの鬼って本当にお母さんが言ってた悪魔なのかなあ。)

(油断するな。たとえいい鬼に見えても中身は違うかもしれない。

・・・もしかしたら食べるために、俺達を助けたのかもな・・・)

(ひい！怖いこといわないでよわんわん！)

(そうだよ、お前も犬鍋にされるかもしれないぞ！)

(・・・俺は犬じゃねえっつーの！)

「先ほどから何を話しているのだ。お前達は。」

((ひい！！))

少年達は背筋が伸びた。背中に汗が流れる。

少年は咳払いをし、正直に言った。



「あなたはなぜ罪の無い村人達を裁くのですか？」

鬼は黙った。

少年達に緊張が走る。

(言っちゃった・・・言っちゃったけど良いのかこの空気!?)

(おい、お前のせいで気まづくなっちゃったじゃねーか!!)

(ガクガク・・・ブルブル・・・)

少年達は目を合わさないように、直立不動で横を向き、目を食い縛った。

「すまない・・・」

少年達は前を向きなおした。

「私が地位を剥奪されたのが原因なのだ・・・私が弱いばかりに・・・」

「・・・？」

「・・・勝手ながら、私の長話を聞いてはくれないか・・・」

180年前・・・

私は生まれた。

天使のような母と、強い父のもとに。

醜い豚の子として。

私は正義を通した。

村人が倒れていれば口で啜えて近くの街に運び。

水の無い街にはバケツを首にぶら下げて街へ持っていった。

だが醜い、汚いなどと言って追い出された街もあった。

それでも一部の人々から愛されていた。

私はそれだけで十分だった。

やがて15年が経った。

季節は冬だ。

私は老いていた。

瞳がくすむ。

だが死ぬのも悔いはない。

……でもできれば、死後も善を尽くしたい……

森の木の葉の最後の葉っぱが一枚、ひらひらと地面に落ちた。

目を開けるとそこは赤い世界だ。

私は死んだのだ。

行った先は地の果て。

天に昇らなかつたのだ。

私は泣きそうになった。

(待ちなさい・・・)

声が聞こえる。

天の声らしい。

地の果てまで響く壮大な天の声。豚は耳を傾けた。

(おぬしは悪いから地の果てに行つたのではない。「天の指令」を受け取つたのだ。)

「……天の……指令ですか？」

（そうだ……おぬしには鬼という地位の配属を許可した……なぜなら、おぬしは死ぬ際までも善を尽くしたいと懇願したからだ。）

これはおぬしにとっての「大きな宝」であろう……）

「……ありがたく、もらわせていただきます。」

（よろしく頼むぞ……）

それが天の声の最後の言葉だった。

それから165年もの間、私はとある村に富と災いを与えつづけた。

それはとても幸せであった。

人々の笑顔をずっと観ていたかった。

166年目。

私はいつものように仕事をしていた。

だが、何者かの炎の玉によって、溶岩に突き落とされた。

長い長い間溶岩の近くで体がなれていたため、何も無かったのだが……

地位を奪われた。

炎の悪魔は言う。

「神聖な者とは……美しく、それでいて力のあるものになるにふさわしいのだ。」

お前のような弱く、醜い者には決してむきはせんのだよ……」

悪魔は高らかに笑う。

「あいつの裁きは非常に卑劣で、強欲なものであった。」

貢物はむさぼるが富は決して与えない。ただ貢物を忘れると災いを与える。

最悪な「裁き」なのだ……」

「そいつはいい、どんな奴なのですか？」

「炎の悪魔・・・その名をブレイズと言っ・・・」

## 16:VSブレイズ(前編)

「炎の悪魔……その名をブレイズと言う……」

「ブレイズ……？」

「奴は美しい炎を身にまとった強い悪魔なのだ……」

だが幼い頃は、守護者という鬼の次に当たるほどの地位を持っている有能な守護霊であった……」

時というものは残酷だ……良き者でさえ悪魔と化してしまう。」

「そいつが……『裁き』をかけているというわけですね？」

少年は問う。

豚はうなずいた。

「頼む」

豚はいきなり少年に懇願した。

「奴は話を聞かないのだ。見たところお前は弓を持っている。

……奴を倒してはくれないか。」

少年は狼を見る。

狼はコクン……とうなずいた。



子供を見る。

子供はビクビクと震える足をこらえ、うなずいた。

「……よし！ブレイズを……倒しに行くぞ！」

「「「おおー！」」」

「な、なんだあれは……！」

少年が見たのは暗い紫色の巨大な城の残骸のようなものだった。

その紫色の外壁に、しきつめられた溶岩の光が照らしている。

「ここからは危険である。増援を呼ぼう。」

豚は口笛を吹いた。

「ピィ……!!!」

すると、2秒ほど経ったのち、豚が何匹も赤い石の陰から姿を見せた。

「「「ゾンビビッグマン第一部隊！只今全員揃いました！」」」

「うむ。これからブレイズの本拠地へと臨む。増援を願う。」

「「「ははっ!!!」」」

と行って、第一部隊は一列に並んだ。

「この豚たちは・・・？」

「こやつらは私の部下、言い換えれば同士だ。」

こやつらは生前、善を成して死んだ私の話を聞いて、死ぬまで、いや、死んでからも善を成そうとしたものたちだ。

天はこやつらを私の部下として与えた。彼らがいるとさびしさも吹っ飛ぶのだ。」

「マ オパーティ買った？」

「いやルイ ジマンシオンだろ」

「K」

「おまいらソニク・ザ・ヘ ジホッグを忘れるなよ」

「おれとしてはファイル（ry）」

「・・・ゲーム ユーブの話だよなあれ・・・」

「ああ、そうだね・・・」

「おいらは絶対ボンーマンだな！」

子供は目をきらきらさせて言っただけであった。

少年たちは遺跡に行く。

松明をさしながら向かう。

ピチュン・・・ピチュン・・・

なにやら音が聞こえる。

向こうの壁際に物影が見えた。

「・・・！お前か！ブレイズは！」

ビクウツ！！

「・・・てあれ・・・炎まっつて無いじゃん・・・」

「それはマグマキューブという奴だ。・・・あー近づくのではないー！」

「え・・・？」

マグマキューブは高く飛び上がる。

そして少年の顔にひつついた。

「うわわわ！ガバゴボ・・・息が・・・」

「ワンワン」

「それえ！」

子供の鉄の剣と犬が舞う。

「おい！おまいら！俺にもダメージが！やめ！」

マグマキューブは倒れ、アイテムをドロップした。

「大丈夫か！」

「へへ・・・全国のマグマキューブ諸君・・・おはようござえます・・・」

狼は思っ。

(だめだこいつ・・・瀕死状態じゃねえか・・・)

豚は思っ。

(こやつらで本当に大丈夫なのか・・・)

「・・・とりあえず肉食え！ほら！りんごも！」

ライモンは肉とりんごを手渡す。

「はあ、ありがとう、ライモン」

「これは・・・伝説の素材じゃないか！」

『『マグマクリーム』であるな。マグマキューブを倒すと出てくるものだ。』

「わあ、すごいなあ・・・ここで手に入るんだ・・・」

子供はへろへろしている少年をよそに、わくわくしていた。

「…………少年達よ、同志達よ、気を引き締める……ついたであるぞ……」

そこにあるのは中央に溶岩の器がある部屋であった。

暗い部屋を溶岩が明るくしている。

「私の部屋にいる者は誰だ……」

ゴオツ……ゴオツ……

炎が神々しく燃える音がする。

「……出たな……ブレイズ……」

「またお前か。お前の醜い姿はもう見たくないといったはずである。」

「……今日こそお前を説得にきた……」

「ならば、私を倒すがいい……どんな時でも……美しく、強いものが勝つのだ。」

「正義を知らぬものに教えてやろう！第一部隊！出撃い！」

「」「」「うおおおおおおー！」「」

金の刃が舞う。

しかしその刃は軽々とかわされた。

「正義、根性……どれも醜い虚勢にしかすぎんのだ……醜い者たちよ……」

その言葉の終わる瞬間、ブレイズは結晶化した炎を勢いよく廻した。

火の玉が第一部隊に向かって飛ぶ。

ボオ……

ボオ……

ボオ……

ボオ……

「ウ……」「！」「ぐはっ……」「！！」

「ぐあー！」

「イ……」「！」「」

「弱い者達よ……」

「うおおおおおおおおー！」

「フンフン……」

「おりゃあああああー！」

二人と二匹がブレイズに向かって突撃した。

「はあ……醜い叫びだ……」

ボオ・・・

ボオ・・・

ボオ・・・

「おっと・・・あぶねえ」

「・・・」

「うわわわ！あちちち！」

少年と狼と子供は運よく玉をさけた。

「くらえ！」

少年は鉄の剣をブレイズに向けて振った。

「私にここまで近づいたことだけはほめてやろう・・・」

「だが甘いのだよ」

ブレイズは勢いよく炎を廻して、一つの炎の玉を出した。

「あんちゃん！」

「だめだ・・・あいつは空中だ・・・！火の玉の餌食だ・・・」

「何をのんきに会話しているのだ・・・？弱い者達よ。」

ボオッ・・・ボオッ・・・

少年は火の玉をくらった。

少年は後方へ飛ばされる。

遺跡の道の壁の上を飛ぶ。

下には、空気が広がるだけであった・・・

狼も子供も・・・後を追うように空気の底へ落ちていった。



17: V.S. ブレイズ (後編)

少年達は落ちる。

暗い暗い空中を。

下に近づくほど橙色で明るく染まる。

溶岩の泡の破裂する音も大きくなる。

ドサッ！ ドサッ！ ドサッ！

少年達は運よくも溶岩ではなく、黒い砂の上に落ちた。

だが致命傷であった。

幽霊達は空をさまよう。

その幽霊達は傷ついたもの達を見つけた。

一粒の涙を流す。

その大きな一滴は少年達の頭上に降りかかる。

少年達の傷は再生されていく。

「あ……危なかった……死ぬところだったぜ……」

「なんで傷が治っていくんだ……？」

子供は自分の腕についた水滴をなめた。

「しょ……しょっぺえ……幽霊達の涙だったのか……」

「なんでわかるんだ？」

「伝説にあったんだ、地の果てには沢山の死者の幽霊がさまよっている、

その後悔や苦しみをこめた涙は人を再生させるっていった。」

「しかしどうすれば勝てるのだろう……」

「そうだ……！おいらに考えがある。力でだめなら頭脳を使うんだ！……おいら地上へ戻るよ……」

「地上に……!?お前見捨てるのか？」

「違うんだ……ちょっとした、武器をね……」

「おいらが作ってくるから、豚さんの援護をよろしく頼むよ……」

「……分かった！なるべく早くこいよ……行こうライモン！」

「おう……」

少年と狼は遺跡を上へ上へと目指していった。

「まだ分からぬのか……お前では私に勝てない。」

「くう……何のこねしき……」

豚は剣を振り回す。

その剣は一向にあたらない。

「この世に正義ほど見苦しいものはない・・・」

ブレイズはそういいながら、昔のことを思い返していた。

燃える民、それを狂うように笑う自分。

正義など・・・

ボオ・・・！ボオ・・・！

「ぐあ・・・！」

2発の火の玉が豚に直撃する。

「隊長・・・！」

「大丈夫だ・・・お前達は下がっている・・・」

「何故ですか・・・隊長！」

「正義をここまで馬鹿にされては・・・引き下がれまい！」

「この火の玉で全て終わりにしてしまおうでは無いか・・・！」

ブレイズは回転を始めた。

「ジュ・・・！」

一つの矢がブレイズに刺さる。

「ぐあ……！」

ブレイズは苦しんだ。

「お前らは……生きていたのか！」

「ゾンビピッグマン、もう大丈夫だ。俺達が行く！」

「ヴ……ワンワン！」

ブレイズは笑い出した。

「何が大丈夫なのだ？さっきとは何も変わっていないではないか！」

「いや、仲間がすごいものを作ってくれるんだ……俺はお前に勝てる。」

「次は溶岩に落ちてしまうことを祈ろう……」

ボオ……ボオ……

少年達は火の玉をよけた。

「俺の矢をくらえ！」

ゴゴ……ゴゴ……！

「矢ごときで私が倒せると思つか！」

ボオ・・・！　ボオ・・・！

それからブレイズと少年達の攻防が始まった。

火の玉と矢が飛び交う。

少年が矢を撃った時であった。

ビュ・・・！　ボキッ！

「弓が・・・壊れた！」

「剣で行くしかねえな！」

しかし、遅かった。

ブレイズはこちらへ近づいてきた。

火の玉を一発放つ。

「うわぁー！」

「ガルルルル！」

狼はブレイズへ飛び掛る。

だが火の玉を浴びせられてしまった。

少年と狼の背後には壁。もう逃げ道は無かった。

「あんちゃん！これを！」

横の遺跡の橋から子供は2つのポーションを投げた。

それを少年が受け取る。

「それを飲んで！早く！」

少年と狼は水色のポーションを飲む。

「……何もかわらないぞ……？」

「おい！まさか何も効果がないわけじゃねえだろうな！」

「ハハハハ……！ただの風邪薬で倒せると思っていたのか！くらえ  
」！」

「ぐっ……」

少年と狼は至近距離で火の玉をくらってしまった。

だが、無傷であった。

「何故だ！私の火の玉を近く受けて立てるはずが無い！」

「それは、火炎耐性のポーションだ！マグマキューブが教えてくれた  
」！

「よし……！これなら奴に勝てる！おらぁ」

ズシュ！

「ぐ……！」

ザッ！

ズバシッ！

「くっ……！」

ブレイズは3回斬られた。

「あんちゃん！わんわん！豚さん！そこから離れて！」

少年達と豚達はブレイズから離れる。

「くっらえー！」



子供は一つのポーションを投げた。

ポーションの瓶が割れ、中からは液が漏れ出した。

「ぐ……なんだこれは……！体がしびれる……！」

「蜘蛛の目から抽出した毒のポーションさ！」

「こんな弱い者たちに……負ける……だと……？」

ブレイズはその場に倒れた。

ゾンビピッグマン達は

長い、長い年月の戦いの末

炎の悪魔に勝利したのであった……

ブレイズはその場に倒れた。

ゾンビビッグマンは問う。

「……なぜ私の地位を奪ったのだ？」

「私は、昔、火事を理由として地の果てにたどり着いた……」

私は生まれてすぐ、人々に消され、地の果てへ向かった。

まだ子供であった。

幼い私は地の果てで天の裁判を受けた。

周りの視線が体中に針となって突き刺さるように感じた。

幼い私にとって……それは恐怖であった。

刑は「守護神としての勤労」という軽い刑であった。

私は守護神として一生懸命働こうと誓った。

幼い私には正義の心があった。



それから1年後、隠れていた私の目の前に飛び込んだのは、醜い豚であった。

醜い豚ごときが鬼という地位を与えられている。

「なぜだ！私は美しいのに誰からも認められなかったのだ！

正義も一瞬に砕け散った！なぜ、なぜこんな醜い者に負けるのだ  
」！

ブレイズの目からは涙が光っている。

「ブレイズよ・・・」

ゾンビピッグマンが言う。

「私は、キノコのシチューが大好きだ！」

「へ……？」

「ん……？」

「は……？」

少年達は啞然とした。

ブレイズも目を開いている。

「お前……ふざけているのか！」

「いいから聞け。私が子供の頃、村人からキノコシチューを買った。それはとても、家庭の味がした。おいしかったのだ。」

「私が雪国に食糧を運んでいた時、家の中で子供達と暖かい時を過ごした。」

「……キノコシチューの作り方を教えてやるっつ。」

キノコを二種類用意する。それらをじっくりと火にかけるのだ。」

「初めての暖炉とはとても心地よかった。雪国でも人々の心が温かいのは

この暖炉のおかげだったのだ。」

「……わかるか？私は火に恩恵を受けている。決して、お前は認められていないわけじゃない

のだ。火は古来から人々や動物に愛されているのだ。」

「……………私は……………ただ自分の非力さにいじけていただけだったのか……………」

「そうだ。お前は炎の守護神だ。お前の仕事にもどらなければならぬ。」

（待て…………）

「……………の声は……………！」

「天のお方だ！」

（まだ決着はついておらぬ……………ブレイズ……………お前には罰を受けてもかまいません……………）

「待ってください！もう決着はついたのです！」

（だまれ……………裁きだ……………刑罰を発表しよう……………）

（笑え……………）

「え……………!?」

（笑うのだ……炎の守護神として心が温かくならねばならぬ……笑うのだ……）

ブレイズから息が漏れる。

その息から、笑いが起こる。

笑い声は地の果てに響く。

まるで地の果てに光がさしたかのように、周りは明るくなった。

豚もそれにつられ笑う。

少年達も笑ってしまった。

天も低い声で笑っていた。

地の果てから聞こえる笑い声は

いつまでも、途絶えることは無かった。

地の果てに灯された、一つの炎のようだ。



## 19・・・レッツゴー！ジヤングル！

「少年達よ、本当に、ありがとう。」

「私からも礼を言う。ありがとう。」

「それよりも、これからは二人で仲良く地上の人たちを守ってくださいね。」

「ああ、もちろんだ！・・・というわけでブレイズ、酒持ってきてくれ。」

「はあ!? お前何俺に指図してんだゴルア？」

「いやお前守護者だから・・・俺よりも地位低いじゃん・・・だから・・・」

「いい加減にしろこの！ジジィ！」

「はあ!? 何を！この青二才！」

「俺は青二才じゃねえよ！どっちかつーと赤二才だバーカ！」

二人はガミガミ喧嘩をし始めた。

「・・・もともと気が合わないのかもね？」

「おい・・・ここまでトークできるんだったら漫才やれよ・・・」

「はははは・・・」

二人は幸せそうな顔で、肩をくんでいた。

ネザーゲートを通して雪の村に戻った。

「ありがとう、あんちゃん！これからは村で楽しく過ごせそうだよ！」

「そうか・・・！」

「・・・ところであんちゃんたち、何で旅してるの？」

「世界を見に行くんだ！いろいろな世界を！」

「へえ・・・おいらも行ってみたいな・・・」

「行っても良いわよ！」

家から出てきたのは子供のお母さんとお父さんだった。

「いいの？」

「昔から、かわいい子には旅をさせよ、っていつからねえ・・・」

「あなたも、もうそんな年頃だからね！お兄さんに迷惑かけるんじゃないよ！」

「……という事で旅人さん、息子をよろしくお願いします。」

「……分りました！」

「いやーにぎやかになるねえ……」

お父さんとお母さんはびっくりした。

「い、犬がしゃべった！」

「な、なんと！」

「おい、ライモン！」

「いけね！……あ！お父さんだいじょうぶですか！」

「ブクブク……お前にお父さんと呼ばれる筋合いはない……」

「だめだこりゃ……気を失ってるよ……」

少年達は草原を歩いていた。

「ところでお前はなんていう名前なんだ？」

「おいらはジャック。友達からは歩く冒険の書って呼ばれてるんだ

「！」

「変なあだ名だな・・・」

「お・・・見えてきた！」

見えたのは自宅。久しぶりに戻ったのだ。

「あー！動物が散乱してる！」

「作業が途中だったなそういえば・・・」

「集めようか！」

動物達を集めてから、少年達は自宅の床についた。

少年はおきた。

腹が減っていたので豚肉を食おうとしたら・・・

「あ・・・」

「むにゃむにゃ・・・骨骨パラダイス・・・むにゃ・・・」

「ライモン！おきて！」

「もう自分がほ……はっ！」

何の夢を見ていたかは知らないが、少年は今の状況をライモンに話す。

「石炭が切れちゃったよ……」

「意外と早いな……松明とか燃料に使っちゃったからか。」

「木炭なら20個ほどあるんだけど……これじゃこれから切れるよな……もぐもぐ」

「そうだな……もぐもぐ」

「「どつすれば……むしゃむしゃ」

少年と狼はパンを頬張りながら悩んでいた。

「ぐ……真剣な眼差しで見つめるスフィンクスの放つ幻想的な香り……」

「こいつまだ寝てるのかよ……ってかなんの夢見てんだよ！」

「それは君も同じじゃないかライモン……おい、朝だぞー！」

「それでいて珍しい色のスタチュー・オブ・リバティー……はっ！」

「なんで世界遺産なんだよ……」

「なるほど、炭が足りないんだね・・・それなら沢山木の生えるところに行こう!」

「でもほとんどの木って丈が短いからそんなに取れないんだよな。簡単に4スタック分くらいの原木が取れる木があれば・・・」

「ジャングルしかないな!」

「ジャングル!?!」

「確かここへ来る途中、東に密林の気候帯があつたんだ。そこへ行ってみよう!」

少年達が東へ歩くと

そこには天までそびえる大樹だった。

明るい緑の葉に、赤橙色の幹。

「ここがジャングルか・・・」

「壮観だな・・・」

「さっそく伐採しようよー！」

「でも・・・どうやって？」

「こんな大樹じゃ、下からブロック積み上げて切るのは大変だぞ。」

「いや、あれを見てよー！」

子供が指差したのは幹。

その幹をよくみてみると緑色の網のようなものがかかっている。

「密林の気候帯ではツタが群生しているんだ。あれをのぼって、木の天辺から

一気に切る、ていう寸法さー！」

「なるほどな・・・」

「よし、のぼるかー！」

少年は木の幹をつたってのぼり、木を切っていく。

3本目を伐採した時、気づけば夜になっていた。

「ふう・・・4スタックどころじゃないな・・・7スタックか！」

「すごいな！」

「……やばい……！夜だ！」

「何だ？確かに夜は怖いがそんなにあわてることは」

ガサ……

「!?」

ガサッ

ガサガサ……

子供は涙目になりながら答える。

「密林の夜は……見にくいからどこから敵が来るのか分からないんだ……」



## 20：真夜中のジャングル

ガサツ・・・

ガサ・・・

四方八方から音が聞こえる。

だが姿が見えない。

ガサツ・・・

「そこだ！」

少年が影を狙って矢を放つ。

「シュツ・・・！」

「やばい・・・クリーパーだ・・・」

ガサツ

「そしてこっちだ！」

ビュッ・・・

「カラン・・・」

「スケさんまで!？」

「くそお……ここまで多いと弓矢でもきりが無いぞ……！」

「ひとまずその木に登ろう！」

少年達はいそいで傍の背の小さい木に登った。

モンスターたちが姿を現す。

クリーパー……

ゾンビ……

クリーパー……

スケルトン……

クリーパー……

クリーパー……

クリーパー……

蜘蛛……

「く！よりによってクリーパーが多い！」

「こんな数のクリーパーに爆破されちゃひとたまりもないよ！」

「朝まで経ってもクリーパーは死なないからな……」

「ジュン……」

「うわ！矢が！皆気をつける！」

「この木なら蜘蛛は寄ってこないが……」

「ライモン！後ろ！」

「……！ガブッ！」

もう少しでやられるところだった。

後ろの背の高い木から蜘蛛が伝ってきたのだ。

「こりゃそんなに時間かけてられないぞ……」

「背の高い木を伝って砂漠に出ればなんとか踏ん張れるけど……」

「あっちだな……」

「ここから二つ、三つ木を伝っていったところに砂漠が見える。」

「よし……いくぞ……」

少年達はジャンプしながら砂漠へ目指した。

「もうすぐだ……到着……」

砂漠には着いた。

が、そこには無数のクリーパー。

スケルトンやゾンビもところどころ見つけた。

「や……やべえ……」

後ろからはさっきのモンスター軍団。

「か……囲まれたよ……もうおしまいだ……」

「じゃあー」

「……？」

「……？」

「……？」

「……………」

「ぬ、ぬこだ！」

「か、かわええ……」

「カラン……コロン……」

「ヴァー」

見るとスケルトンやゾンビたちも見とれていた。

「シユ・・・シユー！」

クリーパーたちは拡散していった。

「い、いまだ！」

「逃げるぞー！」

「よしきたー！」

少年達は猫を抱えたまま、夜の砂漠を走り出した。

スケルトン達はようやく気づき、追いかけてきた。

クリーパーやゾンビは歩いていた。

そのとき、背後から走る音。

見ると人間が鬼のような形相で猫を抱えたままこっちに走ってくる。  
ん。

「じおおおおおおお!!!道を開けるおおおおー！」

「じゃー！」

クリーパーとゾンビは驚いて逃げる。

どちらも人間に。

人間達と狼はそのまま砂漠を走っていった。

ボタン！

少年は自宅のドアを急いで閉めた。

「はあ、はあ、はあ……」

「なんとか、逃げ切ったな……」

「もう、なんか無理やりな展開だな、もはや作者もネタぎ……」

「わーわーわーわー！それを言っな！」

(ナイス、少年。b)

「おいら、もっどキドキしまくりだよ……」

「こんな冒険も、いいね！」

ジャックは言う。

「……ああ、そうだな！」

「まったくだ！スリル満点だ！」

少年達は思いつきり笑う。

「ヴァー……」

「……」

バリッ！

「ヴァー！！」

「あゝ」

その後、少年達はボコボコにやられるのだった……



「シゲンハドウダ・・・？」

「ハイ、カクニンシマス。モクザイ1378000コ、セキザイ893680個・・・」

ここは無数の黒い柱が建つ漆黒の世界。

謎の生物が目録を読んでいる。

「・・・ハナ65879個。イジヨウデス。」

「ソウカ・・・モウスグダ・・・」

謎の低い声。

「・・・セカイハ・・・モウスグイッショクトナル・・・」

## 21：蠢く影

少年と狼はジャングルで集めた木炭をチェストに

入れながら、チェストの中身を整理していた。

「木炭がたくさん集まったな！」

「本当だな。4スタック半ぐらいか・・・」

「げっ!?イカ墨がなんで1スタック分あるんだよ!？」

「いや、池にイカがうじゃうじゃいたからさ、倒してたらこれぐらいだった。」

「こんなに使えねえだろ・・・羊毛を塗るぐらいしか使えないぞ?・・・ポイっと」

「ああー！俺の努力の結晶を軽々と・・・肉が少ないな・・・」だから使えねえなって・・・」

「そついえばジャックはどこなんだ？」

「あ、外でレッドストーンばらまいてたぞ。」

「何を作っているんだ?・・・」

少年は外に出た。

「よし、できた。」

「なんだこれ？」

「へへ、これぞおいらの傑作！『半自動農業マシン』だ！」

みると四角く囲まれた中に小麦、サトウキビ、スイカ、カボチャが育っている。

「何だこれ？言われても分からん……」

「これは土に種さえまいておけば、後はボタン一つで収穫してくれるんだ。」

「レッドストーンってこんな使い方なのか。」

「レッドストーン回路を組みればトラップも作れるよ。」

「なるほど、分からん。」

「まあ作物が育つまで家で待とう。」

少年達は家に戻った。

あれから二日が経った。

少年達は『半自動農業マシン』の様子を見に行くことにした。

「全部育っているね！」

「早くパンが食いてえよ……」

「このボタンを押すのか？」

「そう、押すだけだよ。」

「ポチッと。」

バツシュン！

ピストンが押されて、水流で作物が全て流されていく。

そして取り出し口には大量の作物があった。

「「「おおおおおおお！」」」

「「「こんな感じだよ。」」」

「レッドストーン回路っておもしろいな！」

「そうでしょ！武器にも使えるんだ！」

「へえ、俺も作ってみ……」

「「「ジュッ……」」」

!?

何か前を通った……気がした。

「おい、さっき何か通らなかったか？」

「え？何も。」

「どうしたんだ？」

「……いや、なんでもない。」

その夜。

少年達は家の周りの湧きつぶしをしていた。

「モンスターが家の周りにスポーンすると大変なことになるからね。」

「たしかにな……朝起きたときに蜘蛛の鳴き声がするなんてごめんだぜ。」

「昼のあの影はなんだったんだろう……。」

「お前は疲れてんじゃないのか？このごろ忙しかったから。」

「そうだね・・・ちょっと今日は寝ておいたほうが良いよ。」

「ああ、おやすみ。」

少年は寢床についた。

ブル・・・

!?

少年は謎の音に目を覚ました。

まだ夜だ。

外を見てみると・・・

「ジャックーライモン！」

「お、おお、お前か・・・」

子供と狼が倒れていた。

ジャックは話す。

「おいら、暗闇の中に、何かの影が見えたんだ・・・  
それを・・・見たら・・・その影に・・・一瞬で・・・

近づかれたんだ……ライモンも……攻撃したけど……倒された……」

「大丈夫だ。ジャック。休んでいい。」

「俺がそいつを倒す。」

少年の眼には炎が灯っていた。

## 22：VS謎の影

ジュッ……

ジュッ……

「……くそお……なかなか姿を現さねえ……」

まだ月が真上に昇っている夜中に

少年は剣を構えていた。

「気をつけてー！そいつは……高速で移動して背後から襲うんだ！……  
後ろー！」

ジュッ……

気がつくと背後には黒く、長身で眼が横に長い謎の生物。

（お父さんはな、宇宙人も見たんだぞー！こんな顔の！）

昔、自分の聞いたお父さんの話を思い出した。



・・・父さんは、まさしく「いつのこと」を言っていたのだ。

ドンー！

「ぐはっ・・・！」

少年は長身の生物のパンチで倒れた。

「いつ・・・高速で移動するだけじゃない・・・強い！」

「また来るよーそいつに背後を取らせちゃダメだ！」

「そんなと言われても・・・！」

ビュッー！

バゴ・・・！

「がっ・・・！」

少年はまたパンチを食らってしまった。

だが、後ろに剣を振り回す。

しかし宇宙人は逃げた。

「後ろを取られちゃ、勝ち目がない！どつすれば・・・！」

その時、子供は考えていた。

何なんだ……こいつは……

何も知らない……

知らないことに……こんなに恐怖を持つなんて……

おいらに……旅の選択肢は……当てはまらなかったのか……  
?

「!……そうだ!」

少年は思いついた。

少年は家の壁に近づいて、壁と反対の向きに立った。

「おい、宇宙人……」

「俺の背後、とってみろよ。」

ジュン……

ギュー……

宇宙人は少年の背中と家の壁の間に

まるで紙のように挟まった。

横長の眼が縦におしつぶされている。

「ぶっ……ははははーばーか！」

「オマエハ……オコラセルアイテヲ……マチガッタ……！」

ビュッ……！

ドカッ！

バキッ！

「ぐっ……！……！」

「あんちゃん」

宇宙人は少年にラッシュを繰り出している。

「ぐっ……ぶん……！」

少年はがむしゃらに剣を振り回した。

宇宙人は逃げる。

そのとき、少年の眼が大きく開いた。

少年はパンをバッグから取り出して、食べながら言った。

「ジャック・・・分かったぞ、あいつの弱点。」

「え・・・！」

宇宙人はまた少年の前に移動した。

「かかったな！」

少年はすぐさまバケツの水を下にこぼした。

「グッ・・・」

宇宙人は逃げる。

「・・・なんであんちゃん・・・分かったの？」

「あいつが遠くへ行った時、池に入ってもがいたのを一瞬見たんだ。」

「あいつの弱点は水だ！」

「ごめん・・・おいら、何も分からないんだ・・・」

「大丈夫だ。何も心配することは無い。・・・！来たぞ。」

大丈夫

?

「ヒュッ……」

「おじゃー！」

少年は出た瞬間に剣で切った。

見事、相手は倒れたのだった。

「あれ？なんだ……強いのはパワーと高速移動ぐらいなのか？」

宇宙人から、謎の玉が出た。

「？何だこれは……」

「うづうづ……こじは……」

「あんちゃん！宇宙人がおきた！」

「なんだって……！……？なんか様子がおかしいぞ……？」

「開放された！やった！自由だ！」

「……？……わけがわからねえ……！ライモン！大丈夫か？」

「むにゃむにゃ……骨であしらった自分だけの太陽光発電ハウス……」

「……………のんきに寝てやがって……………」

「ありがとう、私はエンダーマンです。よろしく。」

「エンダーマンはなんで襲い掛かってきたんだ？そんなに友好的なのに……………」

「……………分かりました。話が長くなりますが……………お話しします。」

それは今から18万年前……………

世界には六つの種族がいた。

一つ目は石、土、雪などの物質。

二つ目は木、草、花などの植物。

三つ目は犬、にわとり、猫などの動物。

四つ目はゾンビなどのモンスター。

五つ目は村人、つまり人種。

六つ目には　　実際には四つ目に入るのだが区別されている種族。

だが名前は無かったのだ。

特徴は、長身で、横長の眼を持つ。

彼らは人間達と非常に友好的であったため、

モンスターという「人間と敵対するもの」という枠の中から独立された。

あるときは収獲を手伝い。

あるときは資源を回収する。

それと同時に人間も自分達の文化や文字を教えていた。

まさしく、人間にとって友のようなものだったのである。

だが

その5万8千年後。

宇宙人の住む世界・・・後のThe Endを支配する王は

その生涯を閉じ、自分の息子に王の権限を託した。

息子は 王ではなく、もはや暴君であった。



## 23：世界のスキマ

前の王の息子は暴君であったのだ。

自分の世界だけを中心とする、独裁政治。

当然、人間達との絆を持っている私達は反対した。

だが・・・

暴君は謎の水晶を私達の体の中に閉じ込め、心を支配した。

そして人間達の世界の資源を強引に集めるように命令したのだっ  
た。

「サア・・・アツメルノダ・・・ヒトヲコロシテデモ・・・」

「ハッ！」「ハッ！」

私達はなすすべもなく操られ、人間を殺し、資源を手に入れた。

人間達はそんな宇宙人達に失望し、私達をこう名づけた。

Ender man・・・全てが終わってしまった世界から来た者。

「その水晶はあなたの手にしているように攻撃を受けることで心から出て行くのです。」

しかし、操られた私達に勝てるヒトは久しぶりに見ました・・・

10年前に私は一回倒されたのです。  
男はとても強かった。

その男は私がマインドコントロールから解けたすぐに、こう言っていました。

『私は君達を救いたいのだ！君の住む世界に・・・もう一度案内してくれないか！』

その男は今もなお、長い戦いを続けています・・・暴君と。

私も戦ったのですが・・・すぐに水晶で操られてしまいました・・・」

「・・・おい、ちょっと聞きたいんだが・・・」

ライモンが口を開く。

「なんでこの世界の資源を集めるんだ？理由が分からない。」

「それは……私達の暮らす世界には主に二つの素材しかないのです。

黒く硬い石に白い大地という……

それに比べ、この世界の素材というものは皆、特殊な力を持っているのです。

その力を使って暴君はこの世界に『スキマ』を作ろうとしているのです。

その計画がすでに始まるつとじています。

そのスキマからは沢山のエンダーマンが現れ、この世界を

全てThe Endに染めようとしているのです……!

「ええ!?」

「そんな……恐ろしい計画が……こんな平凡な日常の裏で……実行されつつあるのか……!?!」

「そんな……この世界は……白と黒に染まっちゃつもの?!」

「く……全世界の暴君』になるわけか……」

エンダーマンは頭を下げた。

「・・・お願いします。私と共に、暴君の計画を・・・阻止してくれませんか？」

「・・・分かった！皆、OKだよな？」

「・・・ごめん、あんちゃん」

「ジャック・・・お前何を言っているんだ？怖いのか？」

ライモンは問う。

「おいらは・・・弱いし何も世界なんて知らない。戦力にならないんだ・・・」

「このエンダーマンだって・・・おいらが何か知っていれば・・・もっとすぐに倒せたはずなんだ・・・！」

おいら 降りるよ・・・」

少年は笑う。

「ジャック・・・お前何言ってるんだ？」

狼も笑う。

「本当だ・・・お前・・・バカか？」

「な……ふざけてるんじゃない！おいらは……」

少年はまじめな顔をして言った。

「旅つてものは今までの知識を実践していくものじゃない、

……手探りして、学んでいくものだぞ。」

手探り　　！

そつだ、あんちゃんは　「世界を見たい」って言った……

あんちゃんは　毎日手探りしているんだ！

「分かったよ。あんちゃん。おいらは……『世界を学びたい』！おい  
らも戦つて……」

「よしーその意気だ！さあ、みんな……」

少年は手を差し伸べる。

その上に狼の肉球が乗っかる。

その上に子供の小さな手。

その上に黒い手が乗った。

「暴君を倒すぞー！」

「「「おー」「」」

「ココ・・・」

「ココココココココ・・・」

エンダーマンは闘志に燃えていた表情から一転、険しい表情になった。

「・・・どうした？」

「まさか・・・」

「そのまさかです。・・・第一の計画が始まりました。」

天気は曇り。西の空に紫色の切れ目が見えていた。

## 24：終わりの世界へ

西の空に、紫色の切れ目が見えていた。

「……ついに始まったか……」

「……してはいけません。皆さん、防具や武器の準備をよろしく。」

「……はとある緑の草原。」

西の空に紫色の切れ目。

その様子を村人達は見ていた。

鉄の人形と村長も。

「これは……どついついことなのだ……」

「……」

「……はとある灰色の洞窟。」

西の空に紫色の切れ目。

クリーパーやゾンビたちが洞窟の外を見る。

帽子を被ったスケルトンも、弓の手入れをやめた。

「・・・あれは・・・何なのだ？・・・」

ここはとある深緑のジャングル。

西の空に紫色の切れ目。

猫はそれを見て毛を立てた。

「プシュウウ・・・」

ここは赤い地の果て。

西に紫色の切れ目。

鬼と守護神は見る。

「なにやら不穏な空気だ・・・」

「これは・・・ただ事ではないな・・・」



「ここはある白の雪国。

西の空に紫色の切れ目。

子供と母が窓から覗いている。

「ねえねえママ・・・あれなに？」

「・・・お母さんにも・・・分からないのよ・・・」

「ここはある黄色の砂漠。

西の空に紫色の切れ目。

博士と村人達は見る。

「・・・敵は・・・もうすぐ来るぞ！・・・武器の準備だ！」

「「「ああー」「」」

少年達は洞窟の奥へと進む。

もう明かりが点いている。

壁や床の鉱石もほとんど回収しきっている。

「……じつです。」

そこにあったのは、12個の台座。

周りに白い虫がたくさん這っている。

「……」

ライモンは懐かしい思いで歩いていた。

その白い虫を追い払って進んだ。

「……ここにエンダーアイをはめるのです。」

「ムフェックリーから貰ったこの玉だな。」

少年は一つずつはめていく。

最後の一つをはめた途端、少年達は吸い込まれた。

「……The End……！」

前に広がる殺風景な景色。

エンダーマンがそこかしらにいる。

「……ダレダ……オマエラハ……」

一人のエンダーマンは近づいてきた。

「やばい……」

少年達と共にいるエンダーマンは、そのエンダーマンの腹を殴る。

「ウ……」

水晶が体から出て倒れた。

「エンダーマンは私が何とかします。……暴君はそこです！」

エンダーマンは空を指す。

「……オマエラハナンダ……」

低い声がした。

少年達は見上げる。

そこにいたのは巨大な真っ黒な竜であった。

「……こいつが……我らが暴君、エンダードラゴンです。」

「……エンダードラゴン……この計画を……俺達が消してみせる  
！」

少年は答える。

「ハハハハハ……コンナチビニ……ケサレルヨウナケイカクデハ  
ナイワ！」

竜が飛んできた。

突進するつもりだ。

「気をつけてください！こいつの突進は……最強です！」

「ゴオオオオオオ！」

「うわー！」

「くっ！」

「わわわー！」

少年達の横を竜が通りすぎた。

「ひとまず大地へ！」

少年達は広い大地に足をつける。

「シラレテハイケナイ……」

「シラレテハイケナイ……」

「いっしょ！」

ドゥッ！

バゴッ！

「グッ！」

水晶玉が二つ落ちる。

ゴオオオ！

「おりゃ！」

「ガブッ！」

「たあっ！」

二つの剣と牙が竜へ向かう。

全ての攻撃が当たった。

「よし！」

だが・・・

傷は再生されていった。

謎の光を浴びて。

「何!?再生している!」

「なんでなんだ!」

「・・・分かったよあんちゃん!あの柱の頂上から光がでていてその光が回復させてるんだ!」

ジャックは空を指した。

「あんな高いところのぼらなきやならねえのか!」

「めんどくさい!」

「アタマノイイ・・・トイッテホシイナア!」

ドラゴンは少年に突撃していく。

ゴオオオオオ!

「わああああ!」

「あんちゃん!」

「小僧!」

グシュッ！

「!？」

少年の目の前にいたのは一人の男。

頭は・・・かぼちゃ？

剣でドラゴンを斬ったようだ。

「グウ・・・」

ドラゴンは一旦、柱の近くへと向かった。

「ここへ来たからには、油断してちゃいけないなあ・・・」  
と喋って、頭のかぼちゃをはずした。

「旅人さんよ！」

「・・・お」

「お父さん・・・！」



## 25：再開

ここは草原の村。

村人達は宇宙人の襲来に驚いていた。

「女と子供は避難するんだ！」

「うわぁん！ママー！」

「大丈夫。近くの洞窟に逃げるわよ。」

「コノセカイハ・・・イツシヨクトナル・・・」

「ゴーレム！村を・・・守ってくれ！」

「ゴオオオオ!!」

鉄のパンチが舞う。

その強力なパンチにはさすがにエンダーマンもかなわなかったらしい。

3体のエンダーマンが吹っ飛ばされ、家の壁に激突した。

そして水晶を出した。

ゴーレムはエンダーマンをなぎ払う。

「ゴオオオオオ!!」

ここは砂漠の村。

宇宙人の集団が地平線からこちらへ来る。

ムフェックリー博士は指示を出す。

「大砲用意！撃て！」

屈強な男達はそれぞれのレバーを引く。

6つほどのTNTがそれぞれの大砲の中で点火される。

少したってからもう一つ、TNTが点火された。

その瞬間、爆風と共にたくさんのTNTが空を飛んでいった。

そして、どれも宇宙人の集団の中に落ち、爆破した。

「グワアアアア・・・」

たくさんの宇宙人から水晶が出た。

「よしよしああー！」

「・・・順調だ！」

「じじは黒い世界。」

「お父さん……」

「ナニイ!？」

「あんちゃん……の……お父さん？」

「あなたは……!10年前の……!」

少年は涙を流した。

「お父さん……生きてたんだね……」

「じめんな……心配かけて……」

男は少年の頭をなでた。

まるであの子供の時のように……

「さあ、もう涙は終わりだ。……ルーフス。」

エンダーマンがいるってじじは、話は聞いているな。」

「ああ、この世界を暴君から助けるってことだよな……」

……あいつは攻撃を受けるたびに回復する。

それをどうにかしないと……手を出示しても意味が無い！」

「では、こうしよう……お前達4人はそれぞれの黒い柱の根元から黒い柱の頂上へたどり着いてくれ。私はドラゴンをおびき出す……わかったな？」

「「「「「「」」」」」」

「……おい！ドラゴン、長年の決着をここでつけようか。」

「ノゾムトコロダ……オマエハ……ソウダナ……」

ドラゴンは男に向かって飛んでいく。

「……ニワトリニデモカエテヤロウ！」

ビュオオオオ!!

「おおおおおー！」

ズシヤ！

「フツ……ヤハリツヨイ……ダガマダマダ……！」

少年は父の戦いを初めて見た。

「さすがだよ父さん・・・強い・・・」

「おい・・・」

狼は爪を立てて黒い柱を登りながら言う。

「今は見ている場合じゃねえだろ！」

「じいめん・・・俺達がこの頂上に行くんだ！」

少年は土を積み続けた。

エンダーマンはワープで頂上まで移動した。

「・・・この結晶が回復の元だな・・・」

エンダーマンは結晶を破壊した。

ドオオオオン・・・

「エンダーマンが壊したみたいだ・・・おいらも早く行かないと・・・」

「ク・・・コワサレタカ・・・コシヤクナ！」

ドラゴンは方向転換をした。

「あ!!しまった・・・!気づかれた!」

「ん?何だこの音・・・?」

ゴオオオオオオ!

狼は気づく。

「っっておわー!助けてくれー!」

「あいつは両手・・・いや両足がふさがってるんだ!」

「わんわん!」

「ライモンさん!」

その時、一本の矢がドラゴンに刺さった。

ズシヤ!

「・・・?・・・ナニモノダ・・・!」

「ジョー!!」

少年と狼が言う。

「ス、スケルトン!?」

子供と男と宇宙人が驚く。

「……偶然終わりの世界に来てな!」

「「のぉ!嘘つきやがって!」

狼は笑う。

「よし……!頂上についた!……この結晶だな……たあ!」

ポオオオオン……

2個目の結晶が爆破された。

「ゲッ……コノジンミンドモメ……!」

ドラゴンは柱の頂上にいる少年に体当たりした。

「うわぁぁぁー!」

少年は落ちる。

下が全く見えないほどの高い柱から・・・



26・The End?

「うわぁぁぁ!!」

少年は落ちる。

ドサッ・・・

少年は眼を開くと・・・

「ゴーレム！村長さん！」

「危機一髪でしたな！」

「ガガ・・・」

ゴーレムが両手で受け止めていたのだ。

「・・・村はどうしたんですか・・・？」

「私達の村の名前を忘れたのですか？」

おーい！

旅人さーん！

増援だー！ 戦うぞー！

「ストート村・・・でしたね！」

村人達は村に襲撃してきたエンダーマンを  
全て倒したのだった。

後ろには仲間についてエンダーマン達がいる。

「ナニ・・・エンダーノナヲモツモノガ・・・ニンゲンニ・・・マケル  
ダト・・・!?!」

ドラゴンは言う。

「コノ・・・カトウナジンミンドモメ・・・!!」

ドラゴンは村人に向かって突進する。

わああああ！

きゃあああ！

村人が逃げる。

「フツ・・・ショセンハヨワイモノタチダ・・・」

バァン・・・！

「グッ・・・」

ゴーレムがドラゴンの頭にパンチをした。

「トモ……キズツク……」

「クツ……エンダードモ！イクノダ！」

「シラレテハイケナイ……！」

「眼を覚ませ！エンダーマン！」

村人達も攻撃をする。

黒い世界で大きな戦争が起きる。

村長が言った。

「生きて帰るつもりではないか！皆！」

「おお……」

ここは地の果て。

地の果てに住む軍勢とエンダーマン達が戦っていた。

炎の玉が飛び交う。

エンダーマンが倒れる。

マグマキューブが倒れる。

遺跡は崩壊していく。

崩壊した壁は、マグマの中に落ちて音を立てる。

「これでどうだ！」

ブレイズは三発の炎を出す。

「グアアアア!!」

「グッ……！」

「アアアア!!」

エンダーマンが三体倒れた。

水晶が三つ出る。

「これではきりが無い……」

ブレイズの後ろにはエンダーマンの腕が迫っていた。

「危ない！ブレイズ！」

ズシャ!!

エンダーマンが倒れる。

豚はブレイズの後ろにつく。

「油断をするな！お前の後ろは任せろ！」

「そっちこそな・・・！」

エンダーマンがまた一体、マグマの中に落ちていった。

ここは雪国。

沢山の雪だるまが配置されていた。

しかし雪はエンダーマンには全く当たらない。

「くそ・・・！遠距離の攻撃は効かない・・・！いくぞ！」

「！！おぉ！！」

村人達は剣を振り回す。

エンダーマンは斬られていく。

一人の村人が剣を振る。

すると、エンダーマンに火が点いた。

「グァァァアアア！！」

そのまま、エンダーマンは倒れた。

水晶が出る。

「みんな！そこから離れて！」

村人は撤退する。

一人の母親が子供達と一緒に宇宙人に瓶を投げる。

地面に当たった瓶はわれ、液が漏れる。

エンダーマンは次々と倒れていった。

「わーい！やったやった！！」

子供達は笑う。

ドオオオン！

3個目の結晶が子供に破壊された。

「こっちは爆破したよー！」

「まだ7個もあるのか・・・土をさっきの柱に置いてきちゃった・・・」

「私にお任せください。ゴーレム、見せてあげなされ。」

「ゴゴゴ」

「え・・・？」

ゴーレムは少年を持ち上げ・・・

一気に真上に投げた。

ゴオオオオオ!!!

「ちよっとおおおおおおおあああああ!!」

柱の頂上が目の前に見える。

それを通り過ぎた。

そのまま前方へ落ちていく。

そして柱にたどり着いた。

「ふう……はらはらおせやがって……」

ポオオオオン!!

四個目。

「……マタカ……」

ドラゴンは歯を食いしばる。

「……地道に石並べで降りなきゃいけないのか……」

少年は黒曜石の柱の側面に石を並べていた。

その時。

巨大なドラゴンはその柱に向かって突進してきた。

「わああああ!!」

「くそっ!」

ジヨーは弓を構えた。

が・・・敵のエンダーマンはその弓をはじき落とした・・・

「コウゲキハ・・・ソシ・・・」

そして四体の他のエンダーマンに囲まれる。

「じ・・・じのやるま!!」

ゴオオオオン・・・!

「ル・・・ルーフス・・・!!」



ドラゴンは壁に胴体をくっつけている。

少年は・・・

壁の中であった。

27: The End .

ドラゴンは胴体を離す。

それと同時に少年は下の下の砂の上に落ちる。

「ルーフス？しっかりしろ！ルーフス！」

父は少年の名前を呼ぶ。

返事は何も無い。

帰ってこないのだ。

「ルーフス・・・起きて来い！ルーフス！」

何度も呼ぶ。

「おい！お前まさかこんな終わりになるわけじゃねえだろうな！」

柱の頂上についた狼が言う。

「俺はいつでもお前を信頼してきた・・・いつも困難を！乗り越えてきたじゃねえか！」

「お前はこんな終わり方でいいのかよ！」

ポオオオオン!!

5個目。

「ほんとだよあんちゃんー!」

柱のふもとの子供は言う。

「あんちゃんは・・・まだ世界をすべて見ていないじゃないか!」

「私からも言いたいです・・・あなたは負けるべきではありません!」

「トモ・・・シンジル・・・」

村長とトーレムは言う。

「私からも言わせてくれないか・・・」私からも言わせて貰おう!」

「お前ら・・・」

ブレイズとゾンビピッグマンは言う。

「あなたは何で・・・負けるわけがありません!」

「そうだ・・・私はお前に倒されたんだぞ?・・・こんな図体だけでかい奴に負けるというのか?」

「私からも言わせてくれ。」

ムフェックリー博士は言う。

「私はお前を信じてこのエンダーアイを渡したんだ・・・」

「お前はここで死なない！そう信じて渡したんだ！」

「」「」「起きるんだ！おきろお！」「」「」

「・・・そうだ・・・俺は・・・ここで負けてはいけない！」

少年はふらふらと起きる。

傷が痛む。

息苦しい。

でも

俺はここで倒れれば

「ナゼ・・・ナゼタチアガル！・・・ナゼソコマデネバル・・・！」

「俺は・・・いろいろな世界を見るために旅に出た・・・

生命感のあふれる黄緑の草原。

枯渴する黄色の砂漠。

見るだけで寒い白の雪国。

奥へ行くほど暗くなる緊張感のある灰色の洞窟。

背の高い木の生い茂る深緑の密林。

灼熱のマグマに照らされる赤い地の果て。

そして　この黒と白の終わりの世界。

いろいろな世界を旅したいからなんだ・・・！

そんな素晴らしい世界があるからこそ旅が面白くなるんだ・・・

そのいろいろな色を・・・俺は・・・一色だけにしたくない！

俺は！立ち上がらなきゃいけない！

「クッ・・・」  
「コノニンゲンドモガア!!」

少年に向かってドラゴンが突進する。

ガキイン！

「グホオ・・・!!」

少年はドラゴンの頭部を斬った。

「カ・・・カイクク・・・セネバ・・・」

「もう結晶など無いぞ！」

ブレイズは言う。

「ナニイ!？」

「私が三つ、燃やしてしまったさ！」

「『そして我がゾンビピッグマン第一部隊が二つ、早急に爆破した  
』」

「クソオ・・・エンダードモ！カカレ！」

「何を言っているんだあんたは？」

一人のエンダーマンが言う。

「へ……」

「あなたの仲間はずいいないんだよ！」

「ナ……ナニ……！バカナ……モウエンダーマンガ……ゼンメツ!?……ヨミガエラセテヤル！」

「その前に俺達が！」

「……………お前を倒す!!!……………」

「オマエラハ……スベテ……クリーパーニカエテヤル……!!」

ドラゴンは少年達に突進してきた。

ジョーの矢が刺さる。

父の剣が胴を裁く。

犬は足に力強く噛み付いた。

子供と少年の剣も刺さる。

ブシューウウウウ!!

「グハア……!!オノレ……キサマラダ!!」

ドラゴンは草原と地の果てに住む者たちにすばやく標的を変える。

誰も逃げはしなかった。

豚の金の剣が首を斬る。

ブレイズの炎が胴に当たる。

最後にゴーレムがパンチを頭部にくらわせた。

ゴオン!!!

竜はよろよろと飛び続けようとする。

「マダ・・・マダコンナトコロデハ・・・」

「コスノーゴーレム達！今だ！」

ムフェックリー博士と雪国の村長が命令する。

雪だるま達は雪球を一斉に連射した。

「俺の今までの研究の成果を・・・お前は全く知らないのだ！」

「グオオオオオオオオオ!!!」

ドラゴンから光が放たれる。



今まで集めていた地上の『特殊な力』がドラゴンから放たれる。

「……………コゴデ……………オワルトハ……………」

ボオン……………

「バカナア……………バカナバカナバカナア!!」

一瞬の静寂。

と共に、ドラゴンの放つ光は強くなった。



終わりの世界の暴君を

倒したのだ！

「「「やったああああ!!!」」」

同じ目的で集まった者たちが喜ぶ。

「世界は救われたんだ！」

「俺達も解放だ・・・！」

「よかったな！お前ら！」

「あんだ達がいたおかげだ！ありがとう！」

エンダーマン達は地上と地の果てに住む者たちに礼を言う。

「気にすんな！パーティだ！パーティを開くぞ！」

「「「「ワアアアアアアアア！」」」」

「……？ライモン、体が光ってるぞ？」

ライモンは自分のしっぽを見た。

「まさか……」

ジョーも自分を見た。

「俺もだ……」

「この白と黒の世界で

喜んでいた人々は

まるで、七色、いや、それ以上の色で

カラフルに、染まっていたかのように見えた。

ここは砂浜。

ネザーラックの火が灯されている周りで、

パーティが盛大に開かれていた。

その時。

モンスターたちが村人を襲いに来る。

だが村人はこの日ばかりは怖がらなかった。

「ほれ、肉食え肉。」

「ヴァ・・・？」

「カラン・・・？」

「シュー・・・？」

モンスターも参加してもっと面白くなったこのパーティは

止まる気配は全く無かった。

「ほら、どんどん食つんだお前ら。」

ムファッククリー博士がゾンビピッグマン達に渡したのは豚肉の丸焼きだった。

「……共食いさせる気かっ!!」

「ハハハハハ……」「シュー……!!」

ブレイズは笑う。

「ジョークだよジョーク……ああ悪かったって！怒るなって！」

「クリーパーさん爆破しちゃってくださいよ……！」

「わわわわーマジでやめろ！会場が大変なこと！」

ムファッククリー博士は砂嵐ではなかった。

皆と笑えているからだ。

彼は博士を辞めるつもりだった。

だが研究は続ける。

いろいろなところに住む人たちのために、いろんなものを研究して

いじつと思ったのだ。

もう研究発表会にはでない。

自分のためだけにしかならないではないか。

さあ、始まりだ。自分の新しい道。

「……ナア……」

「なんだね、ゴーレム。」

「……サバク……テ……ナンダ……？」

「なんでそんなことが知りたいのかね。」

「……アノコトモ……キミガ……コトモノ……トキ……ソックリ……」

ゴーレムはエンダーマンと話していた一人の子供を指差した。

「これは『ポーション』っていうんだー！」

「ほう……確かひいじいちゃんが言っていたな……」



「もっと教えてくれ！」

「うん、いいよ！でもおいらが知ってるのは全てじゃない。

「……これだけは覚えておいてね！」

「キミ……ワレニ……オシエテタ……イロンナコト……

モツカイ……オシ……エテ……！」

「……わかった。ゴーレム。」

村長は涙を流した。

私とお前とでは、生きている時が違う。

私は……もうすぐに死ぬかもしれない……

だから、こいつ　親友のこいつにはもっとたくさんのことを教

えたい……

昔のよじり……！」

「お前はどつするんだ？」

「俺はまだ旅を続けるよ。熱帯雨林や山岳地帯だつて、一度も見てないんだー！」

「……そうか。」

一人の男は答える。

お父さんではない、口ひげを生やした男だ。

「……俺は、ここでお別れた。」

「なんでだよ！俺は前のお前の姿でなくてもいい！一緒に旅をしようぜー！」

「いや、自分の故郷に、俺の帰りを待っている人がいるんだ。帰らなければ。」

「……そうか。今まで本当にありがとう。」

「こつちこそだ。お前とジャックとの旅は本当に楽しかった……ありがとな。相棒。」

少年と男は飲み物を掲げる。

「乾杯。」

カロン

翌日の朝。

少年とジャックは旅の準備をしていた。

「・・・準備できたか？」

「ああ、あんちゃん、次はどんな旅をしようか？」

「自由気まま。その言葉しかいえないな。」

「じゃ、俺はこれで。」

「ああ、ライモン。じゃあな。」

ライモンは去っていった。

ライモンは遠くからこつちを振り向いた。

「おいルーフス。」

「お前を俺は、いつでも信じているからな。」

少年は頬に落ちた涙を拭いた。

そして笑顔でこつちいった。

「・・・ああ！おれもだ！」

「あれ・・・？あんちゃん、お父さんは？」

「・・・また旅に出たんだよ。知らないうちに。」

「あの人は俺以上に旅好きなんだ。」

「ここは喜びの砂浜とはもう遠い、密林地帯。」

ジャングルの大木の上に立てた広い家のベランダで広い密林を見渡していた。

水辺に浮かぶ小船はだんだんと遠ざかってゆく。

「ルーフス・・・まだお前の旅は終わってないぞ・・・だが」

「俺の旅も・・・終わってないな・・・！」

「ライモン・・・また一緒に冒険したいな・・・」

少年は歩きながら、バッグの中にあつた一つの骨を見つめていた。

「本当だね・・・」

クウン・・・

「あー狼だ！」

「お前も、ついてくるか？」

少年は骨を狼に差し出し、そういった。

「ワン！」

狼は嬉しそうに、しっぽを振った。

終

## 1：新たな旅

緑色に染まった草原の中。

動物達の鳴き声が飛び交う中を少年達は歩いていた。

「ふあああああああ!!」

「あんちゃん、大きなあくびだね。眠れなかったの？」

「そりゃそうだよ・・・昨日の夜はやけに雷がうるさかったからな・・・  
ってかお前よく眠れたな・・・」

「はははは。おいらは眠い時にはいつでも、どこでも眠れるからね。」

終わりの世界でエンダードラゴンを倒したルーフス達は、

「ご覧のとおり平和な旅を続けていた。

少年達が草原を描きかけの地図を持って歩いていると、  
前方には民家が広がっていた。

「・・・おー村があるぞ。立ち寄ってみるか・・・」

「ちよつと暗くなってきたし、ここで泊まらせて貰おうよ。」

少年達は村へと向かう。



「ようこそー私達の村へー」

「へ・・・」

「え・・・」

そこにいたのはたくさんメイド服を着た、女の子達であった。

「ちゅ、ちゅんぐんぐん」

「あは、いや、どじも・・・」

少年達はメイドさん達と一緒に村の中へと、頬を染めながら入っていった。

「村長さん、旅人の方がいらっしやいましたよ。」

「おおおそうかいそうかい・・・さあ、上がってください。今日はここに、一晩泊まることに。」

「ありがとうございます。村長さん。」

「この村には女の子達がいっぱいいるんですね。」

「はい・・・この村のほとんどがおなじですわい。伝承といいますが、この村では

生まれてくる赤ちゃんが、女の子であることが多いのです。」

「へえ……」

「きゃー」

ドタン……バシヤァン!!

「うわーきったね……何すんじゃあ!?このアマ!!」

「!?」

「あんちゃん、今はなんだ?」

隣の宿泊民家から聞こえてきた怒声。

「……行ってみよう!」

「うんー!」

少年達は宿泊所の扉を開けた。

見れば一人のびしょ濡れになった男がメイドに怒鳴っていた。

「すみません!!すみません!!」

「あやまれれば済むって問題じゃねえんだよ!このスーツいくらしたと  
思ってたんだー!」

「本当に……すみません……」

「だ〜から〜……!!弁償せんかい!エメラルド持ってこんかい!

ああ？  
「

」ぐすん」

メイドは首を横に振る。

「ほう・・・そうかい・・・だったら、体で払ってもらっしかねえなあ  
？」

メイドははっとする。

その時、メイドの口から大きな声が出た。

「やめてください！このセクハラ男！」

カチン・・・

「何だとお！！」のアマア  
「!!!」

男の拳がメイドに襲い掛かる。

ビュオオオオオ!!

ズバシ!!

「ヒョォ!!」

バタン!

男は殴られ、床に倒れた。

ルーフスに殴られていた。

「……嫌がっているじゃないか、止めてやれよ。」

「キサマア!!俺を……この俺を……殴ったなあ!？」

ビシッ!                     ズバシ!

ドン!!

少年の三発の拳が男のあちこちに当たる。

その様子を村のメイド達と村長が見守っていた。

泣いていたメイドは呆然と少年の姿を観ていた。

「グホォオオオ!!」

「……俺は終わりの世界のドラゴンを倒したんだ。なめてもらっちゃ困るな。」

「くそお！覚えてろ！バーカ!!」

男は逃げていく。

「ありがとうございます……」

「大丈夫だったかい？」

「キヤー!!」「かっこいいわー!」

黄色い声がたくさん聞こえてくる。

「かっこよかったが……何か胸騒ぎを……感じるわい……複雑じゃ!!」

村長は言った。

「お礼に紅茶を……ああ!」

ドタン！バシヤァン!!

「わわわわわわ!!」

またスカート裾を踏み転んで紅茶をこぼしたようだ。

「すみません、すみません!」すべに拭きまます。」

村長は口を挟む。

「紅茶は上手いがこぼすと服はぬれる・・・複雑じゃー!!」

・・・口癖なのだろうか？

「ははははは・・・君はドジなんだな。」

かぁ・・・

メイドの顔が赤くなる。

「お恥ずかしい・・・限りです・・・」

「お姉さん、おもしろいな!!」

さらに赤くなり、眼はぐるぐると回り始める。

そして倒れてしまった。

「大丈夫かーおいー!」

「はははははははー!やっぱり面白いやー!」

じつして、一晩は過ぎていった。

朝。

少年達は木を調達するため、村の近くのジャングルへと向かった。

「私の村のおなごを派遣してはどうか？」「やっらは良く働きますわい。」

「じゃあそうしようかな。」

「おおい、手が空いている奴はおらんかのお？」

みればほとんどが小麦収集に励んでいた。

・・・が、昨夜のメイドだけ、鍛冶屋の隅で、座っている。

「・・・何をしておるんじゃ？・・・ほっほっほ・・・またつまみ食いかね？」

ビクウ!!

こつちを向いたメイドは口にクッキーの食べかすをつけていた。

村長は笑っている。

かぁ・・・

また顔が赤くなった。

「す・・・すみません!!」

「なんのなんの・・・腹が減っては戦はできん。さあ、旅人の方々と共に、木を切ってくれんかのお。」

「は、はい!!」

「じゃあ、行って来るよ。」

「じゃあねー」

「で、では、行ってきます。」

「行ってらっしゃいませ。」

少年達はジャングルへ歩を進めた。

「?・・・この実はなんだ？」

「?・・・おいらも分からないよ。なんだろう、新種なのかな？」

少年と子供は首をかしげる。

「はい、それはカカオの実です。これを材料として、先ほど私の食べていたクッキーが作れるのです。」

今ではこの村で、パンの次に主食としているものです。」

「へえ、お前詳しいんだな。」

「お姉さんすごいやー!」

かあ・・・

またまた顔を赤くした。

「わ・・・私は料理に関しては人一倍の興味を持っているのです・・・」



と行って、下を向いてしまった。

「クッキーを山ほど作れるように、これも沢山とっておこうな!!」

少年は笑顔で言った。

「!・・・はい!」

少年と子供はこの村に来て、初めて彼女の笑顔を見た。

彼女の笑顔は、とても明るかった。

まるで太陽を見ているかのようにだ。

少年と子供は、つられて笑顔になってしまった。

その時。

彼女の笑顔は、一つの鳴き声によって掻き消された。

「キシユウウウ!!」

蜘蛛だ。

メイドの脳裏にはいろいろな音が響く。

蜘蛛の鳴き声。

赤ちゃんの大きな鳴き声。

そして女の鳴き叫ぶ声。

「きゃあああああああ!!!!」

メイドはその場に座り、大きな声で叫ぶ。

「ど、どうしたんだろう?」

「大丈夫か!？」

「やめて……!!こないで!!……きゃあああああ……」

女はその場に倒れこむ。

「じゅんじゅん……じゅんじゅん……」

キシユ!!キシユ!!

クシユウウウ・・・

蜘蛛は倒れた。

「あんちゃん、お姉さんは？」

「良かった・・・気を失っているだけだ。」

「一旦戻ろう、あんちゃん！」

「ああ・・・」

少年の腕の上に寝込んでいる女の目から

一粒の涙が垂れた。

## 2：太陽と陰（前編）

ここは村長の家。

ベッドにはメイドが寝ている。

少年達はその横で村長と話していた。

「そうですね・・・そのようなことがあったのか・・・」

「いくら蜘蛛が嫌いとはいえ、もう彼女は精神を保っていませんでした。」

・・・村長さん、何か知っていませんか？」

「・・・」

村長は沈黙した後、黙って席を立ち、扉へ向かう。

そして、扉の前で止まった。

「場所を変えよう・・・彼女の横で話してはダメだ。」

少年と子供はうなずき、宿泊所へと向かった。

宿泊所の中。

村長はベッドの上に座り、少年達はその前で話を聞いていた。

「あれは・・・今から五年ほど前のことだ・・・」

ここは昔の村。

月は真上の上っている。

村長は部屋で今日の日記を書いていた。

インクを横に置き、真っ白な本にペンを走らせている。

「カカオが足りなくなってきたな・・・サルバにでも採ってきてもらおうかのお・・・ん？」

(・・・・・・・・)

「・・・・・・・・気のせいかな・・・？」

はて・・・なにか見知らぬ鳴き声が聞こえたような・・・

あっちの方角は確かジャングルであったな・・・

・・・わしもとつとつ耳がひどくなってきたよっじやな・・・

(・・・わああああ・・・)

・・・！違う・・・動物ではない・・・この声は・・・

子供か・・・!!

「ニース!!ニースや!!」

一人のメイドが村長の部屋に入ってくる。

いかにも眠そうに目をこすっている。

「・・・どうしたのですか？こんな真夜中に・・・」

「援護をしてくれないか・・・いまからジャングルに入るぞ。」

「はあ!?!」

「村長・・・ただの聞き違いだったんじゃないですか？」

「そんなことはない！私のはつきりきいたのじゃ!!」

「分かりましたよ……」

メイドは葉を掻き分けながら村長を引導する。

「あ……本当だ……!!これは女の子の泣き声ですよ……!村長!!」

「やはりそうか……行くぞ!!」

(わああああ……)

声は近づいてくる。

モンスターが行く手を拒む。

メイドがモンスターを倒してゆく。

村長とメイドはついにたどり着いた。

「うわああああん……」

みれば女の子が泣いている。

そして蜘蛛が近づいていた。

「たあ!!!」

ズバシ!!

キシユウウウ・・・

そして、蜘蛛が逃げると同時に、メイドと村長は言葉に出ない悲し  
みを感じた。

なんと、泣いている女の子よりも小さな女の子が、ぼろぼろになっ  
て倒れていた。

「わぁああああん!!!」

「これは大変だ・・・手当てをしなければ!!」

「・・・だめです・・・もう・・・脈はありません・・・!!!」

「そんな・・・」

村長はひざから崩れ落ちる。

メイドは何もいえなかった。



その時、女の子の泣き声が静まった。

そして、赤ちゃんを抱えているメイドのスカートの裾をつかむ。

「わたし・・・守れなかった・・・!! 妹も・・・ママも・・・ひっく・・・!!

・・・つよくなりたいの・・・!! わたし・・・!! えっぐ・・・」

メイドから涙がこぼれた。

この子は・・・何らかの理由でお母さんも亡くしているのね・・・

そんな事にも負けずに・・・強くなりたいと願っている・・・!!

女の子であっても・・・

いせ、

女の子で「あるからこそ」!!・・・

「この子を・・・育てよう、ニース。」

「・・・はい・・・!」

「この子には・・・守ってくれるものは誰もいないのだ・・・

だから・・・私達が守らなければ・・・!

「彼女は今もなお強くなりたくないと願っている・・・夜中にな・・・  
いつも剣を振る音や矢を射る音が聞こえるのじゃ・・・」

最初は未熟な初心者の音であったが、日が増すごとに強くなってお  
る。

彼女は過去の重い荷を背負い、自責の念を抱いた。それが・・・そ  
の『願い』につながっているのである。」「

『『願い』・・・』

「……………」

少年と子供は思い出す。

あの彼女の太陽のような笑顔を。

あの太陽の裏にあったのは、とても暗い陰。

彼女からこの暗い陰が消えるのはいつなのだろうか。

彼女が強くなった時なのであるつか……

いや、強さに限界など無いのだ。

このままでは……

永久に。

永遠に。

彼女の陰は、  
無くならない。

「……村長さん。」

「……？」

「彼女と、話をさせてくれませんか。」

翌日の朝。

女はベッドから起き上がった。

周りを見渡す。

村長の家だ。

そうか・・・私・・・

!!!!

ズキン・・・!!

脳に痛みが走る。

ドクン・・・!!ドクン・・・!!

鼓動が早くなる。

声が響く。

(キシュシュシュユ・・・!!!)

(わあああああん!!)

(おねえちゃん!!うわあああああん・・・!!!)

「止めて・・・!!」

(キシュシュシュ・・・クシャアア!!!)

「止めて!!!」

メイドはチェストの中のソードを取り出す。

ドクン・ドクン・ドクン・ドクン・ドクン……

(キシユウウウ!!)

ド・ド・ド・ド・ド・ド……

蜘蛛の音が響く。

目の前で妹が殺される。

赤ちゃんの泣き声。

蜘蛛の鳴き声。 蜘蛛の鳴き声。

妹が殺される。

妹が殺される。 赤ちゃんの泣き声。

蜘蛛の鳴き声。

赤ちゃんの泣き声。

蜘蛛の鳴き

声。

妹が殺される。

蜘蛛の鳴き声。

赤

ちゃんの泣き声。

「勝てない……何も……私は……弱い……」

「強くなれない……!!!」

ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド……

女はソードを両手で逆方向に構える。

つまりソードを腹に向けて。





「何が『強く』だよ……」

メイドは腹を見る。

ソードは自分の腹の前で止まっている。

その代わりに、一つの手がソードで赤く染まっている。

手をたどって顔を見ると、

そこには旅人が居た。

### 3：太陽と陰（後編）

「何が『強く』だよ……」

！

見ると少年は手から血を出していた。

扉のすぐ先の床で皿が割れ、まだ湯気の出ているキノコシチューがこぼれている。

「お前は……『弱い』から死ぬのか？……」

「私は……強くなれないの……!!何も……守れないの!!」

「あきらめていたなら……蜘蛛に襲われて死んでしまえば良かったんだ……」

「……!!」

「……じゃあ……お前は今……何で生きているんだよ!!!」

「……!!!」

（この子を……育てよう。ニース……）

村長の温かい声が響く。

「強くなるために残しておいた命を……お前は全て踏みにじる気か!？」

少年の口調はとても厳しかった。

が

それでいて、とても優しい言葉であった。

「……お前は……一人『だった』……でも。」

少年は、笑顔でこう言った。

「今は、お前は『皆』と強くなれる。」

キィッ……

「あんちゃん!!その血はどうしたんだい!？」

「何事であるか……?」

「どうしたの……?」

「きゃ!!血……大変!!救急箱をお持ちします!!」

「チエリー……あなた……」

村の皆とジャックが家に駆け寄る。

「俺達は、どんなにお前がドジしたって、どんなに赤くなって倒れたりしたって気にしない。」

「俺達は、お前と一緒に強くなりたい。そして、お前を支えて生きたいんだ!!……」

お前が、決して暗い陰を見せないように……!

俺達は、お前の……明るい太陽が見たい!!!」

ヘッドの中心が、一粒一粒、濡れていく。

ぼろぼろと涙が落ちる。

女は少年の傷ついた手をとる。

そして、顔をうずめて泣いた。

「……う……う……ごめんなさい……旅人さん……皆さん……」

「ほっほっほ……なんのなんの……ほれほれ……涙を拭きなさい。」

「なぐに言うてんの!! あんたは私のかわいい妹

じゃないの!!」

「チエリー・・・あなた、あの時からほんと強くなったよ・・・!!」

「」「」「ほらほら、泣かないで!!」「」「」

「そっだよお姉ちゃん、笑ってよ!」

「さあ、あっちで皆クッキー焼いて待ってるぞ。」

少年は手を差し伸べる。

メイドは手をとじる。

「・・・ははは!」

少年と村の皆は、今日、今までに無い明るい太陽を見た。

それから二日後。

少年の手の傷も回復し、

少年と子供は既にジャングルの木を取り終えた。

カカオの実と共に。

チエリーはそのカカオの実を床にばらまき。

皆と笑い。

そして農作業を手伝い、

村のメイド達との優雅なお茶をたしなみ。

ぐっすりと眠り。

ついに別れの時が来た。

「・・・忘れ物は、大丈夫ですかな。」

「はい、全部荷物は大丈夫です。そうだよな、ジャック。」

「うん、『ぜんぶ』もったよね・・・!!」

「ほう・・・それは良かった・・・しかし、去るというものも、

仕方ないというか悲しいというか、複雑な気分でございます  
じゃ・・・じゃが。」

「ルーフス殿、チェリーを救ってくれて、本当に、ありがとうございます。」

「そんな・・・またこの村に遊びに来ますよ。」

「いつでも、お待ちしております。」

「」「」「」また遊びにきてねー!!」「」「」

？・・・

少年は思った。

そういえばチェリーの姿がどこにも無い。

ははあ・・・あいつのことだから部屋で泣いているのかな・・・？

「」は触れずに行こう・・・

「では、また会いましょう!!」

「キヤーー!!」「ワー!!」

「ありがとうねー!!」

村のメイド達と村長に手を振りながら、少年と子供は村を去っていった。

少年はジャングルの中を歩いていった。



「……そういえばチェリーさん、どこ行ったんだろっ?」

「さあな、そつとしておけ。俺達に一番なじんでいたのは、今思えばあいつだったな。」

「そう思うとなんだかさびしいな……」

ガサ……

ガサ……

「……?」

ビュオオオ!!

その時、草むらから影が襲い掛かってきた。

「……これは……新種のモンスターか……!!」

「ちょっと待って……!! 違うよ!」

「きゃああああ!!!」

どろっ!!!

メイドだ。

「チェ……チェリー!？」

「あ！ルーフスさん！さ……捜しました！」

「え……？」

ニースは村を教会から見渡す。

そしてはしごを降り、村長のもとへ駆け寄った。

「村長さん……まさか、チェリーは……」

「あやつは決める時にはその心にまっすぐに従う。」

きつと、自分の求めていた人を見つけたのであろう。

「……止めは……しないでくださいね。」

「……ああ。」

村長は涙をたらす。

「旅立ちというものは……嬉しければ悲しくもある……」

とても、複雑な気分じゃ……!!」

チェリーは照れながらあるものを手渡した。

白く、細長い糸。

蜘蛛の糸だ。

「お前がしとめたのか・・・!?」

「・・・はい・・・!!・・・ぞ、それと・・・!!」

メイドは顔を赤くして、

「私も！お供させてください!!」

「・・・ああ！もちろんだ!!」

「やったあ!!チエリーさんが仲間になった!!・・・?」

「本当だな!!・・・?」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

「「「「あ!!」」」」

「どうしたんですか・・・!?!」

「お前のために秘密に作ったクツキーを置いてきた!!」

「大丈夫です、」

「既に、私の、お腹のなかです」

「「ええええええええ!?はええええええええ!!」」

「「「「「この速さなら、このジャングル全体の力カオを3日ぐらいで全部食べちゃうんじゃないか・・・?」」」」

「力カオは定期的に貯蓄しないとね・・・」

「ちょっと・・・私もそこまで・・・食いしん坊じゃ・・・ないですよお  
!!」

「はははは!!また赤くなった!!」

「ほんと恥ずかしがりやなんだからな!」

「ううして、チェリーが新しく仲間になったのだった。

#### 4：古からの贈り物

少年達は新たな仲間、チェリーと共に、密林を進んでいた。

実はこの密林に足を踏み入れてから、もう一週間たっている。

その間、この密林の中で、クッキーを食い、モンスターと戦い、リ  
ンゴを食い、高い木からの雄大な景色を見たりして、

なんとか7日間、密林の中を過ごしてきたのだ。

少年は、ボロボロな服を揺らし、だるそうに、密林を歩いていた。

「あゝなんて広いんだこのジャングルは……」

「本当ですね……私もここまで広いジャングルは始めてみました。」

「たぶん、ここはラージバイオーム……つまり巨大な気候帯なんだよ。  
ひどい時にはこれくらいの、地図一枚分も埋め尽くすんだ……」

ジャックは人差し指と親指で、四角形を作って言った。

「マジで!!……そりゃあ先が見えないはずだ……」

ルーフスは肩を落とす。

「でも私は、とても嬉しいです。」

チエリーは話す。

「今まで・・・ジャングルは怖いイメージしか無かったものですから・・・  
あんなに高い木からみた景色は・・・とても心が洗われました・・・  
！」

チエリーはニコツと笑った。

「・・・そうか。」

少年や子供も、つい笑ってしまった。

笑うと、不思議と元気が沸いてくる。

「よしー！がんばって歩くぞー！！」

「「「オー！！」」」

それから一時間後。

まだまだ密林は続いている。

一匹の山猫が木の横をすり抜けていく。

その時、目の前に何かが見えた。

「……？……あれは何だ……？」

「建物だ……」

それは石材で作られた謎の建物。

緑色のコケが生い茂っている。

「……あれは……もしかしたら……遺跡、じゃないでしょうか！」

「遺跡……？」

これは五年前。

チェリーがまだ幼い少女だった頃。

チェリーは村の書齋を掃除していた。



パタパタパタ・・・

本のホコリを一冊ずつ、はたきで払っていた。

その一冊のうちに、表紙にエメラルドの描かれた本を見つけた。

中身を見てみると、なにやら変な絵が描いてある。

「おじいちゃん・・・これ、なんなの？」

「おお、チェリー、・・・ふむ・・・」

村長は考えて後、口を開いた。

「これは、『むかしのひとたち』の思い出が描かれている本じゃ。」

『むかしのひとたち』「？」

「そうじいちゃ。。。」

『むかしのひとたち』はな、ある日、他の国からこの村・・・そして、

宝石も何もかも、奪われてしまったのじゃ・・・

しかしこの人達は、『少しでも』わたしたちに役に立ててほしい、と、  
小さなチエストを、遺跡の中に隠し、罾を仕掛け、他の国の者達に  
奪られないようにした。

その思いから、子孫達は屈せず、他の国の者達に勝ったのじゃ。

その遺跡の中の宝石は、『むかしのひとたち』に敬意を示して、今も  
なお、遺跡にのこしてある。

「あれは、『古からの贈り物』なのじゃよ……」

「おじいちゃん……眠たいよ……」

「おやおや……私としたことが。つい長く話してしまった。さあ、お  
やすみ。……」

「……おそろく、その『昔の人々』の遺跡がもしれません。」

「なるほど……中に入ってみるか！」

「ダメだよ！あんちゃん！大事な遺跡なんだから！」

「でも・・・私も『昔の人々』が何を残したのか気になります。」

「チエリーさんまで!!」

「まあまあ、気をとがめるなって・・・見るだけ、だから。な？」

「はあ・・・本当にのんきなんだからなあ・・・」

「ごめんなさい・・・」

子供は、一人の乙女に謝られて自然に罪悪感が湧いてきた。

少年も目が輝いている。もう止められないだろう。

子供は理由をでっち上げ、妥協した。

「・・・チエリーさんに言われちゃあな。・・・まあ僕も、『昔の人々』の仕掛けた罠が

気になるから。・・・行ってみる価値はありそうだね。」

「じゃあ行ってみよう！」

少年達は遺跡に入ってしまった。

遺跡に入ってから階段を降り、目の前にチェストが見えた。

「……なんだ、もう見つかったぞ。簡単だな……」

「まさか……畏が無いはずがありませんよ……!!!」

「ルーフスさん！ストップ!!」

「え……」

ピン……

何かが張るような音がして、少年の右で何かが光る。

ビュッ……!!

「だぁっ!?」

少年は間一髪でよけた。

サクッ……

壁に矢が刺さる。

少年は青ざめた。

「さすが古代の人々です……『油断する気持ち』ほど、畏にかかりやすいものはありません。」

「ほ……本当だな……ととととても怖いな……」

「あんちゃん鳥肌がすいよ……」

少年達は今、チェストの前だ。

「……開けるぞ……」

「ゴクリ……」

「はい……」

ギギッ……



「……え……？」

「どうした……」

「歴史だ。古代の人々は、『宝石』だけを後世に残したいわけじゃなかったんだ。」

ジャックは右側面に穴の開いた、一つの頭蓋骨を手取る。

「この、戦いの歴史。それを伝えたかったんだ。」

少年と娘は、チエストに近づいた。

「確かに……『戦いに勝つ』為には……被害者は必要だな……ごめんなさい……大きな悲鳴を上げてしまっ……」

「……私も……この頭蓋骨を怖がってしまいました……すみませんでした……」

少年と娘は一つの頭蓋骨に謝る。

「そして……後世に伝えてくださって……ありがとうございます……!!」

娘は涙目で笑った。

少年と子供も涙ぐむ。

2人はずっと、頭蓋骨を抱きしめるチェリーを見つめていた。

「……じゃあ、あんちゃん、チェリーさん、旅を続けよう!!」

「……ああ!」「……はい!」

また歩いてから一時間後。

「見えた……見えたぞ!!」

「やった!!」「わーい!!」

見えたのは広い広い草原。

密林の旅は終わりに近づいていた。



密林の夜。

高い樹林の間から、青白い月が見えている。

ゾンビの声が聞こえる。

スケルトンの骨のかすれる音も聞こえる。

コシ・・・コシ・・・

何者かの影が遺跡の中を歩いている。

遺跡の罾の糸を簡単に、ずさんに切り、その先のチェストを開く。

ぎい・・・

「・・・うわ!! 思ったねえ!! そしてくせっ!! なんだこの骨と肉は!!  
チツ・・・」

男の声だ。

男はチェストをひっくり返す。

中から人骨と人肉が何個も転がる。

その奥から、エメラルドがいくつか出てきた。

「チツ……しよっぺえな……まあ貰っとくか……」

その男は遺跡から出る。

ちょうど月が真上に昇った。

木でさええぎられた月光はまっすぐに男を照らす。

ピカピカのスーツに金髪。

欲望しか見えていないよごんだ目。

ヴァー!!

「……ああつげえ。」

男はポケットから拳銃を取り出し、

ゾンビに向かって何発か弾を発射した。

バン！バアン！バアン！バアン！！

グアウ……

「あーほんと踏んだりけつたりだぜ……収穫はすくねえわ……」

「あんな手ピに負けるわ女にのしられるわ……」

番外編 1：くらふと がーるず

「ルーフスさん……」

チェリーが自室にいる少年に声をかける。

「んー。」

ルーフスは地図で洞窟の場所を確認していた。

「あ、あの……ケーキ作ったので……一緒に……食べませんか？」

チェリーは照れながら言う。

「あー今はいいわ。うん。ちょっと忙しいから。ちゃんと閉めてってね。ドア。」

「……………」

バゴン!!!

チェリーはドアをとて強く閉めた。

ルーフスは気を留めもしない。

地図を眺めているだけだ。

あー眠くなってきたな……

そろそろ寝よう・・・

朝日が昇る。

少年は起きる。

背伸びをする。

ニワトリが鳴く。

何の変哲も無いいつもの光景。

パンを食べて、外へ出る。



「よし！今日も快調だ!!……ってあれ?……ジャックとチェリーは……?  
……」

寝室を見ると、誰も居ない。

「……?……まさかあいつら、もう洞窟に行ったのか?……しょ  
うがねえなあ……」

少年は鉄ピッケルとクッキー、松明を持って、洞窟へ向かった。

「なんだ、あいつら違う洞窟と間違えたのか?……ぜんぜん明るくな  
いぞ……」

少年は松明をつけながら進む。

うぁー。うぁー。

ゾンビの声だ。

なんか耳がおかしい。

なんかいつもより高い声が聞こえる。

少年は右耳を人差し指で掃除した。

ん……！クリーパーの気配！！

後ろだ！！

少年は後ろを振り向く。

「あれ……」

後ろに居たのは女の子だ。

緑色の、見覚えのある顔の柄が付いたパーカーをかぶった女の子。

なんでこんなところに女の子が・・・？

女の子はしゃべる。

「あんだ・・・」

「へ・・・？」

「どこからきたのよ！」

「いや・・・え・・・？」

「なによ！はつきりしなさいよ・・・」

「い・・・いや、いきなり可愛い女の子に話しかけられてもな・・・」

「か・・・かわ・・・かわ・・・いい・・・だなんて・・・私!!」

その女の子は光った。

その瞬間。

ポオン!!!

「うわぁ!!!」

(.....)

（うん、ちょっと待ってくれ。）

（整理がつかないぞ・・・？）

（女の子が・・・洞窟の中に現れて・・・爆発。）

（まるでクリーパーのようだ。）

（落ち着け。落ち着くんだ。）

少年は深呼吸する。

ビュン・・・

エンダーマンだ。

あっちの方角に・・・

「っであれ・・・」

今度は女の人だ。

美人で、手脚が長い、スレンダーな女性。

黒袖の手で石を運んでいる。

少年はじっと見つめる。

女性はこちらに気づき、頬を染めた。

「……しいか……」

何かしゃべった。

「……えっと……なんですか？」

「……恥ずかしいから……」

「……?」

「……私の……顔……見ないでください!!」

バチン!!

(生まれて初めて、女性に殴られた。美人な女性に。)

17のとき、初めて少年は「バチン!!」



(なんか・・・今日、なんか変だ!!!!!!)

「きしゅー!!」

今度は小さい女の子が両手を挙げて襲ってくる。

「きしゅー!!」

その後に一段と小さい女の子。

「なんだ!? 蜘蛛みたいに身軽だ・・・!!」

「たぁー!!」

はすっ!!

「いつ!! くそぉ・・・反撃・・・」

相手は女の子。

「できるかぁー!!」

少年は逃げる。

ジュッ!!

「ひっ!!」

矢が飛んできた。

見れば、洞窟の入り口に、一人の女性が立っている。

白い甲冑のような服。

「あなたのハート。狙い打ちたいわ・・・!」

ジュッ!!!!

ジュッ!!!!

ジュッ!!!!

「ちょ、おま、待って!!」

右に抜け穴があった。

その先にはネザーゲートだ。

(しめた!!……っていつ作ったけ……?)

ジュッ!!!

「……」「……」「……」

「……」「……」「……」

少年はネザーゲートに入ってしまった。

「よし……」じまでくれば……」

「ルーフス様ではありませんか!!」

「ええ!？」

そこに居たのはやはり女の子だ。

「私ども、ルーフス様のご無事を祈って……」

「ああ、分かった!!ありがとうございます!!」

「おまちください!!私どもに、どうか服従を……!!」

少年は走る。

遠くへ走る。

「やっぱり何か変だ。」

「よお、お前は旅人か？」

遺跡の橋の欄干に座っていたのは茶色の水着に身を包んだ女性だ。

吊り目のボーイッシュな顔立ちだ。

「あなたは・・・？」

「お前のその心、われが温めてあげよう！」

ポオッ!!!

ポオッ!!!

「あちちちちちちちちちち!!!! 逃げろ!!」

「待つのだ!! 八八八八八八!!」

笑っている。

相当ドSのようだ。

「ここまでくれば・・・」

「あら、旅人さんですか？」

どじからかの声。

上だった。

とても大きい女性だ。何故か宙に浮いている。

「観光ですか？」

「いや、そうじゃないんだけど・・・」

「うれしいです！！こんな所に観光に来てくれるなんて！！」

「いやそうじゃない・・・」

喜ぶと同時に炎が噴出される。

「ちよ

ぼおん!!!

「言わんこつちゃねええええええええ!!!」

床が崩れ、少年が落ちていく。

目が覚めると、そこは夜の草原。

「あれ、マグマじゃ……」

「逃げてええええ!!! きゃああああ!!!」

見ると茶色の服の女の人が追っかけられている。

「やった!!普通の人だ・・・げえ!」

後ろから青いTシャツを着たショートヘアの女の子が大勢、女の人を追っかけている。

「うあー。」「うあー。」

「うあー。」「うあー。」

「うあー。」「うあー。」

「うあー。」「うあー。」

「うあー。」「うあー。」

「きゃあああああ!!!」

「やべー!逃げ・・・」

後ろを向く。

「あなたと一緒にノノノ・・・いたい!!」

緑パー

カーの女の子。

「私の・・・私の顔を・・・見られるなんて・・・ノノノ」

黒長袖の女性。

「きしゅー!」「きしゅー!」

幼い姉妹。

「ねえ・・・撃っちゃおうよ・・・ノノノ」

白い甲冑の女性。

「私ども、あなたさまを守りたいのであります!!」

金の剣を

持った女性達。

「さあ、また始めようではないか・・・ハハハハ!!」

茶色の



水着の女性。

「きゃー！またあえるなんてすてき〜!!」  
大きい女性。

浮遊した

「あゝもう訳が分からない〜!!!」

少年は頭を抱える。

そのまま、沢山の女の子の渦に巻き込まれた・・・

「うあ〜」

「狙い撃ち・・・!!」 「助けて〜!!」

「うふふふふ〜」 「ルーフス様!!」 「爆破・・・して

も／＼／

「恥ずかしい／＼／」 「ハハハハハ!!!」 「きしゅー!!」  
「うあー」。

「きちゅー!!」 「お守りします!!」 「うあ〜」。

「・・・さん・・・」

「・・・フスさん!・・・」

「ルーフスさん!!」

.....

夢か.....

良かった。

「大丈夫ですか、ルーフスさん.....何か怖い夢でも.....!? あ、ケーキどうぞ。」

「お.....おう.....」

少年はケーキを食べながら、チェリーを見る。

「.....どうしたんですか?」

「・・・やっぱり、お前が一番、可愛いな!!」

「へ・・・いきなり・・・何を／＼／＼・・・はっっ!!!」

ボタン!!!

「あ！大丈夫か!! チェリー!! チェリー!」

今度こそ、平凡な一日が始まった少年であった。

番外編 1：終

「……おいら、思ったけど。」

「……」

「一人でレッドストーン並ぶのって………悲しいね。」

## 5・島の終わり

「着いたあ!!」

「やったー!!」

少年達は一週間もの密林の旅を終え、ついに草原に抜けたのだつた。

「本当に長い旅でした!」

「そうだなー!上からのゾンビ達に震えながら旅ももう終わるかぁ……」

「ただバイオームを抜けただけなのに、なんか嬉しいね!!」

少年達は笑う。

その時だった。

「ワン……ワン!!」

「あ……!!」

「お前は……!!」

少年達の元に、一匹の狼が近づいてきた。

あれはエンダードラゴンの野望を打ち砕いた後のこと・・・

ライモンと離れ、再び旅に引き返した少年達に近づいてきた狼。

「お前も・・・ついてくるか？」

「ワン!!!」

少年は骨をかぞす。

だが狼はタイガへ引き返してしまった。

「・・・・・・・・?・・・・・・・・」

「どうしたんだろう・・・・・・・・? あんちゃん？」

「・・・・・・・・ついて来い、って言ってるのかな・・・・・・・・」

少年達は狼の跡を追う。

「ワン！」

「これは……」

少年の目の前にいたのは……

「家族だ……」

その狼は子持ちであった。

父親か、母親か……どちらかは分からない。

その時。

子供の一人が、少年の腕に噛み付いた。

「ガルルルル……」

子供の狼の噛む力では、当然少年も噛み跡がつくだけだ。

「……たくましい子だ。」

「本当だ……」



少年は子供の狼の頭を二度、軽くたたいた。

「クウン……」

子供の狼は腕から離れた。

「……あきらめようか。こいつには、子供を守ることのほうが重要だ。」

「そうだね。」

少年達はきびすを返す。

その後ろから。

「ワンワン!!ワンワン!!」

子供の狼が強く吠えた。

「……ああ!!大きくなったら……俺がお前を迎えに行くよ……!!」

「待ってるからね!!」

「・・・お前なのか・・・？」

「ワン!!」

「そうか・・・お前か!!よくここが分かったな!!」

「ワンワン!!」

「え・・・？」

狼はバッグをしょったチェリーの周りを嬉しそうにはねている。

「ははははーなるほど、クッキーか!」

「チェリーさんにそっくりだ!!」

「ふふふふ・・・あなたもクッキーが大好きなんですね!!」

「ワンワン!!」

狼は嬉しそうに吠えた。

少年は狼に青の首輪をつけた。

口にはクッキーを頬張っている。

「……」わでよし……と……

少年は立ち上がる。

「さあ、新しい仲間が増えたところで!!旅をつづけますか!!」

「「!!」」  
「おおー!!」

「ワンワーン!!」

少年達は草原を踏みしめる。

が……

「……あり……?」

「え……」

「うそ……」

「クウン?」

地平線の先が見えると同時。

草原は終わったのだった。

前には海ばかり。

「な・・・な・・・ん・・・で・・・す・・・と・・・」

「まさかこんなに短いバイオームだったなんて・・・」

前のようなラージバイオームとばかり思っていました・・・」

「ワンワン!!」

バシヤ・・・バシヤ・・・

狼は水遊びを始める。

「いじゅあにそいじー」

少年は怒る。

「・・・ってじやは・・・」

「この島に……別れを告げなきゃいけないってことだよな……」

子供はつぶやいた。

「……そうだな……」

ルーフスは思い返す。

この島のとある浜辺でモンスターに襲われた。

ライモンとも出会った。

洞窟で鉱石を取って、ジョーとも出会った。

ゴーレムと村長さんに出会い……

ムフェックリー博士に出会い……

そして、こいつ……ジャックに出会ったんだ。

ジャックも思い返す。

本当に、いろんなことがあったなあ……

地の果てでゾンビピッグマンと出会った。

ブレイズと戦った。

あんちゃんと共に、エンダードラゴンを倒した。

(俺は、この島で・・・)(おいらはこの島で・・・)

(どのくらい、成長したんだろうか・・・)

チェリーは笑う。

「本当に、いろんなことがあったんですね・・・顔がほころんでいますよ。」

「うお!?まじで・・・ハハハハハ!!」

「ハハハハハ!!」

「ふふふ・・・」

「よし、島の最後の記念に、ここに灯台を建てるか!」

「賛成!!」

「ワン!!」

「長期にわたる大きなプロジェクトだ・・・拠点を完成させよう!」

チェリーはジャングルに木を、ジャックはこの草原の動物達を狩っ

てきてくれないか？」

「分かったよ!」「分かりました!」

二人は散っていった。

「さてと・・・俺達は洞窟で鉱石をとってこよう!!」

「ワン!!」

少年は洞窟を捜しに森へと向かう。

太陽が沈み、夜になり、朝になった。

少年達はそれぞれの場所で睡眠を取り、

作業を続けていた。

最初に戻ったのはチェリー。

汗を拭きながら、木材の沢山入ったバッグを草の上に置いた。

その横に寄りかかるようにして座る。

「ふう・・・このくらいでいいかな・・・」

松ノ木と榎の木も採ってきちゃった・・・

「・・・ルーフスさんとジャック君はまだ終えてないのね・・・」

「チェリーさん!!」

「ジャック君!!」

ジャックが戻ってきた。

バッグの中には焼いた肉とキノコのシチュー。

「草原の動物は本当に元気があったよ。感謝して食べないとね!」

「そうですね!どうでしたか?夜は。」

「夜は良く眠れたよ。縦穴掘って、松明立ててね。」

「・・・そういえば昨日は狼の鳴き声がすごかったような・・・」

「確かに私もそうでした!昨夜はそれであまり眠れなかったんですよ・・・」

「はははは!それにしちゃ、肌もきれいだよな、チェリーさんって!」

「お、お世辞を言わないでください!!」

メイドは顔が赤くなる。

「・・・あ!あんちゃんが帰ってきた!!・・・って・・・え・・・!?」



そこに居たのは戦場を跡にしたような出で立ちの少年だった。

狼も……なにやら怖くなっている……

「はあ……はあ……あいつは……これまでに最大の強さだった……

あいつとは……関わるべきでは無かった……」

「ど……どづつしたの……あんちゃん？」

少年は押さえていた左腕を離して、真顔でこう言った。

「いんや。なんにも。」

「なにがしたかったんだよ！」

「ワンワン!!」

狼はしっぽを振る。

メイドは腹を抱えて笑っていた。

「よし、設計図は決まった！明日の朝一、作業に取り掛かるっ！」

「おやすみなさいー!」「おやすみー!」

「クウン・・・」

少年達はベッドにもぐった。

今日も、月がきれいであった。

続く

## 番外編2：Merry Christmas!!

少年達はタイガの山岳の壁に、石を採りに来ていたのだった。

その時、ジャックの目の前に、ちらちらと白い何か降ってきた。

その白い何かは、止め処なく、降りしきる。

「雪だ!!」

「なるほど、今日はクリスマスでしたね!!とてもきれいです・・・」

「あ〜うずうずするぞぉ〜!!雪をみると〜!!」

「ワン!!ワン!!ワン!!」

狼は雪を捕まえようとしてあちらこちらとさまよっている。

少年は木をすり抜け、拠点へ戻っていく。

「ジャックくんは、確か雪国出身でしたよね?」

「うん、本当に長い間、冬には雪を見てたよ。」

「やっぱり、雪を見てると落ち着くなぁ。」

「ふるわいのものって、何か落ち着くものがありますよね。」

「せっぴー、おいらはまだ子供なんだな。」

「……………」

チェリーはジャックの言い出したことに疑問を抱いた。

ジャックとチェリーに、いきなり何かがぶつかる。

冷たい。

「きゃっ!!」「うわ!!」

「ハハハハハハ……!!」

見れば少年が雪を投げている。

「もう! ルーフスさんの頭の中には風情というものがありませんか  
」!

「このう!! 村の雪合戦で一位になったおいらをなめるなよ!!」

ジャックは雪を集めて投げ返す。

「こつちだこつち!!」

少年も逃げる。

「待てー!!」

「……………もう……」

チェリーは少し笑った。

そしてはしゃぐジャックを見てチェリーは考えていた。

さっきの言葉の意味だ。

もしかしてジャックくんは、プレゼントが欲しいのじゃないかしら……

無理も無いわ。まだ11歳ですもの……

……！そうだわ！

チェリーは手を一回叩いた。

「ふう……遊んだな〜!!」

ジャックがリビングに寝転がる。

横では狼が眠っている。

「ジャックくん、疲れてるでしょう、部屋でゆっくり寝たほうがいいですよ」  
「？」

「うん、そうするよ。ありがとう、チェリーさん。」

「俺も、そうしようかなー」

「あ……ちょっとー」

チェリーはルーフスが立ち上がったと同時に呼び止める。

「……ちょっと、手伝ってもらえませんか。」

ジャックは暗い自室で考えていた。

つつい、クリスマスプレゼントを欲しがってしまう自分。

冒険に出た者として、こんな甘い考えでいいのかな……

もっと、自分は大人になれるのかな。

まだ、自分は子供なんだ。

ふとドアの外を見た。

もう深夜だ。

なのに明かりが点いている。

「あれ……まだあんちゃん達寝てないのかな……」

ジャックは部屋から出て、一階へ降りた。

やっぱりまだ寝てないんだ。

ジャックはドアを開けた。

キイ・・・

「メリー！クリスマス!!」

「ワン!!」

そこに居たのは赤いサンタの服に身を包んだメイドと少年。

狼までもサンタの服を着ている。

子供は一瞬、ポカンとした。

だが、その次に沸きあげてきたのは

嬉しさだった。

「さあ、ジャックくん、今日は夜更かしして楽しみましょうー！」

「ほらほらー！」馳走もいーっぱい！作ったぞ!!」

「ワン!!ワン!!」

狼はチキンの骨を啜っていた。

「あんちゃん！チェリーさん！ありがとうー！……ごめんね手伝わな  
くって。」

「気にすんなってー！」

お前は俺達にとって、大切な弟みたいなもんなんだからよ!!」



ジャックは涙が出てしまった。

この二人が、自分にとってもっと近くにいたことを感じたのだ。

もはや、『家族』。

「・・・おいらも・・・あんちゃんやチェリーさんみたいな  
お兄さん、お姉さんができて嬉しいよ!!」

ルーフスとチェリーは笑う。

「さあー今夜は楽しむぞ!!」

「おー!!」

「ニーンワ」

大人になったら、こんなことも素直に歡べなくなるのかな？

なら

僕は。

まだ、子供でいても、いいかも知れないな!!

番外編 2：終

「ここは地の果て。

鬼と守護神は地上の雪をみていた。

「なあ、ビッグマンよ……」

「どうしたのだ？」

「俺も、雪国。いききたいなあ……」

「……自分の体、見てから言えよ。」

ブレイズは頭を下げた。

「……だよな。」

## 6：真夜中の怪物

「よし！明日の力仕事に備えてみんな、おやすみ!!」

「おやすみなさい。」

「おやすみー!」

「クウン……」

家の明かりが消えた。

ここは何の人影も見えない草原。

今日はいつもより風が強い。

草がざわざわとなびいている。

……前言撤回しよう。

草原の中に一人、人影が見えた。

人喰い狼達が群がる。

いかにも危ない。

喰われる。

と思われた矢先。

人影は大きくなった。

もはや人影ではない。

その横顔の影はまるで

『狼』。

「ゴオオオオオオン……………」

「ワオオオオオオン……………」

「ワオオオオオン……………」

「ワオオオオオオン……………」

「ウォオオオン・・・」

遠吠えが一軒の小さな豆腐小屋にまで響いた。

「ううん・・・」

ジャックは、布団を肩までかけなおした。

時間を進め、翌日の正午。

少年達は拠点を半分まで完成させていた。

「チェリーさん、ガラス余ってる？」

「あ、1スタックありますよ。」

「おい、ジャック、ちょっと斧取ってきてくれるか？」

「ごめん、今手が離せない。」

「ああ、大丈夫だ・・・」

「ワン!!」



見ると狼が斧を唾えている。

「おおーお前も手伝ってくれるのか……よしよし、あとで肉いっぱい食べさせてあげるからなー!」

「ワン!!」

「おーい! あんたら、何してるんだい?」

「あ、住人の方ですか……こんにちは。」

「「」ん」ちは。」

そこに居たのは中年のおじさん。

「グルルルル……」

狼は険悪そうに唸る。

「ああ、」じ」じ」じ」ぶ。び」じ」じ」めんなさい……」

「ははは……いいんだよ。」

おじさんは笑いながら言った。

「わたしはペットの狼には嫌われやすいんだ。」

(『スピットの狼』には『……?』)

ジャックは少し疑問に思う。

「ところで、何をやっているんだい？」

「あ、今灯台をここに建てようと思ひまして……まだ拠点を作ってるのですが……」

「な……なるほど……そうか……」

(……なにやら不満そうだ……)

子供はまたも疑問に思う。

「まあ、気をつけてやれよ。」

「ありがとうございます……」

おじさんは森の中に入っていった。

「……」

「グルルル……」

少年は考える。

「……? ……ジャック、どうした?」

「あんちゃん……おかしいと思わない?」

「なにが?」

「あのおじさんだよ。あんちゃんやチェリーさんは、昨日のそれぞれの作業の時、

どこかに「軒家を見た?」

「いいや。」「私も。」

「おいらも見てないんだ。じゃあおじさんはどこで夜を過ごしてるんだ?」

「いや、それは初めてここに来たからじゃ……」

「それもないよ。おじさんは自分で森へ入っていった。初めてなら絶対に迷うし、

迷ってたなら高く見渡せるジャングルに行けばいい。

おじさんが持ってたのは斧だけ。リュックもしょうってないんだ  
「よ。」

「ちよっと考えすぎじゃないのか?」

ルーフスは笑う。

「ただ地下で生活してただけだよ。地下に拠点があるんだ……さあ、  
続けようぜ!」

「地下にしては汚れてもいなかったけど……まあ考えるだけ無駄

か。・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼は「俺もそう思う」「といったような、そんな様子に見えた。

その夜。

「拠点も完成したし、明日はいよいよ灯台作りだ。皆、しっかり寝て、体力つけておくんだぞ。」

「はい!!」

「ワオン!!」

皆それぞれの部屋に入る。

ジャックは部屋の電気を消した。

「おやすみ。おやすみ。」

グシューグシューグシュー。

ガオオオオオンン・・・

子供は電気をつけた。

なんだ・・・？

いつもと違う狼の鳴き声。

近い。

ガオオオオオオンン・・・

近い!!!

子供はおそろおそろ一階へ降りる。

あ！・・・

玄関が空いている。

あんちゃん・・・鍵閉め忘れてます・・・

ジャックは涙目になる。

ゴト・・・ゴト・・・

何者かがいる。

リビングだ。

ジャックはリビングを覗く。

そこに居たのは・・・

狼男。

「うわ・・・」

子供は大声を出しかけた。

狼が左右を確認した。

だめだ・・・気づかれる。

ここは・・・こっそり・・・

しんと静まり返った家の中。

子供には狼男しか見えなかった。

ドクン・・・

子供はリビングの端にあったチェストをこっそり開く。

剣・・・剣・・・

チェストにあったのは、まだ一回しか使っていない金剣。

「ルーフスがただただかっこいいから作ってみて、使えなかったのだから放置された剣。」

これしかないなあ・・・もっといいのは

「カラン・・・」

狼は後ろを向く。



床にはチェストから落ちた鉄のシャベル。

その横に　　剣を持った子供。

「ばれちまった・・・」

狼男が口を開く。

「ひっ・・・!!」

「しょうがねえ・・・消すしかねえなあ!!!」

「うおおお!!やけくそだああ!!」

子供は狼男に斬りかかる。

狼男は剣を見てあせった。

「ちょっと・・・あれ?それ?おま、金って・・・」

ズバシ!!

「お……俺の……弱点……」

ボタン!!

「……ありゃりゃ」

月はもう沈もうとしている。

少年はあぐらで、腕をくんでいる。

テーブルの向かい側に、狼男が正座している。

その横で、子供とメイド、狼が見守っている。

「なんで石なんか盗もうとしたんだ？」

「あんたら、都会の奴らだろ。ここに灯台を建てて、その場所を起点に  
っつー。」

「この森を開拓するんだろ！」

「はあ？そりゃ間違いだよ・・・俺らはただの旅人だ。森なんて焼き  
払ってどうするんだよ。」

「え・・・そうか・・・」

狼男はうなだれた。

「俺としたことが・・・すまなかつた!!」

狼男は頭を下げた。

「分かればいいんだよ！」

少年は笑う。

狼男は悲しそうな目で問う。

「なあ・・・一つ、頼みを聞いてもらえないか？」

「あんちゃん！そいつは泥棒だよ！頼みなんて聞く必要が・・・」

「待て、ジャック。なんだ？頼みって。」

「俺も・・・その灯台、手伝わせてくれねえか。」

「え・・・？」

「クウン・・・」

狼は眠そうにあくびをする。

もう朝日が昇りかけていた。

「・・・ここから、ずっと離れた都会に、俺の娘がいる。」

朝日が部屋に差し込む。

狼男は縮んだ。

さっきまで凶暴だったその顔立ちは・・・

まさに、父親そのものの優しい顔立ちであった。

「お前は・・・昼間の時の・・・!!」

「私は、娘にその灯台の光と共に私の声を届けたいんだ・・・!なあ・・・頼む!!」

「・・・分かった。異論は無いよな、二人とも。」

「分かりました。灯台を完成させましょう!」

「そんな頼みなら大丈夫だ!」

少年は狼にも問う。

「お前も、いいか?」

「ワン!!」

狼は元気よく答えた。

「ありがとうございます・・・皆さん・・・」

狼男が涙を流す。

「おいおい・・・泣くなよ・・・」

「泣いてない!こりゃあ、汗だ!!」

「はははは・・・」

「ふふ・・・」

「じゃあ、今日から、灯台作りをはじめろ！みんな！怪我に気をつけて、楽しく作るぞ！！」

「！！」  
「！！」  
「！！」

「ワン！！ワン！！」

こうして、ルーフス達と狼男の灯台作りが始まった。

## 7：光と咆哮

鳥が唄う。

太陽が青々しい海の彼方から、オレンジ色を放って昇る。

少年達はチェストから急いで資材を取り出して外に出た。

「よおーし、今日は灯台作り、がんばるぞ!!」

「おー!!」

「ワオーン!!」

三人と一匹は、早速、設計図を元に灯台を作り上げていった。

ジャックは設計図を確認し、

チェリーが内部から松明をつけていく。

狼男が高速で石を積み上げる。

ルーフスも石を置く・・・置き間違っつて、

狼は資材を三人の元へ運ぶ。

またまた作業を繰り返す。

三人と一匹は汗をだくだくと流し、灯台の完成を目指していたのだった。

時計の針は廻り。

一日がもうすぐ終わろうとしていた。

今日は狼男の提案で、外で夕食をとることにした。

二人と二匹が横たわった原木のベンチに座っている。

「ふう〜疲れた〜!!今日はガッツリ食っぞ!!」

「久しぶりの運動になりました!」

「でも大丈夫?狼寄ってくるんじゃない?ってこんな狼だらけのパーティじゃ

寄ってこないかあ・・・」

子供はホッと息をつく。



「ん？バンバン寄ってくるぞ。」

「エ・・・」

「なんせ人喰い狼達は俺の部下だからな。」

毛むくじやらの狼男は言った。

「大丈夫だ。人喰い狼っていうのは世間の名。俺がいるうちには、人間はくわねえさ。」

その背後から、灰色の毛の狼達がこちらを覗く。

「『『『『ワオーン!!!』』』』」

「言ってる傍から来た・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼は嬉しそうだ。

「ははは、やっぱりお前仲間みたいなものなんだな。遊んで来い。」

「ワン!!」

「『『『『ガル!!』』』』」

狼達はいっしょに森のほうへ、嬉しそうに走っていった。

「ちゃんと朝までには帰って来るんだぞ!!」

少年達と狼男は焼いた豚肉を食べながら話していた。

「……そっいえば名前聞いてなかったな。」

「俺はビスト。狼人間だ。」

「狼人間がこの世界にいるなんてなあ……世界は広いんだな。」

「お前ら知らんのか？俺の先祖はまだ陸が一続きになっていた時代にさかのぼるらしい。」

世界中に狼人間は散らばってるぜ。俺みたいな人肉に興味の無い奴もいるが、ほとんどは

人間を食い殺す。気をつけるよ。」

子供の背筋が凍る。

少年は問う。

「……そっぴや娘さんがいるらしいな。」

「ああ、俺には娘がいる。だがあいつは狼人間ではなかったただの人間だ。母の血を多く受け継いだようだ。」

「お母さんは・・・？」

「あいつが幼い頃、死別した。元々病弱だったんだ。

あん時は悲しんだわ。・・・でも。」

「娘がいたからこそ、俺は強くなれたんだと思う。」

「娘さんは今どこ？」

メイドは尋ねる。

「遠い遠い地に働きに行っちゃったよ。あいつは出て行くとき、反対する俺にはじめて反抗したんだ。」

驚いたね。小つちええ時は狼の姿の俺を見て一日中ベッドから顔を出さなかった事があったのによ。」

『自分も外に出て、世界をしつかりこの目で見たい』だよ。

そんなことを一心に伝える娘を見て、俺も心折れちゃったよ。それでいいだろう、と。」

「ワオーン!!」

「ワオーン!!」

狼達は木の上に昇って吠える。

狼男はどんどん燃えていく炎を見ながら言う。

「だが実際、行っちまうと寂しくなるもんだな……」

「……………」

「なあ。」

「ん？」

狼男は作りかけの灯台をみる。

「……………この光、あいつにも届くかな……」

「ああ、届くさ。」

少年は言った。

炎は燃え果てて、どんどん小さくなっていく。

狼がもう一吠え、月夜に吠えた。

翌日、

ルーフスたちの灯台作りが再開した。

丸石を並べ、松明をたて、石を採取し、・・・

夕方。

前には堂々とそびえたつ灯台があった。

真っ赤な太陽に、薄明るい光を放っている。

「できた・・・」

少年達は草原に寝転がる。

その日の夜。

少年達は灯台を眺めていた。

「明るいなあ!!」

「本当だね!」

「素敵・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼男は無言のまま眺めている。

そしてしばらく経った後、口を開く。

「この光なら、娘に届く・・・」

狼男の目から涙が垂れる。

その涙は一続きになっていき、狼男は草原に座りこんだ。

「・・・ありがとう・・・ありがとう・・・!!」

少年達は笑う。

「ワオオオオオオオオオオオン  
!!!!!!」

「ワオオオオオオオオオオオン  
!!!!!!」

狼男は何度も吠える。

まるで光と共に我が娘に伝えるように。

私の娘へ。

元気ですか？

体調崩していませんか？

怪我していませんか？

私は、いつもこの地で帰りを待っています。

その時まで、この光と声を届けます。

父より。



8：狼の名前は・・・？

灯台を見上げていた夜が過ぎ。

狼の草原に朝が来た。

ルーフス達は拠点から、手持ちにするものを選んでいた。

「終わったか？お前ら。」

「終わりましたよ。」

「おいらも終わったよー!!」

「よし、後は・・・あ・・・あいつか・・・」

「狼のことですか？それなら家の前で狼達と別れを惜しんでました

」よ。」

「クウン・・・」

「ワォーン！」「ォーン!!」

「」「ワォーン！」「」

家の前で五匹の狼が泣いていた。

「……さすがに二日も滞在してちゃ、親友になるよな……」

「もう少し出発を遅らせましょうか。」

「お前ら、本っ当にありがとうな！こんな立派な灯台を作ってくれやがって！」

「俺らだけで作ったんじゃないさ、あんたも手伝っただろ！」

ルーフスは笑う。

「俺も灯台作ってて楽しかったぜ！ガキの頃に戻ったみてえだった」

「ふふふふ……あなたって本当に子供らしいですねっ！面白いです！」

狼男は照れる。

「お前らはこの後、どっちに行くんだ？」

「あっちだ。」

ルーフスはジャングルと反対側の、広い海を指差す。



「あ……」

「どうしたの？あんちゃん。」

「今悪いんだが……」

「狼の名前。」

「「あぁーッ!!」

「ワオン?」

「なんで灯台作り終わってから気づくんだよ!!」

ルーフスはボートを叩きながら自問自答する。

「し、仕方が無いですよ。」

メイドは言っ。

「なんてっ たってこの小説の作者が忘れたから

こんな変なギャグ展開を作ることです……」

「「フーフーフーフー!!メタな発言はやめる!!」

本当にごめんなさい。

ボートはまっすぐ進行方向に進んでいく。

「……まあ名前を考えましょう。どうします?」

「かっこいい名前がいいな!! ガダムとかエレカセンとか。」

「おい、登場する度をつけるような名前はやめなさい。」

「あんちゃんはどんなのがいいの?」

「うー……ん……そうだな……」

骨が大好きだからコッコツ君とか……」

「チェリーさんはどんな名前がいいの?」

「かわいい名前がいいですね! ウルフから『ウールちゃん』とか。」

「なんか羊みたいな名前だな……」

「スルーせんといて!!」

ルーフスは涙目になりながら大声をだした。

狼は犬掻きで楽しそうにボートを追いかけていた。

ボートはゆっくりと進んでいく。

「まだ島は見えないな・・・よし、ゆっくり考えるぞ。」

まずは「いつから連想する情報を整理するぞ。」

ルーフスは本と羽ペンを取り出す。

「まず狼！」「うん。」

「お肉を食べますよね。」「うんうん。」

「骨もなめて・・・って食べ物しか思い浮かばないぞ。」

もっと性格の方で考えよう。」

「えっと・・・強いですよね!!」

「確かに、こいつは真っ先に俺の腕に怖がらずに噛み付いてきたよな。」

よし、候補つと・・・。」

「気が利く！」

「なるほどなるほど・・・」

海はすでに赤く染まるうとしていた。

海上の夜。

少年の本には300以上の候補。

「だぁー!!逆に何選べばいいのかわかんねえ!!」

「候補出しすぎましたね・・・」

「途中で止めておくべきだったよ・・・」

「・・・ちょっと休もうぜ?」

「ハア・・・どーしよーかな・・・」

三人はボートの上でへたばる。

狼は寝ぼけているのか、犬掻きしながら器用に寝ている。

少年達は夜空を見た。

星がキラキラと小さく輝き放つ。

少年は懐かしく感じた。

自分の最初。

旅に出てから、まだ一人だった頃。

こんな風に、夜空を眺めていたんだっけ。



「・・・そうだ・・・星だ！」

「ルーフスさん?・・・」

「あんちゃん?」

「おい、ジャック、お前、なんか違う言語の辞書持ってるか？」

「ああ、あるよ。」

少年は本を取り出す。

『星』って調べてくれ。」

「星・・・星・・・ステーラ。ステーラだよ、あんちゃん。」

「まあ・・・いい響き・・・でも何故『星』を？」

「俺、いつも思うんだけどさ、どの星もこの星からすげえ遠いだろ？  
考えてみれば、よく光なんか届くよな、て。」

ルーフスは狼の頭をなでる。

「だから俺は星のように、『強く』輝いて欲しいんだ。こいつにな。」

「いいよ！あんちゃん！かっこいい名前だ!!」

「私も賛成です!!」

「よろしくな！ステラ!!」

「クウン……」

狼は寝ぼけ眼でルーフスを見た。

翌朝。

「はぁ……寝ちゃったのか……」

子供は背伸びをする。

「ぐいぐいすす……」

子供は進行方向を見たと同時に固まる。

そして目を閉じる。





## 9：グレート・スライヴシティ

「なんじゃありゃ……」

「何……あれ……」

少年は目の前に見えた景色に目を見開く。

霧には直方体の大きな影が映される。

ボートは前進する。

霧が晴れていく。

ビルだ。

10階どころではない、30、いや、80階はありそうだ。

「すげえ……………」

「初めてみました……………あんな高層ビル……………」

「すごい都会だね……………」

少年達は見入るばかりであった。

少年達が砂浜に着くと、

改めて高層ビルの高さが目に分かった。

高層ビルの周りには大小それぞれのビルが建っている。



と皮肉りながらすすりすすり立ち去っていった。

リゾート地の出口から出ると、もつビルや店が並んでいた。

人通りも多い。

『ロイヤルベルホテル：グランドスレイヴシティ支店』

『メークドネルド：グランドスレイヴシティ第3支店』

『メイプルドーナツ本社ビル』

『ピース生命保険本社ビル』

・・・

少年達は看板を見ながら歩く。

狼が舌を出しながらしっぽを振っている。

初めての景色に興奮しているようだ。

その拳動不審の姿を観てたのか、一人のアロハシャツの老人が話しかけてきた。



「君達、この街は初めてかね？」

「はい、私達は北の島から旅をしてきた者です。いや、本当にすごい都市ですね。」

「ワン…」

ずっと黙っていた狼がやっと口を開く。

「ほう、君達、旅をしてきたのか…」

老人は遠い目になる。

はっと思い出したのか、

「ところで君達、『エメラルド』は持っているかね？」

「エメラルド？…ああ、確か…」

ジャックがバックから取り出す。

「…この宝石ですよね。」

ヒスイ色に輝く宝石。

「そうじゃ、この『対価』は『エメラルド』で行うのじゃ。」

「これを持っていなければ、あんだ、この都市で何も買えんぞ。」

「なるほど・・・ありがとうございます、おじいさん。」

「なんのなんの・・・旅人さんに出会えたことで、私も昔の思い出を思い出すことができた。こちらこそ、ありがとうございます。」

老人は去っていった。

少年は少し安心した。

さっきみたいな卑下する奴ばかりいるのかと思ったが、

親切な人もいるんだな、と。

ぐうぐう・・・

ジャックのお腹が鳴る。

チエリーは微笑んで、

「せっかくだから、何か食べていきましょうか。」

「ああ、そうだなー！」

「へへへ・・・」

「ワンワンニ！」

少年達は近くにあった『メークドネルド・グランドスレイヴシティ  
第3支店』

に入ってしまった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「「注文は何でしょう？」

「えっと・・・フィッシュサンドーっ、ビッグサンドーっで。」

「テイクアウトで？」

「>・・・」

受付は少し顔をひきつらせて、

「お持ち帰りにしますか？ここで食べていきますか？」

「あ、お持ち帰りです・・・」

「エメラルド5コになります。」

少年はジャックからもらったエメラルドを払う。

「「「ありがとうございます〜！」」」

「はぁ……意外に高いんだな……」

「本当だね……」

少年達は街道を行く。

狼はチェリーのフィッシュサンドの魚の半分を食べている。

「でもおいしいですよ、このハンバーガー。」

「おお、そうだな……ムシャムシャ……」

少年はがつついた。

「この都市も、まあまあ楽しいところだな！」

「おめえは……この都市の何を知ってる？」

少年は目を開く。

右を向くと、そこには路上に缶を置いて酒を飲む男がいた。

ボロボロのジャンパーを着たその男の表情は、ネックとキャップでほとんど見えなかった。

男は続ける。

「おめえの目に映るもんが、ぜんぶ真実だと思うな。この都市にや、裏があるんだよ……」

ジャックとチェリーも話を聞く。

さらに続けた。

「おめえは、この瞬間の都市を信じるか？ 疑うか？」

その男は見るからに汚らしい存在であった。

だが見えない口からこぼれだす話は、妙に惹かれる点があった。

どついつ意味だ？

その時、遠くから大声を出して歩いてくる人物がいた。

「やあやあ諸君!! 今日もがんばっているかね!!」

「これはこれは市長!! こんにちは!!」

「元気でなによりだ!! がははははは!!」

豪快で、金髪その男は笑う。

「市長さん! こんにちは!!」

見ると少女が一輪の花を持っていた。

「いね!!」

少女は男に花を渡す。

「ありがとね〜お嬢ちゃん! お兄さん、今日も頑張っちゃっしょ!」  
スーツの男、市長は少女の頭をなでる。

その時、後ろについていた女性秘書は市長を呼ぶ。

「市長、午後3時丁度から」メルエス株式会社社長、ラレール・ベルグソン氏とのご対面があります。そろそろ戻らなければ。」

茶色の長い髪を縛り上げ、黒いスーツに身を包んだ女性秘書。

銀縁眼鏡をずりあげている。

「ああ、分かったよ。じゃ、戻ろっか。」

男が振り返る時、一瞬目が会った・・・様な気がする。

そして素早く目を逸らした・・・様な気がする。

はて・・・

あんな人、どっかで見たような・・・

チエリーも首をかしげている。

ジャックは何も感じないようだ。

「市長さんって、面白そうな人だなあ。」

「クウ〜ン?」

ここはグレート・スライヴシティ、グランドビル58階。

最上階であるこの階に一人の男が座っていた。

逆光で顔が見えない。

壁掛け時計は午後5時を指している。

この季節だ。外はもう真っ暗だ。

男は少し考える素振りを見せながら、誰かに電話をした。



「お前ら。この都市の北に旅人が来た。」

そいつらを始末だ。」

「了解。」

ガチャン。

隣にいた秘書は言った。

「恐縮ですが」

「うわ、びっくりしたあ!!」

部屋の明かりが付き、逆光ではなくなった。

「お、お、お前は、気がつくくと近くにいるからびっぴりするんだよ！

もっと強くノックしてこいよ!!」

さっきのダンディな声と裏腹に、まぬけに裏声を出した。

「承知しました。」

そして裏返すように、ダンディな声に戻る。

「ふっふっふ・・・あいつら、終わったも同然だな。」

私に逆らうとしようとすることになるんだぜ・・・はっはっはっはっは!!」

## 10：表と裏

昼食をとった後、ルーフス達はエメラルドを5個ずつ持って、解散した。

集合場所と時刻は午後6：30、都市の中心の噴水だ。

ルーフスはただただ気ままに、電気屋や釣り道具屋などをめぐりめぐる。

ステーラはルーフスについていく。

ジャックは図書館でこの付近の気候帯の調査や、本を読んでいた。

チェリーは本屋で料理本を選び、服屋で服を見ていたりしていた。

チェリーが服屋から大きな紙袋を持って出ると、さっきのアロハシャツの老人がいた。

「おお、これはこれは・・・先ほどのお嬢さんではありませんか。」

「あ、こんにちは・・・」

「おや？他の二人はどうしたのかね？」

「今は自由行動中です。午後6：30分に噴水に集合する予定です・・・」

その時、老人の目が大きく開く。

そして老人は服屋に少し入ってから、受付の上に飾ってある時計を覗く。

午後5：16。

老人は服屋から出て、チェリーの肩を掴む。

「今すぐこの街から立ち去りなさい！  
今すぐだ!!」

「えっと・・・おじいさん・・・どうしたのですか？」

老人は血相を変えて言った。

「いいか、お嬢さん、この街の夜間人口に対する昼間人口の比率は96%だ。」

老人は年の割りに難しいことを喋っている。

チェリーが要約して喋る。

「つまり・・・夜の間の人の数より昼の間の人の数が大幅に大きいってことですよね・・・」

「そうじゃ、なぜこうなっているかっていうとな・・・」

チェリーは老人の言葉を耳にして、驚愕した。

た、大変!!

ルーフスさんとジャック君に知らせなきゃ!

チェリーは都市を駆け抜けていった。

「くねくねも気をつけるんじゃないぞ!!」

ルーフスはじーっと見ていた。

ステーラと一緒に。

蛙だ。

ルーフスが足を踏みおろす。

ダン・・・

ゲエーコツ。

蛙が鳴いた。

ステーラも同じく。

ポン・・・

ゲエーコツ。

蛙が鳴く。

ルーフス。      ダン。      ゲエーコツ。

ステーラ。      ポン。      ゲエーコツ。

ルーフス。      ダン。      ゲエーコツ。

ステーラ。      ポン。      ゲエーコツ。

「面白いな・・・」ね。」

「クウーン。」

「・・・！！・・・今は・・・」

午後6：27。

「うわ、蛙に見とれてたらもうこんな時間かよ!!急ごう、ステーラ!!」

「ワンワンワン!!」

ルーフスとステーラは雑貨屋さんから出た。

午後6：40。

「ああー!!あんちゃん、なにやってたのさ!!」

「「ぐめんぐめん、蛙が・・・」」「ワン!!」

「蛙?・・・それよりかチェリーさんが来ないんだ。どうしたんだろ?」

「え・・・?あのチェリーが?・・・あいつはおっちょこちょいだけど

時間は必ず守るはずだよな。」

「……あんちゃん、何かチェリーさんの身に何か起きたんじゃないの？」

「でもあいつにゃ剣術が……」

「あーあー!!!」

ルーフスのジャックの中に、三人の武器一式とエメラルド5個。

「まままままずいジャック……ぶつぶつぶつぶつぶ……」

少年は顔面蒼白になっている。

「大丈夫だよあんちゃん、この街はとてつもなく広い、3時間程度じゃ都会から逃げ出せないよ。……捜そう！チェリーさんを!!」

少年は気を引き締める。

「……ああ……」

「ワーンワーン」



「やっと見つめましたね兄貴。」

「ばっきやるー!!」

兄貴と呼ばれる男は弟分を殴る。

「てめえが雑貨屋さんの『あの玄関によく置いてある防犯用の蛙の置物』に見とれてたからだろうが!!」

「ひいー！すいません!!」

廃ビルの3階。

銃を持ったスーツのたくましい男は銃口をセットする。

照準・・・旅人の少年。

「だが俺の銃のテクニクにかかりゃ、一秒で終わりさ・・・」

「いっけー！やっちまえー！兄貴!!」

少年の頭が照準に合わされる。

アディオス……

「おっ！……なんじゃーりゃー！」

サッ

バピューン。

バシヤ!!

少年はかがみ、水鉄砲の水は後ろの車に当たった。

「……これすげえな!!クリーパーのフィギュアじゃねーか!!」

「1/8サイズぐらいか……僕も買えばよかった……」「クウン……」

「えっと……兄貴？……そりゃ、訓練用の水鉄砲じゃ……」

「・・・・・・・・」

兄貴は思っ。

( やっべええええええええええ……この俺が照準をはずしかつ訓練用の水鉄砲でバツピューンと撃ってしまつとは…… )

「兄貴、バツピューンじゃなくてバピューンかと……」

「なんでお前俺の頭ン中の声聞こえてんだよ!!」

ゴチン…

兄貴は殴る。

「あ、あ、兄貴……照準が……」

「あー!!」

照準は既にいずこへ。

「チェリーさん！チェリーさん!!」

「チェリー!!返事しろー!!」

「表通りは一通り見たんだけど……」

「路地裏にいたりして！」

「いや、そんな・・・」

ジャックの動きが止まる。

「ジャック、どうした？」

「・・・あんちゃん、あれ。」

少年が路地裏を見ると、そこには皮の薄着一枚で、縄で縛られている

女の子が3人。

近くには目のよごんだ男達がいる。

「これは・・・」

「おう、おうさん、いまならいくら、まとめてエメラルド3個だ!!」

少年の目が見開く。

「ほう……今日は特価じゃないか……どうしたんだい？」

「こいつら、全くもって使えないんですわ。よーするに、

売れ残りだよ。」

売れ残り。

人の。

「さあ、どうすんだい？おっさん、買つの？買わないの？」

「じゃあ、買おうかな。ほら、エメラルド3個だ。」

人3人で、エメラルド3個。

少年は言葉を思い出す。

おめえは、この瞬間の都市を信じるか？疑うか？

「ごつごついう意味だったのだ。

この金欲にまみれた風景を見て、昼間の都市など信じられるわけがない。

表と裏だ。

「いやだ!!」

女の子が一人叫ぶ。

「おかあさんとご帰るんだ! もう売られたくない! もう止めて!

止めて!」

男は蔑む。

「はあ?・・・ハッハッハ・・・止めれる訳ねえだろこんな儲かる商売・・・いいかぁ、お前。こうなるのもお前が貪しいから悪いんだぞお。嫌なら儲かれ。嫌なら金を手に入れる。」

「.....ごつごつ」

女の子は泣く。

「さあ、メールちゃん、おじさんと、家へ来るんだ・・・」

女の子二人は呆然としている。

もう意識はほとんどないらしい。

中年の男はいやらしい目で女の子の腕を乱暴に掴む。

「やだ!!やだ!!・・・」

女の子は最後に泣き叫んだ。

「誰か助けてえ!!」

ドオン！ バゴン!!

中年の男と販売人が同時に吹っ飛ぶ。

少年と子供がパンチをしたのだ。

少年は笑う。

「・・・やっぱりお前もか。」

「・・・常識だろ、あんちゃん。」

少年と子供は女の子の縄を解く。

「さあ、逃げようー」

女の子達は少年と子供に手を引かれ、表通りを駆け抜けていった。

「に、逃がすなー・・・てどわぁあ!!」

「ガールルルル・・・」

「ステーラ！ありがとう！あとで肉たっぷり食わせてやっかな!!」

ルーフスは叫ぶ。

ガブツ!!

「いててててて!!」

男は痛さで応援も呼べないようだ。

・・・



「ここは？」

チェリーが起きると、そこは牢獄の中。

窓もない檻の中。

そうか、私……誰かに後ろから殴られて……

「気が付いたかい？」

見るとそこには昼間の市長がいた。

……いや、市長と呼ぶべきでない。

遠くからじゃ分からなかったが……

「……は……！あの時の!!」

「村じゃ、よくも私のことを『セクハラ男』と呼んでくれたもんだ。」

「だって実際にそうなんですもの。」

「な、なにをー!？」

男は咳払いをし、言った。

「まあいい、お前はあいつらを始末してから、終わりだからな……ハッハッハ!!」

男は去っていく。

あーあ……

油断していた。

あの時に思い出せばこんなことは予測できたはずだ。

バッグも無くなってる。

お腹すいたなー……

ギィ……

ドアが開く。

「！・・・あなたは・・・」

茶髪の女性秘書だ。

「・・・これ、あなたのバッグでしょ？」

「なんで・・・あなたはあのセクハラ男の仲間じゃないの？」

「ふふ・・・」

女性秘書は『セクハラ男』という呼び名に笑う。

「私はね、純粹にこの都市の市長として働きたかっただけなの。

だけど前にいたのが・・・ぶぶ、『セクハラ男』だったわけよ。」

「ぶっ・・・」

チエリーも笑ってしまった。

「あ、バッグ、ありがとう。」

「私、あなたとなら友達になれそうだわ。」

「友達になりましたよ！」

牢獄の中小さな笑い声が響いた。

11：裏側（前編）

ルーフスとジャックは三人の貧しい女の子達をつれ、都会を駆け抜けていた。

「おい！お前ら！あいつら捕まえろ！！」

背後から追いかける黒スーツが声を上げた。

横の路地裏から次々と黒スーツが姿を現す。

「！！！！コノヤロオ！待て！！！！」

「くそ・・・あんなビジネス街が夜はこんなことになってたなんて！」

「あんちゃん、この女の子達が危険だよ。どこかに身を隠しておかないと・・・」

「でも、そんな余裕も無さそうだぜ？・・・もう俺達の情報は広く知れ渡ってるよつだ・・・」

「そんな・・・チェリーさんも捜さなきゃいけないのに！！」

「どうすれば・・・」

「待てえ！！」

「うわ！前からも・・・！！」

ルーフス達は女の子達の手を引き、ただただ、逃げることしかでき

なかった・・・

ここは牢獄。

女性秘書とチェリーは檻の中で話す。

檻の中とは思えない、幸せな内容であった。

都会での暮らしと、旅人としての暮らしを交互に話し合った。

「・・・あ、申し遅れたわね、私はヴァイオレット。」

「私はチェリー。よろしくね！」

「ふー。でもいいな。私も、旅人を目指していれば、こんな窮屈な所で仕事しなくても良かったのに・・・」

「でもあなたはビジネスウーマンとして働きたかったんでしょ？」

「確かにそうだった・・・だからこそ他の暮らしにも憧れてくることがあるわ。」

女性秘書は立ち上がる。

自信に満ちた顔だ。

「でも私はやっぱりこの仕事がいい。男じゃなくても仕事はできるの！その事を社会に伝えたい!!」

「その意気だ!!」

チェリーは笑う。

一瞬にしてバイオレットの顔が曇る。

瞬時に後ろを振り返る

ドッ!!

一発、後ろから近づいてきた黒スーツの腹にパンチを入れたのだ。

「ウッ……」

黒スーツは倒れる。

チェリーは驚きの顔を見せる。

「あなたって……本当に強いよね……心も体も。」

「なんであんな『セクハラ男』を超えられないのが疑問だわ……」



「それは・・・」

ヴァイオレットはためらいながらも話す。

「お願いします!!この私を秘書にしてください!」

ヴァイオレットはビルから車に乗ろうとする市長に懇願する。

三人の内、一人の黒スーツは叫ぶ。

「こちらお前!市長に向かって失礼だ!今市長は忙しいのだ!下がれ!」

「まあまあ・・・君はこの私のサポートをしたいんだね。歓迎さ。今ちょっと!」

秘書がいなくなったからね。付いてきなさい。」

市長は笑顔を向けて言った。

良かった・・・偶然秘書がいなかったんだ・・・

「これでやっと、市長になる夢に近づける・・・」

「ありがとうございます!!」

市長の働く光景は輝かしいものだった。

市民に必ず声をかけ、市民の意見を反映させる。

暴力団撲滅ののろしを上げ、活動する。

最高の市長であった。

私も、こんな素晴らしい市長になりたいと思ってしまった。

思ってしまったのだ。

ヴァイオレットは市長の部屋に重要書類を置きに言った。

トントン・・・

「失礼します。」

市長はいなかった。

秘書は重要書類を机において、こっそり壁に寄りかかる。

ふう……

ちよつとがんばりすぎたかな？

まだ秘書としての仕事が慣れてないとか……

……よし！気合を入れないと……

ポチ……

「え……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・・

寄りかかっていた壁が開く。

牢獄だった。

何でこんなものが・・・？

女性秘書は中へ入っていく。

目を疑う光景があった。

一人のスーツの男性がボロボロになって檻の中に入たれこんでいる。

もう死んでるようだ。

ヴァイオレットは恐怖に襲われ、後ろに下がる。

と同時に、何かを踏んだ。

バツジだ。

そこには、「第一秘書・ジール」と書いてある。

「見られてしまったか・・・」

女性秘書は後ろを向く。

すると、市長の後ろに黒スーツが二人。

いつものボディガードじゃない。

一人は暴力団の副総長の顔にそっくりだ。

「市長……その男達はどついついことですか。」

「なあに、その通りにとらえておけばいい。それより今はコッチのことだ。」

市長は顎で血まみれの男を指し示す。

「……全く、この男ときたら……私の計画を話せばいきなり秘書を辞めるとか言い出してね。」

「この都市をさらに発展させるための計画なの。」

そつつぶやくと、市長は女性秘書の耳元に近づき、こつとささやいた。

「誰にも言つなよ・・・お前の情報はもう調べてある・・・」

お前の親父の血が吹き飛ぶ羽目にあつぞ・・・」

「ぐじぐじ・・・」とっ」

女性秘書は聞き返す。

「なになに・・・ただの偶然さ・・・」

男は話す。

「まさか、焼き尽くそうと思っていた森の管理人が、お前の親父だったとはねえ・・・」

女性秘書は目を見開いた。

女性秘書は一瞬で市長を床に押し付け、護衛用の拳銃をスーツのポケットから取り出した。

力チヤ。

市長の眉間に当てる。

「おやおや・・・そんなことしていいのかなあ、こっちはこの無線のスイッチがある。」

これを押せば、森にいる俺の部下の受信機に送られて、そいつらが狼男を殺す。そしてから森に放火だ。・・・ハハハハ!! 楽しみだなあ、押すのが!」

女性秘書は目に悔し涙を流し、拳銃を離して、押さえつけていた手の力を抜く。

「そうだ。お前の親父を大切にしたいんだったら、服従しろ。・・・」

あんなに人の事を考え、行動していた市長が。



あんなに市民に明るかった市長が……。

この都市の事を第一に考えていた市長が!!!

「お前は、俺に逆らわなければいいんだよ……ハッハッハッハッハ!!」

市長はそういつて明るい社長室へ出る。

「……………」

ヴァイオレットの遠い記憶が蘇ってくる。

「ねえねえ、おとーたん。」

「んー？」

「なんでおとーたんは、いつも木をじっとみているの？」

父は笑いながら話す。

「お父さんはな、実は木のお医者さんなんだ！」

「木もおかせ、ひくのー？」

「ああ、ひくよ。いいかいヴァイオレット。」

「木も私達と同じなんだ。だから、木にもお医者さんが必要なんだよ。」

少女は少し考えてから、

「よくわかんない。」

父親は少女を抱き上げ、頬ずりする。

「わが子ながら、かわいいやつだなあお前は!!」

「おとーたん少しくたい・・・」

「……へ……?」

雷の降る真夜中。

「ただいまー。」

「うづうづ、おとーたんー!」

狼男に目を開いてない少女が飛びつく。

雷が相当怖かったようだ。

6歳の少女は顔を見る。

お父さんではなかった。

狼だった。

少女はベッドに飛び込む。

「わああああん！おおかみさんだあ〜」

少女はベッドを涙で濡らす。

「ああ、しまった!!」

狼男は叫ぶ。

狼男はもうすぐ朝日がくることを確認して、演技をした。

「がー……雷が怖い子はたーべーちやーうーぞー……」

「うええええええん……」

そっぽを向きながら、違う声をだす。

「ヴァイオレットー。だいじょうぶかー。」

野太い声で、大根役者は言った。

「おお、なんだとう、なんだ、にんがんかー。ってウワー。」

狼男は外へ引っ張られるふりをした。

バン、ボカ、バキ、ドカ

狼男は自分の体を叩く。

朝日が昇り、狼の姿から戻る。

「ヴァイオレットー。大丈夫だったかー？」

「うえええええん．．．おとーたん．．．」

「ハッハッハッハ．．．」

父親は少しヒリヒリする腰をさすりながら笑った。

「何？都市へ出る？」

「うん．．．私、ビジネスウーマンとして働きたいの！」

「．．．？．．．びじ．．．ねす．．．うーまん？．．．何だそれ．．．  
ハッハッハ」

「真面目に聞いてよ！」

「ダメだ!!」

父親は怒鳴る。

「何だよー！」

「えっと・・・ダメなもんは・・・ダメなんだよ・・・」

「・・・お父さんなら・・・分かってくれると思ったた。」

『行ってらっしゃい』って、笑顔で行ってくれると思ったのに。」

「・・・そんなに行きたきゃあ・・・勝手に行ってくればいいじゃねえか!!」

娘はバックパックを持って扉を開けて出て行った。

ボタン・・・

開けたままのドアが、ゆっくり閉まる。

ガラス窓から、机に伏せていた父の姿が見えたような気がした。

「ううう……お父さん……ううう……」

女性秘書はただただ、暗い場所で泣いていた。

私はあんな表裏のある奴についていこうとしたんだ。

バカだった。

ただただ、自分を後悔するだけであった。

「だから私はあいつについていくことしか出来ないの……」

女性秘書は黙った。

が、少し経ってからチェリーが口を開く。

「私、あなたのお父さんにあっただわ。」

「……え？」

「あなたのお父さん、『娘に自分の声を伝えたい』って……『自分がここにいたいことを伝えたい』って必死に言ってた！

私はあんな強いお父さんなら、絶対に死なない、いや、『死ねない』の。あなたのために!!」

ヴァイオレットは涙を流す。

あんなに反対してた理由は……私を心配してたからなのね……

私は大人になっていく中で、自分のお父さんを信じられなくなって



きたんだ・・・

お父さんは昔から、強くて、遅しくて、嵐にも竜巻にも負けなかつた!!

お父さんを信じなきゃ!!

「・・・ありがとう、チエリー。あなたのおかげで、大切なものを気づかせてくれた・・・」

「あなたはこれからどうするの?」

「戦争だわ。あの『セクハラ男』をぶちのめすの!」

チエリーは元気に、かつ壮大に話した。

「・・・私も、その戦線に参加してもいい?」

「もちろん！」

チェリーはヴァイオレットの手を握る。

「この都市を、『作り直す』のよ!!」

「……ええ!!」

12：裏側（中編）

ここは都市のちょうど中心あたり。

月はビルの屋上をほぼ真上から照らしている。

暴力団が徘徊するこの都市の夜に、明かりは『一つしか』ない。

市長が管轄しているセンタービルだ。

たった今、一つ小さなビルに明かりがともる。

ビルから誰かが出てきた。

「何か外が騒がしいのお・・・」

老人だ。

老人は今日の夕方の事を思い出す。

「いいか、この街の夜、人がほとんどいないのはなあ・・・」

この街で、人身売買が行われているからじゃ!!お前さんはさっさとこの街から

出て行ったほうがいい!!」

娘は驚きの顔を見せ、走り出していった。

「気をつけるんじゃないぞー!!・・・おや?」

歩道には娘が買った服が置き去りになっていた。

「大変じゃー！おーい！！お嬢さん！！」

老人は若々しく、袋を持って歩道を走る。

遠くの前方に娘が見えた。

ちょうど曲がり角だ。

老人も曲がる。

はて・・・？

確かにここを曲がったはずじゃが・・・

・・・まあいい、私の家にひとまず保管しておこう。

「もしやあの子に何かあったのかも知れないな・・・」

「いたぞー!!」

掛け声と同時に、誰かが曲がってきた。

「……!!」

「お前さんは……」

黒スーツが曲がってきた。

黒スーツは老人に聞く。

「おい、じいさん。」

「ん？なんじゃ？」

「ここら辺に、これぐらいの坊主達を見なかったか？」

黒スーツは両手でそれぞれの身長を示した。

「んー……しらんのぉ……わからんのぉ……最近物忘れがひどくてなあ、

見たかどうかも忘れちゃったよ。」

「そうか……ってかじいさん、こんな夜中に何してるんだ？」

「わしゃ、マラソンにいらつとただけじゃ。でもそりゃ、あんたの方もじゃろ。」

「……まさかこんなヨボヨボの老人を売るつもりじゃなかるうね？」

「と、とんでもねえ、お、おじいさん、ありがとやした!!」

黒スーツはいきなり敬語になり、虫のように去っていった。

「……いったぞ。」

「ふう、ありがとおじいさん。」

「なんのなんの、おやおや、そこのお嬢さん達ボロボロじゃないか。」

「……ぶつだ、君達、暗くしなきゃならんがお茶でも?」

「あ、じゃあいただきます。」

「いただきます。」

小さな二階建てのビルの中でルーフス達はおいしいお茶を頂いていた。

ルーフスはおじいさんに、何があったのかを話す。

「ほう、・・・わしの大学時代の後輩がそんなしゃれたことを・・・」

「へえ、あのホームレスのおっさん、後輩だったんですか。」

「あいつは、真面目じゃないが変に自論を持ちたがるやつでのお、

彼からいろんなことを教わったんだよ。」

「おじいさん、頼みがあるんですが。」

「なんじゃ？」

「この女の子達は人身売買で売られそうになってたんだ。風呂に入らせてやってくれないかな。」

「別にいいんじゃないが・・・お前はわしを疑わないのか？もしかしたらわしも、人身売買に関わっている人間かも知れないのじゃぞ。」

ルーフスは話す。

「あなたに旅の話をした時、あなたは昔を思い出していたでしょう。」

その時の目は、お父さんと同じように輝いていました。

あなただけは、疑えないのです。」

「ハッハッハ・・・現役の目、というわけか。・・・ここまで信じられたのなら、



「この子達も信じなければダメだろう。」

あの暴力団達に関して、一つ怪しい点があるんじゃない？」

おじいさんは可能性を話す。

「なぜ、こんな夜中まであのセンタービルの明かりが点いているのかに気になってな・・・確かに市長は忙しい・・・かといって、まさか寝ている時にも電気をつけているわけではないだろう。」

「まさか・・・市長と暴力団に何かつながりがあって、夜中まで働いているのでは・・・と？」

『可能性』じゃ・・・でも調べる価値はあるじゃろう？」

老人の目に好奇の輝きが現れた、気がしたような。

「ありがとうございます。おじいさん。」

「おお、そうだ、名前を聞いていなかったな。わしはハヤブサ。」

「僕はルーフス、こちらはジャックです。」

「体に気をつけてね、おじいさん！」

「なんのなんの・・・あと100年は生きる思いじゃ！」

少年達はセンタービルを目指す。

「着いた！」

「でっかいなあ・・・」

60階ぐらいはあるのだろうか、遠くで見えていたよりも威圧感がある。

「ワン、ワン!!」

「お！ステラ!!あいつらはどうしたんだ？」

狼は繰り返し顎を開閉して、音を鳴らした。

「噛んでやったのか!!さすがだ、ほら、肉だ。」

「クウン」

狼は道路に落ちた肉をくわえる。

「あんちゃん!あれ!」

ジャックは叫ぶ。

右を見ると、灰色スーツとサングラスの女性がシートを着込んだ人を運んでいる。

よく見ると、チェリーの茶髪とメイドスカートの裾がちらちら見える。

車に近づいていく。

「ま、待てー!!」

女性はチェリーを連れ、地下駐車場へ逃げる。

少年達は追いかけていった。

地下駐車場の地下二階に女性は逃げる。

「待てー!!」

するといきなり、女性とチェリーが立ち止まる。

「どわぁーびくった!!」

女性はサングラスをはずす。

チェリーもシートを脱ぎ捨てた。

「ルーフスさん、この人は私達の味方です！」

「初めまして、ヴァイオレットです。」

「へ・・・市長の秘書じゃねえか・・・どっいつことだ？」

「話は後です！ルーフスさん。・・・あの市長、よく思い出してみてください、私と初めて出会った時を！」

「ん？・・・うーん・・・」

一瞬の静寂の後、ルーフスの脳に電流が走る。

「ああああああああああああああああああ！」

「あいつが黒幕です。ルーフスさん、この都市を『作り変える』のです  
「!!

「なんかチェリーさん、いつもより熱いな・・・」

「だな。」

「じつして、ルーフス達の計画は始まったのだった。

### 13：裏側（後編）

ボタン!!

ルーフス達はセンタービルの最上階の、社長室のドアを開けた。

誰もいない。

机の上には置手紙が置いてあった。

その置手紙には、甘ったるい、ふざけた口調でこう書いてあった。

「やあ革命家諸君、君達がここに来る事は分かっていたよ。

ここで戦っては、私の愛するビルが壊れてしまう。

西の爆弾処理場だ。ここならいくら壊してもらってもかなわない。

まあ、もし、君達が『犯罪者』になってもいいというのならな。」

最後の文字を黙読した途端、あざ笑うような笑い声が聞こえたよう  
な気がした。

「くそーあいつ、俺達を走りまわせやがって!!」

「待って、あんちゃん、置手紙の下になんかある!」

「ん?」

見ると、年代がかっている写真のようだ。

女の人・・・?

笑顔じゃない、女の人映っていたのだ。

何かを抱えながら、女の子を連れていく。

逃げているのか…？

「……なんだこりゃ？……」

「きれいな人だね……」

ルーフスやジャックは分からなかった。

が、チェリーは驚愕していた。

まさか…そんな…こじは…

私の…

「チェリー、どうした？」

「顔色が悪いよ？」

ルーフスとヴァイオレットが問いかける。

「い、いえ、なんでもありません！…それより、爆弾処理場へ行きましょー！」

「そうね。このセンタービルには一人も部下がいなかった。

つまり爆弾処理場に全員が待機しているはず。気を引き締めていきましょー。」

皆が頷く。

そして、社長室をあとにする。



中心街から離れ、ルーフス達は西へと進む。

廃業になった水商売のお店が立ち並んでいる。

チェリーはその光景をただただ見ていた。

何も記憶がない…まさかね…そうよ…

いきなり、チェリーの脳裏に何かが光った。

違う…そんなはずは…

チェリーは首を振る。

そして、歯をかみ締め、心を戻す。

「やあ、よくきたねえ。君達。」

「いい加減その甘ったるい口調はお止めにしてもらえませんか？」

ヴァイオレットは厳しく言い放つ。

「おや？ヴァイオレット。お父さんがどうなってもいいのかい？」

薄情な女だ…見損なっただぜ…」

「お父さんは死なない!!お父さんは…例え森が焼けても…

くじけない!…自分の手で生き返らせるわ!」

バキユン!!

ヴァイオレットの髪に弾がすり抜ける。

市長が拳銃を放ったのだ。

ヴァイオレットは拳を握り締める。

恐怖で足が立ちすくむ。

「なんて奴だ…人間の風上にもおけない！」

「……………」

ルーフスは市長を睨む。

「子供がこんなに弱いによぉ！」

… エメラルドもろくに持たねえ 田舎もんが語るんじゃねえよお！

世の中は権威が全てなんだよ！馬鹿力で勝てるもんじゃねえんだ  
」！

チェリーが剣を振りかぶり、市長に向けて降ろす。

暴力団の一員が斧でガードする。

戦闘用斧。バトルアックスだ。

「すい…チェリーさん…」

ジャックはチェリーの速さに見とれていた。

「おやおお、これは村のお嬢さん。はしたないですなあ、  
井るであなたのお母さんのおじい。」

「…そうだったのね。…なんであなたがお母さんを知っているの？」

「親父のアルバムを発見したのさ。親父がどうもお世話になりましたっ…」

相変わらずのふざけた口調だ。

「なるほど…家族揃って狂ってたわけね…」

チェリーは珍しく皮肉で返した。

「そういうえば、まだ家賃滞納してないのですよー。  
返してもらわないとなあー」

バン!!

「チェリー!!」

ヴァイオレットが叫ぶ。

「グルルルルル…」

ステーラも唸り声をあげる。

チェリーの肩から血が飛んだ。

「チェリーさん！」

「……………ッ!!」

ルーフスは睨んだまま舌打ちした。

ジャックが手を見れば、

震えている。さっきのヴァイオレットとは違う震えだ。

「…チェリー。」

ルーフスは優しい口調で話しかけた。

「お前は、休んでろ！な！」

「…ごめんなさい、ルーフスさん…」

ルーフスは最高の笑顔で言った。

「いいってことよ！あとはジャックと何とかするから！…ヴァイオレットも看病、よろしくな！」

「分かりました…幸運を祈ります。」

「ああ！」

ヴァイオレットはチェリーをおんぶして、爆弾処理場の門から出て行った。

ルーフスの顔が豹変した。

先ほどの優しい笑顔からは、想像もできないくらい冷たい顔だ。

市長は笑っている。

ルーフスとジャックの背後、ウォーハンマーを持った二人組を見ていた。

ビュン!!

ルーフスとジャックは素早く剣で斬る。

ズバツ!!

「っお!!」

二人組は倒れる。



市長の笑いが消える。

ルーフスは二人組の一人の胸ぐらを掴んで問う。

「おい、あいつの今までにしたことを言え……！」

黒スーツはビビッて声が出てこないようだ。

「言え!!」

ルーフスは怒鳴った。

「に……人間ひとを売って！遺跡から宝石を奪って！それから……森を焼き  
払ってテーマパークを建造する計画をたてましたっ!!」

「遺跡……」

ジャックは悲しみと、怒りが湧いてきた。

古代の遺跡を、こんな欲望まみれの奴に荒らされたのだ。

市長は続ける。

「そいつの言ったとおりだ。だが良く考えてみるよ…」

人間ひとを売れば、仕事が楽になる。場合によっては、心の癒しになる。

金は手に入れられる。

遺跡から頂けば、儲かる。森を焼き払えば、肥料も沢山、テーパー  
クが

出来れば、みんな喜ぶじゃないか！ダツハツハツハ！！」

少年は口調を朗らかに言う。

「ほう、そりゃいいな…」

「へ…？」

ジャックは驚愕する。

「エメラルドが沢山あれば、本も買える、服も買える…」

俺も参加するぜ。」

「あんちゃん…」

ルーフスは答えない。

「ほう、そうか！それは良かった…ようこそ、我がチームへ！」

「さっそくだが、今までにためたお金、見せて欲しいなあ…」

「ほれ、これだ…」

市長の手からエメラルドの束をひったくる。

地面に落として、足で踏んづけた。

パリン……

エメラルドが全て粉々になる。

「あんちゃん…!」

「お前…!!」

「人間がエメラルド一個で買えんのかよ…」

「<sup>ひと</sup>人間が…!!こんな石の欠片で買えんのかよ!!」

「くそっ！お前ら！出番だ!!」

「準備はいいよな！ジャック！ステーラ!!」

「ワォーン!!」

「ああ!!」

「うおおおおお!!」

黒スーツがハルバードをジャックに振りかざす。

ジャックが消えた。

「…」  
「…」

また振りかざす。

また消える。

黒スーツの頭に矢が刺さった。

子供はエンダーパールを手でもてあそんでいた。

少年にフレイルの鉄球が降りかかる。

剣で防ぐ。斬る。斬る、斬る。

「ぬお!!」

ステーラは黒スーツの脛を無差別に噛む。

「いて!」

「ぎゃあ!!」

「ああ!!」

また一人、また一人と倒れたり、逃げていく。

だがまだまだいるようだ。

「あんちゃん、これじゃキリがないよ。」

「くそ…厄介な奴らだ…！」

ルーフスの背後に剣が迫る。

「あんちゃん！危ない！」

「うわぁ!!」

ルーフスのポケットから何かが落ちた。

さっきのクリーパーフィギュア。

男は動きを止め、釘付けになる。

「へ・・・」「は？」

静寂…

「レアフィギュアだー!!」

「oooooooooooooooooooo!!!」

男達の祭りが始まった。

クリーパーを手に入れようと、こんがらがっている。

「おい！お前ズレて持ってるだろー！」

「いんや、俺はこのキュートな瞳のリーパーの  
ほづがいいんだ!!」

「俺のだー!!」

「お前に渡すからブレイズくれよ!!」

「誰が渡すかあ!どっちも俺のもんだ!!」

「スケルトンいる人ー。クリーパーこっちにもっといでー。」

「うるせえ!骨なんているか!」

「シヨボ

ン。」

「よこせー!!」 「いてえよー!」

「はなせ!!」

「誰だ踏んだ奴!」

「おい!お前ら!何してやがる!!…くそっこうなったら  
スイッチを押してやる!…てああ!!」

市長の手がすべり、黒スーツ祭りの中へ。

パキッ!!!

「ああああ!!」

「ああ、もつめんどくせえ!!」

クリーパーを持った男が爆弾処理場から出て行く。



「……………」待てー!!「……………」

ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ  
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ  
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ  
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ

タタタタタタタタ…

………

市長は愕然とする。

目の前には壊れた無線スイッチが。

「あのヴァカ（バカ）ども…」

チェリーとヴァイオレットが処理場に入ってきた。

「ルーフスさん…さっきの人たち…」

見ると二人と一匹、そして一人しかいなかった。

「知能は猿並だったよね！クスッ！」

黒スーツを誰よりも知る、ヴァイオレットは笑う。

「ルーフスさん、これって、どっいっつとですか？」

「それが……」

ルーフスがこれまでの事を話す。

チェリーは話を聞き終わると、笑いもせず市長に近づく。

バシン！バシン！

チェリーがビンタをくらわせる。

「ぶほっ！がほっ！」

「これはヴァイオレットとビストさんの分。」

バシン！

「ばほっ！」

「これはお母さんの分。」

バシバシ！バシ！

「ひぶっ！ぐほっ！ばほっ！」

「これはルーフスさん達の分。…えっと、頭の数確か…」

バシバシバシバシバシ！！

「がはっ！ひでっ！ぶほっ！あべっ！しぬっ！うへっ！」

「そして、昔の人たちの分。」

「ハハハハ…チェリーさん、ありがとう、スカッとしたよ！」

「ついでにチェリー、あと3発食らわせてやってくれ、  
そいつに売られようとしてた子たちの分だ。」

バシバシバシ！！

「ちよっ！やめっ！ぶはっ！」

「私からも礼を言っわ。ありがとね！チェリー！」  
ヴァイオレットは笑顔で言った。

「私達、友達でしょー！」

ヴァイオレットとチェリーは抱き合った。

ルーフスとジャックも笑う。

「お、おまひらー！」

齒のかけた市長がなにやら大声を出す。

「おまひら、市長にほんなほとして、タダで済むとおほつなよー…さいはん（裁判）も知らない田舎ほんどもがー

おほいしれ！おはえらはあひた（明日）、いは、今日！処刑ら！！はっはっはっはー…ああ、いへい…」

市長はそう言って、頬をさすりながらセンタービルに戻っていった。

「…ごめんなさい皆さん。私が言い出したせいで裁判に巻き込んでしまった…」

「大丈夫だって！」

「ヴァイオレットさん、旅人はもともと、悪いことする人たちだったんだよー！

別に、良く見られようとはしたくないよー！」

「そうよ！たとえ檻の中に入ったとしても、皆一緒だから！」

「ありがとう、皆さん…っっっっっ」

「泣くなよ！ほら、拭けよ！」

爆弾処理場の砂を、太陽の光が照らそうとしていた。

ここは中心街。

人が集まっている。

市長と旅人の公開裁判だ。

「えーこれより、旅人のルーフスさん達とゴルディ市長の裁判を始める。」

「はいはい!!…私は夜に、この旅人達に暴行を加えられました！」

皆さん！この、市民の為に力を尽くす市長が暴行を加えられたんですよ！

この旅人達は、罪を償うべきではないのでしょうか！」

「そうだー！」

「有罪だー！」

「市長さーん！」

「あなたの味方するぜー！」

「ビュービュー!!」「いいぞー！もっと言ってやれー!!」

「静粛に!!」

裁判長が大声を出す。

「では旅人の方々と、協力者のヴァイオレット秘書の意見を述べてください。」

「はい。」

ヴァイオレットが立った。

「ゴルディ市長は『暴力団を撲滅する』というスローガンを立て、皆さんの評価を集めました。」

しかし今もなお、暴力団は健在のままです。なぜなら、市長自ら暴力団とのつながりがあったからなのです！」

さすがに女性秘書だ。テキパキと話を続けている。

「なんだって?」「嘘ー。」

「女は下がってる!」「嘘つくなー!」

「ゴルディさんがそんなことするはずねえよ!」

だが、やはり市長のほうが上がった。

「静粛に!!…度が過ぎる場合、退場させますよ。」

観客は一斉に静かになった。

「ではゴルディ市長の意見をどうぞ。」

「私が暴力団とつながりがある？そついつのなら証拠がないとねえ…  
ヴァイオレットのお嬢さん。」

「いいぞー！ゴルディさん！」

一人の男が大声をあげる。

「確かに証拠はありませんね…」

証拠が無いとすれば、旅人の方々は有罪ということになりますが。

そついつことでよろしいですかね？」

裁判長が問う。

ルーフス達はただただ黙る事しか出来なかった。

証拠がないのだから。

ルーフスは観客を見回す。

ヒソヒソと話をしている主婦達。

携帯カメラのフラッシュをたく男達。

大声で状況を聞いている子供達。

ただひそかに笑っているおと…

！…あいつは！

「裁判長！」

「ルーフスさん、どつぞ。」

「あの男を調べてください！」

「>…」

「あー！あんたは！」

ジャックは思い出した。

あのルーフスが胸ぐらを掴んだ男だ。

「め、めっそももない…そいつのたむじとですよ…

一般市民を巻き込んでいいんですか？裁判長？」

「では、おまえさん、このバッグの中に入ったこの武器はなにかな  
？」

「ギクッ!!」



「ハヤブサおじいさん！」

アロハシャツの老人だ。

「きゃーあの人、取材の鬼と呼ばれるハヤブサさんだわ！」

「なんであの人が旅人達の味方を…」

「カメラ持ってきとけばよかったなあ」

なにやらとても有名ならしい。

「それだけではないぞ。…お前達、スクリーンに映しなさい。」

そこにはルーフス達と市長と暴力団員の姿が遠くから映し出されていた。

市長の声が入っている。

『…だが良く考えてみるよ…』

人間ひとを売れば、仕事が楽になる。場合によっては、心の癒しになる。

金は手に入れられる。

遺跡から頂けば、儲かる。森を焼き払えば、肥料も沢山、テーマパークが

出来れば、みんな喜ぶじゃないか！ダッハッハッハ！！』

「あ…いや…それは…その…これは嘘だ！合成だ！

…はっはっは…良く出来てる映画じゃないか…

声優が俺とそっくりだ！傑作だな！」

観客の空気が冷めた。

市長を睨んでいる。

「俺も一言言っただい？」

「お父さん…!!」

「ビスト…!」

裁判長は笑いながら言っ。

「やれやれ…今回の裁判はすごい事になりそうですね…」

ではビストさんでしたな。どござ。

スタッフがマイクを渡す。

「俺の管理している森を焼こうとしている奴をとっ捕まえたんだ。

そしたらなんと、ゴルディ市長っーお偉いさんに指図されたらしいじゃねえか。」

「ほう…市長、なにか意見は？」

「皆さん！そいつは狼と人間の血を引くものです！そんな奴の言う事が信じられると思いますか!？」

観客はゴルディの理不尽な意見に、額のしわを寄せた。

「私達からも!」

「君達は…！」

洗いたてのまっすぐ伸びた髪少女達が言う。

「私達、ゴルディ市長の部屋の檻にずっと閉じ込められて、それで出られるかと思っただらまた売られて…」

ゴルディの目はぐるぐると回り、汗を流している。

観客の視線がぐさりと刺さっている。

「裁判長、証拠が山ほどありますな！」

ハヤブサは畳み掛ける。

裁判長は大きな声で言う。

「これらの重大な証拠より、ルーフスさん達の無罪が確定しました！」

観客の皆様、反対意見は！」

観客は何も言わなかった。

「」「」  
「やったー！！」「」

「ウォーン！！」

「そして、ゴルディ市長の件につきましては、人の命を金で買うような

行為を、

市長であるにもかかわらず行ったため、終身刑を科す！賛成の者

「!!

ザッ!!

皆が皆、手を上げる。

こうして、ルーフス達の裁判が終わったのだ。

「お父さん!!」

「ヴァイオレット!!」

お父さんの大きな体に、ヴァイオレットが飛びついた。

ヴァイオレットは涙を流す。

「じゅんね…お父さん…心配してくれたのに…」

「いいんだ、ヴァイオレット。お前が元気でいれば、それでいい。」

「でも、なんでここに来たの？」

「いや、なんかなあ、昔お前と撮った写真、あったろ。それがいきなり落ちたもんで、嫌な予感がしたただけだ。」

「もう、お父さんたら……ありがとう!」

「良かったね、ヴァイオレット。」

チェリーはもらった涙を拭く。

ジャックはハヤブサと話していた。

「へえ、ハヤブサさん、放送局の局長さんだったのかあ!」

「ほっほっほ……わしをただのおじいちゃんと思ったらダメだぞ。」

「後でカメラ見せてもらえませんか!」

「勿論じゃあ!放送局に顔を出してみてくれ!」

ルーフスとステーラはなにやら探し回っていた。

「ワンワン!!」

「あ!いた!」

ホームレスのおじさんだ。

「あん？なんだ、裁判の小僧か…」

「その言い方はやめてくださいよ…」

「なんだ？この俺になんのようだ？」

「あなたにお礼を言いたくて…」

「あなたがこの街の裏を覚えてくれなかったら、

あの女の子達は売られていたし、俺も成長できなかった。

だから、ありがとう。」

「ばかやろう。旅人がホームレスに礼言ってどうすんだ。」

「はは、それもそうですね。じゃ、また会えたら会いましょう。」

「二度とくんよ。」

といいながら、おじさんは手を振ってくれた。

ホームレスは一人つぶやく。

「旅ねえ…いいじゃねえか…」

「なあ、少年よ。皆、こんなみすばらしい姿の俺を『狂ってる』という  
が…」

「こんな窮屈な世界で生活して、泣かないそんな奴らも『狂ってる』  
…と思わねえか？」

灰色のビルの隙間から、青い青い空が見えていた。

## 14：都会との別れ

「おお…すげえ…」

「ワン!!」

少年達はハヤブサ放送局本部のビルに訪れていた。

そこには何台もの撮影用カメラ、コンピュータ、スクリーンが設置してあった。

「すごい設備だな…」

「…」「…」「…」

薄い綿の服を着た少女達は高度な設備に唖然としていた。

「ほっほっほ…私は旅人の頃からカメラオタクでね。カメラの事を追求していたら、いつのまにか放送局までも建っていたのじゃ。」

ちなみに、この放送局ではただ撮影するだけではないのだぞ。」

「…あれは…本で見た事があるぞ…」

ジャックがある機械に興味を持った。

「プリンターか!」



「その通り。」ここでは新聞の発行も行っているのじゃ。」

「すげーじゃー…あっちの部屋も見ていいですか？」

「ああ、いいとも。」

ジャックは輝いた目で部屋に入っていく。

「ところでルーフスさんとチェリーさんよ。」

…あのお嬢さん達のことなんだが…」

少年と娘は消えたカメラの前で、楽しそうに手を振っている女の子達を見た。

「正直な話…あの子達はこの都市にはいけないと思うのじゃ…」

恐らく、小さい頃からなんの教育も受けておらんのだらう。

この都市にいても将来、生きられないと思うのだ。

どこか別の場所に移してやれないものか…」

「確かに…こんな変な性格の都市じゃあ、仕事も見つからないですよ。ね。」

「ハヤブサさん。」

「私にいい考えがあります。…ちょっとお買い物行ってきますね。」

チェリーは放送局から出て行った。

ここは放送局内の控え室。

中にはチェリーと女の子がいる。

男性陣の三人と一匹は外で待っていた。

「出来ました！…ささ、あなた達。見せてあげなさい。」

外に出てきた女の子達は、メイドの服に着替えていた。

ハヤブサは白く太い眉を少し上げた。

「ま、まさかチェリーさん、この子達に水商売なんて…」

「ち、違いますよ…私の住んでいた村ではほとんどの人たちが女性のメイドさんなんです。」

村長も優しい人で…この子達をその村に置いていこうというわけです。

周りの自然も豊かですし。」

「成るほど…しかし似合いますな！」

「本当だな！」「かわいいわよー！」

「ワン!!」

女の子達は照れて顔を下に向ける。

「では、私はこの子達を送ってきますので。」

「おいチエリー…大丈夫か、一人で。」

「大丈夫ですよ。私を女の子だと、心配なさらないでくださいー！」

チエリーは笑顔で答える。

「ま、待ちなされお前さん方。まさかあの距離をボートで行くというのかね？」

それでは時間がかかって、一日は経つだろう。

そうだ。私の撮影用のジェットボートが港にある。それに乗っていきなさい。

3時間後。

懐かしいジャングルからチェリーと少女達が出た。

目の前には村が見えた。

「さあ、あなた達の家よ。…」

チェリーは自分も村に入ろうとしたが

「…行きなさい。」

「」「ありがとうございまして！」「」

少女達は元気な声で挨拶する。

「…いい返事だ！」

チェリーは笑う。

そつよ…私は勝手にこの村を離れたの…

今更この村にする挨拶なんて…

「何してんだい、チエリー…」

「…ムース姉さん…」

冷静な顔つきをしたメイドがチエリーの後ろにいた。

「全く…勝手にこの村から出て行くなんてね…」

「………」

「…忘れものだよ。」

メイドは本を投げた。

チエリーはあわてて受け取る。

チェリーがつけていた日記帳だ。

「チェリーは本当にあわてんぼだねえ。」

メイドは優しく微笑んだ。

「体には気をつけるんだよ。」

「……」

「ニース姉さん!!」

チェリーはニースに抱きついた。

涙が止まらない。

止まらせる事が出来なかった。

血はつながっていないが、いつも自分を見てくれたお姉さんだ。

「……ありがとう……お姉さん!!」

「もう……!泣くんじゃないよ!……私の、大切な妹!」

ニースの瞳にも涙があった。

村と再度別れた後、チェリーはジェットボートで都会に戻り、ルー  
フス達と合流をした。

少年達は翌日、都会で発電所や缶詰工場を見学し、都会を後にした

のだ。

「いろいろあったな…グレートスライヴシティ。」

「ありすぎてまだ疲れてるよ…」

「ワンワンニ」

ステーラは巨大な肉にかぶりついている。

チェリーは遠くに広がるグレートスライヴシティを見ていた。

さよならなら…私の故郷…さよなら…お母さん、プラムちゃん…

私…この人たちと一緒に…

この広い世界を、旅してきます。



## 15：メデイウス・ライブラリー

都会から抜けて。

少年達は広大な草原をこえ、緑豊かな森へと入っていった。

木のところどころに蜂の巣がぶら下がっていて、小さな蜂たちが飛びまわっている。

狼はその蜂の群れを追いかけてまわす。

陽光も程よく降り注ぎ、とても心地いい。

「今日もまたいい天気ですね……」

「ふわあ〜……」

少年は大きくあくびをした。

「ほんつとに眠気が覚めない、いい天気だなあ……」

「あんちゃん！あれなんだ？」

そこには真っ白な大理石で出来た建物が森の中にそびえ立っていた。

全く、見慣れない光景だ。

「なんの建物なんでしょう……」

「ちよつと行ってみようぜ……ステーラ!!」

一匹の狼がルーフスへ寄る。

三人と一匹は白い建物の中へ歩いていった。

「ようこそおいでございました。」

ようこそ、メディウス・ライブラリーへ。

私は館長のバンダと申します。以後お見知りおきを。」

白い口ひげを蓄えた、スーツの老人が出迎えていた。

背筋をピンと張っていて、歳を感じさせないたたずまいであった。

「ライブラリー…図書館なのかあ!!」

子供の目がきらびやかと光る。

確かに、目の前には数え切れないほどの本が棚に詰め込まれていた。

ジャックはあちこちの本を指差していちいち聞く。

「あの本も…この本も…あっちの本も…全部読んでいいのかあ!!」

老人はにこやかに対応する。

「どの本も、全て、読んでいいのですよ。」

ジャックはたまらず駆け足でかけていった。

「あ、おい、ジャック…」

「ふふふ…とっても嬉しそうですね。」

ルーフスは笑ってため息をついた。

ルーフスとチェリーは中庭通路を歩きながら、館長と話をしていった。

「でも、なぜこんな森の中に図書館を？」

「私は若かりし頃、あなた方のような旅人だったのです。」

花や木、風や雲を観察し、自由気ままに旅をしていたのです。

そして私は、何よりも本が大好きでした。

しかし、この美しい自然の中では図書館などあるわけがございませ

私は旅を終えてから、都会や街とは遠く離れた場所に図書館を建設

しよつと決心し、

昨年、このような立派な図書館を完成することができたのです。」

「昨年ですか！まだ新しいのですね。」

「なるほど…すみません、実は俺、図書館なんて今まで行った事がなくて…」

「ええ!？」

傍にいたメイドは大きく口を開き驚愕する。

「ほっほっほ…では『本の探し方』から私がご説明いたしましょう。」

「…あ…私も…お願いします。」

「お前もじゃねえかよ…」

メイドは顔を赤くして答えた。

一方ジャックは。

机に何冊もの本を山積みにし、勉強をしていた。

「荒地…Wasteland…全体的に荒廃した気候帯…か…

「こんな気候帯もあるのかあ…やっぱり世界って広いんだな。…うん？」

見ると下へ続く階段があった。

「こっちは何があるのかな？」

ジャックは机の上の本を片付け、階段を降りていった。

その後、従業員なのかそばかすを蓄えた一人の青年が、

階段の前にのろのろと看板をたてた。

看板には、『Staff only』と。

「……………あああ……………置き忘れちゃったなあ……………」

青年はじれったく喋って頭を掻いた。

ステーラは玄関でエサを食べていた。

ルーフスとチェリーはバンドに説明を受ける。

「えー…まず探したい本のテーマを決めなければなりません。」

「じゃあ…私は『料理』にします。」

「俺は…えっと…」

少年は考えてから、

「…玄関に置く防犯用のあの置物。」

「も…もっと大雑把で大丈夫ですよ…。」

「…はい。…じゃあ『冒険』で。」

ジャックは階段を下っていく。

「長いなあこの階段…どんな本があるんだろうなあ！」

ジャックは感激のあまり冷静さを失くしていた。

着くと小さな場所だった。

周りには本棚は無く、ただ書見台が一つ。



上には本が置いてある。

「何の本かなあ？」

子供はわくわくして開いた。

見ると、左ページに謎の記号群、右には黒い写真が貼られていた。

「なんだこれ…？見た事無い本だなあ…」

その瞬間。

黒い写真に画像が浮かび上がる。

延々に広がる草原。

「え……？」

シューウウウウウウウウウウ……

バサッ……

階段を降りた先の小さな部屋。

その中には、ただ本が落ちていただけであった。

## 16：鈍行世界

ここは…どこだ…？

ジャックは目の前に広大な草原を見た。

遠くのあちらこちら点々と、謎の青い結晶がそびえたっている。

「…この場所は…あの本の中の場所かぁ!？」

少年は驚きと同時に不安から体が震え始めた。

僕は…帰れるのか…？

もしかしたら…ずっとここで…こんな明かりも無い場所で…

夜もすこさなきゃいけないのかあ…!?

脳裏に白骨死体が浮かび上がる。

少年の目がにじんできた。

「うわあああああああ」

ジャックは恐怖に耐え切れず無造作に回り始めた。

「!!!」

「…!!」

ジャックはにじんだ目でしっかり見えたものがあった。

「村だ!!」

ジャックは村へと駆け出していった…

「すみませーん!!」

ジャックは畑を見ていた村長さんに話しかけた。

「あの一…僕は一人の旅人なのですが…」

もしよければ泊めてもらえないでしょうか？」

…

返事が無い。

あれ、聞こえなかったのかなあ…

そしていきなりはっと気づき、のったりと話した。

「…お母…」

「これはこれは…」

「お母さん…」

「私達の村へ…」

「……私は……村長の……ラルゴと……申します……」

「…なんかすごいゆったりとした人だなー…」

「……なるほど……私達の村に……泊まりたいと……」

承知しました……すぐに……宿泊所の……準備をします……」

「あ……ありがとうございます……」

それから一息、一息、そして三息おいて、

「……おーい……アルガ……この方に……宿の用意を……」

家の中から青緑色の髪をしたメイドが現われた。

同じくのったりと口を開く。

「……かしこまりました……」

……「この遅さは遺伝なのか!?



ここはメデイウス・ライブラリー。

玄関では餌を食べ終わったステーラが昼寝をしていた。

チェリーとルーフスは説明を受け終わり、それぞれの分野の本を堪能していた。

「なるほど…パンプキンパイってこうして作れるのね…」

チェリーは料理の本を立ち読みしていた。

「うおおおおお!!やべえ、え!?こんなモンスターが!?マジかよ!!

うっほおおおおおいしい!!!」

「ル、ルーフス様、図書館の中ではお静かに!!」

慌ててバンダが静止にかかる。

「…館長…お掃除…終わりました…」

「あ、はい、ありがとう。では次は本棚の上もお願いしますね。」

「…はい………」

のろのろと従業員がはたきを持って歩いていった。

「…あの妙にじれったい奴は誰ですか…？」

ルーフスは疑問に思う。

「私がこの図書館の整備を行っていた時、まだ開業してもいない

図書館の中に何故かいたのです。話を聞けば、道に迷ったらしく…

住んでいた場所の特徴なのか、彼はしきりに結晶がないとも申し  
ておりました…

『この場所にはそんな場所はない。もし迷ってしまったのなら、この  
場所で泊まってはどうか。』

と提案した次第でございませぬ。」

「へえ…不思議ですな…」

「この世界には、地上に結晶はありませんしね…彼はどこから来たの  
でしょう？」

「一つだけ、思い当たる節があるのです。」

バンダは白鬚をとかしながら話した。

私は昔、父親に、先祖代々から伝わる一つの本をもらったのです。

父は『帰還の書』という本を持っていなければ、この本は開いてはいけない』と私に堅く言いました。

続けて、『さもないと、この世界から完全に切り離されるだろう』……と。

以来、私はその本を決して開く事はなく、現在もこの地下に保管されています。

「その話から私は、一つの推測を立てあげました。

もしかしたらその本は、この世界と平衡して流れる世界とを繋ぐ本ではないかと……」

「……………」  
「????????」

ルーフスとチェリーは難しい話に首を傾げる。



しかしそこには本が山積みされていただけであった。

「あれ……あいつどこに行ったんだ……」

「ブラッカス君、地下への看板は立てて置いたのですよね？」

「……ああ……たてて置きました……」

老人は安心した。

「それなら安心だ。」

「うーん……どこ行ったんだ？あいつ？」

「……ああ……そういえば……最初………立てるの……  
忘れてました………」

3人はのろまな少年を死んだような目で見た。

そばかすの少年の頭に3つ大きなたんこぶが出来た所で。

3人は蔵書の中から『帰還の書』を探していた。

「『機関車の仕組み』、『機械工学』…」

「歴史書、歴史書…」

「があああ!!ぜんっぜん見つからないじゃねーか!」

チエリーもため息をつく。

「さすがにこの図書館の本から一つの本を探し出すのは大変ですね  
……」

「……………」

「おい、ブラッカス、何やってんだ?」

「…『き』…『か』…『ん』…『じゃ』…『の』…『じ』…『へ』」

バシロン!!

ルーフスは近くにあった薄い絵本で頭をはたく。

「おせーんだよ!!しかもその本俺が確認したから!!」

「……あ……」

「……たく……なんでこんなろまんなんだ……?」

「……いつたい……!」

「……あ!!……バンダさん、もしかしたらこの本ですか!？」

チエリーが緑の表紙の本を差し出す。

「ま……まやこくじの本です!!」



「え!?…息子がいなくなっただですって!？」

「……そうなんです……鶏を小麦で……集めていたのですが……」

それから…帰ってこないままで……」

「……何故なのでしょう……この近くに村なんて一つもありませんし……」

「……私達にも……分かりません……彼が戻る事を……祈るばかり  
でしょう……」

……ああ……じれったい……!!

「おーい!! ジャック!!」

見るとチェリーとルーフス、バンダ、…知らない少年が立っていた。

「あ…あんちゃん!!」

ジャックは駆け寄る。

「…無事で良かったです!」

「おお………ブロッカス………!!」

「……………!!……………お父さん……………!!」

スローモーションのような再開。

「…皆様…本当に…ありがとうございました。…お礼に……………我が村で……………お茶でも…」

「わあ、おいしいパンプキンパイ!!…これあなたが作ったの?」

少女達は隣り合って話し合っている。

「……………はい……………少し……………砂糖が……………多かったかも……………」

「また今度、一緒に作りましょうね!」

「……はい!……」

「ここが…異次元…素晴らしい…」

バンダは結晶と草原の入り混じるミステリアスな光景に目を奪われていた。

「なるほど!…この世界の時間は、私達が住んでいる世界の時間より遅く進んでいるのですか!」

いつもは冷静な老人も、異次元に来てしまっただけには興奮を押さえられないようだ。

「そして夜でもモンスターを気にせずにご過ごせる…!…とても面白い世界ですね…!」

「…ほ…っほ…っほ…喜んで頂けたなら…私も嬉しいです…」

時の遅い世界の時間は、更に更に、ゆっくりと流れていった。

「…バンダさん…また…いつか…また…働いてみたいです…」

「私も、君に働いてもらいたいです。君は確かに遅い所があります。

しかし、一つの事に真剣に仕事を行う様子はしかと評価していますよ。」

「…ありがとうございます…！」

「…また…来てね！…チェリー…!!」

「では…また…会う日まで…！」

ルーフス達も異次元の人々に手を振る。

そして帰還の書に吸い込まれていった…

それからルーフス達は、メデイウス・ライブラリーに一晩泊まった。

翌日の朝。

ルーフス達は眠っているステーラの横で、バンダと話をしていた。

「いろいろな本を読ませてくれて、ありがとうございました。バンダさん。」

「本当に面白かったです!!」

ジャックはまだ目を輝かせていた。

「いえいえ…君は私の子供の時にそっくりだ。私も初心を振り返る事ができました。」

ジャック君。…これを受け取ってください。」

そこにはボロボロの百科事典。

いまにも千切れそうな付箋が無数のページに貼られている。

「私が若い頃から使っている百科事典です。」

「え…いいんですか!?…こんな大切なもの…」

「私もいずれは衰え、死んでしまいます。しかし、私の『努力』は残しておきたいのです。」

付箋を貼って、実際に見て、聞いて、行った『努力』をそこに詰め  
てあります。

君は私のような…いや、私を超えるような勉強家になってほしい。

…受け取ってください。ジャック君。」

バンダは優しく微笑んだ。

「…絶対、大切に使います…!!」

ジャックは真剣な眼で答えた。

ルーフスとチェリーは黙ってジャックを見守っていた。

「さあ、行くぞ、ステーラ。」

「クウン…?」

「では皆さん、お元気で!!」

「おめでとう!!」

「ありがとうございましたー!!」

「お元気でー!!」

「ワオン！ワオン!!」

森の中を抜け、ルーフス達は険しい山々を登っていた。

辺りには牛が荒い息をたてていた。

チェリーは思い出した。

「あ！バンダさんの歳、聴くの忘れてた！」

「はははは…意外と鈍いなー…ブラッカス達の鈍さが映っちゃったのか？」

「はははははは!!」

チェリーは顔を赤らめる。

「も、もう!…ルーフスさんとジャック君たら…」



この『世界』で、今日も愉快な旅を続けているルーフス達であった。

### 番外編3：深夜のロングトーク

険しい山の山腹で、牛が群れている。

ルーフス達は花が寂しげに咲いた山を下りていた。

目の前に遠く広がるのは広大な草原。

豚や鳥、羊の鳴き声が麓から聞こえてくる。

「あんちゃん、もつ夕方になっちゃったよ？」

「うー…ん…早く村を見つけないと野宿することになるぞ…」

「さすがにそれは怖いですね…」

「ワン!!ワン!!」

「…よし、ひとまず走るぞ。」

みんな、置いてけぼりになるなよ!!」

「「「おお!!」

「ワン!!」

ルーフス達は麓から、草原へ向けて走って行った。

月が少し昇り、モンスターが出現する。

ルーフス達はあわてて見つけた村の小屋に避難した。

「ジャック―ドアをふさいでくれ!!」

「…」

ジャックは丸石を二つ、ドアの前に置いた。

嗅ぎつけたゾンビがドアを叩く。

三人は深呼吸をする。

「良かった…間一髪だ…」

「でもはつきり言って、僕たちって不法侵入だよね…」

「ん…ああ…そうだな、ははは…」

「朝になったら、この村の人たちに挨拶しましょうか。」

「そうだな。」「ワオンー！」

ルーフス達は窮屈な部屋にベッドを敷いた。

「さて、寝るぞー…」

ヴオ … カラン…コロロン…

ギシャシャ…

ヴオ … コロン… カランコロロン…

ヴオ … カラン… ヴオ …

ギシュ！… ヴオ …

ヴオ … ギシャシャ…

「」「」「つるせー！！」「」「ガオウ！！」

三人と一匹は一喝した。

「…と…いうわけで……」

「眠れないので。雑談でも、しましょー。」

「イエーイ!!!」「ワン!!!ワン!!!」

「えーと…何かネタ無いか？」

「そういえば近年、ゾンビが少し賢くなったみたいだよ。」

「どういふことですか？」

「探検家から学んだのか、装備を付けるようになったり、

一人が傷ついたら集団で逆襲したり……」

「おええ？まじかよ…あの見かけたらスルーするぐらい弱いゾンビまで

強くなってるなあ……」

窓の外のゾンビは膝に顔をうずめて落ち込んでいた。

「スケルトンもエンチャントの武器を使うようになったり、

遠くまで矢が届くようになったり。」

「…なんか知らないうちにすごいことになってるな…」

「それだけ手ごたえが生まれたっていう感じですね…へへへ」

「「チエリーさん!」」

ルーフスとジャックは驚きを隠せなかった。

狼はおねだりした豚肉をおいしそうに食っていた。

「パンプキンパイが焼けましたよ!」

チエリーは4つのパンプキンパイを手渡す。

「うーん…いい香りだあ…!…うまい!」

「うんめえ!!…最高だ!!」

「良かった!…メデイウス・ライブラリーの料理本から教わったんです。」

また逢えたら、アルガちゃんとヴァイオレットと一緒に料理作ってみたいなあ。」

「お？そんな時は何を作るんだ？ゆでたまごか？ずんだもちか？楽しみ  
だなー!!」

「もう、ルーフスさんたら、料理のことばっかりなんだから……」

深夜に笑い声が響く。

月は明かりのついた小屋を真上から照らしていた。

「ステーラ、お手!」

「ワオン?」

「ほら、『お手』って言ったらくらこうだよ、ステーラ。」

ジャックが狼の前足をルーフスの手の上に乗せた。

「ワン!」

「お手!」

「ワン!」

ポテッ。

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「おかわり！」

ポテッ。

「かわいい〜!!」

チェリーはハートの目になっている。

ルーフスは鶏肉をステーラにあげ、頭をなでる。

「お前賢いなー。」

「やっぱり、ペットって和むよねえ……」

「ステーラア!!あなたって最高よ!!」

鶏肉を口にくわえたままのステーラをチェリーが抱きしめた。

「ワンーワンー！」

狼は幸せそうに尻尾をふる。

「どこかにキノコしか生えないバイオームがあるらしいよ。」

ジャックは辞書を見ながら言う。

「「え……!?!」」

「マジで!?!そこに行けばキノコシチュー飲み放題じゃん……!」



「でもキノコしか生えないってなにか寂しいような…」

「ここに書いてあるには、巨大なキノコも生えてるらしい。」

「まあ、面白いですね。」

チエリーは笑う。

「行ってみてえなあ…ほかにもなんか珍しいバイオームはないのか」  
「？」

ルーフスは完全に目が冒険モードだ。

「えーと…どこかに巨大な花の生えるバイオームもあるらしいよ。」

「すげえ!! 行きてえ!!」

「私も行ってみたいです!!」

ステーラはさすがに眠ってしまったようだ…

月がもうすぐ沈む。

気が付くとルーフス達は眠っていた。

時間が楽しくて、疲れてしまったのだ。

ルーフス達は仲良く地面に寝転がっていた。

「ふわぁぁ……」

ルーフスの欠伸でチェリーも起きる。

「眠ってしまいましたぁ……」

「やっぱりねむらねえと駄目だな……」

楽しかったけどよ！」

ルーフスは笑顔で言った。

「私も楽しかったです！」

チェリーも笑顔で応える。

「……お……朝日が昇るぞ……」

朝日が窓から差し込む。

それはジャックと狼の上に落ち、目覚めさせた。

「もう朝かぁ……」

「クウン……」

「よし、みんな起きたな、あいさつに行くぞ。」

「はい……」「うん……」「ワッ!!」

ルーフス達の一日が、また始まるつとじていた。

## 17：小さな戦士達

何も知らぬ村での一夜を過ごしたルーフス達。

小屋の扉を開け、村人達に挨拶をすることにした。

まず出向いたのは石の屋根で作られた鍛冶屋だ。

「じんごちはー…」

返事が無い。

「あれ、誰もいないのかなあ？」

中を覗くと…

うん、誰もいない…

？

「いるじゃん…」

中には筋肉の整った男性がいた。

ワイルドな白髭の顔が似合っている。

男性はしかめっ面をしながら返事をした。

「お前達、どこのよそもんだ。」

「あ、えっとー…昨夜あそこの小屋を勝手ながら使わせていただきました…」

それで、挨拶をしようとした。

男性は耳をほじりながら答える。

「なるほどねえ…昨夜のあのやかましさはあんたらだったのかい。」

「「「ギクッ」」」

「「「せつせつ」」」。

「…まあいい…とりあえず、「ここ」に来たからにゃあ、剣を渡してもらお

「う。」

「えっ、剣を？」

「ああ、うっ、ああ、うっ、うっ。」

少年はしぶしぶ3本の剣を渡した。

ルーフス、ジャック、チェリーの3本だ。

男性はルーフスの剣を手取る。

「…これはひどい。なんて乱暴な斬り方をしとるのだ。」

剣がぼろぼろに傷んでいる…」

「グサッ」

ルーフスの心臓に何かの突き刺さる音がした。

「…だが、それと同時になんと破壊力のある斬り方だ。」

そこだけは褒められる。」

ルーフスはほっとすると同時に、『だけ』に反応し地面にへたり込む。

続いてジャックの剣。

「…お前さんは剣をまだほとんど使っていないのだな。

まだ新品のままだ。ほれ、これはもっておきなさい。」

ジャックは投げられた剣をあわてて取る。

何か仲間はずれにされたようで納得がいかない表情だ。

最後にチエリーの剣。

持つと同時に男性の目の色が変わる。

「じ、これはお前さんのかい？」

「は、はい…あの…そんなに扱いがひどいのですか？」

「とんでもない！ 静、動の剣さばきはどちらも完璧、

とてもきれいな傷み方をしている!!

その腕、さらに上達を目指したほづがいいぞ。」

「は、あ、…」

チェリーはいきなりの褒め言葉に動揺する。

ルーフスは問う。

「でも、すごいですね…剣だけで普段の剣の扱い方まで分かるなんて…」

男性は真顔でルーフスの剣を研ぎながら答える。

「ものにはその人の愛情がどこかに垣間見えるものだ。」

私はその細かい点を探しているだけだよ。」

「言い忘れたな。私の名前はスチル。この村の鍛冶屋を営む者だ。」

「私達はルーフス、ジャック、チェリー、そしてステーラです。」

「「よろしくお願いします。」」

「ワン!!」

カン、カン、カン！

鉄の槌を金床の上の剣に力強く振り下ろす。

ルーフスの剣は元の状態に戻されていく。



ひょーっ

家の陰から何かが覗いていた。

チェリーは気になり、家の後ろに回りこむ。

チェリーの目が見開いた…!!

「キヤーーーーー!!」

「チェリーさんの声だ!!」

「なんだ、モンスターが残ってたか!？」

ルーフスは声の方角へ駆けていく。

「チェリー!!」

「ルーフスさん！見てくださーい!!」

みると腕の中に青色の人形達が3つもあつた。

みんな腕から抜け出そうとしている。

「かわいい〜!!」

チェリーは3つの人形に無理やり頼ずりした。

「なんだ…!?人形が動いてる！」

「電池でも入ってるのかな？」

「魔法、だよ。」

ルーフスの剣を持ってきたスチルは答える。

「魔法!?!」

ルーフスとジャックは驚く。

「この村にはずっと伝えられている童謡があつてな…」

むかーしむかし。

この村には人形好きの女の子がいました。

朝から晩まで、積み木もおにごっこもせずに、

粘土で作った人形で遊んでいました。

ある時、一人のお婆さんがこの村を通りかかりました。

伝説で有名な魔女です。

黒く大きな帽子に黒の洋服。

そのお婆さんはまさにその伝説の魔女そっくりだったのです。

そのお婆さんを魔女だと思い込んだ女の子は「どうお婆さんに頼みます。」

「このお人形さんを生き返らせて!!」

お婆さんは承諾し、粘土の人形に魔法をかけたのです。

するとたちまち粘土の人形は動き出し、女の子は大喜びしました。

しかし、近所の男の子達はその人形を赤と青に塗りたくってしまっただのです。

人形たちは敵と勘違いして仲間割れ。

女の子はそれを見て泣いてしまいました。

男の子はあわてて色を戻そうとしますが、何をやっても全く戻りません。

大人たちもこの事を知り、ついに赤色の人形だけを隣の村に移すことにしました。

こうして、この村には青色の動く人形が住みついているのだとぞ。

おしまい。

「…というわけだ。」

「なるほど、わかりやすいな。」

ルーフスが童謡に納得する。

「魔女が本当にいたなんてなあ……」

「だからこの子達は動くのですね！」

チェリーは自分に向かってファイティングポーズをとる人形の頭をぐるぐる撫で回す。

「その童謡の名残はまだ残っているのだ。」

「どういふことですか……？」

「ほら、始まるぞ。」

スチルは草原の水平線を指差す。

……

………

………

………

………

赤色の人形の大群がポウルと棒を持ってこちらに向かってくる。

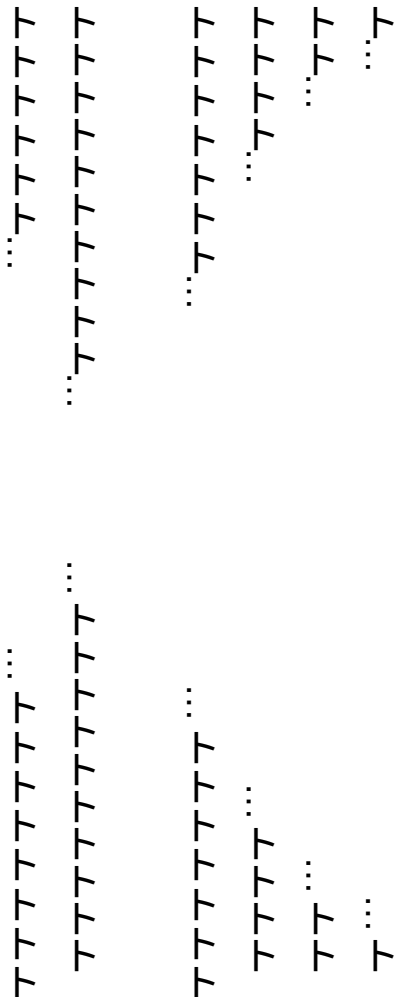
チェリーの腕の中3人はひょこつと抜け出した。

家の中からは青色の人形達。

ポウルと馬、棒を食器棚から取り出してやがて…

整列した。

一人の青色が右手を挙げた。







彼らは私達にそのことを皮肉さをこめて伝えているのだ。

…だから私達は、この戦いをやめさせることが出来ても、やめさせたくはないのだよ。」

やがて一騎打ちになり、最後の一突きで両方がやられた。

「…ドロー。だな。3845回目のドローだ。」

「そんなに引き分けしているんですか!?!」

ジャックは尋ねる。

『『そんなに』どころではない。全てが引き分けだ。』

彼らは疲れているときでも、いつでも決まった日時に戦う。

おそらく、あと1000年間は余裕で戦い続けるだろう。」

チエリーは考えていた。

この子達は『敵』がいるから戦っていられるんだ。

『敵』がいなくなればいいってわけじゃない。

『敵』がいるから強くなれるのかな…

「この子達にまた一つ、教わった気がするわ…

「よし、完成したぞ。」

チェリーの剣をスチルは渡す。

「ありがとうございますー！」

「うむ。…おい、お前さん。」

ジャックをスチルは呼ぶ。

「今度ここに来る時には、しっかり傷をつけて来るんだぞ。」

「はいっ!!」

ルーフスは小さい兵士達と棒で戦っていた。

突く、守られる、

斬る(?)、弾かれる、

足をさばく、避けられる…

「なるほど、お前、なかなかやるなあ……」

青色の人形は照れる。

「ほら、戦士の友情の証だ。」

ルーフスは右手を握り差し出す。

その右手に粘土の小さな手がぶつかった。

「「「ありがとうございますー!!」」」

最後にスチルは笑って見送ってくれた。

そして青色の人形達も敬礼をしていた。

「あ、ルーフスさん、あれ！」

チエリーが横を指差す。

遠くで赤色の人形達も敬礼をしていた。

「あいつら、まとまってきたら強いんだろつな!!」

「そうだね。一瞬で負けそうだ！」

ルーフス達は青と赤に見送られながら、草原を進む。

18：廃坑探索！（前編）

小さな戦士の住む村を離れて後、

ルーフス達は…

地上ではなく地下にいた。

それは少し前にさかのぼる…

ルーフス達は広大な草原を抜け、雪原に踏み入っていた。

「クウン…」

狼は寒そうに身震いしている。

「ステーラ、大丈夫？」

「ワン!!」

チェリーは心配する。

狼は問題ないようだ。

「雪、懐かしいなあ〜」

ジャックは右手で雪を受けながら、郷愁に駆られていた。

「ここんどこ全然雪なんか見てなかったからな。

ずっと雪の中にいたお前は恋しいよな。」

「私もクッキーが恋しくなってきました…」

「いや、あんた毎日食べてるだろう。」

「ワン!!」「ワン!!」

ルーフスとジャックがハモってツツコミを入れる。

狼は元気そうに吠える。

「毎日四時間に一回は口にしないと元気がでないのですよ!」

チェリーは誇らしげに言う。

「あー、もう数とかじゃないんだ、数を通り越して周期なんだな。お前は。」

ルーフスが冷静にツツコミを入れた所で。

もう太陽は沈みそうになっていた。

「あんちゃん、早く村を見つけないとやばくない？」

「まあ、「」」までの流れからしてみるとすぐ見つかるだろ！」

「ワンワンニ！」

月が少し昇った。

ルーフス達はモンスターに追いかけられていた。

「やばいよやばいよ〜村が無いじゃんかよ〜!!」

シュツ!!

スケルトンの矢が3人の隙間をすり抜ける。

「この状況どうするんですか〜!!ルーフスさん!!」

「ワオーン!!」

ギシュギシュ!!

チェリーの頭上に蜘蛛が飛び掛る。

チェリーが片手で3回、素早く斬る。

「あーあそこあそこー!洞窟があるよー!あんちゃんー!」

「かまわんー!皆、飛び込むぞー!」

狼は洞窟の前で何回も吠える。

み、  
モンスターがひるんでいるスキに、ルーフス達は洞窟の中に駆け込

土で入り口にふたをする。

最後に急いで狼が隙間から入る。

「ふうくたすか…」

背後には沢山の目。

「に…」

「逃げろおおおおお!!」

「ワオオオン!!!」

三人と一匹は洞窟の中を駆け巡る。右、左、左、上、下、下…

…!?

足を動かしても前に進まない。



それはそうだ。

空中にいるのだから。

「けーこく（溪谷）かよおおおおおおお!!」

「きゃあああああ!!」

「うわあああああ!!」

「バウ!!ワウ!!」

ルーフス達はモンスターが見守る中溪谷へ…

バツシャン!!

ドボン!!

バシャン!!

バシャーン!!

四つの大きな水しぶきがたった。

運よく下には水流があっただのだ。

ルーフス達は水流から抜け、

服を乾かそうとする。

狼は体を振って水を落とした。

「あー…服がびちゃびちゃだ…でもまいたか？」

「いえ、まだモンスターはいますよ。」

チェリーは遠くを指差す。

「こつもりが沢山飛ぶ中に、

クリーパー、スケルトン、ゾンビ、蜘蛛がうじゃうじゃ。

「こりゃ明るい所に出なきゃだめだな……」

「クウン……」

「あんちゃん、明かりがあるよ。」

「え？」

確かに溪谷の穴から明かりが漏れている。

「しめた。みんな、行くぞ。」

「ワン！」

狼は返事をする。

他の二人はうなずいた。

ルーフス達は洞穴の中へと向かう。

「!?…なんだ」は…」

そこには人工物のレール、チェスト、木で作った門があった。

何年も人がいないのか、蜘蛛の巣がところかしこに張っている。

「廃坑だね。ほら、」

ジャックはバンダからもらった辞書をルーフスとチェリーに見せる。

廃坑 (Abandoned Mine Shaft)

古代の人々が鉱石の採掘のために掘って作ったもの。そこには古代の人々が残した数々の貴重品があるため、「地下の宝物庫」とも呼ばれてきた。

「へえ…『地下の宝物庫』か。」

「でも」ここまできれいに残るのですね。感動しました！」

「面白いものが見つかるといいな！」

「ワン！ワン！」

「よし、皆、廃坑探索に、出発だ！！」

「おお！！」

ルーフス達の廃坑探索が始まった。

## 19：廃坑探索！（後編）

短くあらすじを説明しよう。

ルーフス、ジャック、チェリー、ステーラの三人と一匹はモンスターに追いかけられ、洞窟に入り、渓谷へ真っ逆さま。明かりを見つけると、そこは廃坑であった。

ルーフス達の危険な廃坑探索が始まる…

今、ダイヤモンドの剣でゾンビが倒された。

木製の柱の影からモンスターが次々と現われる。

「さすが廃坑だ…モンスターがうじゃうじゃいるぜ！」

チェリーは青い顔をしながら言った。

「う…生のゾンビの肉のにおいが…」

「だ、大丈夫？チェリーさん。」

ステーラがチェリーの前のゾンビ肉を飲み込む。

「ふう…ありがとっ、ステーラ。」

「ワン!!ワン!!」

狼は元気になったのか尻尾を振る。

「さあ、お前ら、気を抜くなよ。まだモンスターはいるぜ!」

シュー…

カラン…

ヴォ…

キシュキシュ!!

「はい!ルーフスさん。」

「おう!あんちゃん!」

「グルルルル…バウワウ!!」

ステーラがモンスターに威嚇し飛び掛る。

カラッ!!

スケルトンが崩れる。

チェリーが剣を振るう。

キシュウウ…

蜘蛛が仰け反り、動かなくなる。

ジャックが弓で矢を放つ。

シュー…

クリーパーが火薬を落とす。

ルーフスが剣で斬る。

グボオア…

ゾンビが倒れる。

ルーフスは松明を力強く立てた。

「よし…ここは制圧完了!!」

「チェストがあるよあんちゃん、」

ジャックはトロツコの上に置かれたチェストを調べた。

ギコオ…



金の延べ棒と蜘蛛の糸、リンゴに鞍、そして鉄の剣。

「ワーン!!」

狼がリンゴにかぶりつく。

「うーん…なんか微妙だ…」

「なーに、宝探しなんだ。そんなに見つかったら苦労はしないぜ。」

「そうですね。気長に探しましょう。」

「じゃあ、ここからは手分けして探すことにしよう。」

俺はこの道を通り直ぐ、ジャックは左、チェリーは右へ行ってく  
れ。

…ステーラは誰と行くか…」

「はい…」

チェリーが名乗りをあげる。

「わたしが連れて行きます。」

「よし、決まりだ!!皆、けがなんてするなよ!」

「うん!」「はい!」「ワオン!!」

ルーフス達は分かれていった。

~~~~~ジャックの探索~~~~~

「「「「「ヴオー…」」」」」

「な、なにい!! もしや…うそでしょ…: モンスタースポーンがあるのか  
!?

「いやいやいや早いだろー!!」

ジャックはあわてて剣で応戦する。

ズシャ!! ザク!! ザク!! …

ゴホオウ…

グボオウ…

グホウ… グボオウ…

急いで周りを照らす。

苔だ。

「やった…!!」

モンスタースポーンを壊して、

松明をつけて、制圧完了。

「中身は…」

ギコオ…

リンゴ、鉄の延べ棒、腐敗した肉、エメラルド…鉄の馬鎧!!

「おおおおおお!!??」

少年は目が飛び出る。

「これ…レアでしょ、絶対!」

~~~~~チェリー、ステーラの探索~~~~~

「…なんで元から使われていたのに鉱石が残ってるのかしら…」

チェリーは鉱石を掘りながらつぶやく。

ステーラが「それは言わない約束だ」とばかりにチェリーを見て首を振った。

「まあ、ここまで鉱石がたくさん取れるからいいわよね、ステーラ。」

「ワオン。」

ステーラは一声鳴いて同意する。

キシユウ…

キシヤ…！

蜘蛛が二匹、チェリーの元へ。

「…ごめんなさい…あなたを殺してしまう身だけど、言いたい事があるわ。」

私は、もうあなた達なんかには負けない！」

剣を六つ、素早く振る。

キシユウ…

キシユウウ…

「クウン…」

狼がさびしげな顔をチェリーに向ける。

「あ…ごめんなさい、なんか獲物を横取りしちゃったみたい…」

「ワン!!ワン!!」

「ふふふ、分かったわ。次の敵はあなたが倒してくれる？」

「ワオーン！」

狼は力強く吠えた。

「さ、もう少し先に進んでみましょうか。」

「ワン！」

チェリーたちは松明を灯しながら奥へと進んで行った…

~~~~~ルーフスの探索~~~~~

「カラン…」  
「ロン…」  
「シュー…」

「お、出たなモンスター！それっ!!」

ルーフスが剣で素早く斬る。

攻撃はどんどん当たる。

シューウウ…

カララッ!!

倒れた後に火薬と骨、そして弓が散乱した。

「おお、弓を落としてくれた!

…サンキュー、お前の弓、大切に使ってやるからよ!」

ルーフスは更に進む。

「…?…なんだこの蜘蛛の巣だらけの場所は…

…こつこつ場所に限ってすげえ宝があるんだよな。

よし、行ってみるか!」

ルーフスは蜘蛛の巣を剣でなぎ払う。

「ふう…まだ宝箱はね…!!!」



「なんだ…びっくりさせやが…」

「キシユウー！」

「…!!」

ルーフスを襲う。

ルーフスは少し痛い攻撃に耐え、なんとか倒す。

ズク…

「…!!!!!!」

ルーフスの身に経験したことの無いような痛みが走る。

辺りを見回しても何も無い。

蜘蛛もまだ遠い所だ。

「キシユウ!!」

お…また来た。



ズキィ…!!

「ぐっ…」

ルーフスは突然の痛みに剣を振れなかった。

剣が手から離れる。

小さい蜘蛛は寝転んだ状態のルーフスに攻撃を仕掛ける。

「くそぉ…!!」

ルーフスは力を振り絞り絞り蜘蛛から離れる。

蜘蛛も追いかける。

ルーフスは分岐点に差し掛かった。

「くっだ…!!」

ルーフスは急いで通路を丸石で覆う。

「キシユウ!!」

タン…

最後の丸石が置かれた。

間一髪で蜘蛛の行く手を阻んだのだ。

ズキユウ…

「ぐはっ…」

ルーフスが血しぶきを口から出す。

持ち合わせたパンを食べるが治らない。

どうしちゃったんだよ俺…!!

~~~~~チェリーとステーラの探索~~~~~

ステーラの耳が立つ。

「ワン!!ワン!!」

「ステーラ、どうしたの…まさか、ゾンビの肉があたったんじゃ…!」

首を振る。

「ワンワン!!ワンワンワン!!!」

ステーラが一目散にもと来た道を駆け出して行った。

「!!…ちょっと！ステラ!!」

チェリーが追いかけていく。

~~~~~ジャックの探索~~~~~

）

廃坑に鼻唄が聞こえる。

ジャックはレアを手に入れ上機嫌だ。

「まっだまっだあつるのっかな〜超レア〜」

即興で作った需要の無い歌を口ずさみながらスキップでモンス  
ターを倒していく。

最後の松明が置かれた。

「…あ、…しまった、材料持ってきて忘れた。取りに行こうと。」

ジャックは辞書を読みながらもと来た道を歩く。

もと来た道を…

…

止まった。

辞書のページのある部分の内容を読んだからだ。

パタン…

ジャックはもと来た道を走る。

「まずい…このことは伝えなきゃいけないじゃないか…!!」

~~~~~ルーフス達、合流~~~~~

「チェリーさん!…!!!」

…ハア…ハア…

ルーフスが石の上に横になっていた。

「まさか…毒!？」

「ええ…そうよ、なんで分かったの？」

「これだよー」

洞窟グモ (Cave Spider)

廃坑に生息する蜘蛛の亜種。

スポンブロックによってしか

出現しない、小さな蜘蛛だが、

その姿とは裏腹に強力な毒を持つ。

「ごめん、僕が廃坑の事を良く調べなかったばかりに…」

「謝らないで、ジャック君…それより…」

チェリーが久しぶりの涙を見せる。

「ルーフスさんが…全然よくなるの!!」

「クウン…」

狼も悲しげな顔を見せる。

ジャックはチェリーの肩に手を置いて自信を持って答える。

「大丈夫だよ、チェリーさん、解毒方法はしっかり調べてあるよ！

チェリーさん、お菓子の材料の牛乳って持ってる？」

チェリーは涙をぬぐってかばんを探す。

「牛乳なら…」

「それをあんちゃんに飲ませてー！」

ゴク…ゴク…ゴク…

…

「あり？治った。」

一瞬で完治。

チエリーは目が点になる。

ジャックは笑顔で言う。

「…ね」

「ははははは…いやー小さい蜘蛛だって油断してな！」

…ジャック、チェリー、ステーラ、ありが…」

チェリーが涙目になっている。

「もう…心配させないくださいよ！ルーフスさん！」

本当に…心配…したんですからね…!!」

チェリーはまた泣いた。

「…ああ、サンキュー、チェリー。」

「ワン！ワン!!」

狼も喜ぶ。

「あんちゃん、治ってよかった!!」

ジャックも続けて笑った。

その後、ルーフス達はすぐ地上に戻ることにした。

さすがに、もう誰も毒にはかかりたくは無いから。

「へえ…ステーラが俺の毒を察知してくれたのか…」

俺より賢いなあお前！」

ステーラの頭をルーフスが撫でる。

狼は嬉しそうだ。

ジャックがいきなり発表する。

「あんちゃん、この廃坑探索ですごいもの見つけたよ！」

「ジャーン!!」

「おおおおおおおお!!!」

「これ、お前、かつこいいじゃんか、お前、よく見つけたなあ!!」

ルーフスは興奮している。

「本当に『地下の宝物庫』でしたね…馬か!!乗ってみたいなあ!!」

チェリーもいつも以上に興奮している。



「クウンっ？」

狼は何がなんだか分からないようだ。

「いつか馬も欲しいね！あんちゃん！」

「そうだな！そんなまでに手綱を作っておかなきゃな！」

「ふふ…早いですよ、ルーフスさん、荷物になるだけですよ！」

洞窟中に笑い声が響く。

「お、出口だ…」

ルーフス達はやっと地上に出る。

「すげえええええええええ!!」

ついたのは巨大なセコイアの生い茂る森。

木々の間で鳥がさえずっている。

「すごいなあ……」

「美しいですね……」

「ワオーン!!!」

今までに見たことのない景色にルーフスは思わず感嘆する。

「世界ってこんなに広いんだな……」

「あんちゃん、早く行こうよ!」

「行きましょう!ルーフスさん!」

「ワン!ワン!!」

「おう!!」

ルーフス達はセコイアの森へ駆けて行った。

## 20：絶交

セコイアの樹のびっしり生えた森の中。

ルーフス達は家を建てていた。

松の独特の黒色を基調にした  
ログハウスだ。

ジャックが松明を挿したところで、雨が降る。

「おお、グッドタイミングだ。それじゃ皆、家で休むか！」

「ふう〜腹減った〜…」

「クウン…」

「ベイクドポテト、焼きましようか！」

「賛成！」

「ワン！」

ルーフス達はドアを開けて家に入っていった。

ジャックは疲れて眠ってしまったようだ。

ステーラはその隣でベイクドポテトを嬉しそうに頬張っている。

「…うめえか？ステーラ。」

「ワンワンニ」

狼は元気よく答える。

「だよな！なんせチェリーが作ったんだからな！」

ルーフスは笑う。

チェリーは一瞬、心の奥底で何かが揺れ動くのを感じた。

その揺れはまだ収まらない。

それどころか強くなっていくように感じる。

私、ルーフスさんに…恋してるのかな…

ルーフスさんは私のこと…どう思っているのかな…

チェリーは顔を真っ赤にしながら、ルーフスにきいてみた。

「あ……あの……ルーフス……さんは……私のこと……どう……思ってるんですか？」

「え？……」

ルーフスの顔が一瞬で真っ赤になる。

チェリーは恥ずかしくて、下を向くことしか出来ていないようだ。

ルーフスも同様で、チェリーの顔から目を逸らしている。

一度ほおを搔いてごまかしながらルーフスは考える。

何で…今…ここで…こんな事をきいたんだ…？

えっと…チェリーは…俺にとって…かの…

心の中でルーフスは自分を蹴飛ばす。

いやいやいや…まだそんなレベルじゃ…ってか「まだ」ってなんだよ…

俺はデートしてんじゃねえんだぞ!?これはただの旅だぞ？

…えっと…どうすれば…

「…仲間…そう！旅の『仲間』だよ！そう！『仲間』！」

チェリーの心の揺れがピタッとやんだ。

一瞬、ルーフスを見てからの静寂。

「そ、そっすよね。」

チェリーはとぼけるように笑う。

…私…なんで満足してないんだろう…

仲間がいいじゃん！私を仲間と認めてくれたってことじゃん！

…でも…

雨音が去っていく。

「…お…雨やんだな…」

ルーフスは立つ。

「俺、食糧探ってくるよ。」

「あ、はい…いってらっしゃい…」

「行ってきます。」

ルーフスは扉を開け出て行った。

チェリーは後ろに倒れる。

ふう…

私は…ルーフスさんに『彼女』って言ってもらいたかったんだ…

キイ…

チェリーは起き上がる。

扉には、赤いアウターに茶色のTシャツの男。

ルーフスさんだ。

「あれ…何か忘れ物ですか？」

目の前のルーフスは口が裂けるように笑った。



「…いただきます。」

ルーフスは倒した豚や牛に感謝し、肉を捨てる。

ルーフスは小屋へ向かう。

はあ…

あそこで本当のこと、言えば良かったのかな…

チェリーの事を…好きだって言えば良かったのかな…

ルーフスはうろつろつろと考えているうちに、セウイアの樹にぶつかった。

「…あつて…」

キィ…

「ただいま…!？」

見ればチェリーとジャックが倒れている。

眠ったわけではない。

二人の服はボロボロになっている。

ルーフスは手始めにジャックを起こす。

「おい！大丈夫か！ジャック！ジャ…！」

ドゴッ!!!

ジャックがルーフスの頬を殴る。

ルーフスは床に倒れた。

「ッ…何すんだ！」

「あんたこそ何してんだよ！」

ジャックがいつもより強い口調で喋る。

「今まで旅をしてきて…それで仲間を滅多打ちかよ！」

「…ジャック…お前何言ってるんだよ…？」

ルーフスの頭には疑問しかなかった。

俺がジャックとチェリーを滅多打ち…？

「俺は…お前らを滅多打ちなんかしねえよ！」

「したじゃないかよお!!」

ジャックとルーフスは睨み合う。

ルーフスはチェリーを見る。

斬られたのか、血が広範囲に広がっている。

「…チェリーの手当てをしなきゃ」

「しなくていいよ。」

ルーフスが手を伸ばすのをやめたとき、

ジャックがチェリーに近づいて手当てを始める。

「…あんちゃんは…僕達が仲間じゃ不満なんだろ。」

それなら…勝手にすればいい。チェリーさんとステーラで旅を続けるよ。

あんちゃんは違う仲間を見つければいいじゃん。」

ルーフスは自分の心にヒビが入ったかのように感じた。

ジャックが…自分について来てくれたジャックがそんな事をいうなんて…

ルーフスは悲しんだ。

ルーフスはジャックにさっき捕った豚肉や牛肉をジャックに渡そうとする。

「いいよ。あんたが食べればいい。」

「…くそ…」

ルーフスは豚肉と牛肉を床に投げ、扉を開けて出て行った。

バタン…

扉の閉まる音がジャックに響く。

「…僕だって…信じたくないぞ。…」

ジャックも悲しい顔を見せる。

扉が今、そっと開く。

そしてそっと閉まった。

夜になり。

ルーフスはセコイアの森の北にある砂漠の地下にいた。

あるだけの松明。

あるだけの食糧を食べて。

ジャックに殴られた頬をさする。

砂の隙間から満月が見える。

月は独りをあざ笑うかのごとく洞窟内のルーフスを照らす。

ルーフスは過去の事しか考えられなかった。

ブレイズとの共闘。終わりの世界での共闘。

ステーラとの出会い。チェリーとの出会い。

都会での奔走。都会での戦い。

廃坑での戦い。

そんな事が心をめぐりまわっている。

それは目からもあふれ出すほどの冒険であった。

ルーフスはそれらを拭う。

拭っても拭ってもあふれ出す。

涙がルーフスの目から垂れる。

「俺たちじゃ……」で終わんのかよ……！」

……

「……！」

ルーフスは耳をすます。

……オーン……

……ウォーン……



…オーン！…

「ステーラ!!」

ルーフスは大声を上げる。

ステーラも気づいたようだ。

ルーフスはシャベルで狭くふさいでいた砂を掘り返した。

ステーラが洞窟に入ってくる。

ルーフスはステーラを抱く。

「ステーラ…おめえ…帰ってきてくれたのか!」

「ワン!」

ステーラは嬉しそうに尻尾を振る。

ルーフスはステーラから情報を抜き出そうとしていた。

ステーラの目の前の土に と×が刻まれている。

「よし、まずはテストだ。お前はメスだ。」

「ワン！」

ステーラは×に手を置く。

「チェリーとお前はクッキーが大好きだ。」

に手を置く。

「よし、本題だ。∴ステーラ、俺が家に入ってきたんだな？」

に手を置いた。

「そして俺がジャックとチェリーを襲った。」

に手を置く。

「その姿は俺だったか？」

に手を置く。

「俺じゃないってこと、お前は分からなかったか？」

×に手を置く。

「じゃああれは俺じゃない、違う奴ってことか？」

「ワン！」

ステーラは静かに 手を置いた。

「よし…お前、よく出来たぞ…」こぼびだ。

ステーラは持っていた豚の生肉をあげる。

「…ありがとな、ステーラ。」

ルーフスは口を引き締め、月を見た。

「…絶対に見つけてやるぜ。俺の偽者め…！」

「ジャック君…あれはルーフスさんじゃないわ、

あなただって、分かるでしょう。ルーフスさんはあんな事なんて絶対しない。」

「分かってるよ。チェリーさん。…でも、現にあんちゃんが僕達を襲ったんだよ？」

どじやって疑えっついでいっのわ…」

「……」

「ステーラはたぶん、あんちゃんの所に行ったんだろっ。」

しょうがない、僕達二人で旅するしかないよ。」

「……やっぱり駄目。」

チェリーが言う。

「私達は！ルーフスさんとステーラ、ジャック君、そして私。

…この4人で『私達』だったでしょう!?

それなのに…その中の二人だけなんて…

ルーフスさんとステーラが恋しくて耐えられないの!!」

「…チェリーさん…そうだよね。」

「あの二人がいなきゃ、僕達は成立しないんだ…」

ジャックは反省する。

自分からルーフスを離してしまった事。

キイ…

「すまなかった！」

ルーフスが扉を開けて土下座する。

「俺が…お前らを裏切るような事しちゃった！」

俺を仲間に戻してくれないか！」

「ルーフスさん…！」

チェリーは喜ぶ。

ジャックがルーフスの肩に手を置く。

「いいんだ、あんちゃん。僕が言い過ぎた。」

もう一度、仲間になってよー。」

「あ、ありがとうー。」

ルーフスは泣く。

ジャックは笑う。

チエリーも微笑んだ。

「あんちゃん、ステーラは？」

「ああ、あいつなら近くの池で水飲んでるぜ。」

「分かった。…ちょっと僕、食糧取ってくるね。」

ジャックは家を出る。

「ふう…良かった、ルーフスさん。戻ってきて…。」

ボタン!!

「くれ……て……!？」

チェリーはルーフスに押し倒された。

「お前が好きだ。」

21: Herobrine

「お前が好きだ。」

「…!!」

チェリーの顔が真っ赤に染まる。

「え、ちよっ、ルーフスさん？えっと…この体勢は…ええ!?」

チェリーは突然の出来事に戸惑う。

ルーフスはゆっくり顔を近づける。



本気だ。

ルーフスさんが本気だ…

チェリーはかなわず目を閉じる。

チェリーが目を閉じると、ルーフスは白目になり、口を裂けて大きく笑う。

まるで悪魔のような顔つきだ。

チェリーを飲み込む気なようだ。

キィ…！

ズシャ!!

ズシャ!!

二つの剣がルーフスの背中を斬る。

背中から二本、血が垂れる。

「てめえ！俺のチェリーに何しやがる!!」

「ワオン!!」

本当のルーフスは大きく怒鳴る。

チェリーは目を開けて本物のルーフスを見た。

「ルーフスさん!」

続いてジャックが家の中に入ってきた。

「池に行ってもステーラなんていなかったよ…? ルーフスの偽者さん。」

「ゲルルルルル…」

ステーラは偽者のルーフスに怒っている。

偽のルーフスは大きく飛び上がり、チエリーから離れた。

「…あなたは偽者だったんですね。」

チエリーは少しさびしい表情で言った。

Herobrineは舌打ちをして本性を現す。

「黙って喰われていりゃ、いいものを…」

本当のルーフスは問う。

「お前は何者なんだ？」

偽のルーフスは答える。

「俺はHerobrine…形のねえ妖怪さ。」

「形の無い…妖怪？」

「この姿を見りゃ分かるように、俺は好きな人間の姿に変身する事が出来る。」

偽ルーフスの姿が歪む。

そしてジャックの姿に、

更に歪んでチェリーの姿になった。

「ぼ、僕…違う…チェリーさん…？」

チェリーの姿のHerobrineは更に続ける。

「俺はこの能力を使って、大好物の人間を食って生きてきたのさ。」

輪郭が歪んでルーフスの姿になる。

「さて、これで食べ物が増えたってことだ。」

「お前、バカじゃないの？」

ルーフスが剣を構える。

ジャックも弓を引き絞る。

ステーラが唸る。

ジャックが言葉を跳ね返す。

「お前が倒される確率も4倍に増えたってことだろう？」

「そうか…じゃあ0%ってことだな…！」

Herobrineは口を裂けて笑った。

「…」じや、おめえらの本当の力を引き出せないだろう。

外へ出ようぜ。」

「はは、親切なんだな。」

ルーフスは睨みながら笑う。

「お前らには丁度いいハンデだろう？」

ルーフスとジャック、ステーラ、そしてHerobrineは外へ出て行った。

チエリーはその場に座る。

…なんだ…偽者か…

…本当だったら良かったのに…

チェリーはハツとして、首を横に振る。

…それよりも…

チェリーの瞳が燃えている。

…女心につけこんで、食べようとするなんて…！

許しません!!!

チェリーは飾り棚からソードを手に取った。

夜も明けてゾンビ達が燃え出した。

「さあ、バトルスタートだ！」

ルーフスが言った。

Herobrilineにルーフスが剣を振るう。

Herobrilineはやすやすと避ける。

ジャックが矢を放つ。

またしてもHerobrilineはやすやすと避けた。

ステーラも何回も嘔むが…

やはり避ける。

「あんちゃん、あいつ、攻撃すら当たらないよー！」

「…まだまだ、続けていくぞー！」

「ワーン！！ワーン！！」

ルーフス達は次々に攻撃を仕掛けていくが…

Herobrineに全て避けられた。

剣を振っても全く当たらない。

矢も全て空に放たれた。

「バカが…俺はお前らに変身できるのだ。

お前らの攻撃など全てお見通しだ。」

「グルルルルル…」

ステーラは唸り声を上げる。

ルーフスは考える。

「くそ…どうすりゃ良いんだ…」

「何か方法は…」

ジャックが辞書を探しまわす。

ズシャ!!



「な…!？」

ジャックとルーフスはHerobrineを見た。

チェリーがHerobrineを剣で斬っているではないか。

「チェリー…!」「チェリーさん!？」

「女の子の恋心につけこむなんて…最低です…!」

「ばかな…俺に攻撃を当てられる奴がいるだと!？」

Herobrineは見えない速さで逃げる。

その途中でチェリーに変身する。

チェリーの背後をとる。

が。

またもや斬られた。

「何!？」

チェリーは怒った顔で言う。

「私の努力を…なめないでください!」

Herobrineはさっきとは違うチェリーの顔に、

恐怖を感じて動けなくなっていた…

「…え…?…ちょっと…まっ」

ズシャ!!…ズシャ!!

「ぐわぁああああ!!」

ズシャ!!…ズシャ!!

Herbrineが倒れる様を…

ルーフス達はただ口を開けたまま見守るしかなかった。

ルーフス達から無数の汗が流れる。

「…チェリー…怒らせないようにはしないとな。…」

「…うん……………」

「クウン……………」

「ぎぎあああああああああああ…!!!」

その夜。

「では、おやすみなさい。」

「「おやすみ。」

「ワン!!!」

チェリーは二階の上って寝室へ行く。

ふう……

チェリーはすぐにベッドに寝転がる。

今日は疲れたな。

……はあ……

トントン。

二階の窓を誰かが叩く。

「!？」

チェリーは窓を覗く。

見ても窓に映った自分しかない…

…と思ったら窓に映った自分が勝手に動いた。

チェリーに変身したHerobrineが、窓の外にいたのだ。

「うわあ！…ってあなたは！まだいたの!？」

窓を開けろ、と言ってるらしい。

「…女心を利用するような人を、私の部屋に入れるような事はしませ  
ん!」

チエリーはそっぽを向く。

それに対してHerobrineは手を合わせて懇願し続けている。

チエリーはその真剣さに気になって、剣を持ちながら窓を開ける。

「すまないな、夜分遅く。」

「…30秒ほどで帰っていただけませんか？」

「ちょっと、早すぎるだろう！お譲ちゃん！」

「自分にお譲ちゃんなんて言われたくありません！」

Herobrineは咳払いをして話を本題に変える。

「俺はあの時、お前を襲っただろう？」

「…それがどうしたのですか？」

「俺は本当は、家に入ってからすぐお前を食べようと思ったんだ。」

チエリーは嫌そうな目でHerobrineを見る。

「…はあ…さっきのカウント、15秒ほど縮めてもいいでしょうか？」

「ちょっと！本題はここらだっつーの！」

「つまり、あれは俺の食欲が敵わないほどの愛の気持ちってことだよ  
」！

「<…?」

チェリーは真っ赤になる。

Herobrineも真っ赤になった。

「…今見てる通り、俺の感情はその変身元の本人とリンクする。

…あいつはお前のこと、本当に好きなよっただぜ。」

チェリーは顔が真っ赤になったままだ。

「…それに、お前を助けに来た時、あいつはなんて言ったか思い出して  
みる。」

(俺のチェリーに何しやがる!!)

カア…！

チエリーの顔が最大に真っ赤になる。

「…妖怪が言うのもなんだけどよ…俺はお前らを応援してるぜ。

…約束の時間は過ぎてねえか？」

チエリーは言葉が理解できないままうなずく。

「じゃあな…」

Herobrineは姿を消した。

10分ぐらい経って。

チエリーはやっと冷静になり、笑顔になった。

Herobrineさん…

あなたが教えてくれなければ、私は前に踏み出せませんでした。

…ありがとうございます！



翌日。

チェリーはかまどの前で、焼き魚を焼いていた。

ジャックは武器の整備をしている。

焼き魚を焼き終わってから、チェリーはジャックに問う。

「あれ？ジャックくん、ルーフスさんは？」

「ああ、まだ寝てるよ。」

「起こしにいらしてきますね。」

チェリーは二階へ上がっていった。

ギィ…

「ルーフスさん？朝ですよ！」

起きない。

チェリーは左右を確認する。

Chu…!

チェリーは、ルーフスの頬に一つ、キスをした。

…やっぱり起きない。

「…ふふ」

チェリーは笑顔になる。

「ルーフスさん、お先に食べていますね！」

ボタン…

⋮

やべえ  
⋮

俺、今、チエリーにキスされたのか!?

ルーフスは寢床で顔を赤くしながら、しばらく横になっていた。

昼。

ルーフス達はセコイアの森を探索することにした。

「よしーお前ら、行くぞー！」

「おうー」「ワッン!!」

「はいー…きゅあー!!」

バタン！

チェリーはロングスカートにつまみずく。

ルーフスは笑顔で手を差し伸べた。

「ほら、行くぜー」

チェリーは手を取る。

「…はい!!」

「あんちゃん！チェリーさん！」

「ワン！ワン！」

ジャックが遠くで手を振っている。

ステーラも元気そうに跳ねまわっている。

「おお！今行く！」

ルーフスとチェリーはジャックとステーラの元へと駆け出した。

深緑の葉に白い陽光が降り注ぐセコイアの森の中。

楽しそうに、3人と1匹の話し声が響いていた。

## 22：世界を結ぶ道

セコイアの森を歩く3人と1匹。

小鳥が木から今、飛び立った。

狼は鳥の飛び立った木に向かって吠え続けている。

「…広いですね、この森。」

「この景色も退屈してきたな…」

ルーフスは肩を落とす。

ステーラが後ろからついてきた。

「次のバイオームはまだ見えないね…」

3人と1匹は休みついでに立ち止まる。

トン…

トン…

「……………」

狼は無言でどこかを見ている。

「じつじつ時に馬があると便利だよなー…」



「そうですね。馬を見つければ一日でもっと進めるはずですし…」

「馬を早くみつけない…」

トン…

トン…

何かを置き続ける音がする。

「…ステーラ、何を見ているんだ？」

「…?…」

「…!？」

「…」

3人も見続け始めた。

目の前で線路を引き続けている女の子だ。

めがねに垂れ目、車掌帽に登山服。

髪はぼさぼさのロング。

無理やり詰め込まれたようなバッグをしょっている。

「こちらには気づいていないようだ。」

「うーん…方角はこれであっている…わね。」

「あ、あの〜」

「きゃー!」

女の子はびっくりして倒れる。

ルーフスは初めに気になった質問を投げかける。

「えっと…何をしていたのですか？」

「あ…んと…失礼しました…えと…」

女の子は立ち直し、深呼吸してから答える。

「私は世界中を結ぶ列車を通すために、線路を引いていたのです。」

「世界を結ぶう!?!」

「「列車!?!」

「「ワン!」

「いきなり驚いてごめんなさい…すごく壮大な計画をお持ちなんです  
ね…」

「いえいえ、お褒めいただきありがとうございます!」

女の子は笑う。

一同は自己紹介を始める。

「俺はルーフス。いろんな世界を見るために旅してんだ。」

「いろんなことを学ぶためお供している、ジャックです！」

「つ、強さを求めている、チェリーと申します…何か恥ずかしいですね

…」

「ワン！ワン！」

「皆さんもとても大きな夢をお持ちで！」

…私はリナ。自称、世界一の鉄道マニアと自負しています…」

リナは自信ありげに話す。

「今の所、どこを線路で繋いでいるんだ？」

「一年前から始めたのですが、結構繋がりましたよ〜!!」

リナは何枚かの地図を見せる。

カラフルな印が地図上に描かれている。

「それぞれの駅に目印の旗を立てて、記録しています。」

まず私の故郷から、アルコバリノ・ブリッジを通って、サクラノ国、シヨウグン雪原、エンヘル村、その隣のジャングル、森と行って、海を越えて

グレート・スライヴシティ、メディウス・ライブラリーの森、クレイ・ソルジャーズの村、

そして現在に至るわけです。」

「メディウス・ライブラリー……バンダさんにもあったのかあ!？」

「図書館の館長さんですね。会いましたよ。」

「私の村に……グレート・スライヴシティまで!？」

「俺たちの行ったところ、ほとんど行っているじゃないか!？」

「え……!? ってことは、ヴァイオレット市長やスチルさんにも……!？」

「あいつ……市長になったのか!? すごいな!!」

「スチルさんは元気だったのか?」

「ええ! 元気でしたよ!」

「お前とは話が合いそうだ!」

「私もです!……もう日が暮れてしまいますね。」

「私の小屋でお話しませんか?」

「いいなあ……」

「よろしくお願いしますー!」

チェリーは笑顔で言った。

「ワン!ワン!」

ステーラは嬉しそうに尻尾を振った。

リナとチェリーはかまどの前で料理をしている。

リナは涙を垂らしながら焼き魚を持っていた。

「うっ…」げちゃったよう…」

「…あなたって、一年間一人だったんでしょっ? そんなに下手で今まで何を食べてきたのよ…」

「パンとかクッキーだもん! クラフトすれば食べられるもん! うええええん!!」

リナは号泣する。

「分かった分かった。私が今日はみっちりあなたに料理を伝授してあげる…!」

「本当に! ありがとう! チェリー!!」

「はは、チェリーは誰とでも、すぐ仲良くなれるよな！」

「うらやましいよね…」

狼が机の上のリナの失敗作を、おいしそうに頬張った。

10回目のかまどを開けた。

「やっと成功だあ…！」

「うん！完璧!!」

チェリーが指でOKサインを出す。

リナが全員分の焼き魚を机に運ぶ。

2人と一匹は既に入っていた…

「もう月が真上になっちゃっせ…」

「やっと食べられるね…」

「クウン…」

「う、うめなやつ監視中…」

「あはは…」

チェリーは笑いながら汗を流した。

「……いただきます！」「」

「ワオン！」

それぞれが食べ始める。

ルーフスがリナに問う。

「お前はさ、なんで世界中を結ぶ列車を作り始めたんだ？」

車掌帽をはずした女の子は囁むのを止めて答える。

「私には一人の弟がいるの。」

弟は生まれた時から、足が動かなくて…

でもそんな悲しいことを考えないで、弟は笑顔で『世界を旅してみたい』って言うの。

歩きでは到底無理でしょう？

…でも列車を使えば…世界中どこへでもいける列車があれば！

世界中の人たち全てがどこへでも、行ける。

もちろん弟も…！

素晴らしいことだとは思わない？」

「弟さんのためにそこまでがんばるなんて…流石だよりナさん！」

「とても素敵！…私がおばあさんになっても、どこへでも行けるのね」

「世界中の人たち全て…か…」

できるさ、お前なら。弟と列車を、ここまで愛してるならな！」

「ありがとうございます!!」

リナは笑顔でお礼を言った。

その後もルーフス達のおしゃべりは続いた。

楽しい夜はすぐに過ぎていった…

その後、ルーフス達は出発を延ばしてリナの線路の整備を手伝っていた。

リナが指示をし、

ルーフスは線路の両脇に石を詰める。

ジャックは灯台を立てていく。

チェリーは柵を立てていく。

ステーラはツールを手渡していた。



4人と1匹は汗を流しながら、線路を完成させていった。

サクツ…

足元に砂の感触が伝わる。

ルーフスが後ろを向くと、そこには砂漠があった。

緑のサボテンがところどころに見える。

「バイオームが終わった…!!」

「皆さん！ありがとうございます。私はここから砂漠を横断していきます。」

「ああ、そうか。楽しかったぜ…！水には気をつけろよ。」

「「ちら」そありがとうー！リナさん！」

「もうお別れか…」

「また会えるわよ！チェリー！」

「…うん、ありがとね、リナ！」

砂漠の彼方で、リナが手を振っている。

…ありがとう！…

ルーフス達も手を振る。

…チェリー！…

「…！」

…また、料理教えてね！…

チェリーは涙が溢れてきた。

「…うん！もちろんよー！！」

「めずらしいな、チェリー。別れは何度もしてきたのに…」

「…何故か、悲しくなってしまうって…」

「大丈夫だよ！別れは誰でも悲しいものだよ！チェリーさん。  
現に僕も、少し悲しいもん…」

「そ、そうよね…」

…私、あんなことがあったから感傷的になっているのかな…

…だめ、チェリー。別れなんてこれからいくらでもあるのだから!!

チェリーは笑顔で言う。

「私達も行きましょう！ルーフスさん！ジャック君！ステラ！」

「おう！そうだな！」「がってん！」「ワオン!!」

ルーフス達は、一人で『世界を結ぶ道』を作る女の子を後に、

小屋へと戻って行った。



3人は場所の通り凍えるような目で目の前の男を見た。

目の前には厚く服を着た、サングラスの黒人男性。

なんともミスマッチだ。

男は冷たい視線も気にせず挨拶する。

「Meはミラーボ。南国の管理人Sa!!」

ルーフスは言っている意味も分からず答える。

「えっと、俺はルーフス、ジャック、チェリー、狼のステラだ。」

「…よろしく。」

「…お願いします。」

「……………」

チェリーは呆れるように言う。

「えっと…もっと服を着たほうがよろしいのでは？」

「そうだよ。あんた。寒さで頭がどうかしちゃったのか？」

「温かい飲み物でも飲んだら？」

「Ha、Ha、Ha!! You達、言葉がきついねえ。」

「これを見てくれYo!」

男の後ろには…温泉だ!!

「あ、ありがてえ!!」

「え…入っていいんですか!？」

「ラッキー!!」

「ワン!!」

サングラスの男はキレイのいいダンスを踊りながら話す。

「OK、OK…」のTropical Jacuzziに入れば、

一瞬のうちにYou達は南国に飛ばされるのSa…」

「H a H a H a…全く、Youは冗談きついねえ！」

ルーフスはすっかり口調が映っている。

「What? MeはJokeは言っていないYo！」

ルーフスは服を着たままジャグジーに飛び込む。

ジャボン！！

「おお!!温けえ!!」

「僕も!」「ワン!!」

ドボン!! ジャボン!

チェリーは迷いながら、寒さに負けて飛び込んだ。

ドボン…

「あゝ温かいです」

「泡が気持ちいい」

「いい湯だ」



「わお〜ん」

「おっつと、もっすぐだYO!!」

ルーフス達はジャグジーの気持ちよさに入る入るになっている。

「なにがだYO〜…」

「く〜…」

「ふう〜…」

サアアア…

日差しが強い。

心地よい風が吹いている。

……

「日差しいい!？」

「そよ風え!？」

ルーフスとジャックが目覚める。

そこには砂浜にやしの木がいくつも生えている光景。

「むにゃむにゃ…ピナコラーダおいしいよお」

チェリーは南国の夢を見ているらしい。

「おい、チェリー、おい！」

「むにゃ…」  
「!!!!??」

「あれ!?まだ私、夢見てる!？」

「夢じゃねえよ、現実だよ!これは！」

「Boyの言うとおりだZe、Girl!!」

ジャグジーの底から、アロハスタイルに衣装をチェンジした

ミラーボが出てきた。

「ここはMeが発見した南国の世界なのSa!」

「元の世界には戻れるんですよね？」

ジャックが冷静な質問を投げかける。

「もちろんSa!あのColdな雪も忘れてこの一瞬を心ゆくまで

楽しんでいってくれYo!!」

「「「Yeah!!」」」

「ウォーン!!」

3人と1匹はノリノリになる。

「まずはこれを飲むといいYO!!」

「ピナコラーダですね!」

「ピナコラーダ? 寝言でも聞いたけどなんだ?」

「え!? 寝言言っていました!」

チェリーは咳払いをして答える。

「ピナコラーダとは、パイナップルとココナッツミルクを加えた、

カクテルですよ!」

「へえそうなのかー!」

「さすがチェリーさんだなあ!!」

3人は竹のマグカップを受け取る。

ゴクゴクゴク…

ほわぁ〜…

「くぅ〜!!うめえ!!」

「この味…この味ですぅ〜!!」

「甘くて美味しいなぁ」

「Ha Ha Ha Ha!!そのVery Goodな気分で、もっと楽しんで  
いっしょくねYo!!」

チェリーは水着に着替え、ビーチチェアでのんびり日光浴をしてい  
た。

サングラスから、海で遊ぶルーフス達を見ていた。

「本当に、いい気分…」

ルーフス達も短パン一丁の水着姿だ。

ミラーボから借りた水鉄砲で撃ち合っている。

「それ!!」

「うわ!!」

ジャックの腰に水が当たる。

「ははは!また俺の勝ちだな!……」

ビーチの方を見ると、ビキニ姿のチェリーが椅子に座っている。

ルーフスがボーっとする。

顔が赤くなる。

ビシャアー!!

「!!」

ルーフスは頭から浅い海に倒れる。

バシャーン!!

「いっぽーん!!」

ジャックがガッツポーズを取る。

ルーフスは笑って仕返しをする。

「やったな!!」

「キキ!!」

「クウン?」

ステーラに一匹の猿が話しかける。

「キィ!キィ、キィ!!」

おどけた踊りで挑発する。

カチン！

「ウゝバウワウ!!」

「キィ？キキキィ!!」

ボコスカボコスカ。

まさしく犬猿の仲だ。

3人と1匹は夕日を眺める。

「…もう夕方だね、あんちゃん、チェリーさん、ステーラ。」

「…もう終わっちゃったか…」

「ツンドラに戻るのが心惜しいです…」

「クウン…」

ミラーボが楽しげに声をかける。

「Hey、You!!何を言っているんだい？夜がまだあるじゃねえか



「Yo!!」

夕飯は砂浜でバーベキューだ。

「…おい、ミラーボ、明かりつけとかなきゃやべえんじゃ…」

「Never Mind! ルーフス! スウ…」

ミラーボが息を大きく吸う。

「カロロロロロロ!!」

「!?!」「どうしたの!?!」

「何しているのですか?」

「クウン?」

「カロン…」「カロン…」

見ると腰に美濃をつけたスケルトンが「つじゃつじゃ」出てきた。

「ガLLLLLLLLL…」

「やべ! スケルトンだ!」

「NON、NON」

ミラーボはサウンドブロックを様々なブロックの上に置く。

「Let's Dance!」

ドシタドシタドシタドシタドシタドシタ

スケルトンは踊りだす。

「おおーいいなー」

「僕も踊るぞー!!」

「楽しい夜になりそうですね!!」

「ワンワン!!」

ドオオン…

今、南国の世界で火山が噴火した。

まるでにぎやかな客人をさらにもてなすかのよつに。

それはまさに一瞬の思い出。

しかしそれは、ルーフス達の心の中に、深く、確実に刻まれる思い出であった

南国の朝。

セミの鳴く中、ルーフスはジャグジーの前にいた。

「ありがとう、ミラーボ。本当に楽しい1日だったよ。」

「お礼を言いたいのはこっちもS a !! 楽しく遊んでくれて、V e r y  
T h a n k s だY o !!

もし良かったら、M e の生まれた街にも行ってみてくれY o !!

「キキキッ!!」

ミラーボの頭の上から笑った猿が出てくる。

カチン!

ステーラは猿を追っかけまわしはじめる。

「分かった。確か…『ディスコ・マウンテン』とかいう場所だったな！」

「「ありがとうございました!!」「」

猿がいきなり止まる。

ステーラは首を傾げる。

猿はステーラを抱く。

背中に回した手をポンポン、と叩く。

そして腕をほどいて笑った。

ステーラも笑って返す。

「…ワン!!」

「それじゃ、See You Next Time!! Yooooo!!」

「おめでとうなら!!」「また会っ日まで!!」

「またピナコラーダ、作ってくれよなあ！」

「…OKO、…OKO」

「ワン!!」

ルーフス達はジャグジーから消えていった。

「Thanks, Very Good Time」

ミラーボは小さくお礼を言った。

番外編 4：終

……

……



## 23：ジャックの弟（前編）

セコイアの森を出発してから。

寒い寒いツンドラ地帯を超えて、

ルーフス達は草原にたどり着いた。

寒いツンドラを超えても、ルーフス達は走り続ける。

最近では珍しい雨が降っているのだ。

3人と1匹の雨水を蹴る音が聞こえる。

「くそ…なんてこった！」

「災難ですね…」

「どこかで雨宿りできないかな？」

「……………」

ステーラはテンションがただ下がりのおつだ。

「……」

遠くで人型の何かが倒れている。

ルーフス達は足を速める。

そこに倒れていたのは子供のゾンビだった。

とても小さい。

ルーフス達、全員の膝下までくらいの背丈だろう。

「ゾンビか。」

「人間にやられたのかな……」

「とりあえず、まずは手当てです。」

「えっと……あんちゃん達、離れてて。」

ゾンビには治癒のポーションじゃなくて、負傷のポーションが効くんだ。」

チェリーはステアラを持ち上げて、子供ゾンビから離れる。

ルーフスも離れる。



ジャックは少し遠い所から子供ゾンビに向かってポーションを投げた。

パリン!!

……

少し経ってから。

子供ゾンビがゆっくりと起きた。

「良かった…!」

ジャックとルーフス、チェリーが安堵の表情を見せる。

「じゃあ、俺らはもっと東へ向かうからよ。」

「元気でね…!」

チェリーが笑顔で話しかける。

「よし…行いっしょ」

ザッ ザッ ザッ ザッ …

TTTTTTTTTTTTTTTT。

ルーフス達が後ろを向く。

ゾンビとの位置関係が全く変わっていない。

気にせず走り出す。

ザッ ザッ ザッ ザッ …

TTTTTTTTTTTTTTTT。

…ちっぴり変わらない。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!

トトトトトトトトトトトトトトトトト。

ルーフスは顔を引きつらせる。

「……あのぉ。」

子供ゾンビはジャックを見ると、ジャックの右脚に抱きついた。

「きゃー……！！かわいい!!」

かわいいもの好きのチェリーは眼がハート型になっている。

ジャックは戸惑っているような様子だった。

「えっと…えっ…どっすねばいいの…。」

ルーフスはため息をついて、子供ゾンビに話しかけた。

「しょうがねえ、お前も、一緒に来るか?」

子供ゾンビは小さく頷く。

「…おー丁度いい、あの村で…あゝ!!」

「そうだ。…この子が村に入ったら、村人の皆さんがパニックになっちゃっよね。」

「ここら辺に、小さい小屋でも建てましょうか！」

「…そうだな…」

ルーフス達は小屋を作り始める。

子供ゾンビはその光景をじっと見ていた。

ジャックは子供ゾンビを確認すると、

「君も、やってみる？」

子供ゾンビは嬉しそうにコクリと頷いた。

「おー手伝ってくれるのか。はい、木材だ。

ジャックと一緒にやってくれ。重いから気をつけるよー！」

子供ゾンビは体からはみ出すほどの木材を一生懸命持ち上げている。

ジャックが慌てて端を持つ。

「せーのー！」

ポン！

しばらく経って。

雨はまだ止んでいない。

「ふう…完成だ。お前がいてくれたから、いつもより早く終わったぜ。

ありがとな！」

子供ゾンビは照れたような仕草を見せる。

「もう…かわいい!!」

チェリーが小さな体を抱きしめて頼ずりした。

かわいいものを見続けると、我を忘れるのがチェリーだ。

ジャックとルーフスはチェリーを見て笑っていた。

小屋の中。

「ワン…」

「やっとテンションが戻ったか！ステラ！」

「ワン！ワン！」

たまっていた何かを発散させているのか、部屋を走り回る。

子供ゾンビが小さなステーキを飲み込む。

「おいしい？」

チェリーが聞く。

子供ゾンビはにぱっと、幸せそうに笑った。

「そう！良かった！」

ジャックは問う。

「君、お母さん、お父さんはどうしたの？」

子供ゾンビは真顔に戻って、首を横に振る。

「…もう、いないのね。」

ゾンビがコクッと頷く。

「決めた！」

ジャックが席を立つ。

「僕が、君のお兄さんになってあげよう。」

子供ゾンビは言葉をしっかりと理解した後、

笑顔に戻って、ジャックに飛びついた。

「ははは。」

「……………」

チエリーはそのほほえましい二人の姿を見て、ついほころんでしまった。

ジャックは子供ゾンビにゆるゆるな金のヘルメットをかぶせた。

「ありゃ、サイズが合わないなあ……………」

ジャックは説明する。

「いいかい、外に出る時は、絶対に、このヘルメットを外しちゃいけないよ。」

子供ゾンビは頷く。

「あとは名前だな……………うーん……………」

ジャックは少し考える。

ひらめいた。

「ヘルメットを被っているから、メットでいいかな？」

子供ゾンビは嬉しそうに頷いた。

ベッドの上で話している2人を、ルーフスとチェリーは見ていた。

「ジャック君、嬉しそうですね！」

「ああ……」

ルーフスは少し複雑な表情だ。

「？……ルーフスさん？」

「ジャックは弟としてみてるけど、あいつは、モンスターなんだよな。」

「……………」

「本当は敵として対峙しなきゃいけないんだ。……」

「だから、あいつがこの旅で大きくなったら、自分の存在を考えるよ  
うになるだろう。」

「……敵対している以上、別れは必ず来る、と云うことですね。」

（ジャック。……もし別れが来た時、お前は悲しみに耐えられるか……？）



翌朝。

雨はすっかり晴れ上がっている。

ジャックとメット、ルーフス、ステーラが外へ飛び出す。

「鬼ごっこだ!!」

「じゃんけん、ぽん!」

「お、ジャックが鬼だな!はてさて何時間かかるか…」

「あんちゃん、僕の速さをなめないで欲しいな。1分以内に終わらせてちゃんよ…」

「ワン!ワン!」

家の前でチェリーが見守っている。

「逃げるー!!」

2人と1匹は散らばる。

ルーフスこける。

「あ、草……！」

どしゃー！

タッチ！

「……あんちゃんあんなに挑発しておいて……！」

「う、う、う……せえ!!」

メットが逃げ回っている。

「よし……狙っぞー！」

ルーフスはダッシュする。

しかしメットはとても早い。

ルーフスは何分も追いかけて、息が上がる。

「ぜえ……ぜえ……あいつあんな大きい金のヘルメット被って

よくあそこまで走れるよなあ……！」

ササササササササ…

見ると狼が骨を埋めている。

タッチ！

「ステーラ〜？なんで鬼ごっこ中に骨を埋めているのかなあ〜？」

ステーラは汗だくだくになる。

ステーラがメットを追いかける。

あと10cm…！

メットが足を速める。

距離が長くなる。

互角の速さだ。

「あ、あいつ…ステーラと互角の速さなのか…!?」

「すじいなあ〜メットは…」

タッチ！

メットがついにつかまった。

「ワン！ワン！」

ステーラとメットは笑い合う。

ビチャ！

メットのヘルメットに何かが当たる。

卵だ。

遠くに村人の子供が見える。

「ばけものー!」

「むらにちかづくなー!」

「あっちいけー!」

ジャックは怒る。

「こらあ!クソガキー!!」

その時、村人の子供達に影がかかった。

子供達が後ろを見ると…

「あらら〜?ボクちゃん達、お姉さんに遊んでもらいたいのかなあ〜」  
「?」

チェリーがいつもと違う、すごい濃いオーラを放っている。

村人の子供達はたまらず、後ずさりする。

「そおれ」

「うわぁー!」「ぎゃー!」

「おわー!」

チエリーが3人一気に抱きかかえる。

その後の映像はお察しください。

「…チエリーってあんなに変態気質だったっけ?」

「…どうみても演技じゃないよね…」

「この頃、チエリーさんのキャラが全く分からなくなってきたよ…」

「…ワン…」

「大丈夫かい?メット。」

ジャックが卵を払いのけて言う。

子供ゾンビはただいつものように笑って、ジャックに飛びついた。

「…よしよし、僕が守ってやるからな。」

ジャックも優しくメットを包み込んだ。

まるで、本当の兄弟のようじ。

「コルク？メット？バルサ？」

村人の母親が呼んでいる。

そこに3人の子供達が来た。

「どこ行ってたんだい！お手伝いをサボって！」

「…？…なにか嬉しいことでもあったのかい？」

3人は何も考えられないような、幸せそうな顔をしている。

「はあ……」「姉ちゃんサイコー。」「ふへへ……」

「き……気持ち悪い子達だねえ……全く……」

「ゴチン!!」

「さあ、約束してた洗濯を終わらせるよ!」

「痛いって母ちゃん!」「自分で歩くから!」

「ふひひ……」

一人、目が覚めてないまま母親は3人を引っ張って行った。

それから、何日か、この広い草原でルーフス達は泊まっていた。

ジャックはメットと一緒に、釣りをしたり、木を伐採してきたり。

他にも言い切れないくらい、兄として体験させてやった。

そんなある日の夜。

メットはむくっとおきだし、外へと行った。



ゾンビの体質が、月夜の風がとても心地よいのだ。

シュー…

クリーパーの倒された音がする。

メットは慌てて後ろを見る。

「…探したぞ。」

真っ黒な容姿にぼさぼさの髪。

見るからに怪しい男だ。

目にかかるほど伸ばした前髪から鋭い目が覗いていた。

メットは急いで中に入ろうとする。

が、男に前をふさがられ、軽々と持ち上げられる。

メットはじたばたと暴れる。

「…なんで逃げ出した。」

メットは首を横に振る。

「…まあ、お前には答えられないか。」

メットは首を大きく横に振る。

「帰りたくない」と行っているのだろっ。

「…友達でもできたのか。」

だが、私がお前に飲み食いさせてやっているのだぞ？

本当なら恩を返してもらってもいいはずだ。」

メットは男の肩に噛み付く。

ガッ!!

男はメットの顔を思いつきりぶん殴った。

金のヘルメットが草の上に落ちる。

メットは気を失ったようだ。

「…困るな。逃げ出されては…」

お前には俺の野望を…叶えてくれなきゃあな。」

男はメットを乱暴に担ぎ上げながら、夜の草原を歩いていった。

翌朝。

ルーフス達は小屋を飛び出した。

メットがない。

夜の間には抜け出しているのだ。

「メットー!!」

「メットくーん!」

「メットー!!」

ステーラは鼻で匂いを嗅ぐ。

「ワン!!」

「ステーラ、方角が分かったか?」

ステーラは南の森へ走り出す。

ルーフス達はステーラについていった。

「メットー!!」

「メットくーん!!」

「返事してくれー!!」

ステーラの足が止まる。

「どうした？ステータ。」

ステータはしょんぼりとしている。

「朝方の雨で掻き消されちゃったか…！」

「メット…どこ行っちゃったんだよ…！」

「ジャックくん…！」

ジャックは拳を握り締める。

「…明日、ここを出発しよう。」

「…分かりました。」

「…うん。」

「…クウン…！」

ルーフスは思う。

ここにいても、ただジャックの悲しみが増えるだけだ。

出来るだけ早く、この土地を後にしたい…

ジャックはチェストの中に入っていたメット用の釣竿を手取る。

…メット…君は、僕と自分が、違う世界に生きている事を知って、

黙って行ってしまったのかい？…

そんなこと…僕と君は、もう兄弟じゃないか…

森の中に、石レンガと木で作られた、一つの小屋がある。

男が鉄の扉の横にあるコンピュータにパスワードを入力する。

ガチャッ

男は中に入る。

ガチャッ

自動的にドアが閉まった。

メットがベッドに横になっている。

「…ずっとそうしているが。腹でも痛いのか？」

メットは頷きもしないし、横に振るうともしない。

「…昼食だ。お前の大好きなキノコシチューだぞ。」

依然として何も返事をしない。

男はため息をついて、

「そこまでの友達ができたとはなあ…行って来い。」

メットは嬉しそうに起き上がった。

「まあ夜だ。まだ朝はお前には危険すぎる。

あと、私の条件を飲んでくれたら、だ。」

メットはジャック達への会いたさから、すぐに頷いた。

男は狐のように口をあけて笑った。

男の手の中には、一つの×印の描かれたポーションがあった…

その日の夜。

「じらじら、家の中で暴れるんじゃない。」

メットは嬉しさのあまり、部屋の中を走り回っていた。

「俺の条件ってのはな…この薬をかぶってもらおうか。」

男は瓶をかざす。

メットは怪しげな薬に背筋がゾクツとし、首を横に振った。

「友達と会えなくて良いのか？」

メットは気持ちを少しの間落ち着かせた。

そして、うん、と頷いた…



…パリン…

月がもうすぐ真上に昇る頃。

…ドーン…

…ドーン…

…ドーン…

ベッドが小刻みに横に揺れる。

チエリーは物音と地響きに眼が覚める。

…何？この音…？

チエリーはベッドから出る。

保険としてソードを持って。

そして、ルーフス達を起こさないように静かに扉を開け、閉める。

恐る恐る一歩ずつ出る。

「キャオン!!」

「キャツ!?!」

見れば外で寝ていたステーラの尻尾を踏んでいた。

ステーラがもがいて走り回っている。

「いっ、いっめんなさい…ステーラ。」

ドーン…!!

ステーラが地響きと音で止まる。

チェリーはソードを構えた。

南の森からだ…!!

その時。

木を高く飛び越えて、一体の巨大なゾンビが現われた。

ドオオオオオン!!

先ほどとは比べ物にならない地響きだ。

「!!…何て大きいの…!？」

「ワン!!ワン!!」

ステーラが匂いを嗅ぎながらしきりに巨大ゾンビに吠える。

「まさか…メットくんの匂いをするの!？」

ステーラはそつだと言わんばかりに吠え続ける。

「メットくん…まさか…」の怪物に…!!」

「ウガアアアアア!!」

巨大なゾンビは勢いをつけて地面を叩きつけた。

ステーラが素早くチェリーを突き飛ばす。

ポオオオオオオン…

ステーラは衝撃波によって後方に吹き飛ばされた。

「ステーラ!!」

ステーラは致命傷ではなかったみたいだ。

すぐに駆けて戻ってきた。

「…今までの敵とは大違いだわ…」

「気を引き締めなきゃ……！」

月が今、真上に昇り

巨大なゾンビと娘、狼を照らす。

## 24：ジャックの弟（後編）

月が明るく草原を照らす夜。

「グオオオオオ!!」

バアアン!!

巨大なゾンビが地面を叩きつける。

衝撃波がチェリーとステーラに襲いかかる。

チェリーとステーラは左右に分かれる。

地面の揺れが治まらぬまま、巨大なゾンビはチェリーに向かって地面を叩きつける。

バアアアン!!

「チェリーは飛び上がった。」

そしてそのまま、ゾンビに向かって剣を振り下ろす。

ズシヤッ！

ゾンビがひるむ。

ゾンビは大きく息を吸って、口を大きく開けた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

チェリーとステーラはたまらず耳をおさえる。

「なんて大きな声…!!」



チェリーの右前の地面がうごめきはじめる。

ステーラの左から…いや、巨大ゾンビの目の前にもだ。

やがて地中からゾンビがのっそりと姿を現した。

「死者を…蘇らせたの!？」

「ガールルル…」

チェリーとステーラはゾンビを素早く倒す。

そして衝撃波。

衝撃波はステーラに命中する。

「クウン!!」

「ステーラ!」

ステーラは立ち上がるうとする…

が、体が崩れた。

「どうしたの?ステーラ!」

「クウン…」

尻尾が垂れ下がっている。

体力が消耗しているのだ。

巨大なゾンビはチェリーに向かって衝撃波を放った。

「!!!」

チェリーとステーラは衝撃波に飲み込まれた。

大丈夫…まだ私は…戦え…

…!?

立ち上がれない。

空腹状態だ。

なんで!?!…ついさっきまで…全然大丈夫だったじゃない!

巨大ゾンビがチェリーに近づいた。

ドゴン!!

チェリーの体が宙へ浮かぶ。

巨大ゾンビがチェリーを放り投げたのだ。

巨大ゾンビが後から続く。

ポオン…!!

チェリーの体は超速球で地面へと向かう。

ポオオオオオン!!

チエリーは目を開けなかった。

巨大ゾンビは何かに気がついた素振りをして、

震えながら南の森へ逃げて行った。

「…ん…なんだ今の音は…」

「すごい音だったよね…」

ジャックとルーフスがやっと目を覚ます。

扉を開ける。

「!!」

「チェリー!」「ステラ!!」

・  
・  
・

・  
・

・

「ん」

「ワン!!」

ベッドの横でステーラが嬉しそうに尻尾を振っていた。

「ステーラ…無事だったのね…」

「お、チェリー、起きたか。…良かった…」

「…ルーフス…さん。」

チェリーは起き上がるようにする。

「…うぐっ…」

ルーフスはゆっくりチェリーを寝かした。

「おっと、無理するな。」

…昨夜は何があったんだ？」

チェリーはベッドに寝たまま昨夜のことを話す。

「巨大なゾンビ？」

「そうです。今までに見たことのない強さでした。」

「そいつがメットを食ったのか…」

「…いや…違ひよ。」

ジャックが寂しげに辞書を見ている。

「…ジャック。どうした？」

「ちつきバンダさんの辞書で調べてたんだけど…」

辞書の一面が差し出される。

年、モンスターを凶暴化させる薬が一人の科  
学者により開発された。その薬はあまりにも強力  
であり、製造方法は封印されてきた。

しかし都市の裏ではこの製造方法を解析した者達  
が高額でその情報を買っている。その後、世界の  
各地でいたずらに凶暴化させたモンスターに衝撃  
波、爆発、氷や石などを浴びせられ、重傷を負う  
事例が発生。世界中の都市でその薬を所持する事  
を禁止している。

「……………」



「衝撃波…私、衝撃波に襲われました！」

ジャックは頷いた。

そしてジャックはステーラに問う。

「ステーラ、君は確かに、巨大ゾンビからメットの匂いがしたんだよね？」

「ワン！」

ステーラが頷くように吠える。

「…やっぱりだ。」

あの巨大ゾンビが…メットなんだよ。」

チェリーは顔を覆い、驚愕する。

ルーフスも驚いた。

ジャックは悔しそうに叫ぶ。

「…ジャックは…誰かにその薬を浴びせられたんだよ！」

ただのいたずらか何かのために！」

「ジャック…。」

「…チェリーさん。…巨大ゾンビは…メットは…」

その後どこに行つたか分かる？」

「…えっと…確か…南の森へ…！」

ジャックくん…まさか…」

「僕はメットのお兄さんなんだ。

…あんちゃん、ここは僕一人でやらせてくれないか？」

「……………分かった。」

ルーフスは考えてから頷いた。

「ただし。」

「俺もつれてけ。」

「あんちゃん…さっきの言葉聞いてたの？」

ジャックは苦笑いしながら質問する。

ルーフスはチェストに近づき、チェストを開いた。

「聞いてたさ。俺はお前についていく。ただそれだけだ。」

ルーフスはチェストにソードを放り込んだ。

そしてチェストを閉める。

「お前はメットの兄さんだ…」

「…ってことは、俺とチェリー、ステーラも、メットの兄さん、姉さん  
だろ？」

「ワン！」

「…分かったよ。あんちゃんには、敵わないや。」

「ジャックくん。」

チェリーがジャックを手招きする。

ジャックはベッドの横に近づいた。

ぎゅっ…

チェリーが優しく抱きしめる。

「大丈夫。もしメットくんを殺してしまったら、

メットくんはあなたを絶対恨まないわ。

あなたは…メットくんのお兄さんだもの。

…だから。メットくんには正しいことをしてあげてね。」

「…ありがとう。チェリーさん。」

ジャックはチェリーの温もりを感じながら応えた。

天気は曇り。

ジャックとルーフス、ステーラは南の森を無言で歩いていた。

ジャックの手には火打石と打ち金があった。

木は前に進むに従い後ろへ流れていく。

ジャック達が今見ている世界はスローモーションのように流れていく。

風に揺らぐ木々、草、花。

池に浮かぶ波紋。

いつもとは違う、寂しげな新鮮さがあった。

トオンン…！

トオンン…

トオンン…

トオンン…

トオンン…

ドオン!!

目の前には巨大ゾンビ…メットが。

「…メット。」

ルーフスは耳で聞いた時よりすごい衝撃を受けた。

薬が…ここまで変えてしまうものだろうか。

ステーラは何も吠えなかった。

ジャックが話し始める。

「メット…君はチェリーさんとステーラを傷つけたみたいじゃないか。」

…チェリーさんは僕のお姉さんだぞ。…つまり君のお姉さんだ。」

「ガア！」

地面を殴る。

ジャックはよけなかった。

服に切れ筋が入る。

体の力がガクツと抜ける。

「…君は間違っただことをしたんだ。…おしおきだ。」

「ガアアア！」

巨大ゾンビが腕を振り上げる。



ボオ…！

ジャックは火打石でメットの下の地面を燃やした。

「ウガアアアアアア!!ガアアア!!」

巨大ゾンビはもたえる。

ゾンビが燃える炎の中に映像が浮かび始めた。

一人のゾンビの子供が倒れている。

一人のゾンビの子供がおいしそうに料理を食べている。

一人のゾンビの子供が楽しそうに走っている。

一人のゾンビの子供が…

…一人の…ゾンビの子供が…

…僕の…弟が。

「わああああ!!」

ジャックは手に持っていたバケツに近くの池で水を汲む。

そしてゾンビに浴びせた。

炎は消えた。

だがゾンビの返事はない。

「僕の…弟は…殺せるわけないよー!」

ジャックの目から涙がこぼれ落ちる。

ルーフスは黙ってジャックを見ていた。

「……」

その時。

焦げたメットは、目の前のジャックを抱くように……

いや、ジャックに抱きつくように倒れた。

最初にジャックに抱きついた時のように。

武器はジャックの手の上にずっしりと乗っかる。

メットの姿が一つの武器に変わっていった。

「メット……メット……」

メットが光り始める。

メットは返事をしない。

「……メット……」

ジャックは座って震える。

確かに聞こえたよ…メット…

『ありがとう』って…!!

」  
「うわあああああああ!!」

ジャックは武器を抱えながら号泣する。

ルーフスも涙を流す。

ステーラは悲しみの遠吠えをした。

「メット…「っちこそ…ありがとう…」

ウオオオオオオオン…

曇り空の下。

一人の少年がずっと、泣き叫んでいた

草原に朝が来た。

ルーフスはまだ眠たそうに起きる。

「お、あんちゃん、おはようー」

ルーフスは驚きながら応える。

「お、おう、おはよう」

「何がいいかな、朝ごはん。」

「えっと、パンかな。」

「分かった。小麦を三本、と。」

「ジャック、メットのことは大丈夫なのか？」

ジャックは言う。

「…確かに。今でも寂しいよ。」

でも、メットはまだいるってことに気づいたんだ。」

ジャックはチェストの中からハンマーを取り出した。

「ね？」

ルーフスは笑顔になった。

…俺の考えすぎだったな。

ジャックは今も、ずっと、成長しているんだな。

ルーフスはいつもの元気で言った。

「よし、ジャック、チェリーの為に今日はジャングル行ってカカオとつて来るぜ！」

「お、いいねえ！あんちゃん、たまにはケーキにも挑戦してみないかな？」

「それもいいな…：おっと、まずは腹ごしらえだ。ジャック、とことん食わせー！」



「おっ…」

ルーフスとジャックは早食いを始める。

チェリーとステラが起きた。

ルーフスとジャックが椅子の上で腹を膨らませていた。

「」  
「」  
「」

くすっ…

良かった、いつもどおりのジャックくんだね。

「お、起きたか、チェリー、今日はな…」

「本当ですか!? やったあ!」

「ワン！ワン！」

「ははは!!」

いつもどおりの楽しい風景。

その風景を窓の外から小さなゾンビが見ている。

その幻影は、にぱっと笑ってから、一つのハンマーに吸い込まれていった…

ここは南の森の小屋の中。

一人の男がカメラの映像を観ている。

「…ちっ。まだ人間一人に勝てないほどの力か…」

男は×印のポーションを見て笑う。

「だが、火力は十分だ…」

戦力としてリストに入れておこう…」

男が手にするリストのタイトルは

「世界壊滅計画」の文字。

## 25：歯車の街

草原の生活が1週間ほど経って。

チェリーの重傷は完全に治った。

「チェリー、大丈夫か？痛まないか？」

「ええ、全然大丈夫です！ルーフスさん、ジャック君、ステーラ、ありがとございますー！」

「いいってことよー！」「そうだよ、チェリーさん！」「ワン!!」

ルーフス達は元気に西へ向かう。

「お…でっかい街だぞ…」

ルーフス達の目の前にはレンガや石で囲まれた街だ。

「あんちゃん、よく見たら、」「」「一つの国みたいだよー！」

「…まじか…！」

遠くにつつすらと城が建っているのが見えた。

「ともかく、門へ行ってみましょう。」

「ワオン！」

ルーフス達は門へと向かう。

門番が3人を止める。

「旅人の方ですね？」

「はい、そうですが。」

「入国料をお支払い願います。」

「入国料…ですか？」

門番は堅い表情から少しくだけて話す。

「この国では、王の権利を自分の物にしようとする王を襲う輩が王国を狙ってくるのです。」

だから入国に関してはとても厳しくなっております。」

もう一人の門番が話す。

「私も入国料を支払わせることは反対なのですがね…この政策が出来た後、支払うことが出来ずに

王国を避けて通る旅人が多くなりまして。」

「まあ、しょうがないか…」

ルーフス達はそれぞれ1個ずつ、エメラルドを渡す。

「ペットの分は支払うのですか？」

「いえ、結構です。では、ごゆっくり。」

門を開けると同時に2人門番は笑顔で言った。

「「ようこそ、ディラベル王国へ!!」」

門の隙間から光が見えた。

そこには美しい赤いレンガで造られた街があった。

石畳の道をルーフス達は踏み始めた。

「ふーん…」

木材とレンガの調和。

その美しさは声も出ない。

こんな街を人が作ったのだというからより驚きだ。

一人の商人が活気に話しかける。

「よお、旅人さんかい？」

「はい。…とてもきれいな街ですね！」

「そうだろそうだろお！この街はー古い伝統を守っている街でね。

コンクリートも一個も使わずにレンガと木材だけで生きた街なの  
な。

レッドストーンさえも使わないんだぜ！」

ジャックは驚く。

「動力が無くてここまで発展したの!？」

「すごいなあ……」

「いや、ボウズ、それは違うな。」

「？」

「レッドストーンは使わないんだが、歯車を使っているのさ。」

「歯車を？」

「例えばよ……」

商人はチェストの中から例えを探す。

「これだこれ、ほらよ。」

商人は目の前の机に置く。

ちっちゃなゼンマイだ。

「まあ、かわいいー！」

「これは中に歯車をしこんである。こじってまわすとー！」

商人がギギギとゼンマイをまわす。

「中に歯車の回転する動力がたまる。……まあ適当な例があまりなかったから、

もう少し先へ行ってみるといい。色々な歯車が見えるぜ。」

「ありがとうございますーございました！ではまたいつかー！」

3人はお礼を言った。

「おうー！いい旅にしるよー！」



先へ進んで。

ルーフス達は植林場の横を歩いていた。

「あんちゃん、あれ！」

「おー！」

植林場の中で人が木を切っている。

手にはノコの付いた機材が握られていた。

「あの一。すみません！」

「おや、旅人さんじゃないか、めずらしいねえ。」

おばさんが応えた。

「その手に持っているものはなんですか？」

「これは歯車動力で動くノコギリだよ。」

動力を補充すれば何回でも使えるのさ。」

「すーいー！」

「そうだろう、だけどこのノコギリはこれだけじゃなくてねえ……」

おばさんは斬り残した高い樹木を見つけた。

「それ！」

ノコギリの刃が木に向かって飛んでいく。

そして木が落ちた。

「」  
「」  
「おおおおおお！」

「楽々ですね！」

「ワン！ワン！」

3人と1匹は喝采を送る。

ところ変わってここは農場。

ルーフス達は広大な小麦畑を見学していた。

スプリンクラーが水を撒き散らしている。

農家のおじさんは説明を始める。

「この歯車駆動のスプリンクラーのおかげで、広大な畑を管理するのが楽になったよ。」

ほれ、自家製のはちみつパンを食つか？」

ルーフス達ははちみつパンにかじりつく。

「「「おいしい!!」「「「「ワオーンー」」」

「でも、歯車があるってことは造っている人もいるのですよね？」

「ああ、それなら、もっと先へ行ってみるといい。」

実は歯車の伝統は続いているが、歯車を造る職人は減っていて、その一軒しかないんだ…」

「え!？」

「ってことは、あのゼンマイも、ノコギリも、

このスプリングクラーもその店だけで造っているのですか!？」

「ああ、そうさ。かなり腕のいい職人でね。」

彼にかかればどんな歯車製品も造れるのさ。」

どんど、でっかい歯車がデザインされている店だ。

「どこか…」

「分かりやすいね……」

チリーン……

カウンターには一人のメガネで白髪のおじいさんがいた。

すごい真剣な目で歯車を磨いている。

「どうして？」

その真剣な目のまま、そっけなく言った。

少し話しかけづらい。

ルーフスは申し訳無さそうに話しかける。

「あの…この店でこの街の歯車を造っているのですか？」

おじいさんは納得した歯車につなずき、歯車を置いてルーフス達に向き合っ。

「そうだ。今では私一人になってしまったがな。」

「一人で…！」

ルーフス達は感服する。

「あの…もしよろしければ、見学させてもらってもいいですか？」

「……」

おじいさんは無言でゆっくりと完成した歯車を棚に置いた。

…アレ…

迷惑だったかな…？

おじいさんはカウンターの扉を開ける。

「ついできなさい。」

「まずは自己紹介だな。私はコグウィルだ。」

「僕はルーフスといいます。」「ジャックです。」

「チェリーと申します。」「あ、こいつはステーラです。」

「ワオン！」

コグウィルさんは茶色、銀色、金色の歯車を見せた。

「歯車には3つの種類がある。木製、鉄製、真鍮製だ。」

後者ほど摩擦が少なくなり、動力が安定する。」

移動し、「動力伝達機材」と書かれた看板の前に来る。

「動力の伝達にはいろいろある。手でこいだり、振り子を使ったり、蒸気を使う方法がある。ここで主に使っているのは、一番動力を生むことができる

タービンだ。下から蒸気を加えることで半永久的に動作できる。」

またまた移動し、いろいろな機材の置かれている前に来た。

「あ、さっきのノコギリだ！」

「スプリングクラーもあるぞ。」

「扇風機のようなものもありますね……」

「コグウィルさんはうなずく。」

「歯車を使うことでこんなにも様々なものができる。」

細かな手持ちの機材を作るにはまた違ったテーブルが必要になる  
がな。

…と、私が説明できるのはここまでだ。」

「ありがとうございます！」

「あの、質問いいですか？」

ジャックが手を挙げる。

「何故、あなたは歯車を造っているのですか？」

「…そうだな。」

コグウィルさんは考える。

「伝統を守りたい、とも言いたいのだが、それ以上の理由がある。」

コグウィルさんは壁から突き出た木の椅子に腰掛けた。

「私はもう分かる通り、人との付き合いが苦手だね。」

ただただ昔から、一人この部屋で歯車を造り続けてきた。

そして歯車を人に手渡した時、ひしと感じたものがある。

感謝の気持ちだ。歯車が私とこの街の人々を繋いでくれたのだ。

電気は人に手渡せないだろう？私は、歯車で人をこれからも繋いで  
いきたい、

そう思っているから、かもしれないね。」

「コグウィルさんは少し笑ったように見えた。」

チリーン…

「ありがとうございました。」

「ちょっと待ってなさい。」

おじいさんが引き止める。

ルーフスの手に道具と沢山の釘が渡された。

「…これは？」

「これ一つしか余っていなかったのだがな。」

物騒なのだが、これは釘を飛ばす武器となっている。

モンスターが出た時は、役に立ててもらいたい。

お金は結構だ。」

ルーフスは手を握った。

「ありがとう、コグウィルさん。」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」



おじいさんは優しく手を振る。

ここにまた、5つの歯車が噛み合ったのだった。

## 26：王様の気まぐれ

シャンデリアで明るく照らされた王室。

王室の床は絨毯で赤く塗られている。

たくさん兵士達があつちりと見張っている。

その部屋の玉座で王様は態度悪く座っていた。

「あゝ暇だ。」

側近の一人の若い執事が呆れて言う。

「王様、客人がいないとはいえ、王としての態度は守っていただきたいかと思えます。」

「うるさい。暇なんじゃあゝ。」

同じく側近の一人、メイドも同調する。

「王様、しっかりしてください。只今紅茶をお入れいたしますので。」

「あゝいーいー。今そんな気分じゃないから。」

執事とメイドは顔を合わせ、小さくため息をついた。

王様は思いつく。

「そうじゃあ…ネクサスで遊ぼう！」

執事とメイドは慌てて反対する。

「駄目です！住民達にも迷惑がかかりますし、女王様がなんと言つか…」

「そうだ、レゴブロックで遊びましょう！」

「わしゃ子供か！なあに、私はこの国の王である！  
やっさと持って来い！」

「…分かりました。住民の皆さんには私共から謝っておきます。」

「よろしい…さあ、早く早く！」

子供のよつな王様がせかす。

「あ……プレイヤーがいないではないか！」

執事とメイドが笑う。

「お……そうでした、なら違うゲームに…」

「王様、」

一人の兵士が王の前にひざまずく。

「旅人と名乗る者が、あいさつをしに参りました。」

王様は一回手をパン、と打って。

「丁度良い！その者を連れて来い！」

執事とメイドは額を押さえる。

「王様の前で、悪い態度はとらぬよう、お願いします。」

「はい。」

ジャックは答える。

ルーフスとチェリーは緊張から目を著しく開いたままコクンとうなずいた。

「ワンー！」

ステーラも一声吠える。

ギキギキギキ...

ジャックが普通に歩く中、ルーフスとチェリーはカチコチと動く。  
ステーラも後をつく。

王様の前でとまり、ひざまずいた。

ジャックは肘でルーフスをつつく。

「…ほら、あんちゃん、あいさつ。」

「はは、初めまして…」

ジャ、ジャック…じゃない、チェリー、じゃない、  
ルーフスと申します。」

「ジャックと申します。」

「お、おな、同じくジャックと申します。」

「チェリーさん！間違ってる、間違ってる！」

「あ、すすすみません、チェリーと申します。」

王様はさっきとは違う、王の顔で旅人と接する。

「ほっほっほ、王の目の前とはいえ、そんなに緊張するでない。

「ふん、ふん、ディラベル王城に。ここまでの長旅、ご苦労であった  
な。」

「ありがとうございます。」

ルーフスはやっと落ち着いて話す。

「して、旅の者達よ、そなた達は幾日もわたりモンスターと戦っておるのじゃろっ?」

「はい。」

王様は声を大にして懇願する。

「その力、とくと見せて欲しい!」

「?...はい。」

いきなりの懇願にルーフス達は戸惑う。

「で。」

「門前まで戻されたわけだけど...」

「ははは...またもとの道を行かなきゃいけないね...」

「申し訳ございません、王様のわがままでこのようなことになってしまつて...」

一人の執事が謝罪する。

「いいんですよ。僕達も少しワクワクしているのです。」

見るとメガネをかけたビッグマンや、蜘蛛、ゾンビが襲ってくる。

「じゃ、お前ら、準備はいいな？」

「はい!」「うん!」

「ワオン!!」

ルーフスとチェリーがゾンビを斬り進める。

ステーラが蜘蛛の足を噛む。

ジャックにゾンビと蜘蛛、ビッグマンが一斉に襲い掛かる。

ジャックは手に持ったハンマーの重みを感じていた。

「メット…君の力を…貸してくれ!」

ジャックが力強くハンマーを振るう。

ドオオオオン!!

モンスター達が吹っ飛んで行く。

「…強い！」

ジャックは手に汗を握る。

その後も次々と襲い来るモンスターを倒して行った。

スケルトンや、クリーパー、の他にも、

母蜘蛛や、危険な油まみれのゾンビに、少し大きいゾンビ、

黒い謎の人型モンスター、石のようなモンスター…

ルーフス達はいい汗を流していた。

「只今戻りました。」



「ご苦労、双眼鏡で見ていたが、さすがの強さであったぞ。」

「王様！」

一人の兵士がボロボロになって駆けつけてきた。

ルーフス達は慌てて場所を空ける。

「黒い反逆者たちが……！」

「なんじゃと……!？」

バリイン!!

玉座の横の窓から黒い人が突き破ってきた。

兵士が行動するも空しく、王様に剣をかざす。

「うおっ……！」

「これで天下は我が物だ……！」

「王様……！」

執事は駆けつけようとする。

「待った！」

「……いつはいつのまま殺してやっても良いが……」

平和的な解決が俺の流儀だ。

おとなしく王位を渡してくれるのなら、王様は牢屋だけに済ましておこつて。」

「くっ…貴様が王になって何ができる…!」

「俺が王になって?…まずは古い街を取っ払って、軍事施設でも作るのかな…」

はっはっはっは!!」

ルーフス達はこそこそ話し合つて。

「このままじゃ、この国、滅んじゃうよ…!」

「あの美しい町並みが消えるなんて…許せません!」

「俺もだ。」

…なんとか遠距離攻撃で、あの男の隙が作れねえか…?」

「だめだよ、矢はさっきの戦いで使い果たしちゃったんだ…!」

「くそ…どつすねば…!」

ルーフスのポケットにはコグウィルさんの釘撃ち器。

「…これなら…!」

ルーフスは男を狙う。

行け！

ジュッシー……

キン！！

男の額に見事命中。

「ジュッシー」

「今だ！」

執事は声に反応し男を取り押さえた。

カランカラン…

男の持っていた剣が床に落ちる。

「やった！」

「くそ」…

「ルーフスといったな…よくぞ私を叛逆者から守ってくれた。  
…そして、私の気まぐれに付き合わせてすまなかつたな。」

「いえ、僕も楽しかったから…」

「面白かったですよ！」「そうです！」

「ワオーン！」

「ほっほっほ…そうかそうか…」

…ラズリー、今夜は宴会を行う。

「これは旅人の歓迎と、王国死守のお礼だ。」

「はい！かしこまりました！」

メイドは笑顔で応えた。

王様は豪快に笑う。

「ほほほほ…今日は愉快な1日だ！」

「な・に・が・ゆ・か・い・で・す・っ・て…?」

王様の顔色が一瞬で青ざめ、汗が噴出す。

「じよ、女王様…!」

「あなた！ネクサスブロックは住民の皆に迷惑になるから駄目と言っ  
たでしょう!?

しかも旅人の方にも迷惑をかけて！あなたには王の自覚が無いん  
ですの!?

「…だって…暇だったんだもん…!」

「暇ならもっと小さなことで遊びなさい!」

「…分かりました…もうしません…許してください…!」

「全く…!」

ルーフス達は怖がる顔で女王様を見ていた。

女王様は素直な笑顔で向いて、

「夫を守っていただき、本当にありがとうございました。  
今夜は目いっぱい、楽しんでいってくださいね。」

「はいー!!」

「ワォーン!!」

その夜。

王室での愉快的な晩餐が行われている。

王様はルーフスに話す。

「ルーフス、私にお前さんの旅行記を話してくれないか。」

「分かりました。まずは」

今ではすっかり、王様と対等に話しかけている。

女王様はステーキを頬張るステーラをなでていた。

「まあ、かわいい狼です」と…」

「ステータって言うんです。お肉が大好きで、とつても強いんですよ。」

「そうなの。たんと、食べなさいね。」

「ワオン！」

ジャックが説明する。

「こちら紅茶、白身魚のムニエル、グリーンオムレツです。」

「この紅茶ってどうやって作るのですか？」

「そ、それは……えっと……」

「茶葉を圧搾機で抽出して作るのですよ。」

「あ、ラズリー……」

「全く、シャルドつたら料理に関しては何も知らないんだから……」

「べ、別に良いだろ……おっと、赤ワインが切れてしまいましたね。」

今、お持ちします。」

「あ、ありがとうございます。」

あの……じゃあ、この白身魚のムニエルは……」

「焼き魚と小麦粉、レモン、マヨネーズをクラフトしています！」

「これもお願い！」

「これは…」

チエリーは相変わらず料理に夢中だ。

夜はどんどん更け、話も盛り上がる。

「グレートスライヴシティという街はですね。」

「なんと、雷の力で動いているというのか！…私の国も参考にしなければな。」

「この国は今のままでむしろ良いと思いますよ。

私はこの街の雰囲気大好きです。」

「そんなことを言ってくれるとは、私も国政により力が入るな。ほっほっほ…」

「お手！おかわり！」

「こんなことまで出来るの!？」

「はい、頭も賢いのです。」

「私も狼が欲しくなってきたわ〜！」



「ねえねえ、あなたって、あの執事さんに恋してるでしょ？」

「な、そ、そ、そんなこと無いわよ！あんな鈍感！」

「ふふ、だってさっきからあなた、あの執事さんの事ばかり話してるわよ？」

「!!!」

ラズリーの顔が赤く染まる。

「…ねえ、チエリー。」

「何？」

「恋の相談、聞いてくれない？」

「うん、もちろん！」

まだまだ楽しい夜は終わらない。

翌朝。

ルーフス達は王城の玄関にいた。

「楽しかったぞ、旅の者達よ。」

「またいつでも、寄ってください。」

「はいーおいしい料理、ありがとうございましたー！」

王城が離れていく。

「」「さようならー！！」「」

「オーンー！」

王様と兵士達、執事とメイドが手を振り返す。

外の太陽がルーフス達を照らす。

ルーフス達の旅が、いつものようにまた始まった…

## 27: ブラウン村

ディラベル王国の中を歩いて3日。

ルーフス達は整地のされていない森の中を歩いていた。

まだここは開発が行われていないようだ。

「王様が言うつには、ここらへんは王国が開発される前からの住民達が多  
そのまま住んでいるらしいね。」

『歯車』が出来る前からの住民達か……」

「あ、あれじゃないですか?」

前には木材で作られた家々があった。

風車や水車がところどころで回っている。

「おお、旅人さんですか。」

みるとタオルを頭に被った若い男性がいた。

「ようこそ、ブラウン村へー!」

若い男性は爽やかな、活気の溢れた声で話す。

「初めまして。ルーフスです。そしてこっちがジャック、チェリー、ステラです。」

「「よろしくお願いします。」」

「ワン！ワン！」

「こちらこそ。私はこの村の村長、テイローと言います。」

「村長さんですか!? …若いですね…」

チェリーは驚く。

「はは…実は村長であった祖父から、この前引き継いだばかりなのですよ。」

「なるほど…」

「では、この村を案内します。」

「はい…」

ジャックが元気よく返事をする。

ルーフス達も後をついていく。

ルーフス達はノコギリが置かれた風車と水車の前に着く。

「この村は王国の出来る前からの生活様式で生活しています。」

例えばこの風車と水車。回転する力で機器を作動させています。全て、この土地に住む人々が私達に残してくれたのです。」

「この水車と風車はいつからあるのですか？」

「祖父が生まれた頃からあったようです。しっかり造られていて、まだまだ使えるでしょう。」

「すーい…そんな昔からあるのか…!!」

「おお、村長さん、こんにちは。」

おじさんがテイローに話しかける。

「コーダさん、こんにちは…いい作品は出来ましたか？」

「ああ、今日もたくさんできましたぞ！」

「旅人の方々に見学をさせてもいいですか？」

「おう、いいよ。」

「こちらはこの村の陶器屋のご主人、コーダさんです。」

「よろしくー。」

「よろしくお願いします。」

コーダは台の上に粘土のカタマリを乗せる。

そして粘土が回り始めた。

コーダは慎重に粘土に筋を入れていく。

「「「「「おおお!!」「」」」」

するとプリンターが出来上がった。

「で、後はこれを、このかまどで焼くんだ。」

コーダは移動し、大きな炎の上に設置されたかまどにプリンターを置く。

ふいこの稼動を確認しながら、みるみるプリンターが焼きあがっていった。

テイローが追加で説明をする。

「この回転台も、ふいこも水車と風車の動力で動いているのですよ。」

「へえ…自然を動力にする…かあ…!」

ジャックは目を輝かせた。

所変わって、ここはテイローの家。

「さあ、どうぞ。自家製のチャウダーです。」

ルーフス達は口へと運ぶ。

「うめえ！」

「…おいしい…！」

「すごいまるやかだあ〜！」

「ガツガツガツ」

ステーラは一心不乱にチャウダーを食べている。

「このチャウダーの食材には全て、村の農産物を使っています。そして私の母、ベラスが作っています。」

幸せそうに太った女性が笑う。

「喜んでもらえてうれしいねえ。」

「テイロー、お客さんかね？」

「あ、じいちゃん、

紹介します。私の祖父、そして前村長のマシロです。」

腰を大きく曲げ、杖をついた老人は笑顔を見せる。

「このチンケな村に、わざわざきてくれて、ありがとうございます。」

「いえ、とっても素敵な村です…！」

ルーフス、ジャックもうなずいた。

「そうかい、気に入ってくれて何よりだ。」

「こんにちはー。」

村に一人の兵士が来た。

「テイロー村長、マシロ前村長、ご無沙汰しております！」

マシロの顔が厳格になる。

「…また来たのか。」

「はい、街での通貨をこの村に普及すれば、この村はもっと豊かに」

「そんなカタマリなどいらんわい！とっとと出ていけい！」

マシロは壁にかけてあるスピアを手に取り弱弱しく兵士に突き続ける。

「マ、マシロさん！お体に響きますよ！無理せずじー！」

「ひるかに…！じほっ、じほっ、じほっ…！」

チェリーがマシロの元へ駆け寄る。

テイローは兵士に弁解の意を伝えた。

「すみません、わざわざ来ていただいたのに…」

しかしこの村は、東の街が齒車を守っているように、私達も文化を守っているのです。どっかお引取りを…！」



「いや、でも王様の「指名で…」」

「では、私どもから王様にお詫びの「馳走を届けてもらってもよろしいですか？」

「試食もどうぞ。」

兵士はルーフス達のチャウダーを見て唾を飲んだ。

「で、では、お言葉に甘えて…」

その後、兵士はテイローから「馳走をもらい帰って行った。

マシロはベッドで寝そべっている。

チェリーが横で看病を行っていた。

「すまんのう…迷惑をかけて…」

「大丈夫ですよ。ゆっくり休んでくださいね。」

「…私はこの生活が好きなんじゃ。」

老人は唐突に話し出す。

「時に汗をかき、時に病にかかり、時に皆と談笑し、自ら作る料理を食す。私はこの生活が何よりも大好きじゃ。」

もし街へ食べ物を買に行けば、  
食べ物のおかげがたさをきつと忘れてしまつたらう。

だから、私はわざと苦しい中で生きるのじゃ。  
苦しいからこそ、食べ物のがんがさが分かる。

私はこの生活が大好きなんじゃ……」

「じいちゃん……」

テイローは口に出した。

「ブラウン村新村長として、あなたの伝統を守り抜いて見せます！」

マシロは笑顔でうなずいた。

ルーフス達も笑う。

「ありがとうございました、テイローさん、マシロさん。」

「こちらこそじゃな。旅人が遊びに来る時は、本当に楽しくなる。」

「ベラスさん、レシピありがとうございました！」

チェリーがベラスにお礼を言う。

「いいのよ、いいのよ！あなた、昔の私にそっくりなんだもの。」

「え……？」

「私もね、昔から料理が大好きでねえ。ことあるごとに村のお母さん達から

レシピをもらって作っていたのよ。

またいつか、この村によって頂戴ね。次までにまた新しいレシピ、考えておくわ!」

「はいー私、ベラスさんのようなお母さんになりたいです!」

「まあ、ありがとう!」

ベラスとチェリーは笑いあった。

3人と1匹は手を振ってまた西へと向かって行った。

ディラベル王国の西門が近づく。

王国ともお別れだ。

二人の兵士が名簿をつけてから敬礼を言った。

「「よき旅を!!」

「ありがとう!」

3人は手を振る。

「楽しかったなあ、ディラベル王国!」

「また寄りたいな、この街！」

「みんな、とても優しかったですね！」

「ワォーン！」

「あんちゃん、次はどっち進む？」

「このまま『西』だな！いくぞ！お前ら！」

「「「」」」

「ワォーン！！」

3人と一匹は草原を西へと駆けていった。

## 28：機械の文明

サクッ

おいしいクッキーを食べながら草原を進むルーフス達。

「やっぱりチェリーのクッキーはうめえな！」

「香ばしいんだよね〜」

「ありがとうございます」

「ワン！」

ステーラは骨をしゃぶっていた。

「はぁあ!？」

「ええ!？」

「…!!」

「ワオ…!？」

3人と1匹の目が一斉に見開く。

骨が狼の口からポロツと落ちた。

まがまがしい幾何学模様で構成された大地と木。

できれば目を合わせたくない光景だ。

「…なんだ？このキバツなバイオーム…」

「気持ち悪いね…」

「コンコンー！」

「この木、硬いですよ！」

「本当だ、金属みたいだ！」

「わけがわからないよ……」

「おや、旅人の方ですか？」

見ると丸めがねに金髪、白衣の男がいた。

ルーフスと同世代のようだ。

「君は……？」

「僕はクラブといいます。あなたとは同世代のようですね。」

「おう、俺はルーフス、そしてチェリー、ジャック、ステーラだ。」

「よろしく願います。」

「ところでクラブ、このバイオームがなんなのか知ってるのか？」

「このバイオームはですね、古代の文明の跡地なのです。」

「古代の文明!？」

ジャックは驚く。

「古代にこんな金属の文明なんてあったの!？」

「詳しくは分かりません。しかし古文書には

『天から光る輪が現われ、我らが大地に種を落とした。』と記されているのです。

つまり、推測するには、大昔に宇宙人がやってきて、一つの文明を作ったと考えられます。

私はここで、その文明について調査しているのです。」

「宇宙人ですか…!？」

「逆に宇宙人じゃなかったらありえないもんなあ…!？」

「クラブ クラバ シュウシュウ カンリョウ。」

「ありがとう、ワーカー。」

小さなロボットがクラブに歩いてきた。

「かわいい〜!？」

チェリーの目がハート型になる。

「ワーカー?」

「このロボットのことです。一生懸命私の調査を手伝ってくれる、良



き相棒です。

…ワーカー、ルーフスさんに、チェリーさん、ジャックくん、ステラくんです。」

ワーカーはルーフスに目を向ける。

「ルーフスさん、」

チェリーに。

「チェリーさん、」

ジャックに。

「ジャックくん、」

ステーラに。

「ステーラくん。」

「よろしくな！」

「ヨロシク ヨロシク。」

「ワーカー、次は採掘をおねがいしてもいいかな？」

「リヨウカイ リヨウカイ。」

ワーカーは遠くへ行く。

ワーカーが遠くに行ったことを確認すると、クラブはワーカーについて話し出した。

「…あいつは可愛そうなやつなんです。」

「かわいそう…というと？」

「僕はこのバイオームを見つけ、ワーカーと出会いました…」

クラブは語る。

機械で構成されたバイオームで。

クラブはロボットを発見した。

「君は？」

「……………」

ロボットは無視して去る。

クラブの科学者スイッチが入る。

なぜ逃げるのか？言葉は話せるのか？

どうしてここにいるのか？…

なんとしても、調査したい！

ロボットは歩いている。

木の陰からクラブが現われた。

「調査させてくれえー！」

ロボットは慌てて逃げる。

廃墟の中から白衣。

木の上から白衣。

土の中から白衣が。

いたるところから白衣の男が出てきた。

ある日の夜。

ロボットは廃墟のなかでスリープする。

かぼちゃで変装したクラブはこっそりと廃墟の中に入り、

背中の接続端子に機器を挿す。

「規格は……よし、ピッタリだな。」

クラブはかぼちゃを外し、コンピュータで確認する。

「これはこのロボットの見た映像履歴だな……これで文明の謎が分かるはずだ。」

カチッ

映像履歴のファイルを開いた。

たくさんの一つ目のロボットに囲まれている。

『フシヨウケン』

クラブは衝撃に目を見開く。

『フリヨウヒン ヒツヨウ カイム』

『ハカイ スベキ』

『ゴミ フェルノミ』

『デハ エイエン ネムレ』

『フリヨウヒン ネムレ』

『シツパイサク ネムレ』

『ネムレ』

『『ネムレ』

『『『ネムレ』

『『『『ネムレ』

『『『『『ネムレ』

映像が終わった。

そのほかの映像は無かった。

「…おまえ…」

クラブは涙を流す。

生まれてから、『不良品』『失敗作』とよばれ。

『眠れ』といわれ長い間電源を落とされた。

なんと非情なことだろう。

クラブはロボットを見る。

…こいつが逃げる理由がわかったよ。

こいつは何も信じられないんだ。

…僕はこいつをどうすればいいのか…

…ただ、愛すしかないだろう。

ロボットが起きる。

目の前に白衣の男。

ロボットは背筋が一気に伸びる。

クラブはロボットを抱いた。

「僕の相棒になってくれないか？」

…「ワーカー。」

クラブは名前を呼ぶ。

「ワタシハ イテ イイノ？」

「ああ、僕の相棒なんだからな。」

クラブの涙が一筋流れ落ちた。

「キミノ ナマエハ？」

「クラブ。クラブだ。」

「クラブ ワタシノ アイボウ。  
ズット イッシヨ。」

「ああ、そうぞ。」

「…あいつ…生まれながらずっと一人だったんだな。」

「なんて悲しいんでしょう…」

チェリーは顔を真っ赤にして泣いている。

「僕はこれからも、あいつと調査を続けようと思います。」

あいつは、僕が守っていなければ駄目なんです。」

「No.002647…フリヨウヒン ハッケン

サッキウ ニ ハカイ シマス。」

ドオン!!

「ワーカー！」

クラブは走っていく。



「まさか…まだそのロボットが残っているの!？」

「俺達も行こうぜ。」

「ワオン！」

チェリーもうなずく。

見るとそこには背の高い…一丁目ロボットがいた。

「いつ起きた…?」「いつ…くらえ…」

クラブは持ち合わせのシャベルで殴る。

ビュン…!

バシユ!

レーザーに撃たれた。

「うわ!!」

「クラブ…!」

ロボットが駆け寄る。

「1Jのせーなー!!」

ルーフスがロボットに剣を振るおつとする。

ジュン！

ジュン！

ジュン！

ジュン！

ジュン！

ジュン！

レーザーを高速で打ち込んでくる。

「おわぁーちゅーくそー」

ルーフスはよける、よける。

よけながらも何とか3回斬ることができた。

「!!おおおお!!」

ジャックがハンマーを振るう。

衝撃波がロボットに命中した。

まだ倒れない。

「はぁぁー！」

チエリーが勢い良く剣でロボットを斬る。

「ガブツ！」

ロボットに力強い噛み跡が付く。

「ギギギギ フリヨウ ギギギギ ヒン  
ギギ ハカイ ギギギギ デキズ」

ドオン…

ロボットは爆発する。

「クラブさん、大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとうございます、チェリーさん。」

「ワーカーも大丈夫？」

「イジヨウ ナシ ゲンキ。」

「ふふ、それは良かった！」

「ありがとうございます、皆さん。僕とワーカーを守ってもらって。」

「いってことよ。俺達もいい運動になったからさ。」

「ワンワンー！」

「新しいモンスターのことも知れたしね！」

「こんなかわいらしい子を不良品と呼ぶなんて、許せませんよー！」

いつの間にかワーカーはチェリーに抱かれていた。

「アリガトウ アリガトウ。」

「ルーフスさん達はこのあと、どっちに行くのですか？」

「そうだな…このままこのバイオームを突っ切って西に行こうかな」

「そのまま行くと…」

クラブは地図を開く。

「海を通ることになりますね！」

「お、久しぶりの海か…サンキュー、クラブ。」

クラブが笑顔で言う。

「船旅、お気をつけて！」

「サヨウナラ サヨウナラ」

「ああ、クラブもワーカーも、元気にやれよ。」

「さようなら…」「お元気で！」

「ワン!!」

ルーフス達は機械に侵食された大地を踏みしめ、西へと向かう。

## 番外編5：今日の世界旅

とある家の中で。

女の子が父に話しかける。

「とーさんー！」

「ん？」

「世界旅、はじまるよー！」

「ああ、そうだったな。」

父はテレビを点け、チャンネルをまわした。

効果音が流れ、タイトルが現われる。

男性のアナウンサーが話し始める。

「どうもー！ミスター・タニグチですー！今日の世界旅のお時間ですよ。さて、今日も気ままに旅をしていきたいと思えますー！」

今日の世界旅は…？」

ミスター・タニグチがサイコロを振る。

「北ー！」

もう一回。

「西！」

もう一回。

「南！」

「では、今日は北、西、南と試してみよう！」

『まずミスター・タニグチが向かったのはここ、メディウス・ライブラリー。』

「ここは昨年に建てられたばかりの図書館。白い大理石でできた美しい外観の中には、100万冊を超える書物が蔵書されています。』

「うつくしいですね。この森と建物の色の対比がなんとも素晴らしい！」

では、早速、入ってみましょう！

……どうもー。」

「ようこそ。メディウス・ライブラリーへ。」

「えーっと、貴方は？」

「私は館長のバンダと申します。」

「ああー！館長さんでしたか。これは失礼しました。」

えーっと、ここは旅人しか来ないであろう森の中ですよね。

言ってしまうえば、もっと人通りのいい街の中に建てればよろしかったのでは？」



「それでいいのです。私も昔は旅人だったのですが、砂漠や森の中には本は落ちていないでしょう。」

「だから私は旅人のために、この図書館を建てたのです。…ああ、勿論、一般の方々も利用してください。」

「本を読むことはとても楽しいことですから…」

「ミスター・タニグチは顔をわざと歪ませて、

「すばらしい！なんとという本と旅人に対しての愛情！タニグチも感動しました！」

「では私も、このメディウス・ライブラリーで、本を読んてみたいと思います！」

「えーっと、では…この『爆笑！お笑い入門』をゆったりと読みたいと思います。」

『ミスター・タニグチは読書している…？』

「あー、本を読んでいると、時間が短く感じて、お腹がすいてきてしまいますね、バンダさん。」

「ははは。ではパンプキンパイでもどうですか？」

「おおおお！気が利いていますね！好きな本を読みながらのティータイム。」

「なんと贅沢なのでしょう！」

『メディウス・ライブラリーではきれいなメイドさんのパンプキンパイと紅茶が

エメラルド1個で食べられる、素敵なサービスも！』

『おいしいスイーツと読書を堪能したミスター・タニグチは、次の場所へと向かいます。』

『ジェットボートで、魚と共に進むミスター・タニグチ。

西の大陸が待ちきれないようです。』

「…さあ、大陸に着きました。…すごいですね。この灯台。誰が建てたのでしょうか？」

…お、きこりの方がいますね。ちょっと尋ねてみましょう。

…「こんにちはー。」

「おおーあのミスター・タニガワじゃねえか？」

ミスター・タニグチは大げさに地団太を踏む。

「お・し・い！僕はミスター・タニグチですよ！もう！」

「おお、すまん、間違えてしまった…」

「お尋ねしたいのですが、あの灯台は誰が建てたのですか？」

「あの灯台はなあ、俺と俺の親友たちがいつしよに建てたんだよ。娘のためにな。」

「おお、娘さんのために…娘さんのお名前は？」

「ヴァイオレット、ってんだ。」

ミスター・タニグチが目と口を大きく開く。

「ええー!!ヴァイオレットというと、グレート・スライヴシティの新市長さんですか!?!」

『そう、彼、ビストさんの娘はあのヴァイオレット市長なのでした。』

「あいつが働きはじめる時にな、初めて親子喧嘩したんだ。

娘ってのは、いなくなると本当に寂しいもんで。その後、ヴァイオレットと会って、

お互いを認め合うことができたよ。」

ミスター・タニグチは顔に手を当てて、目を隠す。

「くぅ〜!なんとという親子愛!ミスター・タニグチ、またもや感動してしまいました!」

…ビストさんはここできりをやってらっしゃるのですよね?」

「ああ、そうだ。しかしこの頃はじめてのは、昼限定で小さな公園を開放しているぞ。」

「おおー公園…!童心がくすぐられますね!ビストさん、案内してもらってもいいでしょうか!」

「よし、ついてきな。」

『ビストさんの作った狼の森わんぱく公園。子供達のために昼限定で開放しています。』

ミスター・タニグチも木の間をすり抜けるウッドコースターに乗りました。』



すー」

『女性に目がないミスター・タニグチは村へと入ります。』

「おおっと、エンジェルの中に、一人だけ仙人がいますよ!？」

メイドたちは爆笑する。

「ほほほほ…残念ながら仙人ではないのお。私はこの村の村長じや。」

「おお、村長でしたか…よっ！えらい！日本一!!」

『素晴らしい村を作ったことを褒めるミスター・タニグチ。』

冷静な顔つきをした女性が話す。

「この村ではクッキーとお紅茶を楽しめます。」

ミスター・タニグチは手を合わせる。

「ああ、神様仏様…女性のクッキーを食べることが出来るなんて…！感動的です…！ではお言葉に甘えて。」

『かわいらしい3人のお嬢さんがクッキーを運んできました。』

「」「」「」

「おおおおー！こんなに可愛いお嬢さんにクッキーを持ってきてもらえるよー！

感動！感動！…もう感動しかいえません!!」

『無料でクッキー5個とお紅茶1杯をメイドさんと楽しめる村。一度  
言ってみては?』

「いやー、今回も、とっても素晴らしい旅でしたね!今日はここでお別  
れといたしましょう!

皆さん、いいですか?」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「  
来週も!今日の世界旅!」「「「「「「「「「「「」

「感動!感動です!」

「ピラフ。おもしろかったな!」

「うん!来週もみなぎゃ!」

「…旅か。あいつら、元気にしているかなあ…」

ライモンは言った。

## 29：愉快的海賊達

海の上。

巨大な帆船が浮かんでいる。

白いマストがたなびく中、アコーディオンと共に歌声が聞こえてきた。

我らが スターク海賊団

太陽が今日も 甲板を照らす

海に消えていく 波の音は

故郷ふるさとに届く はずもなく

故郷ふるさとを想う ためならば

今日の姿のままに 帰るのだ

「島は見えるか〜!」「ノー!」

「船は見えるか〜!」「ノー!」

それでは始めよう 宴の時!

船長が歌い終えるが、伴奏はまだ続けている。

船員達が酒や料理を甲板の上で頬張る。

「こっちにも酒だー!」 「まだ足りないよ!」

「がっはっはっは!」

「いいぞ!酒の飲み比べだ!」

「ゴキョ、ゴキョ」 「はっはっはっは!」

「おい!なさけねえぞ!」 「どどこさわってんのよ!」

「ぼふっ!」 「うっぷ…もう駄目だ!」

「はっはっはっは!!」

筋肉質な体格の船長は豪快に笑う。

「今日も順調の航海だ!!」

ルーフス達は。

機械のバイオームを抜け、ボートで海を西に進んでいた。



太陽がまぶしく、温かくルーフス達を照らす。

「ふわぁああああ…ねみいな…」

チェリーが目を開ける。

「あ…ついとうとしちゃいました…」

「ほんっと、いい昼だねー。」

「クウン…」

ステーラもルーフスのボートの上で眠っている。

「…はぁ……」

ルーフス達も一斉に寝始める。

ルーフス達のはるか遠くで、ノコの刃のような三角が横切った。

「もっ…いっちょっ…」

我らが スターク海賊団

この世界の 全てを盗んでやる

あの娘に 花束贈るのなら

必ずや帰り 手渡すのだ

「島は見えるか〜!」「ノー!」

「船は見えるか〜!」「イエース!」

それでは始めよう 宴のと…

「なにい!？」

アコーデイオンが止まる。

「船は見えています。…とは言っても小船ですが…」

船長は船の前方を見た。

3人の少年少女、そして犬がボートの上で眠っているではないか。

船長は宝を見つけたのごとく目を見開く。

「おめえら、引き上げろ…」

「アイアイサー!」

ルーフス達は眠ったまま、海賊団に引き上げられた…

ルーフスが目を覚ます。

ここは…？

部屋の中？

見ればそこには樽や木箱が置いてあった。

ルーフス達はベッドに寝ていた。

「おい、ジャック、チェリー、ステーラ、おきろ！」

「うーん…エンダーマン、そんなにじゃがいも食べられないよー…」

「わあ…触れるごとにクッキーが1万枚だなんて…」

「…なんの夢見てんだよ。」

「誰がわし。」

「で、じいはどこなんだ？」

「あんちゃん、じい！」

ジャックが×印の書かれた地図を見つけた。

「やばいよ、じい、海賊船の中だよ！」

「ええええええええええええ!!??」

「…どじりする、ドアを蹴破って一気に逃げるか？」

「いや、ボートもどっかに行っちゃったですし、海に飛び込んで近くに島がなかったら…」

「どじすねばいいんだ…」

「キイ。」

屈強な男が部屋の中に入ってきた。

「ん？」

顔に傷跡がある。

モノホンの海賊だ。

ルーフス達は口を開けることしか出来なかった…

ステーラはその横でのんきに眠っていた。

「はっはっは…船員が驚かせてすまなかったな！」

「はは、なんだ、サメが来てたから助けてくれただけだったのか！」

「もし助けてくれなかったら今頃…本当にありがとございまして…」

ジャックが青ざめた顔でお礼を言った。

「そりゃあ、サメが来れば誰でもびびるわな。

まあ、お宝も頂いたしな！」

サクッ！

「ああー!!私のクッキー!!」

チエリーは驚く。

見れば船員達も全員食べている。

「もう！欲しいなら欲しいと行って下さいよー！なんで盗むようなまねしてるんですかー！」

「『』『』だつて海賊だし。『』『』」

「しかしうんめえな！これ！」「うまい」

「お前の作るクソマズ料理よりぜんぜん最高だな

」！

「あん？おめえのご飯明日から抜きにすんぞコラ。」

「母ちゃんのクッキー思い出すぜ……」

チエリーはおいしそうに食べる船員達の様子を見て、  
笑顔になった。

「俺の名はスターク。お察しの通りこの海賊団の船長だ。」

「俺はルーフス。」

「ジャックです！」

「チェリーです。」

「ワンワン!!」

「こいつはステーラだ。」

「おめえたち、まだ若いのに旅に出るとは、よくやる者達だ！」

ルーフス達は照れる。

「で、おめえらはこれからどこへ行くつもりなんだ？」

船長は尋ねる。

「俺らは西の大陸に行こうと思ってるんだ。」

「お、奇遇だな！俺らはここから西にある、でっかい島に用があるのだ。」

「用ですか？」

「実はな……」

「ここから西の島に見える城。」

そこには魔術を操るネクロマンサーがいる。

そのネクロマンサーは莫大な宝を持っているらしい。

「俺らはその宝目当てに、その城へ突撃しようと思ってるのだ。」

「キャプテン！目標の城が見えました！」

「野郎ども！準備は出来たか！」

「ooooooooooooooooooooo」

「我々はなんだー！」

「oo」

「そうだ！我々はスターク海賊団！世界一の海賊だ！！」

船が砂浜に着く。

奥には巨大な城があった。

そしてスケルトン達は、すでに船の近くまで来ていた。

恐ろしい数だ。

「突撃イ！！」

ワアアアアアアアアアア！！

だがこちらの数も負けていない。



スケルトン達が襲つ。

船員達が斬る。

スケルトンが倒れていく。

次々と海賊団は城へ攻めていく。

「皆つええ……」

「もう城の中に入っていくよ……」

「おめえらを危険にさらすわけにはいかねえ。ここで待っていてくれねえか？」

返事を待つ前にスタークは船から飛び降りていった。

「…行っちゃった。」

「暇だねー。」

「釣りでもしていきましょうか。」

「ワォーン……」

数時間して、船員の一人があわただしく戻ってきた。

「どうしたんだ？」

「船員たちが皆瀕死になっちまって…！」

「なんで!? あんなに強かったのに！」

「途中のザコは皆倒したんだが、城主が厄介だ！」

今キャプテンが一人で戦っている…！ すまん、もう行かねば…！」

ルーフス達が船から降りる。

「俺たちも行くよ。」

「あんたら…正気か！」

「私達だって、あなた達と同じ旅をする者なんです！」

「それに、恩を返さないと気がすまないよ…！」

「ワンワン…！」

「…ついて来い、はぐれるなよ…！」

船員とルーフス達は巨城へと駆けてゆく。

骸骨と骨、船員達の転がる階段をのぼり、

最上階に着いた。

「キャプテン!!」

スタークは床に突っ伏していた。

「ハア…すまねえ…血が足りねえ…」

「私の力を甘く見ていたようだなあ？海の賊どもよ。」

十字架の前に腰掛ける骸骨が言う。

「おや？海の賊の次は陸の賊か？」

ネクロマンサーは鼻で笑う。

「所詮、ただの人間どもよ。私の魔術で地獄まで送ってやるっ！」

「気をつける！そいつは吸血弾を撃って来る！

触れたらそいつを回復させるだけだ！」

ネクロマンサーが吸血弾を撃つ。

ルーフスがよける。

スケルトンがネクロマンサーの近くに現われる。

「召還した!？」

チェリーは倒す。

「ステーラ、危ない!」

ジャックがステーラを抱え込み横転する。

ステーラの頭上だった場所には砂利が落ちた。

船員がスタークを2階へと運んだ。

「どうした?まだ逃げてしかないぞ?」

「ハンマー!!」

ドオオオン!!

ネクロマンサーに衝撃波が襲う。

「な…なんだこの衝撃は…!!」

カン!カン!カン!

ネクロマンサーに釘がささる。

「ぐおお!!」

ネクロマンサーは床に腕をつく。

チェリーが振りかぶる。

ステーラも突撃する。

「…愚民どもめ!!」

バリリリリ!!

「きゃっ!」

「ワオン!」

チェリーとステーラは弾き飛ばされ、着地した。

電撃だ。

「大丈夫か!」

「はい!」「ワン!」

「スケルトン!!」

ネクロマンサーは叫んだ。

ルーフス達の後ろにスケルトンが現われ、ルーフス達を掴む。

「くそーはなせ！」

「ふは…はははは…私は死なぬ…まだ生きる…はははは…！」

死ぬという恐怖に混乱しているようだ。

「死ぬことが怖くてココロいかれちまうようじゃ、人間より上とは呼べねえな？ ああ？」

「キャプテンー！まだ完治してませんって！」

そこにはスタークが立っていた。

「俺たちや、死ぬこと承知で海に出てんだぜ？」

「殺す殺す殺す！！はははははははは！！」

ネクロマンサーが電撃を手に蓄えながらスタークに近づいてきた。

ルーフス達は目をつぶる。

「…あれ!？」

ネクロマンサーの前には何も無い。

ネクロマンサーの後ろに、みるみるスタークが現われた。

「良き航海<sup>たび</sup>を……」

ザムン!!

ネクロマンサーの背中から一突きする。

スケルトン達は消えていった。

「なんだ…なにがどうなったんだ…?」

「キャプテンは魔術を使える。」

「え?」

「何でも、子供の時、村にいるおばあさんから教わったそうだけ。」

「…もしかして魔女なのか?」

「さあ、そのことはあの人から聞かないとわかんねえな。」

「…っていつても、本人は何も語ってくれないんだけどな。」

「ここは甲板。」

船員達の手当てでも終わり、みんなすっかり元気に話し合っている。

スタークはルーフスと椅子に座りながら話す。

「ルーフスよ。私の代わりに戦ってくれてありがとうよ。」

「俺達は恩を返したただだよ。」

「はは、そうか。…野郎ども！」

スタークが船員達を大きな声で呼ぶ。

船員達は船長に真っ直ぐ向いた。

「今日は皆、久しぶりに死ぬ思いであった！」

しかし今宵は休めるか？ここに私達と同じ勇敢な旅をするものがある…！

寝て夢を見るわけにはいけまい！宴だ！！

「……………イエツサー！！キャプテン！！……………」

甲板の上で愉快的な宴が始まった。

「どうだルーフス、お前と私の冒険を話し合おうではないか！！」



「お、いいぞ！スタークはどこから来たんだ？」

「わしはここから南の南の島出身でな……」

ジャックは甲板の中を見ていた。

「おう、ボウズ、おめえはこっち、こねえのかい？」

「あ、僕はこのキャノンが気になって……」

「キャノンならまかしときな！

「この船で唯一レッドストーン回路を知るこのヤスベエが何でも、質問に答えるぜ！」

「本当ですか！えっと、えっと、まず仕組みはどうなって……」

女船員と話していたチェリーの前に、ポピーの花が差し伸べられた。

「お譲ちゃん、可愛い顔してるね、一緒に踊らないか？」

「はあ？なにアンタナンパしてんの？」

女船員が荒立ててこたえる。

「それって、船の中のプランターに植えられてた花ですよね。」

船員の一人がしたり顔でうなずく。

「植物を大切にしない人は嫌いですよ！」

チェリーはニコツと応えた。

船員は慌てて土下座し始める。

「ははは、あなたにや無理だよ、あきらめな！」

「はい、クッキー！」

チェリーがクッキーを船員に渡す。

しょんぼりしていた船員は一口食べて、一瞬で幸せそうな顔になった。

女船員達がなにやら群がっている。

「お手」

「ワン！」

ポテッ！

「「「「「や〜ん！かわいい〜！！」」」」」

男勝りな女船員もこの時ばかりは黄色い声だ。

船員達がボソツと話す。

「まさか狼に負けるとはな……」

「俺達も狼になりたいぜ……」

「はあ」

一晩たって、

海賊船に連れられ、ルーフス達は西の大陸に上陸した。

「いいんだよな。」

「ああ。おってくれてありがとう。」

「最後に言っておく。」

「俺達が海を支配するなら、おめえは陸を支配しろよ!!」

「ああ、『全部』！行ってやる！」

「では」

「じゃ……」

「良き航海を……!!」

二つの拳骨がぶつかり合った。

船が離れていく。

しかし愉快的な歌声は離れていかなかった。

我らが スターク海賊団

舳先<sup>へびさき</sup>で裂けてく 今日<sup>こんにち</sup>の海

大きくも小さき 船の形は

遠い友に届く はずもなく

友と再会を 果たすなら

今日の姿のままに 帰るのだ

「島は見えるか〜!」「ノー!」

「船は見えるか〜!」「ノー!」

それでは始めよう 宴の時!

それでは始めよう 宴の時!

「よし、皆、俺達も行いっ!」

「おおー!」「ワオン!」

ルーフス達は遠ざかる船に背を向けて砂漠の砂を踏みしめて歩く。

### 30：桜の咲く国

ここはグレート・スライヴシティ。

ハヤブサはビルの西窓から北西の方角を見つめている。

「ハヤブサ局長、何を見ているのですか？」

昔からの部下の記者が話しかける。

「…いや、ちょっと、昔離れた故郷のことを思い出してな…」

「へえ…故郷ですか。…私もいつかまた帰りたいですね…」

ハヤブサは笑って記者と話す。

「誰しも、故郷は絶対に忘れられないものだな。」

「…今度久しぶりに、帰ってみるか。サクラノ国へ…」

海賊達の海を離れて西へ行くルーフス達。

砂漠を踏みしめる音が辺りに響く。

目の前には緑の気候帯が広がり始める。

空まで突き抜ける山は絶景だ。

「すげえ……」

「こんなにすごい高山始めてみたよ……」

「まだまだ、世界は広いですね！」

ルーフス達は更に進む。

険しい山を登る登る。

頂上に着いた。

「……！！」

「まあ…」

チェリーが感嘆をもらした。

目の前には薄い桃色の花の咲く木。

桜だ。

桜が所かしこに咲き誇っている。

桃色の花びらは高原の上を舞う。

「桜だ…」

「すげえ…」

「いいですねえ…!!」

「ワンワン!!」

ステーラがたまらず高原を下っていった。

「おい！ステーラ!!待てよー!」



ルーフス達が追いかけていく先には

立派な城の立つ一つの国があった。

どどん！

堀の上に架かった橋の後ろには巨大な開いた門。

その前には二人の門番がいる。

ルーフス達はその橋の上にした。

「ここはなんていう国なんだ？」

「うーんと…』よひこそ さくらの国へ』…サクラノ国だっ

「サクラノ国が…」

ルーフスは鼻から香りを吸った。

「なんだかい匂いがするな……」

ステーラも舌を出して門に向かってクラウチングスタートのポーズだ。

…全く、行く気マンマンのようだ。

「行ってみましょう！ルーフスさん！私もこの良い匂いの料理、是非習いたいです！」

「行こうよあんちゃん！僕も、あの桜のこと聞きたいんだ!!」

「よし、じゃあ行ってみつか!!」

ルーフス達は門番へ話しかける。

「あの、この国に入りたいのですが……」

「旅人の者でございますか！ようこそサクラノ国へ！

ではまず殿に会っていただきましょう。」

「殿に？」

「お殿様のご命令で、お客様はまず、全て我が城に招待するようにと伝えられております。」

「分かりました。案内よろしく願います。」

「では、私にご引率くださいませ。…ゴヘイ！ここは任せたぞ！」

「へい！わかりました！」

ルーフス達は門番について歩く。

城下町を歩くと、所かしこから声が聞こえる。

「すたみな満点！豚串はいかがかねー!!」

「まあ！この掛け軸美しいわ…!!」

「でしょう、奥様。それは有名な…」

「いい扇子あるよ！扇子だけに、センスがいろいろか！」

「おいしい湯豆腐売ってるよ。」

「にぎやかな町だなー！」

「湯豆腐…」

チェリーが売り手のおじいさんに手を伸ばす。

「まあ、チェリー、城から戻ったら食べるって。」

「さあ、着きました。ここが我が殿の住む城、サクラノ城でございます

「！」

「でっかいなあ……」

白と黒できめた城はなんとも壮観だ。

ぶじぶじ…

着物をまとったたくさん女の子達が横に並んで正座している。

床にはきつちりと詰められた畳。

部屋の上座に近い所に置いた机にルーフス達は座っていた。

細長く広い部屋の中に小さい机。

なんとも異質な光景だ。

爺が旅人に説明する。

「いいですか、お殿様がいらっしやったら上座に向かって正座で頭を下げるようお願いします。」

「は、はい!!」

「分かりました。」

「殿様の、おなぐり!!」

上座の横から殿が来る。

凜々しい顔立ちに八の字のひげとあごひげを持っている。

黄色に輝く着物を翻し、扇子を広げ仰ぐ。

涼しい顔で旅人を見た瞬間、驚いた顔になった。

そして爺に向かって激昂した。

「爺！お客人に何故面おもてを下げさせておる！」

ルーフス達は驚いて顔を上げる。

「殿、お言葉ですが、あなたは殿でございましょう！」

もっと自信をお持ちくださいなれ！」

「自信などとうに持つておる！私は彼らと同じ、人なのだぞ!!」

人が頭を下げていいのは神や仏しかおらん！」

一段落ついたところで殿は旅人と向き合った。

「これは失礼した、旅の者達よ。私がこのサクラノ国を統治する、桜ノ道常<sup>ミチツネ</sup>だ。」

「ルーフスです。」

「ジャックです！」

「チェ、チェリーと申します。」

「こいつはステーラです。」

「ワン！」

「では、食事を持ってまいれ！」

女の子達が3人と1匹分の料理を持ってくる。

殿にも食事が持つてこられた。

湯豆腐に、牛飯、ゆで卵だ。

「あーさっきの湯豆腐〜」

チェリーがハート眼になる。

殿が説明する。

「この湯豆腐は城下町で歩いて売っているサルノスケのじいさんから頂いたものだ。」

遠慮なく、食べるがよい！」

「おいしー」

「うめえ!!」

「卵がとろけるよー!」

「ワンー!」

「はっはっはっは…愉快的旅人達じゃー!」

お殿様はこの国の歴史を話す。

「この国は私の先祖であった道良ミチヨシが桜ノ木を見つけたことから始まる。

道良はそのあまりの美しさに、すぐにここに城を作ることをきめたのだそうだ。

そして旅人がそのまま国に居座り、次々と発展していった。

今では、この国の他にどこまで桜の咲く国は無いとされているようになったのだ。」

「へえ…」

「この国は独特の文化を持っており、私はそれを大切にしたいね。」

殿ははっと気づき、扇子を閉じてちょんまげ頭をぺチン、と叩いて笑った。

「…いかん、私としたことが。熱くなり長くなってしまった。では、宴会を続けるとしよう!」

殿とルーフス達は語り合う。

「おぬし達、『ぐれえとすらいぶしてい』へ行ったと言っつのか!

では、ハヤブサに会ったのか?」

「え!?なんでお殿様がハヤブサさんを知ってるんですか!」

「何故と言われても、ハヤブサは私が若い頃の側近であったからだ。」

「『ええー!』」

「ガツガツ」

「ハヤブサさん、そうだったのかー!」

「やっぱりすごい人だったんだな!」

「ハヤブサの活躍は私も耳に入ってくる。さすがは私を育ててくれた人だ、と思ったよ!」

殿は笑う。

サクラノ城の宴会は夜まで続いた。



「お、もう夜か。では、皆、外へ出てみよう。」

「外へ？」

殿は障子を開ける。

「……………!!」

声も出せなかった。

桜がまばゆく光っている。

薄い桃色の光が点々と照らしていた。

ジャックもチェリーも、ステーラもうつとりしている。

「私は毎日、「」の景色を見ずに眠ることが出来ないのだ。」

本当に、この国を統治していて、良かったと思うよ。」

こうして、ルーフス達のサクランノ国の旅が始まった。

### 31：正月花火

「わあ!!」

チエリーが鏡を見る。

薄い黄色に赤の帯。

髪は後ろでお団子になっている。

着物屋の御上さんは褒める。

「とても美しいですよ、お姫様!」

「もう…!お世辞言わないでくださいよ!」

チエリーは嬉しそうだ。

「おーい、チエリー、終わったかー?」

「あ、はいー!終わりました…じゃあ、エメラルド4個ですね。」

「毎度あり!大事に使ってやって!」

「はい…」

チエリーは店の外へ出て行った。

「お、チェリーさん、いいねー!」

「ありがとう、ジャック君 … えっと… ルーフスさんは?」

「うん… あんちゃんはね…」

「うんめえ…!!」

… 寿司を食べている。

「おっちゃん、これホントつめえな!」

「ありがとよ、ボウズ! そいつはサクラノ国名物だ!

… 塩焼きも食ってくか?」

「お! お言葉に甘えて…」

チェリーはポカンとする。

「はっはっは… お嬢ちゃん、『花より団子』だな!」

隣の扇子屋の主人が冗談を言う。

チェリーは不満そうな顔になる。

「ルーフスさん…」

「お、チェリ」

ガツン!!

少年は道に倒れる。

頭には巨大なたんこぶが。

ステーラはたんこぶを何度もつつく。

「もう、ルーフスさんたら…」

チェリはルーフスの持っていた魚の塩焼きを食べる。

「んー…おいしい」

「はっはっはっはー…」

周囲の町民達が笑う。

「そついえばお前ら。」

魚屋の主人が聴く。

「『正月花火』って知ってるか？」

「『正月花火??』」

「サクラノ国じゃ、年が明ける日のことを『正月』といってな。その時に打ち上げる花火を『正月花火』っていうんだ。」

「花火かー…」

「花火は誰が作って、打ち上げているの？」

「ここからすぐ近くの、あの店で…」

ガッシャーン!!

丁度魚屋の主人が指差した店の前で砂煙がたった。

魚屋の主人は呆れた目をする。

「まーた始まったよ…」

店の前に倒れた青年は立ち上がって言う。

「おい！じじい！もう俺だって大人なんだ！

今年の花火こそ、俺があげるぞ!!」

「ばかやろうー！まだわしは現役じゃ！この3号玉！」

「誰が一番ちっちええ花火玉だ？あ？こら？この音物！

うるせえだけのじじいが！」

「たわけ！おめえにゃあまだ早いんだよ！

もっと昔の技わざっつーもんを磨こいてから言っつた！

…丁度いい！食いもん買ってこい！」

と言って、店の奥へと入っていった。

「ったく…!」

ルーフス達は魚屋の紹介で花火屋を見学することになった。

「俺はタネノスケだ。あのじじいはタマベエ。俺の親父だ。」

「ルーフスです。」

「ジャックです!」

「チェリーです。」

「で、この狼がステーラだよ!」

「ワオン!」

「花火はまず火薬玉を作ることから始まるんだ。

染めたい光の色に合わせて火薬に染料を混ぜる。

大きくしたいならファイヤーチャージを混ぜる。

で、紙で花火球を巻きつけてロケット花火にすれば打ち上げられる。

普通ならここで終わるんだが、俺は一工夫する。」

「一工夫?」

「花火の形を、素材で変えてやるのさ。金塊を加えるなら星型に、羽を加えればバラけたりね。」

「おおーそいつは楽しそうですね！」

「でも、あの頑固じじいときたら、

『うちは長年、円い花火でやってきたんだ！花火を星型にするなど、もっての外だ！』

とか言って、今年も円くて、色とりどりだけの花火を打ち上げるつもりだけ…

俺はいつも正月花火を見ている子供達の言葉を聞くんだ。

『つまんない』ってね。その言葉も知らずに、あのじじいは丸にこだわっている。」

「だからさっきもめていたんですね。」

「…ま、俺は今日、河原にこの違う形の花火を持って行くけどな。」

タネノスケは腕を力強く曲げて言う。

「頑固なのは、親父譲りだからな！」

ルーフス達はほっとする。

ただ仲が悪いだけじゃないらしい。

「今日、花火を打ちあげるんですか？」

「ああ、河原から国中に見えるように打ち上げるんだ。」



ぜひ、見て行ってほしいな。」

「はい…絶対見ます…」

…ちよっとその河原に言ってみても良いですか？」

タネノスケは笑顔でうなずく。

「ここは河原。」

レールが広くしいてあり、ディスプレイが繋いであった。

「レッドストーン回路とトロッコを使って打ち上げるんだね…」

「面白いな…」

「…あ、あれって、タマベエさんじゃない？」

あっちもこちらに気づいたようだ。

「おお、君らがマジハイが言っていた旅の者達か！」

「…」見学しても良いですか…」

ジャックが興奮ぎみに尋ねる。

「おうよ、『正月花火』を打ち上げる仕掛けっつーもんを、とことん教えてやるっ…」

「ディテクターレールにディスプレイを繋げて、トロッコが通るときに花火が出るんだ。時々、同時に何発も打ち上

げるために、

レッドストーンだけ使った回路で制御することもあるがな！」

「へえ〜!!」

「ま、確実に回路を組めるのは、わししかおらんだろうよ！」

「タネノスケさんは出来ないのですか？」

タマベエはしかめっ面になる。

「あいつは何もできねえよ。」

「タネノスケさんは花火の形を変える技を作ったのですよね？」

「あんなものは、エセ花火だ！」

「でも、子供達は『つまんない』って言っているのでしょうか？」

チエリーがズバリと言った。

タマベエは核心を突かれて正直に話す。

「あいつは花火のことを分かっちゃいねえ。

花火は先人の思いも打ち上げるものだ。

そんな花火を、勝手に星型にするなんて行為など、許せたものではない！」

「そんなことを言っているにも、子供達の評価は何も変わりませんよ？」

「タネノスケさんを、一度信じてみてはどうですか？」

チェリーは言った。

タマベエはしぶしぶうなずく。

「…そうだな、今年が、あいつの作った花火の始めての打ち上げになりそうだ。」

日はもう地平線に見えていた。

夜になって。

寒いのに大勢の人たちが外に集まっている。

チェリーの下駄がカツカツとなる。

ステーラはクッキーを頬張っている。

「いじらへんでいいだろー」

ルーフス達は河原の草の上に座った。

「もうすぐ始まるねー」

「楽しみですー！」

「ワォーンー！」

ピュ〜〜〜…

バァン!!

橙色の大きな火花が空に舞った。

「はじまったー！」

観客はどよめき始める。

ピュ〜

ピュ〜

ピュ〜

バン!!

バン!!

バン!!

星型に、円型に、クリーパー型だ。

「タネノスケさんの花火だ！」

「素敵…！」

その後も、何発もの花火が打ちあがる。

城の上からも花火を見ている人がいる。

「天晴れな正月花火じゃ…！」

青色、黄色、紫色…

パラパラと落ちていく花火、

きれいに真っ直ぐ落ちる花火…

小さい花火、大きい花火…

高く拡散する花火、低く拡散する花火…

どれも、新鮮な花火ばかりだ。

子供達も喜んでいる。

タネノスケも真下から笑ってみていた。

タマベエは不満そうに瞳だけで花火を見ている。

そして最後の花火。

プツ〜… プツ〜… プツ〜… プツ〜…

同時に5発の花火が高く放たれた。

皆の視線が花火を捕らえている。

パアアアン…!!

漆黒の空に。

桃色のしだれざくらが咲いた。

タマベエは花火と向き合った。

「ああ…桜が…桜が咲いておる…!!」

しだれざくららは花びらをあたりに散らすように消えていった。

観客達は感動で騒ぎ始める。

絶え間ない拍手が国中に響く。

殿様も日の丸を描いた扇子を開いて笑う。

「天晴れ！天晴れであった！はっはっはっはっは!!」

「これが…正月花火かあ…」

ルーフスが草に寝転がる。

「すっげえ…」

寒い空に舞った正月花火。

それは、人々の心にも焼きつくほど強い光であった。

### 32:「強い」刀

ルーフス達は今日もサクララノ国に行く。

タネノスケとタマベエの話では…

「ここから南の町へ歩いていってござらん。

サクララノ国の刀が見られるよ。」

「…その店主はわしに負けないぐらいに頑固な奴でな。斬られんように気をつけるよ。」

「…どんな人なんだろうな…」

「タマベエさんを超える頑固な人…」

「言葉には気をつけた方がいいかもしれないね…」

店の前に看板があった。

『刀や雑刀 売ります』

「ここみただね。」

ルーフス達は店に入っていく。

「…こんにちは…」



店の中には今まさに刀を作っている男がいた。

黒く太い眉の間にしわを寄せて、刀をじっくりと見ている。

「あの一」

男は無言でキラツとした目で睨んだ。

「ここで刀をつく…」

「ヒュン！」

「おわっ！」

「わー!!」

「きゃっ！」

「ワオン！」

ルーフスの目と目の間に鋭い矛先が向けられる。

「…刀や雑刀も知らん外国人め…この国から追っ払ってやるわ！」

男は店から飛び出し、刀をルーフス達に向かって振り続ける。

「ヒュン！ヒュン！ヒュン！」

「ちょっと！話を聞いてください！」

「黙れ…」の茶髪野朗め…」

店の中から小さい女の子が出てきた。

おかつぱにかわいらしい赤い着物を着ている。

続いて狼が一匹。

橙色の首輪。

ステーラがハート眼になる。

「だめだよとおちゃん！おちついてよお！」

「ウメは黙ってる！」

「いいかげんにしてよお！またおきゃくさんへらすきなの！」

ウメと呼ばれる女の子は大人らしく言う。

男はさらにヒートアップする。

「俺の意思を通して何が悪い！」

「ウメちゃん！旅人達よ！離れてなさい！」

外からタマベエの声がした。



ステーラと狼は仲良く駆け回っている。

「私たちはウメっていうの！とおちゃんはミネエロウ。あのオオカミはユズ。メスなのよ！」

「ははは、ステーラ絶対ユズに惚れてるな！」

「ごめんなさい、とおちゃんがめいわくかけて。」

「いやいや、大丈夫だよ、いきなり押しかけた俺達も悪かった。」

「でもウメちゃん。」

チェリーが質問する。

「なんでお父さんはこの国以外の人を嫌うの？」

「とおちゃん、このごろ、とおい国の会社で店をつぶされそうなんだ。」

「この店の刀、国中にこんきび、つぶれることもないのにな。」

「だからあんなに追いつそうとしてたんだね。」

タタタ、タタタ、タタタ……

馬の蹄うまひの音がする。

「ははは……ドクーのだ平民達よ……」

「あ……つわさをすれば……」

男ががばつと起きて外へ行く。

「あなたはほんトウに馬鹿なヒトーだー。

こんなボロイ刀で、マードやっていくつもりなのか？」

豚のように太った貴族が、馬に乗っていた。

なにやらおかしなしゃべり方で話す。

男は咄嗟に店に落ちていた薙刀を貴族に向ける。

従人が同時に男にピストルを向ける。

「とつとこの国から出て行け。」

「ノンノン…私はこの店を差し出すだけでいいといっぺルのです。

こんな火でどうにも消せる店など、ナクても変わりありませー  
ンー」

「この店は代々から受け継いだ店だ。そうやすやすと渡せるものか。」

貴族は笑って言う。

「あなたは世界を知らない。どんなに鉄をカタークしても、ダイヤモンドには勝てないのですよ。」

…そうだ！明日、河原で勝負をしまショーウ！わたーしがわーが国から剣士を連れてきまーす。それであなーたの勝ち…つーまりあなたの刀が強いと証明されーれば私はサガーリまーす！」

「本当だろつな。」

「本とーうでーす！でーは、わたーしは帰るーとしマース。でーは、また明日。」

貴族は馬で強引に人々をよけさせながら帰っていった。

ステーラとユズが屋根の上で一緒に月を眺めている。

ルーフス達は刀屋の中で話をしていた。

「あの外人さんはランプスこうしゃくっていうの。」

「2年前に突然やってきて、『店を売ってくれ』っていうのよ。」

「なんか話し方がウザイ奴だったな。」

「いかにもごくつぶしって感じでしたね…」

「でき、ミネゴロウさん、どうするの？」

ジャックが尋ねてもミネゴロウは話そうとしない。

「とおちゃん、この人たちはあの人とちがっていい人たちだよ？」

「…ハン！」

ミネゴロウは2階へ上っていった。

バシン！

ふすまを力強く閉めた音が響く。

「ごめんなさい、わたしが話すよ、たびびとさん。」

ウメは話し始める。

「たぶん、明日、とおちゃんはそのけんしと戦つとおもいます。だいじょうぶ、とおちゃんはすっごく強いんだ！」

ウメはミネゴロウの刀をまじまじと見て言う。

「わたちは、とおちゃんの刀はだれにもまけないとおもつんだ。とおちゃんほど、刀をだいじにおもっている人はいないよ！」

「ウメちゃん……」

チェリーは懇願する。

「私も、その戦い、観ても良いかな？」

「え？」

「戦いが気になるんじゃないかな……」

ミネゴロウさんがどれだけ刀を愛しているかを観たいの！

……あ……でもミネゴロウさんが許さないかな……」

ウメはすぐに笑顔で言った。

「だいじょうぶ、とおちゃんは素直じゃないから、  
今2階にいるあいだもわたち達の話、聞いているんじゃない？」

ドタン。

2階から物音が聞こえる。

ウメはくすつと笑う。

「ほらねっ」

「ははは、ウメちゃん、すっかりとおちゃんのこと分かってんなー！」

「ふふふー！」

「ははははー！」

「今夜はお兄ちゃん達、どうするの？」

「んーと…ここにいるもあの人の機嫌を損ねるだけだな、  
ジャック、チェリー。宿を借りに行こうぜ。」

「そうだね…話を聞かせてくれてありがとう、ウメちゃん。」

「明日、また見に来るわ。」



ウメはニコッと笑う。

「うん！お兄ちゃん、お姉ちゃんたち！おおかみちゃんも！また明日！」

ルーフスは屋根の上のステーラを呼ぶ。

「おい！ステーラ！行くぞ！」

「ワン！」

ステーラは返事をしてからユズにお辞儀して屋根から下りる。

「キャン！キャン！」

ユズも挨拶をしているらしい。

ルーフス達は夜の町を歩いていった。

翌日。

ルーフス達は河原に来た。

ミネゴロウは仁王立ちで敵を待つ。

ウメはルーフス達の横で見ている。

前に馬に乗った貴族と剣士らしき男が見えた。

従人達も6人ほどか。

従人達は貴族と剣士を守るように遠くから囲んでいる。

貴族がある程度刀屋と近づいた所で、止まる。

「おやおやー！みなーさんおハヤーい！」

「そのふざけた声はもう聞きたくはない。さっさと始めよう。」

「わかりました！では、マンティース！行きなさい！」

「かしこまりました。」

マンティースという男が前に出る。

敵の姿を見た瞬間、マンティースは貴族に向かって話す。

「ランプス侯爵、私にはこの人とは向かいあわせできません。」

「どういーうことだ？そこまで強いというのか？」

「いえ。」

マンティースはミネゴロウをみて言う。

「私には老人を傷をつけることはしない。だから戦いはできないと  
いつているのです。」

「おい、若造、敵に背を向けていいのか？」

剣士は避ける。

マンティースは目を鋭くさせる。

「侯爵、たった今、彼は敵となりました。始めましょう。」

「グレートであるぞ！始めよー！」

マンティースはダイヤの剣を抜いてミネゴロウに走り出す。

ミネゴロウは刀を見て呼びかけた。

「雷鳴…今日も轟とんいてくれよ。」

刀から青白い光が走ったように見えた。

マンティースの刃の乱撃が始まる。

ミネゴロウはその乱撃を次々とさばいていく。

ミネゴロウの刀がダイヤの剣とぶつかることに雷が走っているよ  
うだ。

ルーフス達にも、不思議なくらいその光が見えた。

「ち、近づけねえ!」

「刀からこんなにパワーを感じるなんて…!」

「ひざが笑ってるよ…!」

ジャックはひざを揺らす。

ステーラとユズも一生懸命に見ていた。

マンティースが乱撃の途中から話し始めた。

「そのような古めかしい刀でよく対戦を挑んできましたね。

さび臭くてたまりませんよ…!」

「ハン!… 剣が壊れそうになって変えるようなお前らとは、違うんでねえ!」

キーン…!

ミネゴロウが刀を振り切って乱撃が止まった。

「この刀はもう30年使ってるんだよ!」

ミネゴロウが始めて笑顔を見せた。

まるで自分の子供を自慢するようだった。

「30年…!しかし刀の歳が勝負に比例する訳ではあるまい!」

マンティースが切りかかる。

ミネゴロウが力強く刀を振った。

ピキーン!!

マンティースのダイヤの剣が背後に飛んでいった。

マンティースは驚愕する。

ミネゴロウはマンティースの首元に刃を当てた。

「終わりだ。」

「やった!とおちゃんが勝った!」

ミネゴロウは刀を鞘に納める。

マンティースは潔く負けを認めた。

「…あなた…すごいですね。…私はここで、また成長できた気がします。」

…あなたのサムライの心、しかと学びました。

…については、また5年後、勝負を申し込みたい。」

「…ハン！…おめえのあの素早い刀さばき。到底素人の真似できるもんじゃねえ。」

受けてやるよ。また5年後に…」

マンティースとミネゴロウは握手を交わす。

ランプス侯爵は悔しそうに言った。

「ぐぬぬぬ…でーは、わターシたちは下がるしかないでーすねー！」

ランプス侯爵は馬をリターンさせる。

一件落着。

…？

ランプス侯爵の馬は3歩歩いてから、もう一度こちらを向いて止まった。

「はい、下ガりました」

ダン！ダン！ダン！

従人がミネゴロウに3発打ち込む。

「とおちゃんー！」

「」「」「ミネゴロウさん！！」「」

ルーフス達は駆け寄る。

「キャン！キャンー！」

ミネゴロウは苦しそつに血を吐く。

「ジャック、医者呼んでくるぞー！」

「うんー！」

ルーフスとジャックが駆けていった。

チェリーはランプス侯爵を睨む。

マンティースも驚愕する。

マンティースはランプス侯爵の前に立つ。

「なーんだ？マンティース？」

「すぐにお止めなさい、侯爵、いや！ランプス！  
あなたは騎士道を侮辱した！」

「お前マーデも私に口答えする気か？」

ダン！ダン！ダン！

「マ…マ…マ…マ…ス…」

ミネゴロウが苦しそうにマントイスが撃たれるシーンを見た。

「では…あの店をたダーチに壊してしまうのでーす！」

「待ってください。」

ランプス侯爵が見ると黄色の着物姿の娘が立っていた。

「なーんだ？お前マーデも私にたてつく気か？…撃ってしまえ！」

ピュン…ピュン…ピュン…

チェリーは素早く動く。

ピストルの弾は地面に刺さっていった。

そしてチェリーが跳んで馬の頭を超える。



「な…」

ランプス侯爵は驚く。

ランプス侯爵の前に乗り、鼻先に剣を当てる。

「この国に…もう関わらないでください！」

「ははははい…もももつ来まーせん…逃げろー!!」

ランプス侯爵は馬を走らせる。

走ると同時にチェリーは地面に着地した。

ジャックとルーフスが戻ってきた。

「あれ？あのバカ侯爵は？」

「もう行きました、この国には関わらないって約束して…それよりミネゴロウさんとマンティースさんを！」

「あーマンティースも！」

「どうですか？先生！」

「大丈夫だ、どちらも、頭や心臓には当たっていない、止血して私の家に運ぼう！」

そして。

ミネゴロウとマンティースは何事も無かったようだ。

少し病院で休んで各々帰った。

ルーフス達も刀屋へ行く。

チェリーは既にメイド服に着替えていた。

刀屋の座敷で、ウメは眠っている。

どうやら疲れてしまったようだ。

「本当にすまなかった。外人だとひいきして、おもてなしも何も出来なかった！」

何と魂が腐っていたことか！」

ミネゴロウが謝る。

「いいんですよ。それより、大事に至らなくてよかったですね！」

「本当に、ありがとうございます。」

ミネゴロウが笑顔を見せた。

ステーラとユズは寂しそうに向き合っている。

ステーラはユズに黙って背を向けた。

ユズは察して、元気良く吠える。

「キャン！」

「じゃあ、僕らはこれで。」

「ちょっと、お嬢さん、待ってくれないか。渡したいものがある。」

「私ですか？」

チェリーが刀屋へ戻った。

ルーフスとジャックが不思議そうに見守る。

「あの侯爵に、恐れも無く、命を賭けて向かってくれて、本当にありがとう。」

「いえ…私も、一人の剣を扱うものとして騎士道を侮辱されたのが許せなかっただけです！」

「君は、本当に強いのだな。」

ミネゴロウは笑う。

「…えーと、それで渡したいというのは…？」

「これだ。」

黒紫色の細長い刀。

「私が作った刀、名前を『閻火<sup>えんか</sup>』という。

黒曜石を念入りに融かし鋼を作ったものだ。」

「黒曜石を…！」

「この刀が選ぶ持ち主。それに似合うのは、まさにお前さんしかない。」

チェリーはその刀が放つ気に怯えていた。

『貴様にこの私を扱えるのか』

まさにそう問いかけているようだ。

「…分かりました。大切に、使わせていただきます！」

ミネゴロウはうなずいた。

「」「ありがとうございます！」「」

「またいつでも来なさい！」

「ワン！ワン！」

「キャン！キャン！！キャン！」

ステーラは再会を約束しているらしい。

町は橙色に染まる。

ルーフス達はサクラノ国の門を出ようとしていたのだった。

「ありがとう、サクラノ国。」

ルーフスは振り向いてつぶやく。

山に咲く桜と城と町が見える。

ルーフス達は別れを言うと、夕日に向かって元気良く走っていった。

「ジャック、チェリー、ステーラ、次の世界へ行くぞ！」

「「「おお！！」」」

「ワオン！！」

## 番外編 6：クリーパーの恋

私、エンジェル村に住む、ナバーナと申します！

毎日の日課、料理の練習、運動、勉強、そして読書！

この前、グレートスライヴシティに行った時に買ってきた本を読んでいます！

タイトルは「クリーパーの恋」。今日で4周目！

では、一緒に読んでみましょう！

ナバーナは本を開く

暗い暗い洞窟の中。

モンスター達は人間を襲うために各々の場所で隠れていた。

1匹のクリーパーがポーっとたっていた。

ドン！

スケルトンが触れて倒す。

「おらー！下っ端！ボーっとしてるんじゃないやねえよ！」

「あ、「じめんなさい」」

僕はクリーパーといいます。

まだ人を襲うのになれていない、下っ端なのです。

今日もさつき、叱られてしまいました。

しっかり考えていたのになあ…

……

…

トン…

足音が聞こえる。

光が洞窟内に広がっていく。

「来たぞ…」

「キシキシ…」

先輩達がつぶやいています。

チャンスです。

ここでしっかりした所を先輩に見せれば…

クリーパーが陰から人間の姿を確認する。

僕のことをみと…

見るとそこには自分と同じ黄緑の服を着た女の子。

その時です。

僕の心が激しく震えだしました。

ただただその女の子を見ただけなのに。



そればかりではなく。

その女の子とお話がしたいとまで思っていました。

「あ〜れ〜」

クリーパーのすぐ後ろで先輩のスケルトンが飛んでいった。

「ここは廃坑。

エンダーマンが木材でバーカウンターを自作してポーションを作っていた。

「何なのでしょうか。」

「ん〜?」

エンダーマンが蝶ネクタイのホコリをはたいて首につける。

「僕は、女の子に会いました。」

「ほう。」

「その時です。僕の胸が大きく震えだしたのです。

「この震えは病気なのでしょうか?」

「病気…か。」

エンダーマンはポーションを振る。

そしてそのまま話を続けた。

「それは恋…だね。」

「…」

エンダーマンはバーカウターにポーションを置いた。

「彼女に、会いたいのだろっ？」

「うん。」

「ならば、勇気を出して、声をかけてもらいなさい。」

ぽーっ！

クリーパーの顔が赤くなる。

「なにやら熱がでてきたようです…」

「ほっ、ならばなおさらだ。…恋とは、そんなものだ。」

「…」

クリーパーは訳も分からずうなずいた。

それからというもの。

僕は勇気をだして告白しました。

返事は「よろこんで！」。

早速、夜にデートを申し込みました。

朝は苦手なので。

夜の都会はとてもきれいです。

まるで洞窟で光る鉱石みたいに。

「きれいだね〜」

女の子は僕に話しかけます。

「。じ。」

僕も答えます。

たったこれだけなのに、僕はうれしかったのです。

エンダーマンのポーションを飲んだら、

心が更に躍りました。

女の子は僕と楽しそうに笑っています。

僕は嬉しさのあまり公園で踊り始めました。

気づけば彼女はもういませんでした。

そういえば途中で「もう帰らなくちゃ」と聞こえた気がします。

僕は立つ気力も無くなってその場で眠りました。

夢の中は全部彼女の色に染まっていました。

彼女の笑顔は心に焼きついていました。

僕はそれだけで十分でした。

十分幸せでした。

気がつくくと、僕は草原で横になっていました。

そこで僕は、今のが全部夢だったことに気づきました。  
僕は告白もしていないし、彼女と笑っていないのです。  
僕が彼女に近づいたら、彼女は僕を避けていくだろう。  
もしくは僕は殺されてしまうだろう。

クリーパーは草原に咲いた一輪の花を見る。

きれいなバラです。

彼女に渡して、僕の気持ちを知ってもらいたいです。

僕は彼女に告白できますか？

クリーパーは月に問いかけるが、勿論月は答えなかった。

クリーパーはうつむく。

…お月様は意地悪です。

…僕は彼女と…笑えないのですか…

「きゃああああああ!!」

クリーパーは南からの声を聞く。

…あの子の声です！

クリーパーは夢の情報から、バラを口で持って行って走っていった。

どこですか？

草原を駆け抜ける。

どこにいますか？

山を飛び越えていく。

ここなのですか？

砂漠の砂を蹴っていく。

聞こえない。

巨大なキノコの横を抜けていく。

感じられない。

堅い粘土を踏みしめる。

あなたはどこに…!!

冷たい氷の上を滑っていく。

!!

彼女が3匹のモンスターに襲われていた。

「ひっひっひっひっ…」

「この前はどつも」

「フッ飛ばしてくれて…」

「いや…いや!!」

夢の中の彼女の笑顔が思い浮かべる。

クリーパーは涙を流す。

僕は…

あなたの笑顔が見れただけで…

幸せです！

ありがとう!!

クリーパーが輝く。

ポオオオオン…

「「「ぎゃあああああああああ!!」「」

モンスター達は吹っ飛んだ。

女の子は地面に落ちていたバラの花を取った。

「もしかして…私を…?」

女の子はその場に立ち尽くした。

それから。

女の子は大事そうにバラを家の鉢植えに植えたのだった。



私はこの話を読むたびに思う。

恋って、人を勇気付けさせてくれるのだな、と。

私もいつか、こんな恋をしてみたいな！

「おい、ナバーナはおるか？」

「あ、はい！」

ナバーナは机に本を置いたまま、駆けていった。

### 33：二つの燃える国

サクラノ国をあとにしたルーフス達。

広大な荒地に続く一本の道路を辿っていた。

荒地には動物も、植物も一切見当たらない。

驚くほど新鮮に、冷やかな茶色の乾いた土が地平線まで続いていた。

ステーラは道路の白線で綱渡りをしている。

ジャックはバンダの辞書を開いて確かめた。

「この荒地の一本道…これだよね。」

見ると目の前の景色にそっくりな光景が白黒写真に写されていた。

「まねに同じですね。」

「で、この道路の先の国はどんな国なんだ？」

ジャックは笑顔で話す。

『ジエラーナ』って言う国で、石油で栄えた国だよ！

国名はその土地の昔の言葉で『燃える』という意味らしいんだ。」

「なるほど…石油に…石油につけてつけの名前ってことだな。」

ジャックはいきなり冷静になった。

「でも『燃える』には二重の意味があつて……」

「二重の意味？」

チェリーが問う。

「その国と間に砂漠を挟んで『イクオラ・ジェラーナ』っていう国があつて……」

ジェラーナ国と石油問題で対立しているんだ。今も双方の国で犯罪が起きている。」

「石油問題か……」

「……」

ルーフスが沈黙する。

「……ってなんだ？」

チェリーとジャックがずっけろ。

「あんちゃんも少しは知っておいてよ……」

「石油問題とは、石油の取り合いで対立する問題のことですよ……」

「あーなるほど。」

「ワン！ワン！！」

ステーラが吠える。

狼の鳴き声と共に前を見ると、そこには都会が広がっていた。

ビルを架け渡すガラスの通路を人がせわしなく歩いている。

タクシーに並ぶ列からまた一人、タクシーに乗っていった。

カフェにはカップルが楽しそうにコーヒーを飲んでいたり、

めがねの男性が足を組んで新聞を読んでいた。

「すごいですねー！」

「グレートスライヴシティに戻ってきたみたいだ！」

「ワン！ワン！」

ステーラも大喜びのようだ。

「さて、まずはなんか食っていくぞー！」

「いいですねー！行きましょー！」



「クウン」

「おいしそ〜」

その時であった。

いきなりルーフス達の後ろの道路にすごい勢いで車が止まる。

ビーツ

窓が開く。

一人の男が話し始める。

「君達、旅人？旅人だよね？私はジュート放送局のドーカ・デナ記者と  
いうんだ！」

早速だけど君達には我が放送局で君達の今までの旅路からこの国  
に来て何を思ったかを

聞かせてもらおう！大丈夫？」

「え、えっと」

「オーケイ！では行こう！」

デナは無理やりルーフスを車に押し込める。

コックのおじさんはルーフスのチキンを持ったまま困惑する。

「あの…？」

デナは一気にアクセルを踏む。

車は反動をつけて去っていった。

そう、ルーフスのチキンから…

「俺のチキイイイイイイン!!」

ルーフスは窓から後ろに手を伸ばし、涙を道路に落としていった…

ルーフスの涙が小粒に収まった所で。

キイ!

「あれ?ここが放送局?」

見ると放送局以上に豪華な、神殿といった感じだ。

デナはさっきのテンションとは思えないくらいに冷静に話す。

「騙してしまってますまなかったな。だが仕方がない。これは国家機密だからな。」

「」「」「国家機密う!?!」

「ワオーン!?!」

「私は大統領からの命令で、君達をここに連れて来い、といわれたのだ。」

「でも…なんでただの一旅人の私達を…？」

「一旅人…だからと答えておこう。これから、大統領から直々に詳細を説明してくれるからな。」

大きな扉が開く。

横にはボディーガードが合わせて20人。

椅子の横にも二人、ボディーガードがいた。

後ろの大きな窓からはこの都市の景色が覗いていた。

こげ茶色の椅子には大統領が座っている。

「ようこそ、燃える国、ジェラーナへ。」

黒いスーツに紺青のネクタイ。

白い肌に堀の深い目、薄い茶髪の男性だ。

「私がこの国の大統領、エルジア・ストックだ。」

緊張で口が一字になるルーフスとチェリーの横で、ジャックは問う。



「何故僕達をここに呼んだのですか？ 国家機密ってなんですか？」

ストックは答える。

「私は、今対立している国、『イクオラ・ジェラーナ』と石油問題で和解したい。」

ストックはそのまま続ける。

「このまま彼らが悪い、私達が悪いとっていては、何も進展しないと私は思った。」

そこで私は、この和解の手紙を筆したのだ。

しかし、我が軍で各々が武器を持ち、行ってしまっただけでは元も子もない…

油断した所を打ち滅ぼしてしまう、という意味をこめるだけになっ  
てしまうのだ。」

大統領は椅子から立ち上がり、面と向かって話す。

「頼む。君達が、この手紙を届けてくれないか。」

突然の頼みにルーフス達は目を開く。

「でも、私達はこの国とは全く関係ありませんよ。」

そんな私達に、この国を賭けてしまっているのですか？」

ストックはうなずく。

「私のような、ジェラーナ国に偏った者が行ってしまったっては駄目なのだ。」

君達なら、この手紙を安全に、何の疑いもなく運んでくれる。

君達は『中立』な立場なのだ。…勿論、君達の判断に任せる。私のわがままを、

どうか叶えてくれるかな。」

ルーフスは真剣に悩む。

そしてジャックとチェリーとも話し合った。

結果は…

「分かりました。やってみます!」

ストックは笑顔でルーフスの手を握る。

「ありがとう、勇者達よ!」

「あー…」

ジャックが大統領に話しかける。

「もしこの手紙を届け終えたら…」

「この国の工場を見せてもらっても良いですか!!」

ストックは少年の目線でうなずく。

「わかった。私が工場に頼んでみよう。」

「ありがとうございます!!」

「では、行って来ます!」

「幸運を祈る。」

ボタン…

扉が閉じられる。

「…」の手紙で、この対立が無くなればいいのだが…」

キイ…

「大統領、今の輩がフェイクの旅人達ですか?」

見ると金髪に金色の口ひげ、迷彩柄の帽子に制服を着た男が入ってきた。

「おお、アーティクル長官、そつだ。彼らがこの国の希望さ。」

「…なるほど、そつですか。」

アーティクルは少し笑う。

「これで、本当に平和は訪れるのでしょうか……」

「…隣国も、戦争は望んでいないだろう。大丈夫だ。きっと上手いくよ。」

二人は大きな窓から広大な砂漠の地平線に見えるイクオラ・ジェラーナを見ていた。

広大な砂漠を進むルーフス達。

イクオラ・ジェラーナはまだ遠い。

「まだまだあるな、これは…」

「あんちゃん、あれが石油だよ…」

見ると黒い液体がなみなみと湧き出していた。

「これが機械の原動力になっているんだね。」

「うーん…」の液体が……」

ルーフスはいまいち納得出来ないようだ。

ババババババババババ!!

プロペラの音が近づいてくる。

「なんだ?…」

チェリーが後ろを見て慌てて言った。

「ルーフスさん、走りましょう!」

「え…!?!」

ババババババババババババ!!!!

後ろから赤いヘリコプターが突進してくる。

「わああああ!!」

ルーフス達は走る。

とにかく前に。

ダダダダダダ!!

ヘリコプターからマシンガンが放たれる。

ルーフス達のすぐ後ろの砂がはじかれていく。

ヘリコプターは執拗にルーフス達を追いかける。

「…逃がしてもくれなそうだな。」

ルーフスはジャックとチェリー、ステーラに言う。

「ジャック！チェリー！ステーラ！別れてヘリコプターを叩き落そう！」

「ワン！」「わかった！」「了解です！」

ジャックとステーラが左、チェリーが右、ルーフスは正面に立った。

ヘリコプターは作戦に勘付いて上昇し始める。

「くらえ！」

ルーフスが釘を発射する。

チェリーとジャックも弓矢を発射した。

ガン！ゴン！ガン！

3つの攻撃は見事にヘリコプターに命中した。

ヘリコプターはふらふらと下降する。

「砂山に隠れる！」

ルーフス達は急いで走る。

バァァァン!!

隠れるより前にヘリコプターは爆発した。

「おわぁー!」「きゃぁぁ!」「うわぁー!」「……!」「!」

ルーフス達は衝撃につまづいた。

「あっぶね……」

ヘリコプターの方を見ると、慌てて赤いヘルメットの男が逃げようとしていく。

「ジャック!あれ残ってるよな!」

「……!……わかった!あんちゃん!」

ジャックは黒い薬を男に投げつけた。

パシァァン!

薬が割れる。

「あれ……」

男の動きが鈍くなる。

ルーフス達はすたすと男の前に立ちふさがった。

「おい、なんで俺らを攻撃したんだよ……」

男は奇術を使う魔法使いを前にしたような恐怖を感じて  
土下座する。

「か……堪忍してくれえ！……こここれはある人からの命令でやったこと  
だ！」

「いやだから……なんで攻撃したかって聞いてんだよ！  
心配すんな、俺達はお前をどうもしねえから。」

「……本当だな……」

男は深呼吸して話す。

「和解の手紙を届けさせないためだ！」

「……なんで和解しちやいけなんだ？」

「まあ、お前らは旅人だから知る由もねえよな。」



男は続けて話す。

「ジェラーナ国とイクオラ・ジェラーナ国には石油問題しかあるわけじゃない、

宗教問題もあるのだぞー！」

「宗教…!？」

ルーフス達は驚く。

「でも、「」の辞書」はそのことは書いてないよ!？」

男は辞書をまじまじと見た。

「宗教問題は最近、ある男から団体ではじまったものだ。だからその古い辞書には載っていないんだよ。」

…その男が我々のリーダーだ。我々は信仰する人が違うものと和解する気はない。」

「…その男って誰なんだ？」

「それは 「

「ここは大統領室。」

ボディーガード達が部屋の中で血を流して倒れていた。

大統領のスーツの肩が赤く染まっていた。

「まさか宗教問題の引き金が君だったとはな…！」

「アーティクル！」

赤い戦闘服を着たその人物が、大統領に銃をつきつけていた。



チェリーもうなずいた。

「止めるものか…すべてはマクス・エルダム様に誓ったためなのだからな！」

ルーフスは男を振り落とす。

「ジャック、ステーラ。この手紙をイクオラ・ジェラーナに届けてくれ。」

俺とチェリーは大統領の所へ向かう。」

ジャックはうなずいた。

「わかった！必ず届けるよ！」

「バウ！」

ステーラも力強く吠える。

「よし、行くっ！」

「待て！」

見ると赤いヘルメットの男がTNTの山に火をつけようとしている。

「…お前…まだ!!」

「俺がそれを許すと思うか…？マクス・エルダム様の思想を守るためなら！」

俺は例え身が滅んでも！」

ドオン！！

ルーフスが男の頭に強い蹴りを入れる。

男は砂漠を少し転がった。

「お前がそうしたら…マクス・エルダムは喜ぶのか？」

…お前が自殺して、違う意見を殺して、マクス・エルダムは喜ぶのかよ…！」

「……」

男は真顔で砂を見つめる。

「俺はマクス・エルダムの思想はわからねえ。だけど、

この世界のどこにも！心の底から戦争がしたいなんて奴はいない！」

ルーフスは動かない男を背にしてジェラーナに歩いていった。

チェリーも男を一度見つめてから、ルーフスの後をついていった。

「じゃあ、ジャック、ステーラ。頼んだぞ！」

ジャックとステーラはうなずいて、一つの包みを男の元へ置いて、イクオラ・ジェラーナに向かった。

男が包みを開けると、そこにはパンとリンゴが二つずつ置いてあった。

男はパンを一噛みして、目を覆って震えた

ここは大統領室。

アーティクル長官は大統領の頭を足で踏む。

「あなたがあの隣国と仲良くしようとしたのが、間違っていたのだ。」

ストックはアーティクルを睨む。

「お前の目的は…サラピス教の弾圧だろう！」

アーティクルは冷静に答える。

「勿論だ。私はコーポリム教の一信者として、違<sup>たが</sup>う<sup>う</sup>心を殺す義務があるのだ。」

「お前は宗教がなぜあるかを間違っている！」

ストックは怒鳴る。

バン！

ストックが目をつぶる。

パリン！！

アーティクルが銃を発砲する。

弾は大統領の後ろのガラスに当たり、一気に割れた。

ストックの上に幾つもの破片が降り注ぐ。

「君はまだ一つ前の立場でいられるつもりなのか？」

ウ~~~~~!!

パトカーのサイレンが聞こえてきた。

「…やはりな。」

「私の胸には…特殊な波長を感知する………防犯装置がしこんである。  
銃弾の衝撃波を…感知した瞬間…警察が作動するようになってい  
るのだ。」

ストックは息を切らせながら言った。

「だが残念だったな。警察にも私の仲間を紛れ込ませてある。」

ストックは目を見開く。

「警察が弾を一斉に撃ったその瞬間、何人が『流れ弾』で倒れるだろう



かね…！」

アーティクルの言葉が終わると同時に、人が悲鳴をあげて倒れる声がした。

「くそ…！」

「さあ、命が惜しくば我々の言つとおりにするのだ…」

軍隊に命令しろ！『イクオラ・ジェラーナの人民を抹殺しろ』と！」

ジャックとステーラは砂漠を日が落ちる砂漠を一生懸命駆けていた。

目の前には砂岩で組まれた神殿や住宅街が大きく見えている。

「…やっとついた…大統領の宮殿は…」

遠く目だった宮殿が見える。

「あそこか…もう少しだね、ステーラ！」

「ワン…！」

ジャックとステーラはもう一走り、砂を蹴っていった。

ポオン…！

大統領が壁に吹き飛ばされる。

アーティクルは大統領のもとへ歩んだ。

「早くしろ。」

ストックは激しく呼吸をしている。

「…ハア…ぜっ…対に…言う……ものかあ…！」

アーティクルはピストルを向ける。

ストックは銃口を恐怖の目で見つめていた。

「それでも…どうだ…？」

アーティクルは人差し指を少しずつ曲げていく。

ストックが目を閉じた。

「あ……！」

「う……！」

ボタン！ボタン！

断末魔と倒れる音がした。

「アーティクル指揮官！大変です！」

アーティクルはピストルの人差し指を戻す。

「どうした？」

「二人の少年少女が侵入してきました！」

「何！……あの鍛えられた隊員たちを……突破したというのか！！」

ポオン！！

大統領室の扉が開く。

「ストック大統領！」

「君達…!!」

ルーフスがアーティクル長官に殴りかかる。

巨大な体は素早くよけた。

「お前がアーティクルか!」

「いかにもそうだ。小僧。何をしにきた?」

「国を繋げに来た!!」

少年は真剣な顔で言った。

チェリーがストックを大統領室からのっそりと抱えていった。

隊員たちと警官が倒れる廊下で、ストックは背負われながらチェリーにたずねる。

「手紙は…」

「ジャック君とステーラが運びに行っています。」

ストックは力を抜く。

「そうか。」

大統領室でルーフスとアーティクルが対峙する。

「恐らく、バークルの奴から聞き出したんだろっ？」

「あのへりで俺らを襲ってきた奴か？」

「そうさ、作戦ではお前らが死んで手紙を切り刻む。これで終わりであったはずなのだがな……」

ルーフスは笑う。

「旅して歩く奴の体力なめんなよ！」

アーティクルは真顔のまま構える。

「すまなかったな。全く、なめていたよ。」

ブウン!!

鞭のごとく巨大な左拳がルーフスを襲う。

ルーフスは左に避ける。

バキッ!!

床に拳が刺さった。

アーティクルは拳を抜いて木片を吹いて落とした。

「お前は共存のことが考えられねえのか？」

右拳のアップパーがルーフスを襲う。

ルーフスが避ける。

「<sup>たが</sup>違<sup>う</sup>心を持つ者と暮らして、何が面白い？」

左足のかかと落としが襲う。

「この世界に立つ者は、私と同じ思想を持つ者だけでいいのだよ！」

ルーフスがまた避ける。

バキッ!!

床にまた一つ穴があいた。

「へえ…じゃあ…」

アーティクルの右拳がルーフスの顔面を狙う。

ルーフスが両腕で受けた。

ルーフスが後ろへ押されていく。

しかし途中で止まった。

「<sup>いま</sup>現在と全く変わらねえ世界じゃねえか！」

「なに？」

アーティクルの攻撃が止む。

「肌が違う、信じる人が違う、持ってるお金が違う、先祖が違う…  
その前に俺達はヒトだぜ？」

ルーフスが構える。

「お前と…何が違うんだよ!!」

ルーフスのパンチがアーティクルの腹に素早く向かう。

ルーフスが続いて次々とパンチをする。

「ハッハッハッハ…なんと平和ボケな思想だ！では考えてみる！  
世界全体で皆が平和にできるのか？」

「できるわ。」

「なぜだ？その原理が答えられるのか？答えろ！」

「…世界の皆が心の奥で、平和を願っているからだ！」

ルーフスが構えた。

その時。

アーティクルの目に何かが見えた。

小僧の後ろに

痩せ細り、ローブを巻いた老人の姿が見えた。

マ…マクス・エルダム!?なぜコーポリム教ではない奴に力を貸しているのだ…!?

『私は…悲しいぞ。私の教えは…戦争に導くものではないのだ…』



ドスン…

アーティクルが床に倒れた。

ルーフスは腕を下ろす。

「…終わったか。」

ドタドタドタ…

警官が大統領室になだれ込んできた。

「アーティクル！覚悟！…アレ？」

「あ…」いつをよろしく頼むよ。」

「…あ、ああ…」

警官たちがアーティクルに手錠をはめた。

ガチャリ。

こうして、違う宗教を弾圧しようとする  
アーティケル長官の企みは阻止されたのだった。

35：パン工場見学！

アーティクルが逮捕されてから。

ジャックとステーラはイクオラ・ジェラーナの大統領に無事、手紙を届けた。

イクオラ・ジェラーナの大統領はにっこり笑った。

どうやら手紙に同意しているようだ。

「ありがとう、勇者達よ。」

ジャックとステーラがジェラーナ国へ戻った後、

ルーフス達は大統領室でストックから感謝の言葉をもらっていた

…

「ありがとう。君達は隣国との平和を守ってくれたと同時に、私も救ってくれた。

一言では言い表せないほどだ…だが皆、もう疲れているだろう。

私が君達にホテルをとっておいた。ドーカ・デナに送ってもらいなさい。」

「「「ありがとう！」」」

「あの…工場見学は…」

大統領はジャックに笑顔で言う。

「心配はない。パン工場にコンタクトをとっておいたよ。」

ジャックは慌ててお礼を言った。

「ありがとうございます…」

ルーフスとチェリー、ステーラも笑った。

ルーフス達は一晩、ホテルでゆっくりと休んで翌日、パン工場へと向かった。

パン工場の受付係が出迎えていた。

「私が今回、案内を務めていただきます、アリス・ベルガートと申します。」

本日はよろしくお願いします…」

「」「」「よろしくお願いします…」

「ワオン！」

「あ…すみません。この工場内は動物は入れることができないので…」

ステーラはしょんぼりする。

どちらかというパンが食べたいだけらしいのだが。

「見学の最後にパンをステーラくんの分と合わせて、4つお配り致します。」

ステーラはほっとして、尻尾を振った。

「ステーラったら食いしん坊なんだから！」

チェリーは笑った。

ガラスで仕切られた空間の中に小麦が成長している。

成熟したと思えばレーザーで破壊され、パイプの中へ落ちていった。

小麦畑はずっと奥まで続いており、横幅にも同じく続いていた。

「ここでは小麦を育てて、収穫をしています。小麦がなければパンは作れませんからね。」

「ここでは1秒で約20000束もの小麦が収穫されています。」

「へえ…。」

「おすごいですね…。」

「では、次のフロアに進みましょうー!」

パイプの中を小麦が整列して左から流れてきた。

下にあるもう一つのパイプには種だけが流れている。

小麦のパイプには途中で違うパイプから小麦が流入している。

そしてそれぞれのパイプは多くのチェストに分配されていた。

「ここでは一度種と小麦を倉庫に格納し、整理をしています。」

「なぜ一度整理をするんですか?」

ジャックが質問する。

「次の工程で自動作業台でパンを作るのですが、整理をしないとそこで詰まって、

溢れてしまうことがあるのですね。それを改善するために整理をしています。」

ちなみに、ここで集められた種は先ほどの工程に戻って、再度植えられるようになっていきます。

では最後の工程に移りましょうー!」

さらに進むと、そこにはたくさんの作業台が等間隔に置かれていてパイプにつながっていた。

右に通じるパイプからはパンが次々と出ている。

「「「おお!!」「」」

「ついにパンが出来ましたね。あの作業台にはパンのレシピが設定されています。」

後はパイプでチェストに貯蓄、トラックで出荷をするのみです。

では、階段を降りて、玄関へ戻りましょう。」

3人は階段を降りていった。

「はい、さんげん。」

「わあーありがとうございます。」

3人は4つのパンを受け取った。

「おいしいー。」

「うめえー!」「うまいー!」

「ステーラー!」

「ワンーワンワンー。」

どつちらパンが待ちきれなかったようだ。

「はい、パンだよー!」

ステーラが口でくわえて、ムシヤムシヤと食べる。

「ワウーン!」

ホテルまでの車の中で。

ドーカ・デナは3人に感想を聞いた。

「どうだった?パン工場は?」

「すっげえ面白かったよ!」

「パイプの中をパンが流れる様子がとても面白かったです!」

「とても勉強になりました!」

「ははは。楽しめたようだね。…」

ドーカ・デナはホテルの前で車を停めた。

「じゃあ、皆、旅を楽しんでいよう!」

「」「」  
「ありがとうございました!」



ドーカ・デナは笑って車を発進させる。

「じゃ、明日からまた、この都市から旅に出るぞ。」

「はい!」「ワオン!」「承知!」

ルーフス達はホテルへ入っていった

ドーカ・デナは大統領室に入る。

「只今、ホテルまで送りました。」

「おお、ごくろう。パン工場、楽しんでいたかな?」

「とっても楽しめたようです。」

「それは良かった…」

笑ってから一変、ストックは真顔で椅子に座る。

「…先ほど、刑務所から連絡があった。アーティクルが逃げ出したぞうだ。」

「アーティクルが!?!」

「何でも、厚さ2mのコンクリートを拳で破壊してしまったらしい。」

「ええ!？」

ドーカ・デナは驚く。

「今、警察が調査を進めている。この都市から逃げていなければいいが…」

ここは荒地。

一人の巨大なコートの男が歩いていった。

後ろにはジェラーナのビル群が見える。

「…マクス・エルダムは私をも裏切った…だが諦めないぞ…私が全て正しいのだからな!」

「待て。」

コートの男は振り返る。

そこには赤いヘルメットを脱いだ男がいた。

「バークルじゃないか。どうした…私についてくれるのか?」

「残念ながら、その逆だよ。アーティクル。」

「何だと？」

「俺達は間違っていたんだ。マクス・エルダム様は殺人をしても絶対に喜ばないだろう。」

もう、終わりにしよう。アーティクル。」

「それは、勿体無いな。」

ズキーン！

バークルの胸を銃弾が突き抜ける。

バークルは倒れる。

その目は衝撃を物語っている。

バークルを撃つたのはアーティクルではない。

バークルの後ろにいた　　白衣の男だ。

その後ろにはまるまると太った男がいた。

「アーティクル…と言ったね。僕と手を組まないか？」

「お前は…誰だ？」

「…なあに、肩書きも何もない、ただの一般人だよ。」

白衣の男がアーティクルに近づいて小声で話す。

「僕の間があれば、この世界は我々のものになる。」

静かな荒野を風が、冷たく走っていった。

## 番外編7：恐怖の館

ザーー……

ゴローン!!

ピシャァン!!

天気は嵐。

「クウン！」

「きゃあ！……すごい雷！」

「あんちゃん……今日すごく寒いよ！」

「くっそ……こんな草原の中心で雨に会うなんてな……

……おー。」

みると松の林の中に黒い屋根が飛び出して見えた。

「あっちになんか家あるぞ家！」

「泊めさせてもらいましょう！ルーフスさん！」

「行けっ！あんちゃん！」

「そうだな……」

「ワオン！」

ルーフス達は屋根の見えるほうに走って行った。

目の前には黒くて大きい洋館。

とっっても不気味なオーラが漂っている。

「うそ……」

チェリーの瞳孔が白く染まっている。

その目からだらだらと涙が垂れていた。

「チェリーさん！しっかり！」

「でもこのままじゃ風邪引いちまうぜ。覚悟決めるんだ！チェリー」

「ひいん！ルーフスさんのバカあ！！」

「大丈夫だって！お前の剣術ありや幽霊も逃げるって！」

チェリーはルーフスに引きずられながら入っていった。

ステーラとジャックも後に続く。

中はきらびやかにカーペットが敷かれ、豪華なシャンデリアまで点いている。

「な？家は見かけによらねえだろ？」

チェリーはほっとした。

「誰も住んでいないのかな？」

「でも電気が点いているってことは誰かいるだろ？」

「あーあのー！」

チェリーは二階に見えた男に尋ねた。

「私達、旅の者なんですけど、道中に雨に降られてしまって……」

「おお、そうか。じゃあ……1、2、3……、よし、こっちの3部屋が空いているぜ。」

「ありがとうございます……」

チェリーは2階へ登っていく。

「おじやまします。」

他も後に続いた。

チェリーが最後の段を上って男を見ると、視線が下に集中する。

チェリーがピタッと止まる。

「ん？チェリー、どうした？」

「ああ…ああ…あああ!!」

チェリーが震えて声を出す。

ジャックが前を覗く。

「前に何かあるの…!!!!!!」

ルーフス達は一階から、男の上半身しか見えていなかった。

しかし…その男の下半身が…

蜘蛛であった !!

「きゃああああああああああああああああああああ!!!!!!」



「ぎゃああああああああああああああああああああ!!!」

「うわああああああああああああああああああああ!!!」

ステーラにいたっては放心中。

ルーフス達はステーラを引っ張って男の案内する方向とは逆の廊下を走って行った。

「あらあら…そっちは我々の部屋なのに…」

「やっぱりお化け屋敷じゃないですかー！やだああ!!!」

チエリーが号泣する。

「だってあんなに普通に案内されちゃ誰だってついていくだろー!？」

「今日僕夢で見ちゃいそつだよー!!」

「…」

「おやおや、雨に降られたんですか、びしょぬれじゃないですか。」

前には足が見えた。

視線を上げると…

顔が鶏であった…

「ぎゃああああああああああああああああああ!!!!」

「もうやだ…」

「ああああああああああああああああああ!!!!」

「…」

ルーフス達は右へ曲がる。

「まあ、早く着替えたほうが…」

と言っているのは体から下が骨の夫人。

「君達。廊下は静かに歩きなさい」

「…」

と言っているのは頭が豚で腕が腐っている男。

「兄ちゃん達、リンゴ食べるっ。」

と言っているのは体から下が鶏の子供。

「いやああああああああああああああああ!!!!」

「クッキーが一枚 お花が一輪」

「おわああああああああああああああああ!!!!」

「…」

チェリーはもはや諦めたようだ。(何かを)

「チェリー！気をしっかりもてえ！」

「もうどうにでもならないじゃないですか！もうやだあ！」

「なんだよ〜…ここはああああ!!」

「…」

ここは2階のとある広い部屋。

一人の黒髪ボブショート的女性が人の顔を縫っている。

「こちらは茶髪のぼさぼさで黒いマント、瓶底めがねの男が狂ったように何かを作っている。

台にはイカ足にクリーパーの体、豚の頭。

「ひひひひ…亡者の血と魂、それに移す体があれば…はははは！  
奇怪な生物などいくらでも作る事が出来る！  
楽しくな〜ったら楽しいな〜！」

「正直趣味悪いよー。ネクロー。」

ネクロは驚いて言う。

「君もだよ!? ビアンカ!? なんで人なの!? 普通テディベアとかでしょ!?」

一度落ち着いてネクロは言った。

「まあ君がいてこそ、この悪趣味がはかどるってもんだ。サンキューよ。」

「はいはい。」

ドーン!

ガラガシャン!!

丸石で閉ざされた部屋が壊され、ネクロの前を3人と1匹が通り過る。

「いめんなわーいー...」

ネクロは目を丸くしてそれを見つめていた。

子供と目が合った。

ビアンカはそのまま縫い続けている。

「なんだっただ、一体…さてと、続きを…あれ。」

拾い集めたパーツにはイカ足が足りなかった。

「あんちゃん、」

「なんだ！ジャックどうした！」

走りながらルーフスが喋る。

「さっき普通の人いなかった？」

「さあな！とりあえず一階に続く階段見つけて逃げるぞ！」

「さんせいです…」

「…」

チェリーはもう泣きつかれたようだ。

「ところでチェリーさん、」

「え？」

「その手に掴んでるの、何？」

チェリーは左手を見る。

イカ足がうにようによと動いていた。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

チェリーの速度が一気に上がる。

「あ、おい！待てチェリー!!」

「チェリーさあん!!」

「…」

投げられたイカ足は地面でもがいていた。

なんとか。

3人と1匹、外へ出ることが出来た。

気づくうちに外は晴天。

「はあ…怖かった…」

「まあいいじゃねえか。旅にはこれくらい刺激もなくちゃな！」

「…まあ、そうだね、あんちゃん…」

「…ワオ!？」

ステーラがやっと起きた。

ステーラが草露を飛ばしながら走りまわる。

晴天だったことに大喜びのようだ。

「よし、行くか！」

「うん…」「はい!」「ワオン！」

いきなり2階の部屋の全部の窓が開く。

「……………」  
「まったきつてね〜!!」「……………」

ルーフス達は微笑む…

そして一気に吐き出した。

「……………」  
「二度と来るかあ!!!」「……………」

「ワオン!!」

その怒声は林中に響いたのだった…



### 36：空の英雄

燃える国を抜けて。

広大なひまわりの咲いた草原を駆けるルーフス達。

天気は快晴。ひまわりを揺らしてそよ風が草を持ち運んで行った。

チェリーはかわいいひまわりの花にテンションが上がっている。

ひまわりの草原を腕を広げて踊っていた。

「うふふ ルーフスさん、ジャックくん！早く早く」

「チェリー、今日はすげえ楽しそうだな！」

「チェリーさん、かわいいものには目が無いからねー！」

「ワオン！ワオン！」

ステーラも笑顔でチェリーの元へ駆け出して行った。

「あ、おい、待てよー！」

「いいねー！」

ルーフスとジャックも後に続いた。

チエリーの回転が止まる。

目の前には広大な海。

「すーい…」

「ワン！ワン！」

ステーラは水遊びをし始めた。

「お、なんだ？海か？」

「ボートで行かないとね。」

ジャックがボートを取り出す。

「チエリー、食べ物は何だけあるか？」

「えーと…3日は大丈夫です。」

「よし、じゃあ海を越えていこう！」

ジャバジャバ…

ガブツ！

ステーラの尻尾が何かに挟まれる。

「キャオン！キャオン！」

「ん…ステーラ、どうしたんだい…って！やばい！」

「きゃっ…」「うわ!!」

ステーラがサメに尻尾を噛まれていた。

ジャックが咄嗟に攻撃する。

「この…この…あっちいけ！」

ハンマーで叩かれたサメは遠くへと逃げていった。

ステーラはジャックの後ろに隠れる。

「大丈夫か？ステーラ…」

「クウン…」

なかなか怖かったらしい。

「あんちゃん、チェリーさん…アレ見て…」

「ああっ？」

見るたびにぎゅぎゅぎゅとのびる型のヒレが右往左往している。

サメが群がっているのだ。

「これじゃ、海に出られませんね…」

「しかたがない…ちょっとくらくらゆっくりするか!」

「やったー」

「わーい!」

「ワオン!」

草原に寝転ぶ3人と1匹。

そよ風が眠気をつながす。

「眠くなってきた…」

「いい天気ですね…」

「すう…」

「クウン…」

ここは海上。

大きな翼が風を後方へ流している。

クジラのような巨大な体が海に影を落とす。

飛行艇だ。

その飛行艇の中から一人の男性が望遠鏡で覗いていた。

「……！……困り人か？」

飛行艇は徐々に下降していった……

草原のルーフス達に影がかぶさる。

「……？」

ルーフス達は目を開ける。

そして起き上がった。

後ろを見ると巨大な飛行艇が着陸しようとしている。

その巨体はずっしりと草の上に乗った。

「すっげえでけえ……」

「飛行艇……!？」

「なんなのでしょうっ……」

「グルルルルル……」

ステーラは威嚇の構えだ。

鉄のドアが開く。

そして中から黒いマントと警官帽をかぶった女性が出てきた。

次に赤いマントと警官帽の男性、黄色のマントと警官帽の女の子、

水色のマントと警官帽の男性が現われた。

黒い女性が問いかける。

「君達、何か困っているようだね。」

「えっと…」「あなた達は…?」「誰っすか?」

黒い女性がどこに持っていたのか、ラジカセを持ち上げて再生ボタンを押した。

カチツ。

テーテーテーテーテーテーテー

ルーフス達はポカンとする。

いきなり黄色い女の子が前に出てきてポーズを決める。

「元気爆発!おてんばな黄色!プルボネ!」

赤い男が前に出てきてまた違うポーズを決める。

「燃える魂!ネツケツの赤色!オリー!」

水色の男性が前に出てきてポーズを決める。

「清らかな心…清纯の水色!テンドロン!」

そして黒い女性が決め顔でポーズを決めた。

「そして強い魅力!裁きの黒色!モイラ!」

そして赤が左、水色が後ろ、黄色が右、黒が前に来てポーズをとる。

「我ら、空飛ぶお助け隊!カラーリーオンズ!」

ポオオオオオン…

音楽が止まると同時に、草原に静寂が走る。

即席のテーブルを作って。

「ほう…サメがいてここから北へ行けないと…」

「はい。そうなんです。」

モイラは豊満な胸を片腕で支えて、カフェラテを飲んでいる。

テンドロンはモイラの傍で控える。

プルボネはクッキーをガツガツと食べている。

オリーは草原の上でトレーニングをしているようだ。

モイラはカップから口を離して言う。

「では私達の飛行艇で北まで送ろう。」

「いいんですか!？」

「ああ、それが私達の仕事だからな。

「…おい！お前ら！行くぞ！」



「このクッキーおいしい〜」

「もっとだぁ!!もっともっとも!!私の体は熱を求めているう!!  
うおおおおおおお おおおおおおおお!!」  
プルボネとオリーはまだやっている。

「じらー行くぞー!お前らー!」

まだやっている。

モイラが涙目になる。

「ぐすん…いい加減泣くぞお前ら…」

テンドロンが汗を流す。

「また…隊長たる人が泣かないでくださいよ…」

「大丈夫かな…」「さあ…」

プルボネとオリーにたんこぶが出来た所で。

飛行艇は既に空を飛んでいた。

テンドロンが操縦を行っている。

モイラとプルボン、オリーはいつもの席に座る。

ルーフス達は客用の席に座っていた。

客席からジャックが尋ねる。

「テンドロンさん。」

「どうしました？」

「この船って…なんで浮いてるの？」

「ああ…この船はこの操舵輪が全て制御しているのです。」

「この操舵輪だけで…!?…不思議だなあ…」

テンドロンが慌ててモイラに報告する。

「隊長、右前方から空賊船が…!!」

「なんだと…!?」

ドオオン!!

飛行艇が大きく揺れる。

船が接触したようだ。

「え…空賊って…なんですか？」

「その名のとおり、空の海賊だよ。」

続けてブルボネが話す。

「でも海賊は堂々と向き合って戦うのに対して、空賊は空から奇襲をしかけるの。」

更に続けてテンドロンが話した。

「空賊は卑怯な臆病者達が集まった集団だ。」

オリーが話す。

「前なんか、空中から爆弾落として村を壊滅  
戦わずして村の資材を掻っ攫っていったんだぜ…？」

「空にそんな奴らがいたのか…」

「がーっはっはっはっはあ!!」

大声が窓の外から聞こえた。

ぶつくりと太った船長がこちらに話している。

「その飛行艇の船長…！その船ごと我らにゆずれえ!!」

「へ！貴様らなんぞにこの鋼鉄の飛行艇は譲れないねえ!!」

ぶつくりと太った船長はモイラに一目ぼれしたようだ。

「うほー!!まさか船長がセクシーな姉ちゃんだったとは!変更だ変更!!船長と飛行艇ごと俺にゆずれえ!」

「隊長があんたの彼女になるわけないでしょ?デブ。」

プルボネが辛らつな言葉を吐いた。

空賊船長は怒りをあらわにしている。

「あの小娘……やったるぞ!お前ら!」

テンドロンがルーフス達に言う。

「ここでもう少し、お待ちください。」

モイラとオリー、プルボネが飛行艇の屋上に乗る。

テンドロンも外に出た。

相手は遠くからこちらを見ている。

「がっはっはっは!お前らに親切に足場を貸しはしないぜ!」

ルーフスは歯をぎしと噛む。

「くっそ〜!めんどくせえ奴だ!」

「カラーリーオンズは、どうやって戦うんですかね……」

モイラは笑う。

「ありがとうよ…」うちのほうが好都合だ！」

空賊船から大砲が撃たれる。

モイラが剣で跳ね返した。

空賊船に弾が命中した。

モイラが呆れる。

「はあ…あいつらバカか？」

「一斉に射撃しろ！」

船から幾千もの矢が飛んできた。

モイラ達は壁に隠れる。

「バカでもなさそうですね。」

「わたしがまず先にやっちゃおうよー！」

プルボネが弓を引き絞る。

「元氣ーばくはーっ!!」

プーン…

ポオオオオオン!!

「「「「「ああああああああ!!」「「「「「

甲板が崩れて船内が丸見えになった。

ルーフス達は観戦している。

「なんだ…?いきなり爆発したぞ…」

「なにしたんだろう?いったい…」

「船長!奴ら、どうやら特殊な矢を持っているみたいですよ!」

「ええい、なら、私達に当たらなければいい話だ!」

空賊船長が操舵輪を後ろに傾けた。

空賊船が上昇する。

「がっはっはっは!!私達にあててみる!」

「どっちら俺の出番のようだよ!」

「おお、頼むぞ、オリー。」

オリーが同じく『』を引き絞る。

「うおおおおおおおおお！」

オリーが何連発も矢を空賊船の底に向けて放つ。

底に刺さった矢から火が吹き出る。

「矢から火が出てるよ!？」

「じゃあさっきの爆発も矢なのか？」

「たぶんそうですね。あんな遠距離から爆弾は投げ込めませんし。」

「船長！船底から火が!!」

「何!? やばい！すぐに下降だ！海で消化するぞ！」

空賊船が下降していく。

「それを私達が許すと思ってても？」

「よし、テンドロン。やね。」

テンドロンが弓を引き絞った。

テンドロンの矢が甲板に落ちる。

船員が挑発する。

「がっはっはっは！当たってないよーだ！」

「ロロロロロ…」

船の上に雷雲がたちこめる。

「ん………天気が…」

「悪事をはたらくものに災いを……神の鉄槌！」

「ピシャァン!!」

「バリバリバリバリ!!」

「うわあああああ!!」

「雷の矢!」「かつこいい!!」

「ワオン!」「強い……!」

「甲板が！甲板も燃えています、船長！」

「なあにい!?!……接近戦だ！野郎ども！」

船長が操舵輪を回して飛行艇を正面にする。

「突撃だ!!」



「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」

空賊船ごとくこちらに迫ってきた。

モイラが前に出る。

「さあ、いよいよ私の出番だな。」

モイラは弓を引き絞る。

「いったい…モイラさんはどんな矢で攻撃するんだ…？」

「わくわく…」「どきどき…」「ワオワオ…」

ルーフス達は唾を飲む。

矢が船長に向かって飛んでいった。

ズバシ！

「ウ…」

船長の胸に命中した。

「せ…」

「「「「「「「「「「せんちゅおおおおおおお!!!」」」」」」」」」」

「大丈夫だよ。そいつは死んでいない。」

モイラが言う。

「…へ？」

「ただし。」

「コケツ！コケコケ!？」

見るとでっぷりと太った鶏が慌てふためいていた。

「…鶏とりになったがな。」

「え」



「さあ、どうする？もう一人二人、鶏になりたいか？」

「とーとんでもねえ!!」

「」「」「逃げろー!!」「」「」

空賊船はすごい勢いで逃げ去った。

モイラ達はハイタッチを交わす。

飛行艇の中。

飛行艇は巨大な海を北に進んでいた。

ジャックが笑って言う。

「モイラさん、あんな矢を使っているんですね。」

モイラのほほが赤く染まる。

「や…やめろよ…その話は…」

オリーが笑って言う。

「実はこの矢のレシピは魔女にもらったんだが、そんな時に隊長がもらったのが」

余ったこの矢だったってわけさ。」

「ははは、 そうなのかー！」

「しょ…しょうがないだろ、もう一つの矢はただ水を凍らすだけで、戦闘向きではなかったんだから…」

「いつもながら照れてる隊長かわいい」

プルボネが抱きつく。

「や、やめろーあつくるしいー！」

「とじろでれ…」

ルーフスが問う。

「このカラーリーオンズって、なんなんだ？」

抱きつくプルボネを置いて、モイラが答える。

「この組織は私が、私的に作った組織だ。

…私は今の警察だけじゃ足りないと思う。  
真面目に書類をどうたらとか、そんなことを考えている大人に子供は安心できないと思う。

この世界には空想の中でいう英雄ヒーローが必要なんだ。  
だから私はこの組織を作った。空を飛ぶお助けヒーロー…」

モイラは拳をにぎる。

「そいつらを見た子供達は、どれだけ満足することだろう！私には分かる。私も、昔はその一人だったから！」

だから。私はこいつらと一緒にヒーローとして皆を救ってあげたいんだ！」

プルボネとオリーとテンドロンは笑う。

「私は、隊長のそんなところに惹かれたんだよねー！」

「隊長！おれも永遠にあなたについていきますぜ！！」

「あなたの正義というものに改めて感心しました…！」

ルーフスも笑う。

「確かに、こいつ奴らがいれば、子供達も笑っていられるな！」

「ワオン！」

ジャックとチェリー、ステーラも笑った。

ここはるか北の大地。

山岳地帯の頂上に飛行艇がとまっていた。

「ありがとうございます！モイラさん！」

「またいつか会いましょう！」

「君達も、旅路、気をつけるよ。」

「チェリー！クッキーおいしかったよー！」

「今度会ったら、一緒に作りましょうね！」

「これこそが友情！一期一会！なんと熱い！熱い！」

「またいつの日か。」「ワオン！」

空に飛行艇が遠ざかっていく。

ルーフス達は空を飛ぶ英雄達ヒーローに手を振った

ここはとある熱帯雨林。

謎の木製の小屋が建ててある。

傍にネザーゲートが作ってあった。

そのネザーゲートからゾンビビッグマンが現われる。

ゾンビビッグマンははしごを上って、扉を力強く開けた。

「おい、あんた。一人の人間にあのおまじないを教えたとは本当か。」

一人のばあさんが不適な笑顔で応える。

「ケツケツケ…聞かれたから教えただけじゃ。」

ゾンビビッグマンは荒立てる。

「ふざけるな。あのおまじないは下手をすれば世界が滅ぶ力を持っているのだぞ!？」

ばあさんは右の人差し指で右耳をほじくる。

「そんなのは作った本人じゃから分かっているわけではないじゃろっ。」

「では何故教えた!？」

「私は、争いこそが平和を生むと思っているからじゃ。幸せなだけで平和は生まれないのじゃよ。」

ゾンビビッグマンはため息をつく。



「あなたの考えは何年話していても解らない。」

ゾンビピッグマンは扉を開けた。

「あんたに振り回されてばかりでは身が持たない。あなたはもう私の友人でもなんでもない。じゃあな。」

バタン！

「ケツケツケ…」

37：池を抜けると…

ここは地獄。

4人の人物が要塞の道の上を歩いていった。

黒いスケルトンが4人の前に立ちふさがる。

「ミナテキ…ハイジヨスルノミ…」

「ひい…」

白衣の男は慌てて制止する。

「ま…待ってくれ…！まだ殺さないでくれ…！お前が必要なんだ！」

「…!？」

ボオン!!

ドカン!!

巨大な男が不意打ちに後ろから地面に押しつぶす。

スケルトンはレンガの中で息絶えた。

白衣の男は笑って答える。

「おまえらの…怨念のみがな。」

箒を持った女の子は言う。

「あんたってなんて残忍なのー？信じられない。」

白衣の男はスケルトンから落ちた骨と石炭をマグマの海へ投げた。

「お前ほどじゃないさ。チェリー。」

白衣の男はぶくぶくと太った男に尋ねる。

「おい、ランプス。お前に頼んどいた強力な武器は大丈夫か？」

「まーかせるのデース。私のこのありあまーる財力があれば、武器はいくらでも仕入れられマース。」

…アナタについてきーて良かったデース。あの憎きサクラノ国を  
手中におさめられーる!!

「ワホホホホ!!」

アーティクルはひっそりと白衣の男に尋ねる。

「なぜあの男はついてきたのだ？」

「俺が騙してやったのさ。それにまんまと引っかかった間抜けってことわ。」

本当はお前の国すらも滅ぶ結果となるのにな…」

アーティクルも笑う。

「ほほう、それは傑作だ。」

白衣の男はつぶやく。

「まずは…この強力な武器のテストといこうか…」

白衣の男の右手には右側面に穴の開いた黒い頭蓋骨が握られていた。

木が覆いかぶさる森を、ルーフス達は走っていた。

ルーフス達の走った跡に矢が突き刺さる。

「くそー！なんなんだこの森！」

「まるで夜中みたいだね！」

「矢があたりそうですー！」

「バオ！」

前方に日の明かりが見えた。

「…ん?…」

「何かありますね…」

「…池?」

ルーフス達は陰から日のあたる場所へ出る。

見回してみると、モンスターが見失っている。

なんとかまいたようだ。

そして。

目の前の池。

花で飾られた小さな池。

その周りは丸石で飾られている。

ルーフスが池を覗いてみる…

「ああああ!!」

「どっしたんですか?ルーフスさん。」

「ダイヤモンドじゃん！」

「え!?なんで!？」

見ると確かにダイヤモンドが沈んでいる。

「ラッキー！」

「あ！ルーフスさん！だめですよ！」

「でも池に落としたって事はいらないうってことだよね？」

「あ…そうですね。」

「もーらおつと。」

ルーフスが池に足を踏み入れる。

ジャボン!!

ルーフスが丸ごと池に入ってしまった。

「ああーあんちゃんー！」

「ルーフスさん!!」

「ワオン!？」

……

息の泡がすぐに止まった。

チェリーは蒼白する。

「まさか…死んじゃった!？」

チェリーが急いで飛び込む。

「ああ！チェリーさん！待って!！」

ジャックはチェリーの足を掴む。

「ワオ!?ワォーン!！」

ステーラもジャックの足に噛み付いた。

ジャボン!!

……

モンスターたちは3人と1匹をいまだに探していた。

ルーフスが池に沈んでいく。

「がぼーがぼーがぼー」

(やべえ…！深っ…!!)

チェリー、ジャック、ステーラもまっさかさまに沈んでいく。

「こぼーかぼー」

(なんて深い池なの…!!このままじゃ…)

「がぼほほーこぼー」

(うっ…息が苦しい…そして足がなんか痛い！)

「ぼぼーぼぼー」

(バウ…！ワオ！)

ボシャン!!

「ぶはー…!!!」

「ぶー…!!」

3人と1匹は池から出た…!?

3人と1匹は池の周りに寝転がる。



「あーーーーー……」

「死ぬかと思った……」

「はあ……はあ……」

「クウン……」

「……」は？」「

見れば木に覆いかぶさった森だ。

だが、さっきと少し雰囲気が違う。

「さっきの場所じゃないようですね……」

「とにかく、散策してみようよ！」「ワオ！」

「そうだな。」

ルーフス達は森を歩く。

薄暗くて気味の悪い森。

ところどころでモンスターの鳴き声が聞こえる。

「……怖いなあ、」の森……」

「急ぎましょう、ルーフスさん。」

「そうだな……」

左に巨大な蜘蛛にスケルトンが見えた。

ルーフス達は一瞥して通り過ぎる。

……

ルーフス達は確認するため後ずさりした。

「おりよりよ？人間だぞ？……」

「キシユキシユ……」

ルーフス達は口を大きく開く。

「逃げろー!!」

ルーフス達は走る。

「びび、びびっくりしたー!」

「なんであんなさりげなくいるんですか！」

グルルルルル…

「「「「ガオウ!!」「「「「

5匹の黒い狼がルーフス達を襲う。

「「「ぎゃああああああああ!!」「「「

「ワォーン!!!」

ルーフス達がスピードを上げる。

ルーフスが先頭を走る。

狼の鳴き声が聞こえなくなった。

「…はあ……まいたか…!」

いるのはルーフス一人。

「え」

べつじやら、仲間までまいてしまったようだ…

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

チェリーは走る走る。

既に狼は来ないが、チェリーは気づいていないようだ。

「はぁ…はぁ…」

前が明るくなる。

森の出口のようだ。

チェリーは息をふかくする。

「はぁ…はぁ…」じまびくびくだ…!!」

チェリーは目の前の景色に驚愕する。

そこは虹色に染まる森。

草は青や緑に染まり、葉は七色に染まっている。

「素敵…!!」

~~~~ジャックの冒険~~~~

ジャックは走る走る。

狼はもう来ていない。

そして暗い森から抜けた。

「すっぱー」

そこは角の長い羊や鹿、猪がいる草原。

そこには天まで高く生える巨大な木が生えていた。

ジャングルの木の比ではない。よりもっと高く、太い木だ。

その木の幹にはセミが羽をかき鳴らしている。

ジャックは草原を進む。

「……にしても、ここはどこなんだろう……」

池の底にこんな空間があるってわけじゃないよね……」

すると、前に巨大な広場が見えた。

「……? ……なんだろうっ、ここは。」

ジャックが広場に踏み入れる。

…?

奥に何か見える。

「…たい…たいよ…」

「…?」

奥から迫ってくる!

緑の大きな蛇だ。

「いたいよお…!!!いたいよおおお!!」

大きな蛇がジャックに迫る。

何やら泣いている。

「うわあああ!!」

~~~~~ステーラの冒険~~~~~

ステーラは黒い狼達と対峙する。

黒い狼のリーダーが一声「ガウ!」と吠えた。

他の狼が一斉に飛び掛る。

ステーラは黒い狼達と噛み合っていた…!!

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

「参ったな…皆とはぐれちゃった…」

ルーフスは暗い森を歩く。

「武器は…良かった、それぞれ持っているようだ。

…まあでも始めに、今いる場所のことが知りたいな。

…散策するか。」

ルーフスはそのままだりを見回して歩いていた。

しほらくして。

「おー」

謎の家を発見。

「誰か住んでいるのかな…」

ルーフスは家に近づく。

窓から覗く…

にゅい。

下からいきなりスケルトンが顔をだした。

「うわああ!!」

ルーフスは後ずさりをする。

「あれれ？お客さんかな？」

さらに家の後ろからもスケルトンが来た。

「いひひ！お客さんだ！」

そして後ろからも。

「おりよりよ。さっきの人間だ！」

「おまえ達は…？」

「あれれ？僕ら？僕らは魔女だよ！」

「いひひ！違うよ！魔女は僕らの師匠じゃないか！」



「おりよりよ。また間違ったね。」

ルーフスは顔が引きつる。

「だから…お前らは？」

スケルトンはようやく自己紹介をする。

「あれれ」と言っている奴が答える。

「僕は魔女の弟子！ロリエ！」

「いひひ」と言っている奴が答える。

「僕も魔女の弟子！サフラ！」

「おりよりよ」と言っている奴が答える。

「僕も同じく！シナモ！君は？」

「俺はルーフス。旅人だ。」

ルーフスは魔女の家の中で3人と話す。

「あれれ？君は『タビビト』だよな。」

「ってことは、平凡世界からきたんだよね？」

「へ、平凡世界!? 何それ?」

「おりよりよ。この世界のことは何も知らないようだね。」

「いひひ。僕が話そう。」

サフラが説明する。

「君の世界じゃ、魔法は普通使えないものだろう?」

「うん、まあそうだな。いると分かっても数人…全部が魔女から教わったとかだな。」

「実はこの世界では魔法がふつうに使えているんだ。」

「そ、そうなのか?」

「うん。そんなこの世界のことを『魔法世界』というんだ。それと区別して、」

君の住んでいる世界を『平凡世界』と呼んでいるわけ。

「…で、たぶん君が通ったとされる池はそれらを繋ぐゲートってことな。」

「ふーん…魔法世界なんてもんがあったのか…」

ルーフスは椅子によりかかる。

「この魔法世界は、実は昔、平凡世界の一つの国だったんだ。」

シナモは話す。

その国の名は、ディブレーク王国。

ある伝統的な魔術師が魔法を完成、それを国民に授けるといふ声明を上げて、

様々な国々の人の移民により完成した国だ。

無論、犯罪者も現われるが魔法でそれを阻止できたため、問題はほとんどなかった。

だが、他の各国々は発展、ついには魔法をも超える強力な武器を創った。

各国王はこの武力を使って、ディブレーク王国を攻撃し始める。

魔術という世界征服に有益な力を奪ったためだ。

ディブレーク国王は国を守るため、自身の強力な魔法により、別世界へと国ごと転移してしまった…

「嘘だろ…国ごと別世界に移すなんて…！」

「君の世界には、『ネーベルオブリース』という巨大な穴があるらしいね。」

「ああ、いつかテレビで見た気が…」

「あれはたぶん、かつてディブレーク王国があった場所なんだ。」

「へえー…すげえんだな、魔法って…」

「そういえば、この世界には、人がいないんだな。」

3人が目を開く。

そして悲しげに目だけをあわせて、うつむいた。

「…?…どうした?」

「この国はね。」

ロリエが話す。

「魔法で創りあげて、魔法で壊れた国なんだ。」

38：魔法世界の冒険（前編）

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

大蛇がジャックに迫る。

ジャックが間一髪で避けた。

「うわああああん!!」

ドオオオン!!

柱を揺らす。

ジャックも揺れた。

「なんてパワーだ…!!」

「うわあああああん!!」

ドオオオン!!

ジャックに大蛇が突撃した。

「!!」

ジャックは吹っ飛ばされる。

ジャックはゆっくり起き上がる。

「くっそ…いて…怒ったぞ!!」

ジャックから湯気が出る。

「くらええ!!」

ジャックが勢い良くハンマーを振った。

ボン!!

ドドドドドドド…!!

衝撃波が大蛇を襲う。

大蛇がひっくり返された。

大蛇の腹から葉っぱが落ちた。

ドオン…

大蛇はゆっくりと起き上がる。

そしてカツと目を吊り上げる。

「怒ったぶーん!!」

ジャックと大蛇の子供のようなけんかが始まった。

ジャックがハンマーで大蛇の腹を叩き。

大蛇がジャックを体当たりで吹っ飛ばす。

「痛いじゃないかぶーん！」

「それはこっちの台詞だ！この蛇！」

「蛇と呼ぶなぶーん！僕はいちおう蛇神なんだぶーん！！」

途中で大蛇の体当たりが止まる。

「あ

「？」

「治ってる……」

大蛇が謝る。

「すまなかつたぶーん。腹の痛みで巻き添えにしてしまったぶーん……」

「なんだ、ただ腹にこの…硬い葉っぱが刺さってただけだったんだね。」

「僕はナーガっていうんだぶーん。この世界の蛇神とは僕のことだ

ぶーん。」

「僕はジャックだよ。旅人だよ！」

『タビビト』：君は平凡世界から来たのかぶーん！」

『平凡世界』？」

ルーフスが聞いた説明をジャックにする。

「そうなんだ…僕は今、異世界にいるのか…

でも、その王様は異世界にこの国を転移させるのに成功させたんでしょ？」

なんでこんなに、人がいないの？」

ナーガは悲しい表情をした。

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ロリエが続ける。

「王様は国をこの世界に転移させることに成功した。

それから人々は昔の平和な生活を取り戻したんだ。

…でも王様は城を固く閉ざしてしまった。

少し前まで王様はいつも元気で、毎日外に出て国民達に挨拶をしていたのに…

ついに国民達は心配して、城の前で声をかけ始めた。」



「…そのときだったんだ。

城からとてつもなく大きな魔力の波が拡がった。

その波に触れた人間達は全て植物に変わっていった。

やがてその魔力は世界を包み、世界の有する時間も止まってしまった。

動物と僕達、師匠のような強力な守る魔術を知っていた者だけが残ったんだ。…

これが、人間がない理由だよ。」

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

ナーガが続ける。

「…植物にされた国民達も悲しいだろうけど、

僕が思うに国民を大切に思っていた王様が誰よりも悲しんでいると思つぶん…」

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

「…そうだったのか…」

「…実は王様が生きているかどうかも、僕達には分からないんだ。

城からは普通の人間には感じない強い魔力が出ているんだけど、王様自身の魔力かどうかは分からない…

僕達も、城へ行つて確かめたいんだよ。

…でもその強い魔力が僕達を拒んで近づけないんだ。」

「…じゃあや。」

ルーフスが笑って言う。

「俺が確かめてくるよ！」

3人は驚く。

「行つては駄目だ！君だつてどうなるか、分からないよー！」

「でも、誰が他に行くんだ？」

「えつと……」

「ロリエ、行かせてあげよう。」

「シナモ……」

「彼の言っている事もその通りだ。誰かが往かないと解らずじまいな。」

「僕も賛成だ。」

「サフラ……」

ロリエは考える。

「……分かった。ルーフスさん。ご無事を祈ります。」

「ああ、行つてくる!!」

ルーフスは高くそびえたつ城へ駆けていった。

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

青と緑の草の上をリスとウサギが跳ね回っている。

歩くチェリーの周りをウサギ達がついてきている。

「あはは あはは じゅんぱんぱん じゅんぱんぱん」

ウサギはぴよぴよじゅんぱんぱん。

「かわいい子〜!!」

なんて素敵なのかな〜

もしかして私…死んでて天国にいるのかも〜

でもこれなら悔いは無いわ〜

シューウウウウウ…

目の前には黒く焼けたバイオーム。

地面から煙が出ている。

(じゅんぱんぱん…まさか地獄…!?)

チェリーは口を広く開ける。

チェリーは二つの風景の境を見る。

(な…なんでこんな夢のある場所からいきなり地獄みたいな場所に…)

チェリーは気になって黒い土を踏み歩いていく。

「なんて暑いのに…」

チェリーはメイド服の襟をぱたぱたさせる。

歩いていくと円形の巨大な何かがあった。

大きな切れ目がある。

「…?…何かしら…」

グウウウウウウウ…

「え?…何?何?…」

円形の何かの中から聞こえる…!

『グルオオオオオ!!』

中から3つ首の竜が現われた。

「竜!？」

左の頭が話す。

「おいおい！2番目！獲物見つけたな！見つけたな！見つけたんだな  
」！」

中央の頭が話す。

「ああ、分かっている…分かっているから黙れ。」

右の頭があくびをしながら言う。

「早くしとめて、ディナーにしよっぜ…」

チェリーが厳しい顔をする。

チェリーが日本刀を取り出した。

「…戦うしかないようね！」

~~~~~ステラの冒険~~~~~

「ガウガウ！ガウガー！」

（訳：へえ、おまえ彼女いたの！）

「ワオ！ワンワン！！…クウ…バウ！ワウ！」

（訳：ああ、そうだよ。…でも僕は旅があったから…）

「ワオン！ガウガウ！ガオ！！ガウ！！」

（訳：クーー！！いいないいな！俺もそんな出会えないかな！）

「ガウ、ガウガウ、ガウガウガー」

（訳：お前はまずそのどてっ腹をどっにかしよっぜ。）

「ガウガウ、ガウガウ。ガウガウガウ。」

(訳：そういえばお前のいったあの「。あのガープとくっついたら  
っせ。)

「グル！ガウガウ！グルルルルガウガウ!!」

(訳：何!?許せんガープ…噛み付いてやらあ！)

「ウォーン！ガウガウ!!ガウガウ！」

(訳：あっはっはっは！やめとけよ、お前じゃ無理だ。)

…なにか…すごく打ち解けていた。

ガサガサ…

暗い森をルーフスが横切る。

「…お！ステーラ…ってっわ！」

ルーフスが驚く。

ステーラが遠吠えをした。

「ウォーーーーーン！」

続けて5匹も遠吠えをする。

「ウォーーーーーン！」

「ウォーーーーーン！」

「ウォーーーーーン！」

「ウォーーーーーン！」

「ウォーーーーーン！」

「…なんで打ち解けてんだよ…」

「でもちよつどいい。お前達、ちよつとジャックとチェリーを探してきてくれ。」

で、池の前に集合するようにつ導してくれないか？  
俺は今からちよつとあの城に行くてくる。」

「ワンー」「」「」「ガウー」「」「」

「よし、頼んだぞー！」

ルーフスは走っていった…

「ガウガウ…ガウガウ…」

(訳…王様か…今どうしているのかな)

「クウン？」

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

左の頭が言う。

「はーっはっはーよっつそ俺達の巢へえ!!」

中央の頭が言う。

「そつてんつぞいらっしやい俺達、ヒドラの腹の中へ。」

右の頭が言う。

「2番目…そんなにつまくねえよお…それより早く食べちゃおうぜ…」

中央の頭が言った。

「では、まずは軽く火通しとしようか…」

中央の頭から火炎放射が放たれた。

ポオオオオ!!

チェリーは慌てて避ける…!

チェリーの袖が燃えた。

「熱ッ…!!」

チェリーは腕に点いた炎をバケツの水で消した。

チェリーの右腕の袖はほとんどがこげてなくなっていた。

「強い…!」

左の頭から火の玉が出た。

ポオオオオン!!

火の玉はチェリーのすぐ左で爆発する。

チェリーは走り、高く飛び、中央の頭に刀を振りかぶる。

「1番目!」



「あいよー」

左の頭が一瞬縮むのが尻目に見えた。

次の瞬間、チェリーは歯に押しつぶされる。

「かはっ…」

チェリーは血を吐く。

中央と右の頭が笑う。

「いいぞー！ 駄目ー！」

「あーでもそのまま食うんじゃねえぞー。俺達の口にも分けるよ…」

チェリーは地面に落とされる。

…もう…駄目…

ルーフスさん…

ジャックくん…

チェリーの視界は閉じていった

39：魔法世界の冒険（中編）

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

黒いだけの世界。

チェリーはそこに立っていた。

ここはどこだろう。

悲しい。

寂しい。

独りぼっち。

チェリーは涙目になる。

…!!

独りじゃないようだ。

私より一回り小さい女の子。

茶色でさらさらの長い髪に水色ワンピース。

その可愛い瞳でにっこりと私に笑いかけた。

「あなたは…?」

少女が口を開く。

「プラムだよ。…久しぶり、お姉ちゃん。」

たまらず目を見開いた。

私の頬に涙が伝ったのがやっと分かった。

脚は勝手に走り出す。

「ダメ!」

プラムが制止する。

チェリーの脚は止まった。

手が届きそうなのに…

こんなに近いのに。

抱きしめられないなんて。

「じゅじゅ…あああああああああ!!」

チェリーは大声を出して泣く。

泣き顔をあげっぴろげにして。

今までで一番大きな声で。

「コホ…ケホ…」

喉が追いつけなくて、咳き込む。

「わあああああああ…」

プラムは優しく笑って弁解する。

「泣かないで。お姉ちゃん。」

チェリーの泣き声が静かになっていく。

次第に息を吸う音だけになった。

チェリーは下を向いて涙を手で抑える。

「私はお姉ちゃんが嫌いなわけじゃないよ。」

…でも…ここでお姉ちゃんが私を抱きしめちゃったら、

今の仲間達を大切に想えなくなっちゃう…私だけを想っちゃう…

！

だから私は止めたの。」

頭の中にルーフスとジャック、ステーラの姿が浮かぶ。

プラムは続けた。

「今、お姉ちゃんにはお姉ちゃんを大切に想う人がいっぱいいるんだよ。」

だから…負けないで。お母さんもお父さんも、私も、お姉ちゃんを守っているから…」

プラムの目が次第に潤ってくる。

「でも…私…やっぱり…プラムちゃんと…一緒に…」

チェリーの心の底に隠れていた本音が口から出る。



次の瞬間。

冷たい涙が伝っていた頬に温かい感触が来た。

プラムがチェリーを抱きしめている。

プラムは大粒の涙を流す。

「……じつすれば、…問題無いかな…！お姉ちゃん…!!」

チェリーはまた涙を流し始める。

しかしさっきの涙とは違う、温かい涙だ。

「私達…今、一緒にいるんだよ…!!」

チェリーはやすらかな笑顔になる。

「ありがとう…プラムちゃん…」

プラムの姿が消えていく。

でももう追いかけてようとはしなかった。

願いはもう果たされたから…

生きなくちゃ。

私…まだ死ぬのは早い…！

(貴様の炎…しかと受け取った…！)

黒い世界を紫の炎が燃やしていった。

茶色く焦げて、炎が噴出す地獄のような場所。

寝ている娘の背後には3つ首の竜。

「じゃ、俺は脚から！」「俺は胴か。」「俺は胸から上だなー…」

中央の頭が近づく。

思い切って口を開く。

ガキン…！

!!

バリバリバリ…

中央の頭の歯がどんどん落ちていく。

「あが—————!!!」

中央の頭はショックで倒れる。

「2番目!!」

「この人間…まだ生きていたのか…!？」

3つ首竜の前には、真剣な顔をしたチェリーが立っていた。

ぼろぼろの服に血がしみこんでいる。

深い傷と対して、なんと心強い顔であろうか。

手に持った日本刀がキラリと光る。

彼女の目には、紫の炎が瞬いていた。

「その傷で〜!!」「動けるわけじゃないっしょ!!」

ポオオオオオオ!!

左と右の頭は同時に火炎放射を放つ。

娘の姿は炎で見えなくなった…

1番目は3番目を見て話し始める。

「今度こそやったな3番目！」

「ふわ〜あ…早くディナーに」

ポオオオ!!

娘が炎の中を超えて飛んできた。

日本刀を両手で左に構える。

右の頭は目を大きく丸くした。

瞳はチェリーを大きく映していた。

ズサ…!!

紫の斬撃が一閃する。

右の頭の首を中ほどまで斬った。

「ち…3番目ー!!」

1番目は娘を震えながら見た。



今まで…我らヒドラは人間に倒されることは絶対に無かった…

しかし…1頭どころか2頭も倒してみせるとはな…

…敵ながら…感服だ…

ヒドラはチェリーを優しく口で巣まで運び、

枯れた草を布団がわりにしてかぶせる。

「なんで俺がこんなかあちゃんみたいなの…」

1番目のヒドラは嫌な目をしてつぶやいた。

そして静かに3番目を治療するのだった…

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

「…」だな。」

前には高く聳え立った城。

確かに扉は丸石で閉じられていた。

ルーフスはつるはしで丸石を壊して進む。

「マ…マジかよ…」

ルーフスは上を見上げた。

長い長い螺旋階段。

螺旋階段の途中では枝分かれがいくつもある。

ルーフスは住み着いたゾンビやスケルトンを跳ね除けて進む。

螺旋階段を上って上って。

なにやら床が見えてきた。

「…もつすく最上階か…？」

ヒック…ウエー…

なにやら声が聞こえる。

…と同時に、異臭もした。



酒の匂いだ。

ルーフスは鼻を押さえる。

「う…すげえ匂い…」

ルーフスは最上階の床を踏んだ。

そこには王冠を被った骸骨がワインを飲んでいる。

顔は驚くほど真っ赤だ。

床には大量のワイングラス。

骸骨は突然大きな声を上げた。

「この世界は終わっつれいるんだよお…！」

「な…なんだ…」

「もう誰も救えれえんだよお…！」

「おい…おっさん落ち着けて…！」

いきなり泣き出す。

「これが落ちついでいられたらよお…！」

誰もいねんだ…誰も…」

そしていきなり怒り出した。

「れていけえーおらえはよお…！」

ビュウ！！

「あぶね…！」

ルーフスは避ける。

ルーフスに向かって魔法弾を撃ってきた。

魔法弾は壁に刺さって消えた。

「…眠らせて冷まさせるしかないようだ…！」

ルーフスは釘を撃った。

骸骨は消える。

そしてルーフスの後ろからファイアボールを撃ってきた。

ポオン!!!

ルーフスに当たる。

「…！」

ドオオオオン!!

ルーフスは壁まで吹き飛ばされる。

ルーフスは起き上がる。

「くっそ……」

目の前には王冠を被った骸骨が3人もいた。

「な…なんだと……」

「……れていけえ！……」

3人から魔法弾が3発ルーフスに向けられる。

ルーフスは右へ走る。

魔法弾は壁に刺さって消滅した。

骸骨はまたテレポートする。

ルーフスはテレポートした場所を見つけた。

「くっそ……」

剣で振りかぶる。

しかし剣で振り払ったのはただの煙であった。

幻影だったのだ。

追い討ちに後ろから魔法弾を撃たれた。

ドオン…！

ルーフスに直撃。

「ぐっ…！！」

ルーフスは螺旋階段へと落ちる。

ポオオオン！！

ルーフスは息を上がらせながら起き上がった。

「くっそお…まずは何れが幻影が分かんねえとな…」

ルーフスはふらふらと見回している3体を良く見る。

あれ…？

一人だけ守りが硬い…

確かに一人だけ、3つの盾を魔法で漂わせている。

…幻影じゃない奴は分かった…あとは…

あの盾をぶつ壊して、攻撃するだけだ！

ビュウ…！

ファイアボールが飛んでくる。

「うわ…」

ルーフスは慌てて身を翻す。

ポオオオン！！

壁に当たって爆発する。

骸骨はテレポートした。

…どこだ…

ビュッ

ビュッ

ビュッ…

そこだ!!

中央の骸骨に剣で連撃を行う。

カキン！カキン！ガキン！ガキン！

また魔法弾が3発繰り出される。

「だあああ!!」

ドオン!!

3発全て当たった。

ルーフスは床に転がった。

「…やべえ…ひとまず撤退だ…」

ルーフスは螺旋階段をよたよたと下る。

骸骨は追いかけてよつとするが、

「……」

……察しのとおりである。

ルーフスは螺旋階段を中ほどまで下って、壁に寄りかかって座る。

そして鞆から肉を取り出してかじりついた。

「……どつやってあんな奴止めりゃいいんだ……」

明るくなった城の中で考え込むルーフスであった。

## 40：魔法世界の冒険（後編）

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

「ガウガウ!!」

「うわあ！さっきの狼!!」

ジャックに向かって何かを伝えようとしている。

時々ジャックの服の裾を引っ張った。

「…ん？何か言おうとしてるぶん？」

ナーガが聞き取る。

「ナーガ、狼の言葉が分かるのか!？」

「僕は蛇の神様なんだぶん。動物の言葉はある程度わかるぶん！

…少年から君に伝言だ、『池の前で全員集合だ』…って言うてるぶん。」

「でもなんであの狼が…!？」

「…まあありがと。君はあの池の場所分かる？」

「ガウガウ!!ガウガー!!」

「ふむふむ…『暗い森は俺達の庭のようなんだ』…って言うてるぶん。」



「分かった…ありがとう、ナーガ！ここでお別れだ！」

「こつちこそ、久しぶりに人と話せて楽しかったぶーん！  
さようならぶーん!!」

ジャックは黒い狼と共に去っていった…

~~~~~チエリーの冒険~~~~~

チエリーが目を覚ます。

そしてヒドラを見てびっくりした。

チエリーは立ち上がって構える。

「あ…あなた達！」

左の頭から順に言う。

「お、起きたか！」

「そう構えるな。俺達はもうお前を食べようとはしねえよ。」

「お前を食って、腹の中で暴れられたらひとたまりもねえからなー…」

「<…?」

ギョルルルルル…

チェリーの小さい腹が大きくなる。

チェリーは顔を赤らめて腰を落とした。

「ほらよ、ミーフストログノフだ。」

ちえリーの前に大きな頭が近づく。

頭の上にはキノコシチューのようなものが。

チェリーはそれを受け取って食べる。

「おいしー…」

チェリーはこの世界についてヒドラから聞いた。

「そんな悲しい事が…」

左の頭が言う。

「その城の王は俺達を毎日討伐にきていたんだ。」

右の頭があくびをして言う。

「あいつが来なくなつて、俺達は暇になつちまったよ。」

中央の頭が城を仰ぎ見て言う。

「あの王は今どうしているのだらうか…」

「ガールルルルルル…」

見るとステーラがいた。

「ステーラ！違うの！この竜はもう仲間よ！」

ステーラは威嚇をやめてチェリーに近づいた。

チェリーはステーラの頭を撫でる。

「よかった、ステーラが見つかった…」

ステーラは腹の血に気づいてチェリーの腹をなめる。

「あはははは…くすぐりたいよ…でもありがと、ステーラ。」

「クウン…！」

ステーラはいきなり急いだようにチェリーのスカートを引っ張る。

「…ついでにいって言ってるの？」

「ワオン！」

そつだと言わんばかりに吠えた。

「ヒドラさん、私もう行かなきゃ。」

「そうか、仕方が無い。」

中央の頭はうなづく。

「また遊びに来いよ！」

左の頭が笑って言う。

「今度は食ってやるからな」

右の頭が冗談を言って笑った。

「はい！」

チェリーも笑顔で返す。

チェリーはステラと共にヒドラの巣から去っていった。

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフスは回復してから再戦、

回復してから再戦を何度も繰り返していた。

だが、一向に相手の3つの盾は割れない。

…！魔法弾だ…！

ルーフスは剣でとっさに跳ね返した。

すると、魔法弾は盾に向かっていく。

パリン…

なんと、いとも簡単に割れてしまったのだ。

「…もしかして…！あの盾、魔法は防げないのか…！  
…そうと分かったら！始めようぜ！ピンポン！」

ルーフスは幻影達の攻撃をかわしながら、

リズム良く弾を跳ね返して盾を次々に割っていく。

最後の盾が割れた！！

「ウィ〜ヒック！まだまだ〜！！」

骸骨はふらふらしながらゾンビを2体召還した。

ゾンビなら毎晩戦っている。

ルーフスはゾンビを倒して盾のない骸骨を斬った。

骸骨がいきなり怒り冗語になって言った。

「いいいらねんにしろお！！俺は死にてえんらよお…！！」

平凡せらいの住人の分際で…！ほっろいてくれるお！！

「ほっとけるかよ。」

骸骨がふらふらと剣を力強く振る。

ガキーン…!!

ルーフスの剣と重なって大きい音を出した。

そのまま骸骨はゆったりと振りかぶって斬るを繰り返す。

ルーフスは後ろに下がりがらその剣をさばく。

「俺はこの世界の住人に頼まれたんだ。

王様が生きているかどうかを確かめてくれってな!

…住人を心配させておいて酒を飲んでいる奴なんてな!」

ルーフスが骸骨の剣を振り払った。

骸骨の剣はくるくると回って後ろの壁に刺さる。

ルーフスは自分の剣を後ろに投げて、王に平手打ちをする。

バシン!!

骸骨は酒の酔いがやっと醒めたようだ。

「今、この世界に住んでいる奴が何を求めているか知っているか…?」

骸骨はルーフスの目を見た。

「王様だよ…!」

骸骨はふらふらと地面に座って震える。

「…こんな私を…か…」

「そつだ。」

骸骨は激昂する。

「…この国を滅ぼした…この私をか!!」

ルーフスは驚く。

「!…お前が…!」

骸骨は話し始めた。

大砲の弾が上空から降り注ぐ。

ピュウン…

ポオオオオン!!

「キャアアアア!!」

民家が次々に燃えていく。

住民達は走り回る。

親とはぐれた少女が泣き。

逃げ遅れた男性は燃えた瓦礫につずもれて見えなくなった。

凜々しい口ひげを持った王様はベランダからその様子を見ていた。

「王様！大変です！我が国の住人達が…！次々と武器により殺されていきます!!」

「…もはやあれしかない…!!」

執事が引き止める。

「お止めくださいませ！その方法を使えばあなたがどうなるか…!」

「このままこの国をこの世界に置いたままでいいというのか!？」

「この国の住人がこれ以上殺されてもいいというのか!？」

「……」

執事は黙る。



「…分かりました…おいぼれの爺は何も言うことはありません！ただ…がんばってくださいね！」

王様は笑って答えた。

「…ああ…ありがとう…」

王様は呪文を唱え始める。

すると国全体に光の線が描かれ始めた。

その線はやがて曲がり…

さらに曲がって…

ついに六芒星が出来た…!!

王様は光に包まれる。

「おい…！なんだあれは…！」

他国の兵士達は戦車からその光景を見ていた。

国が地面ごと浮き始めているではないか！

少し地面が崩れて落ちていく。

そして…

国はサーツと消えていった。

総帥も驚くことしか出来なかった…

別世界へ移された後の3ヶ月後…

街の復興も終わり、元の平和な生活を取り戻していた。

畑で作物を作り。

魔法で大量の土を鉄に変えたり…

子供達は魔法学校で魔法を楽しく学んでいた。

そんな中。

立派な城の自室の中で

王様は寝こんでいたままだった…

メイドが食事を運んできた。

「王様。ここに食事を置いて…」

「黙れ…殺すぞ…」

メイドが不安気に立ち去る。

王様の使った魔法はあまりに強大で

あまりに副作用が大きかったのだ。

胸が溶けるように熱い。

頭が破裂するように痛い。

王様はその苦しみから自分に対する言葉さえも全て拒絶するしかなかったのだ。

王様は自分の情けなさに涙をながす。

「王様ー！」

王様の目が見開く。

駄目だ…

「大丈夫ですかー！」

止める…

王様は布団で耳をふさぐ。

住人達が応援の言葉を次々に語りかける。

お前らを殺してしまおう…！

止める…!!

「うあああああああああああ!!!」

ついに王様は怒りと悲しみに叫び始めた。

魔法がはたらいてしまったのだ。

王様は四つんばいでベランダへ行く。

外の景色はあまりに酷いものだった。

人が根に蝕まれ…木に変わっていく。

子供はぐんぐんと縮み…草花に変わっていく。

私の国民達が…次々に植物になっていく…

王様は悲しみに自分を殴り始める。

しかし死ねなかった。

それから、どんな自殺をはかっても死ねないのだ。

首を絞め、毒を飲み、剣で腹を斬り…

魔法の暴走は、自らを不死身にしてしまったのだ…

気がつけば肉は腐り、骨だけになっていた…

「私が国民を植物に変えた張本人なんだ…  
もうこの世界は終焉を迎える。」

この世界の太陽を見たか？いつも沈んだままだ！

この世界は、太陽と同じように沈んでいくんだよ…！」「

「沈んだまま…いいんじゃないかねえのか？」

ルーフスは言った。

「観てみるよ。」

骸骨はベランダに出て太陽を見る。

数分経ってから骸骨の目から涙があふれ出る。

「…本当だ…」

太陽はさっきと全く変わらない場所で骸骨を蜜柑色に染めていた。



「…ゴドム…！」

「あれれ？王様だ！」

「いひひひひーやった！生きてたんだ！」

「おりよりよ。心配してたんだよ！」

「お前ら…！」

「ワオーーーーーン！」

「ワオーーーーーン！」

「ワオーーーーーン！」

「ワオーーーーーン！」

「ワオーーーーーン！」

黒い狼達が王様を見て遠吠えをする。

更に木の間から猪に、鹿に羊が。

草の間から小鳥やリス、ウサギ、カラスが。

城壁には蛍やセミが止まりに来た。

「…みな…」

動物達も一斉に鳴き始める。



木々が自らざわめいた。

王は涙を更に流す。

「ただいま…！」

こうして、王様の心の氷は溶けたのであった…

ルーフスは狼に連れられて池へと行く。

「おい！」「ルーフスさん！」「ワオン！」

「おお！お前達！」

ルーフスは手を振る。

ルーフスがチェリーの体の包帯を見ていった。

「お…おい！大丈夫か！お前…！」

「大丈夫です。たくさん寝て、食べて、ジャックくんの手当てもしてもらいましたし…」

チェリーがただ笑って言った。

包帯を持ったジャックがなにやら顔を真っ赤にしてチェリーから目を逸らす。

「それならいいんだけどな…」

ステーラと黒い狼は別れの遠吠えをする。

「ありがとな！お前ら！」

「ガオーガオー!!」

木々が風に揺らされる。

まるで風がルーフス達を見送っているようだ。

「さようなら。ディブ레이크王国。」

ルーフス達は池に息を吸って飛び込んだ。

ジャボーン!!

池を抜けて…

バツシャーン!!

元の場所だ。

「…戻ったんだな。」

「不思議な世界でしたね。」

「ふう…」

「ワオン！」

ルーフスは指揮をとる。

「さあ！次の世界！行くぞ！」

「おー！！」「ワオン！」

ルーフス達は暗い森の中を駆け抜けていった。

## 41：災いの少女

天気は曇り空。

今にも雨が降りそうだ。

ルーフス達は呆然とする。

「なんなんだこれは…」

目の前にはとても大きな穴。

そしてその周りの木々にも点々と「穴」が空いていた。

チェリー達は穴を避けて前に進む。

「しかも…この森、動物が全く見られませんよね…?」

「王様の魔法の影響があつた場所なのかな…?」

「クウン?」

ステーラは首を傾げる。

「…そうっばいな…」

ルーフス達は壊された木々を横目に先へ進む。

「!!!」

「えええ!」

「ひどい…!!」

ルーフス達は目の前の光景に驚く。

人が数人、倒れていた。

何かが複数回爆発したような跡。

荒れた地面には穴が空き、

民家があったのだろうか、家の残骸が所々に見える。

ルーフスは倒れている男性を揺らし、問いかけた。

「おい!何があったんだ!おい!!」

男性は今にも閉じそうな目でルーフスを見る。

「白衣…男…」

「白衣の男…?」

男性の目が閉じ、首がガクツと落ちる。

「…!!ジャック!脈は!」

ジャックは悲しそうに首を振る。

「……!!……」

他の村人も、もう既に死んでいたのだった…

「何があっただ…?」

「あ…!」

ジャックが人物を遠くに発見する。

「あつちに生きてる人がいるよ…!!」

「聞いてみるか…!」

ルーフス達は遠くの人物の元へ向かう。

ルーフス達は一人の少女が見えた。

髪はぼさぼさで黒いストレート、黒い肌に大きくはつきりした目、骨がくつきりと見えた手足。

そして茶色く土のついたワンピースを着ていた。

少女はぼーっと突っ立っている。

ルーフスは聞く。

「あの…何かあった」

「近づかないで。」

少女はさえぎって言う。

「それはどういっ…」

「殺されてもしらないよ?」

見た目とは裏腹の言動にルーフス達は驚いた。

「この惨状…私がやったんだ。」

私がこの村を壊したんだ…

皆を殺したんだ…

私は悪魔…

私は災害…

…だから近づかないで…」

少女は微笑んだ。

ルーフス達は沈黙する。

ルーフス達と少女の間を冷たい風が吹いていった。

ルーフスは一步踏み出す。

また一步。また一步。

少女は急におびえた顔になって叫ぶ。

「近づかないで！そう言ったでしょ…！」

ルーフスが少女の目の前に顔を寄せて…

トン！

「痛い…！」

少女にチョップを放つ。

ルーフスは目を少し閉じて言った。

「バーカ。ならお前、殺してみろよ。」

少女は額をさする。

「どつやっってお前がこの村を壊滅させたんだ？



「どっちゃってお前が皆を殺したんだ？」

「…少なくとも、お前はそんなことする奴には見えないし、

お前にはそんなこと出来そうにもない…」

「…俺達に話してみろよ。お前に何があったんだ？」

少女は涙をポロポロと流し始めた。

少女の涙が収まった所で。

チェリーが少女の目の前に差し出す。

「はい、クッキーをどうぞ。」

少女はぼーっと頬張る。

「で、何があったんだ？」

「……………」

少女は話し始める。

「おぎやあ あああー！おぎやあ ああー！

「村長さん！赤ちゃんが生まれました！」

「おお！ガーナ達の子供か！男か、女か？」

「女の子です！」

「…またこの村に、新たな命が出来たのだな…」

ありがたや、ありがたや…！」

村長は手をすりすりと言わせる。

村長は母親の元へと歩く。

「どうだい、ガーナ。名前は決まったかい？」

「はい…名前はココア。東の森のココアの木のようだよ、  
すくすくと伸びて欲しい…そう思い名づけました。」

「そうか。良い名前じゃないか。」

村長はココアを持ち上げた。

「神様、ありがとう…」

村長は太陽とココアを重ね合わせる。

その年からであった。

草原は荒地に侵食され、植物も全く育たなくなり  
村民たちは食べ物に苦しんでいた。

さらに、池の水も黒く濁り、水も飲めなくなったのだ。

加えて、ココアが生まれてから3年後、村長が病気で亡くなり、  
9年後には母親が飢餓で亡くなった…

父親は悲しい村を見てはおれず、夜に失踪。

村民達も次々に痩せ細り倒れていく。

村には笑顔がまるで無かったのだ…

5年経ったある日、4人での村の会議が始まる。

「この状況を…どうにか出来ないのか…！」

「何故こんなに災いが起こるのだ…！」

「…一つ、気がかりがある。…ココアだ。

ココアが生まれてから、母親が死に、村長が死に…  
そして村は不作。…彼女が原因だ…」

「お前…そんなことを言っつか！」

「そう考えるしかないじゃないか！」

「二人とも！落ち着いて！」

乱闘になりかかった男性二人を女性が制止する。

「だが…このまま指をなめて見守るだけでは何も生まれない…  
賭けてみるしかない…！」

…すまない…！ココア！！」

キィ…

ガコン…

石で閉じられる。

ココアは地下の遺跡に閉じ込められた。

ココアは石の扉を叩く。

「開けて…出してよ！！…開けて！！」

石の扉をはさんで、閉じ込めた村民は涙を流して階段を駆け上がっていった。

金色に松明で明るく照らされたまがまがしい部屋。

大きい像は厳しく少女を睨んでいるようで、

少女はなるべく目を合わせないように座っていた…

食事は上から覗く小さな穴から配給された。

…とは言っても、食事は小さな生魚が1匹程度。

日に日に汚い池に魚が棲まなくなり、食事も徐々に減っていった。

トン！トン！トン！！

石の扉に石が当たる音が幾つも聞こえる。

子供達が文句を言いに来ってくるのだ。

「この悪魔！どっかいけー！」

「お前は災害なんだよ！」

「この村から出て行け！！」

少女にとってはこれが一番の幸せだった。

人が傍にいたことが、彼女にとっては嬉しかったのだ。

そしてついさっき。

閉じ込められてから数ヶ月後。

ドオオオン…！

「きゃあああああ!!」

「逃げろ！速く逃げるんだ！」

「ぐああああ!!」

「ああああああ!!」

ドオオオン!!ドオオオン!!

ガラガラ…

遺跡が大きく揺れる。

大きな像が横に倒れる。

ポオオオン!!

ガラガラガラ…

遺跡の天井が崩れた。

天井からは太陽の光が照らす。

少女は瓦礫を踏み越えて、外に出た。

皆はもういなかった。

村はもう無かったのだ…

少女は悲しみと自分への恐怖で立ち尽くすことしか出来なかった

…

「私がいたからなんだ…私が不運だったから、  
この村は壊滅したんだ…」

ルーフス達は真顔のまま聴いていた。

ルーフスが話す。

「お前よお…」

「運なんて信じているのか？」

「え…？」

「運が悪かったから作物が育たない？」

「運が悪かったから皆が死んだ？」

「運が悪かったから村が終わった？」

「違うな。」

ただ、偶然の偶然に偶然が重なって、そんなことが起きたただだと  
思うぜ？

「…それでも信じられないっていうならさあ…」

ルーフスは握手の手を差し出す。

「俺らと一緒に来てみないか？」

俺らと一緒にいて、運とかそんなものは無いって証明してやるよ

「！」

ルーフスは笑う。

チェリー達も笑ってルーフスの横につく。

「私と居て…いいの…？」

「俺達は大歓迎だぜ！」

「僕も大歓迎だよ！」

「私も！」

「ワオン！ワオン！」

ステーラは少女の横で飛び跳ねる。



「ココアはもう一度涙を流す。

「…ありがとう。皆さん…！」

「ココアはルーフスの手を握った。

「決まりだな！」

チェリーがまじまじと少女を見て提案する。

「まずは服が必要ですね！」

ジャックが地図で確認する。

「じゃあ、ここから西にある都市へ行く！」

ルーフスが問う。

「夜になるまでに着きそっか？」

「うん！1時間歩けば着くね！」

「よっしゃー！じゃあ行く！」

チェリーは「ココアしよって行ってくれねえか？」

「分かりました！」

チェリーが「ココアをおぶった。

「じゃ！元気にいつもの掛け声だ！

…行くぞ！」

「「「おー！！」」」

「ワオン！」

5人に増えたルーフス達の旅路は、更に続く…

## 42：グルメの街

ルーフス達は西の都会に向かって草原を進む。

ココアはチェリーの背中で小さな口にお肉を運んでいる。

「ココアちゃん、おいしいっ！」

ココアは幸せそうにコクンとうなずく。

「お料理上手いんだね、チェリーさん！」

「ありがとう！」

チェリーとココアは笑いあう。

ステーラはチェリーにお肉をおねだりする。

「はいはい、ステーラの方もちゃんとあるから。」

「ステーラったらかわいい！」

ココアはステーラの頭を撫でる。

ジャックとルーフスが考える。

「…あの穴は、隕石とかじゃないと思うんだ…」

「確か…さっきの村人は『白衣の男』とか言ってたな。」

「その白衣の男が、村を壊したんだと思う。」

「…そいつ見つけて、一発殴ってやりたいぜ…。」

ルーフスは真剣な顔で言った。

「あ！見えたよ！」

「おー!!あれが都会か…どんな場所なんだ？」

「あの都会は…『イリーガシティ』。グルメの街だって！」

「グルメか…！おいしそうな街だな！」

チェリーが横を走って先頭にくる。

慌てて振り向いて言う。

「早く行きましょー！」

チェリーはココアをしょいながら走っていく。

「慌てるなって…。」

「ワン！ワン！」

ステーラもルーフスとジャックを追い抜いて走っていく。

ルーフスとジャックも走って行った。

「やあ、ようこそ！イリーガシテイへ！」

「ようこそ！イリーガシテイへ！」

見るとやせ細っていてダサイマスクをつけた、小さい男が話しかけてきた。

横には太っていて同じくダサイマスクの小さい男だ。

細いほうが甲高い声で言う。

「旅人さんですよね？」

私達、『ネズミのお助け屋』と申します！お荷物をお持ちしますよ！」

太いほうが低い声で言う。

「おもぢじま〜ず」

「お、いいサービスじゃなか…じゃあ、3人分、頼むわ！」

ルーフス達は笑って荷物を預ける。

「はいはい！」

太いほうが2人分、細いほうが1人分のバッグを持つ。

「あんさん、じつでま〜ずが〜？」

太ったほづが尋ねる。

「ねずみがどんな生き物かってね！」

「ん？…ん…」

ルーフスは考える。

そしてピンときた。

「食べ物が好き！」

「そのとーり!!」

二人組はいきなり走る。

「ば〜か！まんまと騙されやがった！」

「ぶぶぶぶぶ!!だべものいただきや〜!!」

「「「「あああああ!!!」」」」

「バウワウ!!」

ステーラが怒って追いかける。

「俺達も追っぞー!」「はい!」「うん!」

「ロリアもっなずいた。」

「ここは市場。」

二人組と旅人が人の波を掻き分けて逃走劇を続けていた。

「待てええええ!!」

「やなこつた!」

二人組は二手に分かれる。

太いほうが進み、

細いほうは路地裏に入ってしまった。

「チェリーとココアは路地裏頼む!」

「はい!」「うん!」

「ジャック、ステラ! デブのほう行くぞ!」

「うん!」「バウ!」

ルーフス達も二手に分かれた。

「ひい! 助けてくれ!」

細いほうは路地裏で追いつかれたチェリーに剣を向けられている。





太いほうの尻にステーラが噛み付く。

「いっでー！」

太いほうが肉を後ろに投げる。

ステーラはつい本能で飛びついてしまった。

「クウン」

「おい！ステーラぁ！」

「バイビェー！！」

太ったネズミは去っていく。

ルーフスとジャック、ステーラも顔を真っ赤にして怒る。

「くそ〜！姑息な手使いやがって！！」

「ワオン！」

「バンドさんの辞書返せ！！」

怒声は都会に響いていった。

月はもうすぐ真上に昇る。

ルーフス達は宿に止まるエメラルドも奪われ、店の前の路上に座っていた。

明るい店内からはおいしい匂いが漂ってくる。

チリーン…

カップルが今店の中から出てきて、道路を歩いていった。

ギョルルルルル…

4人と1匹のお腹が同時に鳴る。

「腹減った〜」「クウン…」

「ココアちゃん…ごめんね。お腹いっぱいご飯食べさせてあげたかったのに…」

「ううん、いいよ、そんなことより、みんなのバッグを盗んだ、あの人達が許せないよ…」

「ココアは口を結ぶ。

「でも…」

「やっぱりお腹すいた〜…」

「「「はあ…「「「」」」」

「クウン…」

陽気な鼻唄が大きくなる。

チリーン…

中からはでっぷりと太った、口ひげを生やした料理人が。

鼻唄を歌いながら扉の看板を裏返している。

「ん？」

料理人は4人と1匹に気づく。

「君達、どうしたんだ。宿に泊まらないと風邪を引いてしまうよ。」

「いえ…お金が無いものですから…」

料理人は黒い肌の女の子を見て驚愕する。

「君…食事はきちんと食べているのか…」

「骨がくっつきりと見えているじゃないか！」

「あ…」

女の子は緊張で声が出ないようだ。

料理人は急いで扉を開ける。

「さあ、君達、入りたまえ。」

4人の目の前には魚、卵、チーズに鶏肉のサンドイッチセットにサラダとチョコミルクが。

ステーラの前にはステーキが2枚も乗せられた皿があった。

ステーラは早速かぶりつく。

「俺たちまでいいんですか!？」

「ああ、たとえ召し上がれ。」

料理人は笑顔で言う。

黒い肌の女の子はサンドイッチをぼーっと見ていた。

料理人は女の子に話しかける。

「どうしたのだい?…サンドイッチは嫌いだったかな？」

「ココアは確認する。」

「じゃ…食べてもいいの?」

「むしろ、君は食べなければいけないな。」

…「これはね、」…「手で持ってかぶりつくのが一番うまいんだ！」

料理人はココアの小さな手を持って教える。

「ココアはかぶりついた。」

「…おいしい…！」

「ホホホホ!!そりゃそうさ!なにせ、この私がつったのだから!」

ルーフス達もかぶりつく。

「うめえ…！」

「うん!うん!」

「感動しました…！」

「ワオン!!」

料理人はうなづく。

「私は『グラスソ・ガビアーノ・レストラン』の店長、アルミロ・ボン  
ピアーニだ。」

「俺はルーフスといます。」

「ジャックです！」

「チェリーと申します！」

「ココアです。」

「こいつはステーラ。」

「ワオン!!」

「ありがとうございます、食べさせてもらって。」

「いいんだよ。食べ物は食べるためのものだからな！」

でも君達、どうして旅人なのにバッグも何も持っていないのかい  
「？」

「それが…『ネズミ』と名乗る奴らに奪われてしまったのです。」

アルミロはあっと気づく。

「なるほど…あいつらは本当に卑怯だからな。」

…よし、今夜、私が手を打ってみよう！…君達も協力してくれ。」

「「「はいー」」」

「ワオン！」

レストランの明かりも、もう点いてはいない。

ただ月の幽かな光だけが道路を照らす。

家の屋上に3人の影が映った。

「おい、見てみるよ……あそこ……」

細い男はレストラン前のダンボールを双眼鏡で覗いている。

もう一人の細い男が双眼鏡を覗く。

「おほ……あれはもしや、牛肉じゃねえか!？」

「うっへっへっへ……あれがあればじょくりょつには「まらねえぜ」

「早速行くぞーお前らー!」

3人はスタッと屋上から飛び降りて牛肉に近づくと。

「うっへっへっへ……いますぐ食っちゃまおつぜ」。

「どうせ誰もいねえしな」

「いただきまーず……」

がぶっ……

「「「おえええええええええ!!」「」」

3人は舌をまずそつに出す。

「なんだこれ……」

「あれ……なんか……すごく腹が減ってきた……」

「うごげねえ……」

「ホホホホ！また引っかかりおつて！

それはもう既に腐った肉さ！」

3人はへとへとになって言う。

「お前は……」

「アルミロ……」

「ぐぞー……だまざれだー……」

アルミロは真剣な顔で言う。

「食べ物への恨みは恐ろしいのだぞー！

……さあ、たらぶくおいしいもん食わしてやるから、  
旅人たちの荷物を返すんだ！」



ガツガツガツガツ

ムシヤムシヤムシヤムシヤ

夜中のレストランの中で。

3人組は一心不乱にご馳走を食べる。

アルミロは欠伸を掻きながら流し台でお皿を洗っていた。

キッチンにココアが入ってくる。

「おお、君、どうしたんだい？」

「寝れなくて。私は…ずっと独りで夜も過ごしてたから…」

皆と寝るのが…不安で…」

少女は悲しそうに言う。

店長は笑って言う。

「じゃあ、私と少しお喋りでもしよつか。」

店長は食べている3人の横から椅子を2脚かついでキッチンに置

く。

そしてココアを座らせて、自分もどっしりと椅子に座る。

「ココアは泥棒をよそ目に言っつ。」

「何でおじさんは、泥棒にも食べさせてるの？」

「ん？…それはね…」

『食べる』『ことこそ幸せなものはないからぞ。』

どんなに機嫌の悪い人でも、食べ物や口を運ぶと幸せな気分になれる。

そんな相手の感情を思って料理をしていると、悪い奴でもついつい食べさせてやりたくなるのさ。

ホッホッホ…全く、お人よしにも程があるとは思わないかい？」

「ココアは慌てて首を振る。」

「私…嬉しかったよ。」

いつもはお魚を一匹だけで…

今日ほどたっぷり食べたことは無かったから…」

ひっく…ひっく…

「ココアは泣き始める。」

「幸せだったから…本当に…こんなに食べさせてくれるのかな…って

…

疑っちゃって…疑うことしか出来なくて…」

アルミロは驚いた顔でココアを見つめていた。

アルミロはそっと冷蔵庫を探って、

二つのアイスクリームをココアの前に差し出した。

「さあ、召し上がれ。」

君は、よほど辛いことがあったんだね。」

ココアは涙まみれの顔でアイスクリームを舐める。

ココアは笑顔になる。

「おうっふ...っ」

アルミロも笑顔でアイスクリームを食べはじめ。

「君は泣くより、笑ったほうが可愛いよ。」

あの子達...ステーラも加えて、皆、君を大切に思っているはずや。

だから、もっとあの子達と楽しく話してみてはどうかかな？」

ココアは頷いた。

「っふ...っ」

泥棒達は空き皿を机の上に積んで、既になくなっていった...

「あー！」「ワン！ワン！」

ルーフス達は玄関の扉の前に荷物が置いてあるのを発見する。

ステーラは荷物の前で嬉しそうに尻尾を振っていた。

「良かった〜…！返してくれたんだ！」

「アルミロさん、ありがとうございます！」

「なあと、返したのは、泥棒たち自身の判断さ。」

アルミロは白い歯を見せて笑った。

ビルの屋上から泥棒たちは旅人たちを望む。

「…なあ…俺らは本当にこのままでいいのか…」

「これが俺達の求めているものなのか…？」

「…」のままだじゃ…もうぬげだせないぞ…」

泥棒たちは静かに座って考えていた…

ルーフス達は手を振る。

「レシピありがとうございます！」

「おめでとう〜！」

アルミロも手を振った。

「しっかりと食べるんだぞ〜!!」

ルーフス達は地平線の向こうへと見えなくなった。

アルミロは体操をして店の準備に取り掛かる。

店のテレビにはニュースが流れる。

『速報です。昨夜何者かの手によってロックベースシティ全域に渡り、

謎の破壊跡が発見されました。この事件による死傷者は2000人に及び、

警察は原因解明のため調査を進めています。…』

## 43：10億人を殺した科学者

ここはイリーガシティの服屋。

ルーフス達は飾ってある本を手にとって読んでいた。

チェリーがカーテンの中から出る。

「ワン！」「お、着替えたか？」

チェリーが楽しそうに笑って言う。

「ふふふ ジャックくん、驚いちゃうかもよー！」

「？」

ジャックは首を傾げる。

「じゃあー開けますよー！」

チェリーがカーテンを開いた。

シャア！

中には変身したココアが立っていた。

ベージュ色のショートパンツにピンク色のTシャツ。

髪はきれいにとかしてあり、水色のカチューシャをつけている。

ココアは恥ずかしそうに後ろに手を組み、顔を赤くしてうつむく。

ジャックの心臓が飛び出そうになった。

目はハート型になっている。

「おー！ココア似合ってるじゃん！」

ルーフスが目を少し大きく開く。

「ワン！ワン！」

ステーラも同調しているようだ。

「ちえ…チェリーさん…恥ずかしいよお…」

「なぐに言ってるの！女の子なんだからこれぐらいおめかししなきゃダメ！」

チェリーは楽しそうだ。

ルーフス達はレジでお金を払って店を後にする。

ジャックとココアが先頭で、その後ろにチェリー、ルーフス、ステーラが並ぶ。

チェリーの提案でこの配置にしたそうだ。

ジャックは珍しそうに道路の脇に立ち並ぶ店を見ているコリアの横で

顔を赤くしながら逆さまに辞書を読んでいた。

ルーフスはふと気づいてジャックに声をかける。

「おいジャック、辞書逆さまだぞ?」

ジャックは慌てて辞書を持ち直す。

チェリーはくすつと笑う。

「どうしたんだ、ジャック?どっか具合でも悪いのか?」

ジャックは後ろ歩きで両手をじたばたさせて言う。

「そそそそそそそんなことないよーっんーっんー正常すぎて逆にやばいよー!」

「????  
そ、そうか…」

ルーフスは意味も分からず了解する。

チェリーは相変わらず笑っている。

ドン!!



後ろ歩きで進んでいたジャックに人が当たった。

ジャックは前を見る。

「う…うめんなさい!!」

白いぼさぼさに白髭の男性が振り返った。

「いや、いいんだよ。」

ジャックは目を見開く。

「あなたは…!!」

アルフォード・マグネス博士ですよね…!」

男性はうなずく。

「ああ、いかにも。私がアルフォードだ。」

「『アルフォード博士?』」

ルーフスとチェリーとココアは首を傾げる。

「酸の研究者で、新しい燃料を作り出した偉大な人なんだ。」

アルフォード博士は帽子を取って挨拶をする。

「ああ…会いたかったです。あなたにお聞きしたいことがあって…」

アルフォード博士は笑顔で言った。

「君は研究者の卵みたいだね。…では私の研究所に来なさい。」

「いいんですか!」

アルフォードはうなずく。

「ありがとうございます!」

博士は歩きながら旅人たちと話す。

「ほう!君達は旅人なのか!…それはいいな。世界はとても広いだろう。」

「ええ、とつても。まだまだ自分も知らない場所があつて…」

「よく学ばせていただいています!」

「今のうちに、よく学んでおきなさい。例えどんなものであるつと、将来、問題を解く鍵となることだろう。」

「「「「はー!」」」」

「ワオン!」

「…まあ、着いたよ。」

「……!!」「え……!!」「なんで……!」

「……」

ジャックだけが悲しくうつむいていた。

博士の研究所の壁には落書きがとこるどこるにあったのだ。

『:id』

『You·re enemy of this』

World』!!』

『disaster!!!』

どれも悪口。

書きなぐったかのような汚い字から垂れる液の様子は血文字のよ  
うにも見える。

「重いものを見せてしまってますまない。君達。

「あ、べつぞ中へ。」

ルーフス達は中へ入っていく。

専門書が汚く散らばった部屋の中にはきれいな色をした小瓶がい  
くつもあった。

修復した跡のある窓ガラスからヒビの入った光が机を照らしていた。

「ここがアルフォードさんの研究室かぁー…」

ジャックは興味深々に部屋の中を見ている。

チエリーがたずねる。

「この液体は何ですか？」

「腐食性液体といってね。動物にとっては危険で触ることのできない、

有害な液体なんだ。」

「有害なんですか!!…こんなにきれいなのに…」

アルフォードが研究室を探りながら話す。

「そのまま…ではね。これを更に私が独自に開発した、このプラズマ製錬機で製錬するんだ。するとゲルと呼んでいる物質が出来る。

更にこれを製錬するとこんな固体になるんだ。」

アルフォードが一つの塊を見せる。

「じつなっちゃうのか〜…」

ルーフス達がまじまじと見る。

「私はこの物質を発見してから、更に二つの特定の腐食性液体のゲルと

インゴットを混ぜることで、この惑星<sup>ほし</sup>を救うことの出来る燃料の開発に成功したんだ。

それがこれなんだよ。」

アルフォードが小さなひし形の物体を見せる。

「……これが…?」

「石炭よりも小さいですね…」

「そう思うだろう? だがこの燃料一つで、木炭を約5000個も焼くことができる。」

「1J..5000個?」

「ホ1J5...」

「コリアも驚く。

「すごいな…！惑星を救うほどのものを作るなんて…」

アルフォードは少しうつむく。

「それと同時に…惑星を破壊するまでのものも作ってしまったのだが…」

ルーフス達は驚く。

ジャックは悲しい顔になった。

「それって…どつどつですか…？」

チエリーが尋ねる。

「先ほど、腐食性液体は人間にとって有害なもの…といっただろう。人間とは皆強欲なものだ。各国の国々は他国を自分の領土とするために

人間を殺すための武器を作っていく。」

「戦争…」

ルーフスがつぶやいた。

アルフォードはうなずく。

「レールガン、レーザーライフル、プラズマライフル、クリオブラスタ、酸手榴弾…」

「これらは全て、各国の軍部が私の研究を応用して作られたものだ。」

ルーフス達は静かに聴いている。

「私は浅はかだった…『腐食性物質』という危険なものを人間の役に立つため『だけ』に活動してきたのだ。」

…危険な因子を防ごうとする努力は何もしなかったのだ…！

私は世界中の人間10億人を殺してしまったのと同罪に当たるのだ！」

アルフォードは大声で言い切った。

「家の壁の悪口は…そういうことだったのですね…」

「……………」

ルーフスは何も言うことが出来なかった。

「アルフォードさん…あなただからこそ聞きたいことがあったのです。」

沈黙を破ってジャックがアルフォードに問う。

「『作る』って…どんなことなんですか？」

アルフォードがジャックと向き合う。

「『子供を育てる』…：…：…と同じことだと思っね。」

子供が悪人にそそのかされて悪さをした時、

責任はその悪人ではなく父、母にかかってくる。

だからこそ、責任を持って育てていかなければならないんだ。」

アルフォードは笑顔で言う。

「だが、同時に『愛すべきもの』でもあると思っね。」

私はどんなに悪口をいわれたとしても、この燃料をゴミ箱に捨てる  
ことは無い。

自分の子供を捨てることは、悲しいことだからね。」

ジャックも笑顔で返した。

「お話できて嬉しかったです。ありがとうございます！」

「お礼を言いたいのは私の方だ。この私を尊敬してくれるなんてね。」

ルーフスとチェリー、ココアも温かい気持ちになった。

「「「「ありがとうございます！」」」」

「ワオン!!」

「またいつでも遊びに来なさい！」

ルーフス達はアルフォードの研究所を後にする。

ジャックはとても嬉しそうだ。

バンドの辞書に付箋を追加する。

ココアが興味を持つ。

「ねえ…ジャックくん…これって、何が書いてあるの？」

ジャックは笑顔で教える。



「いねはね…」

ココアも嬉しそうだ。

チェリーはそれをにやにやしながら見ている。

ルーフスは笑った。

「さあ、明日、また次の街へ出発だ！  
今日はとことん食っていいっぜー！」

「！！！！」

「ワン…ワン…」

ルーフス達は楽しそうに店へと入っていくのであった。

## 44：宇宙の壁

ルーフス達は目の前の絶景に驚愕する。

6色程の固い粘土層が積もった気候帯。

今までの風景とは正反対の色彩を持った気候帯に、ルーフス達は啞然としていたのだ。

「すげえ……」

「メサバイオーム……侵食によって形作られた美しい台地だよ……！」

「絶景ですね……」

「コアは何も言わずに口を開いていた。

「すげえ……」

「コアが一つつぶやいた。

「この世界に……こんなきれいな場所があるなんて……！」

「本当だな……」

ルーフスは続ける。

「ココア…俺たちはよ、お前に会うまでもいっばいすげえ景色を見てきたんだ…」

でも、世界にはまだまだ、星の数ほどきれいな景色があるんだろうな…！

お前も、その景色の数々を、これからいっばい見られるよ…！」

ココアは笑顔でうなずいた。

「ワン！ワン！」

ステーラがルーフス達を急かす。

「ははは…分かった、ステーラ…じゃあ行くか！」

ルーフス達は歩を進める。

ルーフス達の横を切り立った崖が通り過ぎていく。

橙色をベースに、青色、白色、茶色…

自然が作り出したとは思えない色の数々。

「本当に不思議だよね…なんでこんな色の土が自然に出来たのか…」

「鮮やかだね…」

「ワンワンー！」

ジャックが指差す。

「あれ、あそこに人だけりが出来ているよ？」

見ると崖の上に人がざわざわといる。

「あ、本当……」

「何をやってるんだ……？」

「行ってみましようー！」

ルーフス達は崖の上によじ登る。

台地の上ではカメラやマイクもセットされ、

壇も設けられていた。

帽子を被った人達があわただしく動いている。

人ごみの一人に話を聞いてみた。

「すみません、この人だけりはなんですか？」

「ああ、今から宇宙船ホープスター号の発射式が始まるんだよー！」

「宇宙船!？」

「そう、今回はロバート・バーリスが月への着陸を目指して、1年間、宇宙を旅するのさ。今、彼の偉大なスピーチが始まるから、是非、聴くといいよ。」

パチパチパチパチ…

壇上に宇宙服を着た一人の男が現われた。

長い鼻に青い目、さっぱりと切った金髪に、がっしりとした体格だ。

ロバートがマイクに向かって話し始める。

「皆さん。私は今回、初めて宇宙に行けることに感謝します。

私がこの壇上に立てるのも、宇宙に行くために指導指示をしてくださったDIXIAの人々、

応援してくださった家族やその他の人達のおかげです。本当にありがとうございます。

私が生徒だった頃、本に書いてあったのは「宇宙は無限に広がっている」ということでした。

私は本当にそうなのか、誰かが本当に、壁が無いことを証明したのか…

私は先生や親に何度も訊きました。

でも返ってくる答えはいつも『先生に訊け』『親に訊け』『先生に訊け』…

まさにいたちづつでした。」

ロバートのコミカルなジェスチャーにギャラリイは緊張がほぐれて笑う。

「私はそれから宇宙飛行士になることを決意したのです。

宇宙に壁があるのかないのか…数で語るより目で見た方が早いでしょう。」

もし私の人生の中で見つけれなくてもいい。

ただ、私はこういった宇宙探査の一つの架け橋になってさえくれればいい…

私は今日、この日を迎えられる本当に幸せです。

素晴らしい宇宙を身体で感じられるのですから…

家族にも伝えたいことがあります。『私は、必ず帰ってくるよ』と…」

パチパチパチパチ…!!

ワー!! ヒュー!!

拍手喝采が起こる。

ルーフス達も声を上げて、拍手をしていた。

アナウンスが流れる。

「ついに、この時がやってまいりました。ロバート・バーリス宇宙飛行士が宇宙へ旅立ちます!」

パチパチパチ…!!

「がんばれー!!」「また1年後ー!!」「お父さんがんばれー!」

拍手と共に応援の言葉が浴びせられる。

ロバートは子供やその他の人々に手を振って宇宙船に乗った。

「では、カウントダウンを始めますー！」

TEN…NINE…EIGHT…SEVEN…SIX…

管制指揮官のカウントダウンが橙色の台地に響く。

「FIVEー！」

「FOUR!!」

みんなが声を合わせる。

ルーフス達も合わせた。

「スリーー！！」「ツー！！」「ワン！！」

「ZERO!!」

シュゴオオオオオオオオオ!!!

白い煙が地面を押し。

ロケットは上空へとだんだん上がっていった。

空に小さくなっていくロケット。

やがてロケットは見えなくなった。

管制室はロケットを固唾を吞んで見守る。

ガピー…

ロケットからの応答。

「こちらロバート。無事大気圏を突破した。」

観衆と管制室から歓声上がる。

「良かった…！」

チェリーは安心する。

「宇宙か…どんな所なんだろうな…！」

「星がきれいなんだろうな…！」

「いいとこ見られたな！」

「ワオン!!」

管制室はマイクを通して返事をする。

「ロバート、君が思い描いていた景色はもつ目の前だ。」



「よき宇宙の旅を。」

「あ!!」

「ん? どうした、ジャック。」

「あんちゃん、チェリーさん、ミラーボって覚えてる?」

「ああ! あの南国のおっさんだな!」

「あの人ですね!」

「??? だれ?」

「ココアはきょとんとする。」

ルーフスは一文で答える。

「まあサングラスかけたおっさんだな!」

「????」

「ココアは更に首を傾げる。」

「!!! ワン」

チェリーが問う。

「…あの人がどうかしたんですか？」

「この地域のメサバイオームの別名は『デイスコ・マウンテン』…  
もうすぐミミラーボの生まれた町に着くんだよ！」

「おお！そうか！次は一体どんな町なんだろうな！」

「楽しみですね〜！」

「ワンワン〜！」

「じゃあ、次はその町へ向かおう！」

「『おおー！！』『ワォーン！』」

ルーフス達は固い台地を走って行った。

## 45：アートの街（前編）

日が沈み、月がルーフス達を明るく照らす。

その周囲では星がきらきらと瞬いていた。

ココアは横から襲い来るモンスターに怯えながら、チェリーに背負われていた。

チェリーとルーフス、ステラにジャックがモンスターを払いのけていく。

背中には大量のモンスターが地面に這いつくばっていた。

ルーフス達とはある街の前に立つ。

「Welcome to music and painting town!」

木でできた看板にこう書かれてあった。

後ろには埋まるほどの住宅の中にビルが点々とそびえたっている。

中には大きな学校らしきものも見えた。

「ここがミラーボの生まれた街か…」

「賑やかそうな街ですね!」

「ふわぁ……」

時間はもう深夜。

ジャックとココアは同時にあぐびをする。

「眠いなあ……」

「まずは宿を探しましょう。」

「そうだな。」

ルーフス達は街へと入っていく。

宿のチェックインを済ませて、ロビーから部屋へと向かう。

「あれ？」

ルーフス達はココアが傍にいないことに気づく。

「どこ行ったのかな……？」

「あ、いましたよ……」

ロビーの大きな壁の前。

ココアは目を輝かせて前を見ていた。

壁画だ。

筆とパレットを持った一人の男性が脚立の上で絵を描いている。

神聖な純白のベールに包まれた女神だ。

背中には光の羽が生えていて、胸には赤ちゃんを抱えている。

女神は優しく赤ちゃんに微笑んでいる。

その姿が母と重なって。

「コリアはとっても幸せな気持ちになっていた。

「わぁーきれいな絵…!!」

「すっげえ…」

「おっきいな…」

「ワン！ワン！」

ルーフス達も絵を鑑賞する。

男性がこちらに気づいた。

「おお、旅人さんかい？」

白と水色の水玉模様に、赤いタンクトップ。

茶色の髪に焼けた肌。

服にはカラフルに跳ねた絵の具がついていた。

「「「「「こんにちは！」「」「」「ワオン！」」」」

「こんにちは。」

男性は元気に笑う。

「僕はアミディオっていうんだ。まだ駆け出しだけど、デザイナーをやっているんだ。」

「へえ、そうなのですか。」

「この絵はなんで女神様にしたのですか？」

「この絵はね。母の温もりをイメージしたんだ。

だから僕は女神様にしてみたのさ……」

まあ、ただ単に女神様を描いてみたかったってということもあるんだけどね。」

ココアは感動していた。

『絵』って……こんなに伝わってくるものなんだ……！

「あ、そうだ。今日はもう寝たいだろう。」

明日、僕が入っている会社の主催する絵の展覧会があるんだ。

場所はこのホテルの西にあるブロス・デセクラーズ美術大学で行う

よ。

絵も描いてみることも出来るから、是非、来てほしいな。」

「はい！分かりました。では、おやすみなさい。」

「おやすみー！」

ルーフス達は部屋へと向かっていった。

翌朝。

ルーフス達はホテルを出て、ブロス・デセクラーズ大学へと向かった。

開催してから間もないのに、もうたくさんの方が集まっている。

横にはおじいさんが油絵を売っていたり、若い人たちがストリートダンスを見させている。

他にも食べ物の屋台が大きな大学の楓の並木道に詰まっていた。

男性陣は早速食べ物を頼む。

「おばちゃん…チョコレートドーナツ…」

「僕はシュガードーナツで!!」

「ワオンワオン!!」

「はいよ、エメラルド1個ずつね!」

「じゃがバター!」

「ソルトピーナツ!」

「ワオン!!」

「焼き芋!」「プレッツェル!」

「ワッフル!」「チリビーンズ!」

チェリーは屋台を右へ左へ飛び交う3人に呆れて笑う。

「…ココアちゃん、先行ってみる?」

「うん…」

チェリーとココアは並木道を進んでいく。

大学の中には様々な絵が。

歪んだ顔の絵や、天使達が楽しそうに歌っている絵。



直線と円だけで描かれたような象徴的なものや、  
1コマずつ描かれたアニメーションまで。

始めてみる絵画の世界を、ココアは歩いていたのだ。

チェリーはココアの今まで見たことの無い楽しそうな顔に安心していた。

チェリーはココアと絵を見ているうちに、美術室を見つけた。

中には子供達が真剣に筆で好きな絵を描いている。

「ココアちゃん、ここで絵が描けるぞじよ。

描いてみる？」

「えーいいの!？」

「もちろん!」

チェリーは笑顔でココアに言う。

ココアとチェリーは美術室に入っていく。

「おーやあ。来てくれたんだね!」

「あ…アミディオさん!」

「いんにちは!」

「ちあちあーべいぞ座して!」

アミディオはチェリーとココアに丸椅子を用意する。

「今日はココアちゃんだけが描くのかな？」

「はい、そうです。」

「じゃあこれが絵を描く道具だよ。」

アミディオはココアにパレットと2本の筆、水のバケツを渡す。

そしてアミディオがココアの前に紙を持ってきた。

ココアは早速紙に向かって赤い絵の具で筆を付ける。

しかし…

何かちがうんだよね…？

もっと太い方がいいかな？

もう一方の太い筆を持って筆を付けてみた。

ちがうなあ…？

わたしが描きたいのはもっと擦れてて…

ココアは閃いた。

「チエリーさん、筆持ってきてくれる？」

「え？…うん…」

「え!？」

チエリーは驚いた。

ココアは指にべたっと絵の具をつけて

紙に塗り始めていた。

「これだ…！」

「ココアちゃん…筆、使わないの？」

「ココアはうなずく。

「だって、筆じゃこの線は描けないんだもん！」

隣にいた少年はココアを馬鹿にしたように笑う。

「ココアはしれっとしたまま絵の具を水で洗っては描いている。

アミディオがココアの方へ廻ってくる。

アミディオも驚いた。

少女が筆じゃなくて指を使って紙に絵の具を塗っているじゃないか。

少女の描いているのは赤と緑…カーネーションの粹のようだ。

アミディオは後ろからじっくり見始める。

そして一通り描き終わり、更に絵の具を筆で自分の右手に塗りたくり、

絵の中心より少し右にぺたっと押す。

かわいい小さな手形が絵に咲いた。

「チェリーさん、左手、いいかな？」

チェリーは察したようだ。

「ええー！」

チェリーの左手に同じように絵の具を塗りたくる。

そしてココアの手の左に、親指が重なるように押した。

ココアの絵は完成した。

アミディオはつい訊いてしまった。

「…題名はあるのかい？」

ココアは楽しそうに笑って答える。

『』  
「おかあさん『』です！」

チェリーは涙目になる。

自分の境遇と重なったのだろう。

「…どうしても、いい絵だよ…」

アミディオはただただ感心する。

それと同時に、こんなことも思い始めていた。

この子は常識を持っていない。

けど、常識を持たないという事は、自由に生きる事ができると  
いうことなのか…！

私も含めて、みんな常識にとらわれているところじゃないか…

「この子の才能を、このまま見捨ててしまっていていいのだろうか…？」

「ココアちゃん、…この展覧会が終わった後、ホテルのロビーに来てくれないか…？」

「？…はい…。」

「ココアはアミディオの態度に不思議そうに答えた。

「おーっす、チェリー。」

「じっつぁんです。チェリーさん。」

「モオモオ。」

そこにはぶつくりと太った男性陣。

「…あなた達、誰…!？」

3人が元に戻った所で。

ホテルの部屋でチェリーは今日のことを話していた。

「へえ！これをココアが描いたのか！……すげえな！」

「筆を使わないなんて、斬新だね…」

「ワオン！」

「でしょっ？…でも、今ココアちゃん、アミディオさんに呼ばれて話をしてるんです。」

もしかしたら…絵の才能が認められて、スカウトされているんじゃない

「…」

「え!?!」

ジャックが驚く。

「…そうか。…でも俺達は何も言つこととはできないよ。」

「これはあいつの問題だからな…」

ステーラが悲しい声をだす。

「…クウン…」

「もしも行ってしまったら…寂しいです。」

「………」

「俺もだよ………」

4人は静かにココアが帰ってくるのを待っていた。

「アミディオさん、話ってなんですか？」

「君の『おかあさん』という絵…僕はそれに惚れこんだんだ。わざと筆を使わないことで生まれる柔らかさと温かさ。君にはとても良い才能があると思うんだ。」

アミディオはココアの目線に合わせて真剣に問う。

「僕の助手として、その才能を磨いて見ないか？」

「え………」



ココアはいきなりの問いかけに戸惑う。

「勿論、断ってくれてもかまわない！」

…君の素直な意見を僕は聞きたい!!」

アミディオはつい声を張り上げてしまった。

ロビー中の人々が注目する。

アミディオは慌てて言った。

「う…うめん、つい気合が入っちゃって…」

ココアは冷静に口を開き始めた。

「アミディオさん…わたし…」

ギィ…

ココアが部屋に入ってきた。

「お、こ、ココア、お帰り…」

「お帰りなさい…」

「お帰り…」

「ワン…」

みんなはいつもの雰囲気を作ろうと頑張った。

ココアは律儀に頭を下げる。

ルーフスが唾を飲む。

ジャックはうつむく。

チェリーは口を押さえる。

ステーラは無言で待っている。

「みなさん、今後とも…」

「よろしく願います…」

ジャックとチェリーはほっと息をついた。

「おまどかしやがってえ〜!!!」

ルーフスは涙ながらにココアに駆け寄った。

そしてココアの手をとった。

「良かった！またみんなで旅が出来るんだな!!」

「ははー結局あんちゃんが一番あせってたんじゃないか!」

「ルーフスさんらしいですね!」

「ワオン！ワオン!!」

「でもよ…なんで断ったんだ?」

「わたし、この旅で世界をまだぜんぜん知らないことが分かったの…  
だから、あと3年だけ、世界を見る時間をくださいって言ったんだ  
…」

「なるほどなー…」

「じゃあじゃあ、よろしくなー!」

「よるじくねー」「よるじくねー」

「ワオン！」

部屋の一室から、愉快的な笑い声が聞こえていた。

## 46：アートの街（後編）

天気は晴天。

旅人達はアミディオと会話していた。

「昨日はありがとうございました！アミディオさん。」

「いや、こちらこそ。新しい才能の芽を発見できて、とっても嬉しいよ。」

…君達はこれから西へ行くのかい？」

「はいーそうですね。」

「ここから西の地域はこことは全く違う景色になるよ。」

「え…といつと？」

チエリーが質問する。

「ここは絵画が中心の文化が根付いている。」

しかし隣の地域では、面白いことに音楽が文化として根付いているんだ。」

「へえーそうですねー！」

ジャックが楽しそうに返す。

「とっても賑やかな場所だね。」

僕も静かな生活に疲れたとき、よく遊びに行っているよ。」

「あの…アミディオさん…」

「？」

アミディオはココアと向き合っ。

「3年後…」の街で会いましょう…」

アミディオは笑顔で返す。

「ああ…約束しよう…」

アミディオの大きな手とココアの小さな手が固く握られた。

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

アミディオさんは手を振る。

ココア達も元気に手を振った。

少し歩いて。

街の雰囲気はアミディオさんの言ったとおりガラッと変わった。

町中に音楽が流れる。

ドラムが大きく響くポップ調の音楽。

楽しい雰囲気はその街には溢れていた。

「すごいなあ……！」

「やあ旅人の皆さん、ようこそおいでくださいました。」

見ると背の小さい、落ち着いた黄色のハンチングキャップに白い口ひげを付けた

老人が黄色い旗を持って立っていた。

黄色い旗には「town ture」と黒文字で描かれている。

「私はここにきた旅人の方々をご案内する、フォルカー・デーベライナーといえます。」

よろしくお願いします。」

「……よろしくお願いします……」「……」「ワオン……」

老人は笑って案内を始める。

「では、少し、歩いてみましょう。」

目的地までの間で。

「まずこれから向かう場所はセントラルシアターです。」

今日は丁度良く、有名なロッカーグループ、レシーバーズの演奏会があります。」

「おおー早速音楽が聴けるのですね！」

「楽しみだなー!!」

老人はシアターに案内する。

受付のお姉さんが目を開いて嬉しそうに言う。

「あらーフォルカーさんじゃない！」

「やあ、サブリーナ。久しぶりだな！」

「本当ー…旅人さんが来てくれたのね。お金は私が払っておくわ。どっぞ中に入って！」

「ありがとう、後で共に酒でも飲もう。」

老人は旅人たちを引き連れてシアターへと入っていく。

お姉さんは笑顔で迎えた。

シアター内はほぼ満席で、運よく5人分の席があった。

「おおー！」

「ふっかふかだー!!」



「気持ちいいですね…」

「何が始まるんだろうっな!」

「ワン!ワン!」

ブー…

音が鳴ってシアターが暗くなる。

中心に立った司会者が照らされた。

ワーーーー…!!

パチパチパチパチ…!

観客席から一斉に拍手が起こる。

「レディース…エンド ジェントルメン!

今日はなんと、あのグループがこのシアターに来てくれたぞ!?

そのグループの名前は…レシーバーズです!」

4人の男性と女性のグループが左から姿を現す。

ウオオオオオオ!!!

キヤアアアアアア!!

観客は最高潮だ。

ルーフス達はびっくりする。

「ハハハ…すごいなあ…」

「皆さん盛り上がってますね…」

「暑くなってきたかった…」

「どんな音楽なんだろうなー？」

老人は楽しそうに見ている。

茶髪の天然パーマの男性が元気よく言う。

「皆！こんにちは！ボーカル兼ギターのシンです！

それじゃあいつものように、メンバー紹介に入りたいと思います

「！

「フーーーーー!!!

「渋い低音を鳴らせ！ベース担当、ソウ！」

ツンツンの金髪の男性が軽快にベースを弾き鳴らす。

「ワアアアア!!

「かわいく弦をはじけ！キーボード担当、アン！」

ギザギザにカールのかかった短髪の女性が跳ねるようにピアノを奏でた。

キャアアアア!!

「最後に、力強くリズムをならせ！ドラム担当、デイズ！」

肥満体にゴーグラスを付けた男性がっこよくドラムをならした。

ワアアアアア!!

「以上がメンバーだ！それじゃあ、早速第1曲目、『RUNN!!』」

ワアアアアアアアアア!!!

観客の拍手と歓声が鳴り止む。

ドラムが力強くバスとスネアを叩き始める。

観客の拍手もリズムに加わる。

それに続いてベースとキーボードが重なった。

最後にギターが入る。

前奏が終わり、シンが歌い始める。

グレーに染まる世界に 独りでただ籠ってた

3年前の本 もう何十回読んだらろう

自分の周りには 誰もいないって決め付けた

はみ出た荷物 背に持って強い光に満ちる世界へ

光も 雲も 草も 空も 僕は何も知らなかったんだ

ここに僕の人生《たび》を見つけた 行こう

街を駆け抜けて 雲追い越して

草を飛び越えて 海掻き分けて

この星は なんて素晴らしく

鮮やかだったんだらう

灰色のこの心が 虹色に染まっていくな

駆けるこの道を どこまででも はるかな未来へと

「素敵な歌詞ですね…」

「ああ……いいな……」

チェリーとルーフスが感嘆をもらす。

ジャック達は静かに聴いていた。

演奏が終わり、観客から声援と拍手が送られる。

パチパチパチパチ!!

ワアアアアアアア!!

「ありがとうー!!」

ヒューー!!

「サイコー!!」

レシーバースも手を振って返した。

その後、4曲の演奏が終わり、ライブは幕を下ろした。

辺りは夕方。西の空が赤く染まる。

ルーフス達はシアターを出て、フォルカーの後について歩いていく。  
る。

「楽しかったですねー!」

「ホント！行って良かったぜ！」

「喜んでいただけ良かったです。私も案内をした甲斐がありました。」

「フォルカーさん、次はどこへ行くのですか？」

「次は先ほどとうってかわって、落ち着いたカフェに行ってみましょう。」

皆さん、お腹が減ったでしょう？」

グオオオオオ...

ココアのおながが鳴る。

ココアは顔を赤らめてうなずいた。

カフェの店内には落ち着いたピアノの生演奏が流れている。

ルーフス達のテーブルにオムライスとコーヒー、飲み物が運ばれてきた。

「良い雰囲気ですねー...」

「オムライスもつめえな！」

ルーフスはオムライスをがつつく。

「この街はとても良いところですよ。私は5年ほど前にここに来たのですが、

この街ほど良い街は他に無いですね。」

フォルカーさんは話す。

ココアが問う。

「あれ？この街出身じゃないのですか？」

フォルカーは答えた。

「私はロックベースシティという街で生まれたんだ。」

ジャックが何気なく聞く。

「ロックベースシティって世界有数の経済大国ですよね？」

「…なぜこんな遠い街に引っ越したのですか？」

フォルカーは真剣な顔で話し始める。

「私は幼い頃からバイオリンを弾いていてね…」

バイオリンを弾く時が一番楽しくて、家に帰れば勉強そっこのけでバイオリンを弾いていたりしていたよ。

そしてロックベースシティで有名なバイオリニストとなった。

もう40年前になるな…

しかし、その10年後、『音楽が騒がしい』という市民の怒号に怯え

た政府が

即座に音楽禁止令を出した。ロックベースシティの憩いの地でもあつたステージは

撤去され、楽器も政府によって奪われてしまった。

私は反対活動を行った。

だが世間の目は違ったのだ。皆が皆お金に目を奪われ、音楽はゴミのように扱われたのだ…

心が疲れた私は酒に溺れ、泣き疲れていたのだ…

そんな私に声をかけてくれた人物がいたのだ。」

『Heyーじいさん、この街に泣いているのかい？

…それなら、Meの街に来てみなよ。あなたにぴったりの場所さ。』

「男は変な話口調で私を誘ったのだ。確か名前は…ミラーボだったな。

男は地図を渡してくれた。あの男がいなければ、私は酒に殺されていたのだよ。

あの男は命の恩人なんだ。」

「そうだったのか…」

「音楽が無い生活なんて…どんなに悲しい生活なんでしょう。」

フォルカーさんは笑顔で言う。



「私は、この街に来て、本当に幸せさ。」

「フォルカーさんじゃないですか！」

「程よく酔った男性が呼びかける。」

「バイオリン、弾いてくださいよ！」

「私、伴奏やってもいいですか！」

「私も聞きたいです！」

「僕も！」「俺も！」

カフェの客がフォルカーさんと呼ぶ。

「この街は、なんて楽しい町なんだろう…」

フォルカーさんはつぶやいた。

ルーフス達も笑顔で言う。

「バイオリン、聞かせてください！」

フォルカーさんのバイオリンが始まる。

その心地よい音色は、何を表しているのだろうか。

悲しみ？ 楽しみ？ 失望？ 希望？ 夢？

恐らく、その全てを包括しているのだ。

これまでの人生を、バイオリンのメロディーに乗せて人々に見せているのだろう。

音楽というものは、一人一人が作ることができるのだから…

ホテルで夜を過ごして翌日。

ルーフス達はディスコ・マウンテンを後にしようとしていた。

「もう旅立ってしまったのかい？」

「はい。」の街にもとどまって居たいけど、また次の場所も見たいですから。」

「…そうか。身体には気をつけてください。」

「…はい！フォルカーさんも健康にお過ごしください！」

ルーフス達はお辞儀をする。

「「「素晴らしい演奏、ありがとうございました！」「「「ワン！」

フォルカーさんは笑う。

「アンコールが聞きたいなら、また遊びに来なさい。」

「「「おやすみ」

「また来ます!!」「ありがとございましたー!」

「ワオン!!」

ルーフス達は赤い台地を駆けていった。

ここは地下の廃坑。

ノイズの入ったテレビから音声が流れる。

『ロックベースシティの復興も順調に進んでおり、政府は引き続き犯人の捜索を進めております…』

「ねー…まーだー?…次の都市はどこー?」

魔女が浮いた箒の上で寝転がって言う。

白衣の男が真顔で答える。

「まだまだ…まだ街の機能が停止しないレベルなのだ…  
もっと強大な力が必要なのだよ。…」

太った男が言う。

「金ナールいくくらナールモ出しマースー!

はやくあのにくーき都市を破壊するのデースー!」

「慌てるな。必ず破壊してやる。」

大きな男が言う。

「…私たちは何を進めれば良いのだ？」

白衣の男は歯をかみ締めてから言った。

「…ミュータントの薬の醸造に、ウィザースケルトンの頭蓋骨とソウルサンドを大量に集めるぞ。」

## 47：海底の涙

ディスコマウンテンを発って、

ルーフス達は海の上をボートで進んでいた。

ルーフス達は反省を生かしてサメを見守る。

「…大丈夫そうだな。」

「油断はいけないよ！あんちゃん！」

「そうですね。しっかりと見張らないと」

ココアは初めての海におびえてチェリーにしがみついていた。

天気は快晴、海風が程よく吹いている。

昼寝には絶好の条件だ。

「…ZZZ…」

ルーフスの首が落ちそうになる。

パチン！

ジャックが舟の上から平手打ちする。

「あんちゃん」

「おほっや…「じめん」「じめん」

「…ZZZZZZ…」

ジャックの首が落ちそうになる。

バチン!!

ルーフスが平手打ち。

「ジャックー!」

「おっと…「じめん」…」

「…ZZZZZZZZ…」

二人同時に首が下がる。

ハッ

そして二人同時に向かい合って平手打ちした。

パン!! パン!!

平手打ち合戦開始。

「いてえなこの野郎!」

「じっちの台詞だよー」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！  
パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！  
パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！

二つの舟が暴れる。

「きゃあー」

「ちょっとー海の上で暴れないでくださいよー」

「ワオーン!!」

ステーラが楽しそうに海面から二人の舟を揺らす。

「わわわ!!ばかおめえ!!」

バツシャアアアン!!!

チエリーは呆れる。

ココアは腹を抱えて笑っていた。

びしょぬれになった服をボートの上に絞って。

4人と1匹は舟を順調に西に進ませていた。

「ジャック、地図はどつだ？」

「ぴったり西だよー！」

「おっし…このまま…」

「きゃああ!!」

バシャアアン!!

チェリーとココアが海へ落ちる。

「…?…ステーラ、またお前やったのか？」

ステーラは慌てて首を振る。

…とその時、ステーラが海中に引っ張られたように見えた。

「ステーラ…！チェリー！ココア!!」

「…あんちゃん…この海には何かいるよ…!!」

「…何でもいいー！」

ルーフスはパンツ一丁で海へ飛び込む。

「あんちゃん!!」



ジャックとルーフスのボートが下へ沈む。

ジャックも足をつかまれ、引っ張られていった…

ルーフスは三人を探す。

こここの地域は深海のようだ。

(くそ…どこだ…)

その時、長い髪のようなものが目じりに見えた。

そして強い力で引っ張られていく。

(!!!)

ルーフスはすごい速度で魚を横目に海の底へと向かう。

意識が遠のく。

(もうだめだ…息が…!!)

がば…

「がはっ!!」

ルーフスは気が付いた。

目の前にはルーフスと同じくらいの娘だ。

「気がついたようね…」

「ルーフスは…?」

「ここは私の家。」

青と水色の羊毛で彩られた室内。

照明で明るく照らされた部屋は、

チェストに絵画などもあり、普通の家のようだ。

「……君は……」

ルーフスが女の子の特徴に気づく。

白色貝殻のブラジャーに白い魚の尾。

海砂を連想させるさらさらなブロンズの長い髪。

娘は話す。

「私はアーフィス。ご覧の通り人魚よ。ちなみにあなた達の舟を沈めたのは私。」

ルーフスは目を開く。

「おい……どういふことだよ。」

アーフィスはしれっとした顔ですましている。

ルーフスは娘の肩を掴んで揺さぶる。

「あいつらは無事なのか!?!」

「さあねえ。知ったこっちゃ無いわ。もう諦めなさい。

あなたが私の家から来たのはもう20分前。もうとっくに溺れてるわ。」

「おい……嘘だろ……」

ルーフスは絶望でいっぱいになる。

アーフィスは笑う。

「それよりも…」

アーフィスは身体力が抜けたルーフスをベッドに押し倒す。

「私と良いことしない…?」

ルーフスは思い巡らせていた。

あいつらは死んじゃったのか…

そうか…溺れて…

…俺は一人だけ…

………

アーフィスの唇がルーフスの唇に近づく。

…いや、違う！

俺はその死んだ顔を見たか？

見てない！…あいつらなら…あいつらなら!!

「生きてる…!」

キ~~~~ン…

いきなりの大声にアーフィスは振り返って耳をふさぐ。

「ど、どうしたの!?あなた!?ついに狂ったの!?」

「狂ってなんかいねえさ。あいつらは生きてるんだよ。」

アーフィスは罵倒する。

「ばっかじゃないの!?こんな海底で人間が生きていられるわけないじゃない!?!」

ルーフスは答える。

「確かに、人間は海底じゃ生きていけない…それは常識だ。」

「だけど、俺はそれと同じように非常識もたくさん見てきたんだ!

あいつらなら奇跡や気力でなんとか出来るはずだ!」

「何を言っているの!?そんな訳ないじゃない!!」

「俺は例え、バカとか言われようが、あいつらを信じる道を選ぶ!」

ルーフスの声が海に響き、小魚達が逃げ出した。

ここは海底の地下渓谷。

横に伸びる明るく照らした洞窟の中。

ピューー!!

口から水が噴出す。

ココアは目を覚ました。

目の前にはステーラにジャックにチェリーだ。

「ああ…よかった…ココアちゃん…」

「よかったあ…」

「ワオンー！」

「皆…！！は…！ってっわ!!」

横を見るとサメが二足歩行で歩いていた。

「良かったな、ココアちゃん、こいつら心配してたんだぜ。」

しかも話した。

「このサメの方はシャーコさんって言うの。海底に棲むサメの半魚人らしいのよー」

「驚かせてすまなかつたな。」

「あ…よろしくお願いします。」

「ココアは辺りを見回す。」

「あれ!? ルーフスさんは!？」

「ああ、少年のことなら私が話そう。」

シャーコがいつものように海の偵察をしていると少年が何かを探すように海を眺めていた。

その時、少年は何かに足を掴まれて遠くへと消えてしまったのだ。追いかけてよとした時ジャックなる少年が上から降ってくる。

彼を助けた後にもう二人の人間が海底に溺れているという情報を聞いて、

間一髪で助けたというわけらしい。

「何かに引きずられたって…ルーフスさんは何に引きづられたの!？」

「大丈夫だ、ココアちゃん。ルーフスは死んでいないだろう。」

もう犯人の目星は付いているからな。」

「そうなんだ…」

「…まあ、今から食事としようか。それから私が彼と合流してやる。」

シャークは魚を焼き始める。

ココアが半目で言った。

「…共食い？」

「…弱肉強食だよ。」

アーフィスはわなわなと震える。

なにやら怒っているようだ。

「え？え？なんで…？」

ルーフスは慌てる。

その時。



アーフィスの目から涙が一筋流れた。

「え……」

「なんで私を恨まないの!?!こんなに人間を殺す私を!!ねえ!」

ルーフスは冷静になって問う。

「お前は、もしかしてこんな行為を今までずっとやってきたのか?」

アーフィスは涙の流れる目を手の平で抑えながらうなずく。

「……理由があつたんだろ?…俺に話してみるよ。」

人魚と人間では時の流れる時間が違う。

人間での10年は人魚での1000年なのだ。

これは今から200年も昔の話。

アーフィスはある男に恋をしていた。

男は人間で、ある国の王子様であつた。

アーフィスは告白をしたいが、人種の壁を越えることは出来ない。

アーフィスの心はいつも高鳴り、もやもやとしていたのだ。

そんなある日。

彼女は髪飾りに浜辺の貝殻を取りに来た。

その時、王子様が偶然海の近くに來たのであつた。

アーフィスは勇気を出して地上の岩に腰掛け、姿を現した。

しかし…

パン!!パン!!

パン!!

アーフィスのわき腹に弾が当たった。

王子はアーフィスを見つけるや否や、「捕らえる」と兵士達に発砲を命じたのだった。

王子の目は『珍しいもの』を見つめるかのような目であった。

口は残忍そうに笑っている。

アーフィスは涙を流して海へと逃げ出した。

傷はサメの半魚人のシャークに手当てしてもらったが…

心の傷は深く残ったのだった…

アーフィスはそれから人間に恨みを持って、

この海域を渡る人間を沈め殺していったのだった…

アーフィスは泣き続ける。

「……もしかしてな。」

「俺だけ助けたのは、王子様と顔が似てたからなのか？」

アーフィスはうなずいた。

「…なんであなたは…ひっく…こんな私を…ひっく…恨まないのよ…」

ルーフスは温かくアーフィスを抱く。

まるで父のようだ。

「恨めないよ…誰だって…人間だって…失恋は辛いものだから…」

「…あああああああ…」

アーフィスは大きく泣いた。

「本当に、辛かったんだな…」

チェリー達は水中呼吸のポーションを飲んで海中をシャークに連れられ歩いていく。

チェリー達は籠った声で話す。

「僕達を沈めたのはその人魚が犯人なんだね。」

「ああ、そうさ。だが分かってくれ、

…彼女には、さっき話したような辛い思い出があるのだから…」

「……………」  
「クウン？」

チェリーはシャーコをじっと見る。

ステーラは首を傾げた。

「あなた…もしかしてその人魚に恋しているんじゃないの？」

シャーコは赤くなる。

「…そうさ。…片思いだ。」

ココアも話に乗った。

「好きなこと、人魚さんには言ったの？」

シャーコは首を振る。

「言わないとだめだよ！好きなら好きって！」

ズブツ。

ジャックの胸に大きな矢印が突き刺さる。

「それじゃあ何にも伝わらないよー！」

グサッ。

もっつおまけに。

「コトアちゃん…」

チエリーは悟る。

シャーコはしょんぼりと顔を赤らめていた。

「おい、アーフィス！お前、また人間を沈め…」

シャーコが石のように硬くなる。

「ルーフスさん？」

チエリーも同時に石のようになった。

「あんちゃん！」「ルーフスさん！」

ベッドの上でルーフスの腕にアーフィスが絡み付いている。

しかもルーフスはもぐった時の格好でパンツ一丁。

ルーフスが慌てて引き離そうとしている。

「じじじじじ…もついいだろ！離れろって！」

「あ〜ん！まだこうしてきたいの〜!!」

「おい！そのサメ！どうにかしてくれよ！」

「じじつタコみたいに取れないんだよ〜！」

石と化したシャークに助けを求めるルーフスであった。

ココアがチェリーを突つつく。

チェリーも全く動かない。

「…チェリーさん？」

「じめんなさい〜！」

アーフィスが旅人たちに謝る。

「いいんですよ。死ななかつたんだし。…ねえ？」

チェリーがジャックとココアに問う。

「許すけど…もつじじじじじとはやめて欲しいね〜！」

ジャックが少し怒って言う。

「辛かったんでしょ？ならしかたないよ！」

ココアは笑って言った。

「…ありがとう！…お詫びにもてなすわ！」

ココアとジャック、ステラとアーフィスが笑って話していた。

チェリーとルーフスはシャーコに呼ばれて家の外で話す。

「ありがとう。…アーフィスはずっと、この海で独りぼっちだったのだが…」

今はあんなに楽しそうに人間と話している。君達は彼女を救ってくれたのだ。

ありがとう。」

「いや、俺たちは海底に招かれただけだから！」

「そうですね…お魚もおいしいですし…」

シャーコは笑う。

「…そう言い換えてくれると、嬉しいよ。」

「…ところで君はスターク海賊団にあったのか？」

「ああ！あったよ、とってもおもしろえ奴らだった！」



「シャー」さんもスターク海賊団にあったんですか？」

「ああ、ただし、最初は『敵』としてな。でも私達の種族のことを話したら、

すぐに受け入れてもてなしてくれたよ…」

海底での会話が進む。

海底には月の輝きと共に波の動きが映されていた…

翌日。

シャー」達が向こうの島まで渡してくれた。

「じゃあ、また会おうぜ、シャー」。

「ああ！元気でいるよ！」

「…アーフィスは？」

「今チエリーと話をしているぞ。」

二人の娘の間に波のさざめきが流れる。

アーフィスはチェリーに貝のペンダントを差し出す。

チェリーは受け取った。

「…これは？」

「これは、恋のライバルの証！

私…絶対に負けないから！あんたもがんばりなさいよ！  
私が頑張る意味がなくなっちゃうじゃない！」

チェリーは笑う。

「友達の証じゃなくて？」

アーフィスは顔を赤くしてもじもじとする。

「りよ…両方よ両方！両方って言うてもライバル成分のほうが強くて

…

と…友達とか…だい、だい大歓迎よ!!分かった!？」

「分かったわ！」

「じゃあねー!!」

「また会おう!!」

「」「」「」「」「」「」

「ワオン!!」

ルーフス達は緑の密林へと入っていった。

## 48：小さな島の研究所

小さな島にたどり着いたルーフス達。

シダやツタ、巨木に邪魔をされ、なかなか前に進まない。

「ジャングルは嫌だなー…」

「とっても進みにくいですねー。」

「あ！ネコさんだ！」

「ココア！危ないよ！噛まれちゃうよー！」

「グルルルル…ガオウ!!」

「ニャアアア!？」

「くら！ステラ！めっ！」

ジャックが制止する。

密林を更に奥に進むと、開けた場所に謎の研究所があった。

鉄で囲まれたものものしい研究所。

中には試験管のようなものが立てられている。

「…なんの研究所でしょうね…？」

「…誰もいないな…」

キヤアオ！キヤアオ！

「ワン！ワン！ワン！ワン！！」

ステーラが空に向かって吠える。

バサ…バサ…バサ…

ココアが空を凝視する。

ココアがジャックの肩をつついた。

「ねえねえ、ジャックくん。」

「ん？」

「あのおっきな鳥、なんていつの？」

「ああ、あの見たことある外観、あれは…プテラノドンだね！

今じゃあもう絶滅しちゃって、どこに行っても化石で見られな  
い恐竜だよ。」

「見えてるよ？」

「………」

ジャックが空を2度見した。



あ!!  
」

ルーフスの最大の叫び声が島に響き渡る。

チェリー達は池へと向かう。

ルーフスが池のほとりに腰を落としていた。

「おい……」ねって……俺でもわかるぞ……」ねは……」

チェリー達が目を見開いて口をぽっかり開ける。

ステーラは威嚇をしているようだ。

「グルルルルル……」

「恐竜だろ!?!」

池には首の長い橙色の竜がいた。

大きさはルーフスの背とほぼ同じぐらいといった所か。

「「「アアア……アアア……」

首長竜は鳴き声を出してルーフスに寄ってきた。

「ひいひいひい!!」っちぎたあ……」

チェリーは慌てて海水にぬれたクッキーをホイと投げた。

首長竜が口でキャッチ!

首長竜はおいしそうに食べる。

チェリーはもう一つ投げる。

ホイッ。

パクッ。

…

ホイッ。

パクッ。

…

チェリーの顔が驚愕の表情から徐々に笑顔へと移行していく。

「かわいい〜!!」

ホイッ!ホイッ!ホイッ!ホイッ!

パクッ!パクッ!パクッ!パクッ!

「チェリーさん、投げすぎ!」

「まあ…旅人さん?」



池のほとりに慌てて駆けてきた女性。

茶色のショートに白衣を着ている。

見た目から言えば30歳ほどの女性だ。

ジャックがいきなり目を輝かせて聞いた。

「なんで恐竜がいるんですか!？」

女性は少し戸惑って話し始める。

「えっと…まあ、私の研究室でゆっくりお話しましょうか。」

白く清潔な研究室の中で。

ステーラはエミリアから差し出された牛肉を食べている。

「私はエミリア・ブライトウェル。ここで恐竜蘇生の実験をしているのよ。」

「『『『恐竜蘇生!』『』『『ワオン!』」

エミリア博士は機械の横に立って説明する。

「化石をこの分析器にかけて恐竜のDNAを取り出して、それを培養することによって恐竜の卵に育てるの。」

でもこの過程に至るまでに相当の運が必要なんだけどね。」

「今は何匹ほど育てられたのですか？」

「うーん…2年前から始めて…6匹ぐらいかな？」

「2年間で6匹!？」

「育てるのも卵を作るのもとても大変なんですね！」

エミリア博士はうなずく。

「今までに何匹もの恐竜を殺してきてしまったの。」

その子達もかわいそうだけど、私もとても悲しかったわ。

自分の子供を殺したのも同然ですから…。」

「そうですね…。」

チエリーは共感する。

「でも私は、ここで一歩進まなきゃいけないと考えたの。」

ここで止まれば、人間は進歩できない。私も含めてね。

私はこの恐竜蘇生の研究に人生をささげて、未来へつなげたいと感じているの。」

「すばらしいなあ…。」

ジャックが感心した。

「あ…。」

「コリアが言っ。

「恐竜を見せてもらってもいいですか？」

エミリア博士は笑顔で言った。

「もちろん…さあ、じゃあ恐竜の世界へ冒険するわよー!!」

エミリア博士は無邪気に腕を上上げる。

「「「「「おおー!!」「」「」「ワォーン!!」

ルーフス達も手を上げた。

「まずはさっきあなた達が見たこの子。プレシオサウルスよ。名前はリナ。人懐っこい女の子よ。」

エミリア博士はリナの頭を撫でる。

「コリア コリア」

リナは嬉しそうだ。

「かわいい」

「この子は大きいから、この私も乗ることが出来るの。  
…」「コアちゃんとジャックくん、乗ってみるっ。」

「やったあ！恐竜に乗れるのかあ！」

「わーい！」

二人とも子供っぽくはしゃぐ。

「すごいなあーリナー！」

「いい子いい子」

「コアアー！コアアー！」

「次に…」

ピュイー…

エミリア博士は口笛を吹いて呼ぶ。

空から巨大な鳥が降り立った。

「やっぱりさっきのそうだったんだ…！」

「この子はプテラノドンのビームスよ。人間で言うと高校生の男の子  
ね！」

とっつても遊ぶのが大好きなのよー！」

「おおーお前俺と同級生なのかー！」



目の前には首長の青い竜だ。

「えーと次はこの子！ブラキオサウルスのルーパちゃん！

こんなに大きいけど、こっつ見えておしとやかな女の子なのよー！」

ルーパは黙々と葉っぱを食べている。

「のんびりしてますねー！」

「こっつまで大きくなるとね。すばやく動けなくなっちゃうの。」

スタタタタ...

「いびき！」

エミリア博士がチェリーに向かってどなる。

「え!?すみません...！」

「ああ、じゅめんね、あなたに怒っているんじゃないの...

後ろの子にねー！」

チェリーの後ろにはぬれたクッキーを持ち去ろうとしている小さい恐竜が。

反省を示しているのか寂しそうな顔をしている。

「かわいい〜 いいのよ〜どんどん持ってっっちゃってー！」

チェリーが小さな恐竜にクッキーを与える。

小さな恐竜はガツガツとおいしそうに食べ始める。

「この子はヴェロキラプトルのマイク。いたずら好きな男の子よ。」

「次にステゴサウルスのエレナ。この子はもう大人で私と同じくらいのおばさんのよー！」

「いやいや、エミリアさんはまだ若いっすよー！」

「やだ〜！もう！ルーフスくんったら お世辞言わないの！」

「」

ステゴサウルスも同時に喜ぶ。

「次にトリケラトプスのランダよ。この子は中学生くらいの男の子ね

！  
「…チェリーちゃん乗ってみる？」

「わああ！乗りたいですー！」

チェリーがランダの上に乗る。

ランダがいきなり楽しそうに歩き出した。

ドスン ドスン

「きゃあー」

「あら…フフフ。この子の性格がやっと分かったわ。

「この子は女の子好きなのねー」

「はははははー」

チェリーは楽しそうだ。

「…あと一人なんだけどね。」

「どうかしたのですか？」

「一人だけ柵の中で育てているの。」

「もしかして…肉食恐竜だからですか？」

ジャックが予想する。

「そう。…ティラノサウルスのゼットっていう子なんだけどね。」

柱で枠組みされた柵の中でゼットが眠っている。

「この子はね、愛情を見せても私に心を開いてくれないの。」



撫でようとするれば手を噛まれるし、近づいても避けられてしまう。

…」

「そうなのですか…」

エミリアは悲しい表情から少し笑ってみせる。

「でもね、最近、分かったことがあるのよ。

私がエサを与えても私の前では食べてくれないけど、私がゼットの所にもう一回来てみると、そのエサはなくなっていたのよ。

少しだけ、愛情が伝わった証拠かな！」

ルーフス達は笑う。

「ルーフスくん達はもうここを出るの？」

「はい、研究の邪魔になってはいけないので…」

「なら、せめて研究所で夜を過ごしてから行きなさいな。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

ルーフス達は研究所へと入っていった。

研究所での会話は弾む。

「ええ!? あなた達、アルファード博士に会ったの？」

アルファード博士は私の尊敬する博士の一人なのよ!」

「おおーそうなのですか!」

「人々の批判にも負けずに、自分の研究を愛し続ける。

私はまだまだね。批判されるとすぐに落ち込んだりして。」

「エミリア博士もがんばっているじゃないですか!」

「そうですよ!」

「ふふーそう言ってくれると嬉しいわ!」

「ワン!」

翌日。

ルーフス達は舟を浜辺につける。

海にはリナ、そしてビームスも待ってくれた。

「コオウ!」

リナは寂しそうだ。

「大丈夫だよ、私達、またきつと来るからね。」

「ココアが優しく頭を撫でる。」

「ココアー！」

リナは笑顔になった。

「おう、お前も元気でいるよな！」

「今度は僕も乗せてよ！…安全速度で」

「キヤアオ!!キヤアオ!!」

ビームスも笑っている。

「エミリアさんも研究、頑張ってください!」「ワオン！」

「あなたたちも、風邪には気をつけるのよ?」

エミリアはステーラを撫でた。

「さようならー!!」「お元気でー！」

「ワン!ワン!」

「またいつでもおいでー！」

「キヤアオ!!キヤアオ!!」「ココアー!ココアー！」

舟は小さな島から、どんどん遠ざかっていった…

## 49：嵐の前の静けさ

青く溶けそうな空にふわふわと白い雲が浮かんでいる。

ルーフス達は1日ほど海を渡り、

「セルバースタウン」という港町についた。

大きな灯台はどっしりと構えており、漁船と貿易船がゆらゆらと波の上で揺れている。

クア、クア…

カモメが鳴いて旋回をしている。

ルーフス達は美しい町の風景を堪能しながら砂浜を歩く。

「いい風ですね…」

「ああ…」

ステーラは砂浜を駆ける。

町は道行く人の静かな賑わいで包まれていた。

ある人は路上で時計や地図などを売り。

カップルはベンチで静かに愛を感じていた。

チェリーは路上販売で4人分のバッグパックを買う。

チェリーはルーフスとジャック、ココアに手渡した。

「お、ありがとう。」

「これで荷物も安心だね！」

「チェリーさん、食材もここで買ったちゃおうよ！」

「ワオン！」

ステーラがチェリーを急かす。

「そうですね、食材を買いに行きましょう！」

ルーフス達は別れて買い物をすることにした。

ルーフスとココア、ステーラは肉屋さんと魚屋さんに。

チェリーとジャックは小麦と野菜やパンを買いに行くようだ。

それぞれの買い物を楽しむルーフス達。

「牛肉と豚肉に…鶏肉も買っておくか、ココア好きだもん！」

「うん！ありがとう！」

「ハッハッハッハ…」

「はは、ステーラ、嬉しそうだな！」

「はい、サービスだよ。」

ステーラの前にステーキが置かれる。

「ワン！ワン！！」

ステーラはお肉にがぶりついた。

「あーありがとうございます！…良かったな、

ステーラ！」

「ワン！」

「はい、チェリーさん、にんじん持って来たよ。」

「あ、ありがとう！ジャックくん。」

「あとは何が必要なんだっけ？」

「うーん…じゃがいもにカカオ豆ですね！」

「じゃあ僕カカオ豆持つてくるよ！」

「ありがとう！…じゃがいも…じゃがいも…」

5人の旅は平和に過ぎていく。

チェリーの笑顔の中には、不安げな表情も同時にあった。

正午のキャンプ場。

旅人たちの腹もすいてくる頃だ。

チェリーとココアの手料理が始まる。

「今日はフレンチトーストをつくってみようか！」

「フレンチトーストって？」

チェリーは優しく笑う。

「作って食べて見た方がわかるかな？……じゃあまず材料は……」

チェリーはココアに説明をする。

ココアは一生懸命に卵を割る。

チェリーはシロップを作りながら見守っていた。

ルーフス達は静かに本を読んで待つ。

ステーラは暖かさに眠ってしまったようだ。

「出来たよー！」

「おー完成したか！」

「うまそうだねー!!」

「ワオン！」

ココアは不安そうにルーフスたちの反応を待つ。

「…どっかな？」

「んー！うめえよ！」「最高！」「ワオン！」

「良かったね！ココアちゃん！」

「うん！！」

ココアは笑顔で応えた。

ステーラが木陰で座っている中。

ジャックとココアが開いたままの辞書を挟んで、ビニールシートの上で眠ってしまった。

チェリーは二人にタオルケットをかけた。

「ルーフスさん。」

「ん？どっした？」

チェリーはジャックとココアを見て微笑みながら話す。

「最近、とっても平和ですよ。」



「まあそうだな、モンスターは時々出るけど、前よりじたばたしてねえっつーか…」

「…平和ならそれでいい、って思いたいのです。でも…」

「この幸せな日々が、いつか不幸になって帰ってくるんじゃないかって、

思っているんです。…どうしたらいいのでしょうか…？」

「…まあ、そうだな…」

ルーフスは考える。

「でもよ、俺たちなら吹き飛ばせんじゃねえか！そんな不幸ぐらい！

俺達がこの町まで来れたのも、俺達の力なんだからよ。

大丈夫さ、今の幸せを、そのまんまかみ締めておこうぜ。」

「…そうですね。」

チェリーは幸せそうに微笑みながらいった。

## 50：計画始動

鮮やかな黄緑色の芝生と白い柵に囲まれた赤い一軒家。

女性は少ない皿を洗い終わってから、机でアルバムを見ていた。

「いつのまにかあなたは大きくなっていくのね…」

女性は笑う。

「ルーフス…あなたは今、どこまで大きくなっているのかな！」

ドオオオオオオン…！

「きゃあああああ!!」

「うわあああああ!!」

人々の悲鳴が外から聞こえる。

女性は慌てて外を見る。

遠くに謎の巨大な黒い影が見える。

黒い影の目は不気味に白く光った。

ここはセルバースタウン。

漁師が今日も陽気に鼻唄を歌いながら網を引く。

漁師に影がかかる。

「ん……？……飛行機か……」

三つ首の髑髏は漁師を凝視する。

漁師は驚く間もなかった。

ドオオオオオオオン！！

ボシヤアアアアン！！

漁師の船は半分になって沈んでいった。

「父やんこー」

他の漁師は大きな水しぶきが見えた。

水しぶきの中から謎の黒いモンスターが現われた。

「逃げろおお!!」

ワアアアアア!!

船はそれぞれがモンスターから逃げていった。

ドオオオン!!

ボオオオオン!!

船は次々に沈められていく。

沈んだ船員達は浮き上がっては来なかった。

モンスターは青く光りはじめる。

モンスターの目は静かに閉じた。

セルバースタウンの砂浜には今日も人で溢れている。

砂浜の監視員は双眼鏡で恐ろしい光景を観てしまった。

モンスターがこちらに向かって近づいてくる…!!

「皆さん！謎のモンスターがこの砂浜に近づいています！

速やかに海から上がってください！！」

観客はモンスターを確認してから海から急いで上がる。

キヤアアアアアア！！

「お子さんの手を離さずに！速やかに海から上がってください！！」

ドオオオン！！

謎の爆発物が監視員の目の前で落ちて砂を上げる。

「まずい！我々も逃げるぞ！！」

監視員も機材を置いて砂浜を引き上げる。

砂浜に大きな口を開けて泣いている少年がいた。

ルーフス達は逃げる人ごみを掻き分けて砂浜に出る。

「なんだ…！この騒ぎは…！」

「グルルルル！！」

ステーラが気づいて威嚇する。

「!!」

黒い三つ首の髑髏に、巨大な肋骨を持ったモンスターが近づいてくる。

ルーフスの後に、女性がたどり着いた。

「レックー!」

「ママー!」

少年は喜んで走っていく。

「うわー!」

バシヤア!

しかし砂に引っかかって転んでしまった。

モンスターは少年の背後から髑髏を少年に向かって放った。

チェリーが咄嗟に判断して砂浜を駆ける。

「たあー!」

刀で髑髏を横に弾き飛ばした。

髑髏は砂浜に当たって爆発した。

ポオオオオン!!!

遠くで砂が上がる。

「早く逃げてー!」

「うわああああん!!」

少年は泣きながら母親の元へ駆けていった。

ルーフスとジャックもチェリーの元へと行く。

「なんだかわかんねえけど……ここで食い止めとかなきゃ街が壊されちまうー!」

「そうだね!」

チェリーは真剣な表情のままうなずいた。

ポオオオオン!!!

モンスターが爆風を上げる。

ルーフスは風を腕で防ぐ。

モンスターは上に上がり、海の彼方へと消えていった。

ルーフス達は呆然とする。

「…なんだっ たんだ一体…」

「ちあ…」

セルバースシティのカフェにはいつも以上の人で溢れていた。

テレビでの情報を家に帰るより先に手に入れるためだ。



店長もカウンターを出て客の中に混じってテレビを見る。

テレビキャスターが話す。

『速報です。先ほど全国各地で謎の黒いモンスターによる襲撃が行われました。』

この事件には死亡者や重傷者も出ており、全国の警察による調査が行われています。

…各地のテレビ局に中継が繋がっております。…』

「この街だけじゃなかったのか…」

屈強な漁師は言う。

「そしてあの黒い奴はどつやら何匹もいるようだぜ。」

魚屋は言った。

「一体あのモンスターは何者なんですの…」

教会のシスターは言った。

『…「」ちらサク…』

プシン…

テレビの表示が途絶える。

「おい、サントス！お前のカフェのテレビが壊れたぞ！」

カフェの店長は腕を組んで考えながら言い返す。

「いや、私のカフェのテレビは、先月取り替えたばかりだが？」

「いやでも現に表示が出来てねえじゃんかよ！」

「それはすまないが、私が得意なのはコーヒーを入れることぐらいだから  
どっしりよつもできないわ。」

カフェの客からは不満がもれる。

その不満を掻き消すかのようにいきなりテレビが点いた。

テレビに映っていたのは謎の白衣の男。

「なんだ…？」

「電波ジャック？」

「誰だ…？」

白衣の男は狐のような笑顔で話し出す。

「やあ諸君。私はM・R・Fと言う者だ。以後お見知りおきを…」

「白衣の…男…」

ルーフスは怒りで震える。

ココアの村を襲撃したのはこいつなのだ。

白衣の男は続ける。

「君達はなんて滑稽で臆病な人たちなのだろう！まさに爆笑ものさ…  
なぜならこんな救われない世界に、黙って住んでいられるのだから」

白衣の男は両手を差し出して言った。

「そんな君達に、最高のプレゼントを贈ってあげよう。

我々の30分間のデモンストレーション…気に入ってくれたかな？

明日の正午から、我々はこの世界を破壊して0に戻す計画を開始する。

君達はただ待っていてくれればいい…

そうすれば、皆が幸せになれる世界が築けるはずさ…

どうだ、最高のプレゼントだろう？

…ただし、どうしても受け取りたくは無いですという者は

バツダボーナ火山のふもとに集まればいい。

もし500万人以上に達せば我々の飛行機に乗せてやろう。

さあ、君達は箱舟に乗るか、死を選ぶか…

君達の判断…楽しみにしているよ。」

プッン…

『……………!!失礼しました。先ほど何者かの電波ジャックにより……………』

客の間に静寂が訪れる。

チエリーの手は机の下で震えていた。

客達の目はさまざまだった。

理不尽な行動に怒りを見せるもの…

滅亡の恐怖に怯えるもの…

怯えた客はカフェを後にし、最後の晚餐に出かけていった。

ドン!!

一番屈強そうな男が取り仕切る。

「ここに残っている奴の中にや…チキン野郎はいねえだろうな…?」

「当たり前だ!」

「そうだ!!」

多数の男女は賛同する。

「…俺達だけじゃ世界は守れねえ…だがこの世界にや、俺達のように共に戦ってくれる奴がいるはずだ!」

「」「」「」  
「」「」

「そうだ!!」「ワン!!」

ルーフスとジャック、ステーラも掛け声を合わす。

「そしてそいつらも同じように求めているのが…」

俺達さー!」

「」「」「」  
「」「」「」  
「」「」「」

勇者達は初対面もいるが、心は既に一つになっていた。

力強い掛け声を屈強な男に浴びせる。

「よし…じゃあまずは今日はもう寝るぞ!力がなきゃ戦はできねえ  
」!」

「待ちなさい。」

カフェの店長が言った。

「それを言うなら君…腹が減っては戦が出来ぬだろう。」

今日は世界最後の大サービスだ。私の料理をいっぱい食べていき  
なさい。」

「」「」「」  
わあああああああああ!!!!」  
「」「」「」

客達は大いに喜ぶ。

「ありがとよーサントスー！」

「俺にはコーヒー入れることぐらいしかできねえって言ったろっ？」

サントスは冷静に手を洗いながら言った。

チェリーがカフェの人々を見つめて、涙を拭いたように、ルーフスには見えた。

腹が一杯になり。

ルーフス達はホテルで予約をする。

ホテルはすでにほぼ満杯で、二人部屋が二部屋のみであった。

ルーフスとチェリー、ジャックとココアとステーラで、二部屋に分ける。

~~~~~ジャック、ココア、ステーラの部屋~~~~~

部屋の明かりを消して、それぞれのベッドのランプでほのかに照らされている。

ココアが本を読んでいるジャックに話しかけた。

「…ねえ、ジャックくん…」

「やじつなの？」「コリア。」

「コリアは不安そうにジャックに尋ねる。

「…」の戦いでさ、私がいても…足手まといになるだけだよね…

私はどうしたらいいのかな…？」

ジャックは答えた。

「…僕は君に、一緒にいて欲しいな。」

「コリアはジャックを見る。

ジャックは震えながら答える。

「正直、僕はこの戦いから逃げ出したいんだ…  
僕の中の臆病な気持ちさ、そうさせているんだよ。  
でも、」

ジャックは真剣な顔でコリアと向き合って話した。

「君がいれば、僕は逃げずに戦えると思つんだ。」

ココアはジャックをポカんと見たままだ。

ジャックはココアの顔に慌てる。

「じ…じめん、やっぱり無理かな？ そうだよな、君を戦場の中に置いておくなんて」

「そんなことないよ！」

ココアは笑顔でジャックの手を取った。

「私…ジャックくんを応援する！」

ジャックくんの傍にいた方が、私も安心できるから！」

ジャックは赤くなる。

ジャックは顔の暑さを振り落としてから、

ココアの手を強く握り返した。

「必ず、君を守って見せるから！」

ココアは笑顔で言った。

「うん…よろしくね」

「ワオン！ワオン！」

ステーラはココアを安心させるように、ココアの顔をなめる。



「あははは！ステーラも守ってくれるんだね！」

「ワン！ワン！」

「お！ステーラ、気合入ってるな！」

「僕も気合入れていかない！」

「ワン！ワン！」

ステーラは元気な鳴き声を発する。

「じゃあ、今日はもう寝よう！」

「そうだね！しっかり眠っておかなくちゃ！」

「ワン！」

パチン…

部屋のランプが消える。

~~~~~ルーフス、チェリーの部屋~~~~~



「怖い…」

チェリーは本音を吐き出した。

「私…これまでに会った人達が…みんな消えてしまうのが…  
とても…怖いよ…!!」

チェリーは泣き始める。

チェリーは思い出してしまった。

お父さんが暗闇に去っていく。

お母さんが霧に奪われていく。

プラムがボロボロに傷ついていく。

そしてチェリーはいろんな人々の笑顔を思い出していた。

「チェリー。」

ルーフスは話す。

「俺達が出会った仲間だよ、みんなお前と同じような事を思ってるんだぞ。」

チェリーの涙は少し治まる。

「俺も、ジャックもチェリーも、これまでに会ったみんな、みんな『お前』が消えたら嫌だ、って思ってたんだよ。」

じゃあ、お前は、その仲間達に出来ることはなんだ？

『生き残る』ことさ。お前は今、泣いてる場合じゃないぞ。」

チェリーは涙を「じ」「じ」と拭いた。

「…そうですね、私は…生き残る…！」

生き残ってみせる…！」

チェリーは言い聞かせるが、涙は次々に溢れてくる。

「チェリー…！」

二人の間に沈黙が訪れる。

チェリーは涙で濡れた顔でルーフスに話しかけた。

「ルーフスさん…」

「ん？」

「…ルーフスさんの…すぐ横に居たいです。」

ルーフスは目を見開く。

そしてたちまち赤くなった。

ルーフスはベッドの左に寄って顔を逸らして言った。

「…全く…大丈夫だよ。」

チェリーはルーフスの背中の中に入る。

ルーフスさんの背中…

温かい…

私は…自分で守ることしか考えてなかったけど…

みんなが、私を守ってくれていたんだな…

チェリーの涙は止まった。

「…夜這いはいしませんから、安心してくださいね。」

ルーフスは一瞬止まった後に怒る。

「わ…わ…わびろ…田すなよ…」

「…ふふ」

チェリーは幸せそうに笑う。

すやすやと眠るルーフスとチェリーの顔は、

両方、温かい笑顔であった。

深夜。

馬の蹄が砂を裂く。

モンスターが徘徊する砂漠の中の小さな家に向かって、

様々な方向から時間差で人々が馬で集まってきた。

人々は白いマントで身を包み、体格も様々だ。

商人達は家の中に入り、下りのエレベーターに乗る。

そこは寂しい砂漠とは裏腹の、豪華な会議室。

商人達はマントを脱ぐ。

その面々は…

グレート・スライヴ・シティ 市長ノヴァイオレット・カーライル

ジェラーナ国 大統領ノエルジア・ストック

イクオラ・ジェラーナ国 大統領ノイブン・ジャリル



アルヘンシキ国 大統領ノイスコ・トゥーツカ・ケウルライネン

デイラベル王国 国王ノコンラッド・デイラベル

デイラベル王国 女王ノローナ・デイラベル

バルダン・オートリウム・シティ 市長ノバリー・オドウクル

イリーガシティ 市長ノエツツイオ・ベツツイーニ

サクラノ国 国王ノ桜ノ道常<sup>ミチツネ</sup>

ザラメユキ国 国王ノ松原郷玄<sup>マツハラゴウゲン</sup>

ディスコ・マウンテン・シティ 市長ノリリアーヌ・ボルデ

モンス・ベールシティ 市長ノオスニエル・ロングハースト

以上の大都市を統べる者達だ。

これから、緊急の、秘密裏の国際会議が始まる所であった…

## 51：国際会議

~~~~~とある荒地より~~~~~

「あと…もう少し、もう少し…」

ボロボロに汚れた車掌帽の少女は爆破された土地を丸石で埋め立てた後に

線路を敷く。

あともう少しで…鉄道産業の中心地　　へールタイル・タウンに着くんだ…

そこには既に通っている、鉄道がある…！

!! この線路を繋げればきっと…計画阻止に役立てるかもしれない…

少女の背後に、やっとへールタイルの町並みが映ってきた。

~~~~~

~~~~~秘密国際会議部屋より~~~~~

国の元首達が互いに握手をする。

ディラベル王国国王、コンラッド・ディラベルとジェラーナ国大統領、エルジア・ストック。

グレート・スライヴ・シティ市長、ヴァイオレット・カーライルとバルダン・オートリウム・シティ市長、バリー・オドゥクル。

サクラノ国国王、桜ノ道常とザラメユキ国国王、松原郷玄は…

ギユイ…

握手の手は震えだす。

「久しぶりではないか郷玄よ…」

「ああ、全く久しぶりだ…ワシとしてはもっと久しく会ったほうが良かったのじゃがのう…」

「私もだよこのヒゲじじいが。」

「青ボウズに言われる筋合いは無いな！」

「二国とも冷静になってくだされ…」

イクオラ・ジェラーナ国大統領、イブン・ジャリルが仲裁に入る。

「では、今回議長を務めさせて頂く、コンラッド・ディラベルです。よろしく願います。」

元首達は拍手を贈る。

「まず確認したいのですが…まだ来ていらっしやらない国はありますか？」

アルヘンシキ国の若き大統領、イスコ・トゥツカ・ケウルライネンは言う。

「ロックベースシティのおっさんが来てないぜ…  
全く…本当にのろまと来たもんだ…」

ケウルライネン大統領は机に足を乗せてあくびをする。

松原郷玄国王はその態度に激昂する。

「この若造が！無礼とは思わんのか！」

ケウルライネンはしれっと応えた。

「へっ…これだから常識でしか語れねえじじいは嫌いなんだ…」

「何を!!」

チャキ…

郷玄が刀を抜き始める。

モンス・ベールシティの市長、オスニエル・ロングハーストが郷玄を押しやる。

「落ち着いてください！郷玄さん！」

「離せ…こいつは斬らないと気がすまん！」

ブロロロロロロロ...

キイ...

外で車の音がした。

「…あーあ、やっちまったな、」

ケウルライネン大統領は真顔で答えた。

エレベーターからは丸々と太ったスーツを着た中年男性だ。

ロックベースシティ 市長ノマック・ウィリアムス

ヴァイオレット市長は大きな声で言った。

「マック市長！今回の会議は、敵に知られないように変装し、さらに馬を使うという約束だったではありませんか！」

「だまれ小娘！私が低賃金労働者の変装などできるか！  
それに車で来なければ、明日の正午までにバツダボーナ火山に着かないのだ！」

各国の長に失望という静寂が走る。

黒い肌をしたバリー市長は大声で怒る。

「あなたは…国民をおいて自分だけ逃げるつもりなのですか!!」

「当たり前だ！私はまだ稼ぎ足りていないのだからな！

…いいか、私は一つの都市を治める者だ！この仕事は才能が無くてはできないのだよ！

その才能と国民を比べれば簡単に答えが見つはずだ！」

バリーに青筋が走る。

「…この…エセ統治者が！」

バリーはマックの胸襟を掴む。

慌てて他国の元首が止める。

会議室はもう会議どころではなかった。

みんながみんな、明日の世界崩壊にあせっていたのだ。

郷玄と道常が、なんとかかしてバリーを引っぺがしたが、

口論はまだまだ続いていた。

「離せ！こいつは努力で勝ち取った私の誇りをなめたんだ！」

「ハッ、貧乏な小国のくせに、何を言っておるのか！」

「私の国民達は！お前の国の奴らよりはよっぽど幸せに暮らしてるぞ

！  
お前の国は！お前が長になったことがなによりも失敗だ！」

ローナ・ディラベルが仲裁に入ろうとしたその時。

ドン！！

各国が静かになる。

コンラッド・ディラベルが机を叩いたのだ。

ローナ・ディラベルは驚いて国王を見る。

各国もコンラッド・ディラベルを見る。

コンラッド・ディラベルは場をゆるくするために嘘を言った。

「おおっ、すまない、蚊がいたものでね…」

ロックベースシティのマック市長。

そこまで逃げていきなければ、どうぞお逃げください。」

「コンラッド・ディラベルは真面目に言った。

「ロックベースシティの防衛については、近隣のイリーガシティのエッツィオ市長にお願いしよう。」

エッツィオ市長は驚いた。

「私の都市がですか!？」

「そして...」

ディラベル国王は質問をさえぎって言った。

「国民にこうお伝えしてもらいましょう。『あなたの市長は国を捨てて鳥のように逃げていった。』と!」

マックは引き下がる。

ディラベルは更に続ける。

「国民を捨てて逃げるなど、あなたには元首としての才能のかけらもないのですな。」

マックは怒りに震える。

そして席について負け惜しみを言い放った。

「後悔するなよ...この恵まれた知識の泉が失ってしまうことを!」

ディラベルはつなずいて再度呼びかける。



「まあ、皆さんも席について…そうだ、バリー市長、コーヒーでもい  
がかな。」

バリーは疲れたように笑って言った。

「ああ、ありがとうございます、ディラベルさん。」

ローナがコンラッドに向かって笑顔で言った。

「かつこよかったですよ。あなた。」

コンラッドは赤くなる。

「…お世辞を言うな。議長として当然のことをしたまでだよ。」

~~~~~

~~~~~鈍行世界より~~~~~

クリスタルがたくさんそびえたっている草原。

その中の一つの村で二人の老人は話していた。

青緑色の髪をしたメイドとそばかすの少年はアップルパイのあつ  
た皿とコーヒーのカップを下げる。

「ありがとうございます、アルガさん。ブロッカスくん。」

「……………えい…いゆ…」

「……それなら……しかた……ありませんね……  
私達も……協力します……」

「おお、その言葉を聞けてよかったです。

これで、世界の人々の避難所が確保できました……」

バンダは微笑んで言った。

村の横には、青いクリスタルで囲まれた門があった。

~~~~~

~~~~~ 秘密国際会議部屋より ~~~~~

イリーガシティの市長は話をする。

「私の都市の国民から、ビデオレターを預かっています。

差出人の名前は『アルフォード・マグネス』と言います。

この名前を聞いて、二つのイメージが思い浮かんだでしょう。

一つは化学を切り開いた第一人者、

もう一つは世界に武力を与えてしまった悪魔……

そんな彼からのメッセージです。」

「では皆さん、早速聞いてみましょうではありませんか。」

パソコンにフロッピーディスクを挿入する。

画面には研究所内の博士が映し出された。

『世界各国の皆さん、こんにちは。』

私は酸の研究をしている、アルフォード・マグネス博士です。

私はとんでもない過ちを犯してしまいました。

この世界に『武器』という不良たちを解き放ってしまったのです。

そこで皆さんにお願いがあります。

その不良たちをモンスターに向けて、『世界を救った英雄<sup>ヒーロー</sup>』  
にしてくださいませんか。

そうすれば、私の子供達を最良に使ってもらうことができます。

…以上です。皆さんのご武運を祈っています。』

映像は博士の敬礼で終わった。

ケウルライネンは言う。

「アルフォード博士の思いは、無駄にはできねえな…」

バリーも応える。

「その通りだ。私の国も、ある小さな都市と戦っている。

その銃を人から背け、モンスターに共に向けることが今できること

だ。」

「私の国も協力しますわ。」

デイスコ・マウンテン・シティ市長、リリアーナ・ボルデは賛同する。

「…私も賛成だ…」

不機嫌そうにマック市長も賛同する。

その他全員もこれに賛同した。

「次の件に移りたいと思います…防衛作戦はどうするべきであるか、皆さんの意見を伺いたい。」

最初に手を上げたのは、イスコ・トゥッカ・ケウルライネン市長であった。

「みんな、それぞれの国を守るってことでもいいんじゃないかねえか？」

俺も含めて、お前ら全員、自国を守ることであせってんだろ？」

「ちょっと待ってください。」

ヴァイオレット市長が手を上げる。

「それでは、大きな都市に属さない小さな村や街はどうするのですか？」

「そうだった…盲点だったよ。」

ケウルライネンは納得する。

イブン・ジャリル市長が手を上げる。

「ではどうするのはどうでしょう。」

保護されない地区が出ないように近隣の村をそれぞれ分けていく  
というのよ。

ケウルライネン市長と、ヴァイオレット市長のそれぞれの意見を統  
合した

アイディアではないでしょうか。」

各国はうなずく。

しかしロックベースシティの市長はやはり違った。

「近隣の弱小国も守れだど!? 国の資金が底を尽きてしまつてはないか  
!

私は反対だ!.....」

各国は冷たい目でマック市長を見つめる。

桜ノ道常が言う。

「マック市長よ...残念ながら、おぬしの他に反対するものはおらん。  
各国が皆、財政がきつい中で今回の防衛をするのだ。」

それを一番経済力のあるおぬしの都市が言っているのはどうするの  
か? 「

.....クソッ! お前達、後悔してもしらんからな! 「

マック市長は悲しく負け惜しみを言った。

「…では、これから保護区分を決めましょう。…」

世界壊滅予定時刻まであと10時間。

国際会議は順調に進んでいた。

飛行艇のバルコニーで白衣の男は写真を見ていた。

きれいな肌の白い女性の写真だ。

「…もつすぐ…君の無念が果たせるよ…ヴェロニカ…」

## 52：賽はなげられた

~~~~セルバースタウンのホテルより~~~~

ルーフスはベッドから起きた。

いつもとは違う、すっきりした寝覚め。

チェリーはもうすでに起きていた。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

2人は隣の部屋の3人を誘う。

「おはよう……」「おはよう……」「ウォン……」

「おはようございます……」「おはよう……」

5人はロビーのレストランへと向かった。

「コッ……」

チェリーはコーヒーに、ハンバーガーにフライドポテト、そしてクッキーを自分の前に置く。

「今日は、ガッツリと食べないと……」

チェリーは元気よく言う。

ルーフスも皿にめいっばいの料理を載せて机に置いた。

「そつだ！今日から暴れることになるぞ〜！

皆、いっぱい食べておけよ〜！」

「もちろんだよ〜！」「はい！」「ワオン！」

5人はがつがつと料理を食べる。

5人にはもはや怯えた顔は無かった。

「この世界を壊させはしない。」「この思いで満ち溢れていた。

5人の戦士達は、臨戦態勢に入っていたのだった…

~~~~~

~~~~~秘密国際会議部屋より~~~~~

「…ではまとまった結果を発表します。

まずは先程の区画で分けた地域を各国が守っていただき、敵の勢力が収まったところで敵の本拠地だと推定される、

『バッドボーナ火山』のふもとへと集結し、首謀者達を捕える。…これで大丈夫ですかな。」

各国は拍手を送る。



ロックベースシティのマック市長は腑に落ちない顔で微妙な拍手を送った。

グレートスライヴシティ市長、ヴァイオレット・カーライルは時計を見て言った。

「…あと6時間…みなさん、早速私たちの仕事に移りましょう。」

「この世界を…守ろうではありませんか！」

各国の首長はうなずいた。

各国は白いマントをまとい、それぞれエレベーターに乗る。

ヴァイオレットは立ち止まった。

ヴァイオレットは唇を震わせる。

「ジャックくん…ステラ、ルーフスさん…チェリー…！…  
どっか無事でいてね…」

ヴァイオレットはエレベーターに乗った。

~~~~~

~~~~~とある飛行艇より~~~~~

Mr・Fは台座に座っている。

Mr・Fは2人に呼びかける。

「チェリー…アーティクル…」

ついに私たちの世界を作る時が来たのだ…！」

チェリーとアーティクルは立って聴く。

ランプスは両手を後ろに縄で縛られていた。

ランプスは顔を真っ赤にしてガラガラ声で叫ぶ。

「騙したのだな！お前たち…許さないぞ！我が財力と兵で消し去ってやるわ…！」

Mr・Fはランプスの顔に自らの靴を乗せた。

Mr・Fの後ろにはランプスの兵達が。

「私が欲しかったのは兵と武器…」

お前などいなくても別に良かったのさ。」

ランプスは更に怒る。

「おい、お前が。」

「「「「「「「「はっ…」」」」」」」」

Mr・Fは兵達に命令する。

「この豚を殺せ。」

カチャ…

ランプスに銃が一斉に向けられる。

ランプスの顔は真っ青になった。

「おい…お前達…お前達にはできないよな…な!」

「まだ気づかないようだな。」

Mr・Fは言った。

「この兵士たちは、お前に『雇われた』からやっただけなのだよ。」

私を買ってしまったなら…お前は『雇い主』じゃなく『ただの豚』だ。」

ランプスは目を見開いて涙を流した。

涙が床に落ちた瞬間、銃の引き金は握られた。

ダダダダダダダダダダ!!

ドサッ…

太った男は血まみれで床に倒れた。

「おい、早く片付けろ。」

「「「「はっ…」」」」

兵士たちは袋に男を詰める。

「あっはっはっは!! やっと逝ったわね! あの豚!」

「本当に、馬鹿な奴だ…!」

チェリーとアーティクルは嘲笑する。

Mr・Fは呼びかける。

「さあ、お前たちもショーの準備を始めろ……」

「はいはい。」「了解だ。」「

~~~~~

時刻は迫る。

バツダボーナ火山の上空には無数のウィザー達。

地上にもミュータントモンスター達が集まっている。

バツダボーナ火山には各国から人々が集まっていた。

怯えた者…家族を持つ者…

様々な人々が飛行艇のバルコニーに集結した。

チェリーは人を数えていく。

「ありゃーもう400万人かー…こりゃ500万人超えちゃうなー

…」

あと30分…

今の人数、499万人程度…あと1000人というところだろうか。

富裕層の民は騒ぎ立てる。

「さあ、あと1000人…！早く来るのだ！」

「お!!」

遠くに茶色い肌をした人の群れが来る。

バッダボーナ火山の近くの村に住む原住民族…ボルム族だ。

「おお…この人数ならば1000などとうに超えよう…  
その貧しい平民どもよ…さっさとこの飛行艇に乗るのだ！」

原住民族は大きな声で言った。

「各国の首長から一通の手紙が届いている！Mr・Fを呼んでくれ  
」

アーティクルは飛行艇の中へと入りMr・Fを連れてきた。

Mr・Fは何も持たずに原住民族へと近づく。

ボルム族の一人が手紙を渡した。

Mr・Fに告ぐ

我々各国家は君の計画に対し尾を巻いて逃げないことを決めた。

この世界の人民達、古代の遺産、建造物など、全てを守る覚悟だ。

向かう敵は出迎える。君に宣戦布告を申し上げよう。

下には各国の長の指名と指紋が載せられていた。

Mr・Fは歯を強く噛む。

「なぜだ…なぜ皆恐れない…」

Mr・Fは激昂した。

「世界が崩壊するのだぞ!? それなのに逃げないだど!? なぜそんなことができる!?!」

ボルム族の一人は口を開く。

「各国の長の意図は私達にはわからない。

だが、私達が思うのは、

『壊されるなら、精一杯守り、また再生すればいい』ということだ。

今まで人に作られたものが作れないわけがないだろう。

私たちも、各国と同じように宣戦布告をするつもりで来たのだよ。」

ボルム族は槍を構える。



「…勝手にしろ…さっさと滅びてしまえばいいのだ…!!」

Mr・Fは飛行艇へと駆けていく。

ガコン…

飛行艇のバルコニーが傾いて柵が沈んでいった。

人々は地上へと流されていく。

「ああーああ!!」

人々は火山岩の上へ落ちていった。

ドサッ…

ドサッ…

ドサッ…

「君たちには失望したよ。…もうこの世界は滅亡しか道がないようだな…」

「…これより世界を壊滅させる!!! 行け! ウィザー!!」

「『『『『『キシャアアウ!!』』』』」

ウィザー達は各方面へと拡散していった。

人々は叫ぶ。

「なぜ逃げさせてくれないんだあ!!」

「俺たちを殺す気かー!!」

「ママー!!」

ドオオオオン!!

叫び声の中に爆弾は発射される。

「もうこの世界は終わりだー!!」

人々が叫ぶ中、

また一つ、大きな飛行艇が地面に降りた。

~~~~~ディラベル王国正門にて~~~~~

ディラベル国王は武装をして待ち構える。

(…逃げたい民にはわがままのようすで申し訳ないが…)

避難場所は世界の各地で用意されている。

この惑星<sup>ほし</sup>の未来を…守って見せようではないか…！)

そう思うディラベルの前の地平線の彼方に

多くのウィザーが迫っていたのだった。

~~~~~セルバースタウン東門~~~~~

ルーフス達はセルバースタウンの東門で待機していた。

チェリーも日本刀『閻火』を構える。

ジャックもハンマーを手入れする。

ルーフスはおにぎりを食べてさらに腹を満たす。

ステーラも歯を鳴らして待ち構えていた。

ココアも息を飲んですぐ後ろで見守る。



~~~~~サクラノ国にて~~~~~

バシユウ!!バシユウ!!

ドオオオオン!!

ウィザーの攻撃がついに始まった。

大勢の兵士たちはウィザーと交戦する。

武装した道常が叫ぶ。

「兵士たちよ！爆発にひるむな！受ける思いで戦えい!!」

ウィザーに矢と槍が刺さり、刀の斬り傷が入っていく。

ウィザーは攻撃の間もなく、ぼろぼろになっていくのであった…

~~~~~

~~~~~機械バイオームにて~~~~~

「ウォーカー！しっかりしろ！どつしたんだ！…ウォーカー！」

クラブは小さなロボットを揺さぶって問いかける。

ロボットは無言でぐったりと倒れていた。

顔の画面には、謎の文字列が次々と書き換わっていたのだった



## 53：防星近況

~~~~~地獄にて~~~~~

ゾンビピッグマンとブレイズは水晶で地上界を観ていた。

「…地上界が危ない。」

「このままでは本当に地上界は滅んでしまつぞ。」

ゾンビピッグマンは焦るようにその場を歩き回る。

「…だが…私達には手出しが出来ない。」

「…だな、非情だが、我々には関係がない。

手出しをすれば運命の掟に反してしまつ。」

ブレイズは悔しそうに言った。

「もしこの世界の住人が皆死んだとしても…」

我々には…生き返らせることは出来ないのだ…」

「いや、待て。」

ブレイズははっと気づく。

「生命の蘇生は出来なくとも、悪人を裁くことはできるのではないか

」?

『それは無理だ…』

上空から声が響き渡る。

ブレイズは大きな声で聞き返す。

「天…！…何故ですか!? 幾多の人々を殺そうとする悪人が…ここに  
いるではありませんか!!」

『彼は…ただ世界を変えようとしているだけだ…例え裁きができると  
しても…』

それは彼が新世界を築き悪行を犯した後の話だ…』

「そんな…理屈がまかり通るのですか!？」

『…ブレイズ…お前の気持ちも分かる…だが…』

『一人の意味も守らなければ…独裁となってしまう…  
これが裁きの難しいところなのだ…』

~~~~~

~~~~~とある扉~~~~~



ドオオン!!

ボオオオオン!!

「ギャアオ!!……」

プテラノドンは宙から撃ち落とされる。

「コアア!!」

「ゴオオ!!」

「キャオ!」

「オオオオン……」

地上の恐竜たちは爆発に怯え逃げ惑っていた。

背後には黒い三つ首の怪物が。

ボオオオオオン!!

パライイン!!

試験管が割れる。

バチバチ……

書類は炭をあたりに撒き散らし燃えていた。

「私の…子供達と…研究成果が…!!」

女性は絶望と怒りに震えていた。

たまらず近くのほうきを持ってウィザーに殴りかかる。

パシッ!!パシッ!!

「出てけ…」の島から…出てけ!!」

ドオオオン!!

ウィザーは威嚇するように爆発する。

「きゃあ!!」

研究所は無残な姿だ。

壁や天井はすっかりはがれてしまった。

ウィザーは女性にゆっくりと近づく。

女性は地面に落ちたまま後ずさりする。

ウィザーの対象が変わった。

柵の中。

小さな恐竜。

小さな恐竜は怯えたようにウィザーを見て震えていた。

ゴオオオ!!

ウィザーはエミリアを通り過ぎてティラノサウルスへと向かった。

「ゼット!!」

エミリアは咄嗟にゼットへと自分の身体を投げた。

ドオオオン!!!

ゼットは目を開ける。

ゼットの目の前にはエミリアが笑って覆いかぶさっていた。

エミリアの背中中は痛々しく赤く焼き焦げていた。

「よかった…ゼット…当たらなくて…」

ドサッ…

エミリアは横に倒れる。

ゼットの目にある景色が思い浮かんだ。

ゴオオオオオオオオ...

世界は瞬く間に氷河に包まれる。

暗い洞窟の中。

ここに一つの卵があった。

パリッ...

一つの卵の殻が少し割れる。

穴の中から、小さな赤ちゃんは景色を見た。

大きな恐竜が自分を氷から守るように覆いかぶさっていた。

(…ママ……)

ゼットの意識は今に戻る。

(…ママ……)

ゼットは目の前の倒れた女性を見つめる。

そしてゼットは怪物に目を向けた。

(…ママを…よくも…!!!)



シャー…

恐竜達は皆研究所へと向かう。

ウィザーはゼットの鳴き声に驚いてバリアを張った。

ゼットはバリアを張ったウィザーにかまわず噛み付く。

ガブジュツ!!

パリン…

バリアは割れ、ウィザーに牙が深く刺さる。

「シュオオオオ!!!」

ポオオオン!!

ウィザーは苦しみながらゼットを振り落として逃げようとする。

「ギャアオ!!」

プテラノドンのビームスが高速で突撃する。

ドオオオオン!!

そのままウィザーは草原へ落ちる。



トリケラトプスのランダが更に頭突きをかます。

ドン!!

ヒュウウウ…

ウィザーはボロボロに飛ばされていく。

そこにブラキオサウルスのルーパは鞭のような首でウィザーを  
かつ飛ばす！

カキイイイン!!

ウィザーはロケットのごとく空へと飛ばされていき…

ウィザーはそのまま光となった…

ヴェロキラプトルのマイクは近くから薬草をむしりとる。

バシャアアン!!

プレシオサウルスのリナがマイクごと薬草に水をかけた。

マイクは薬草をエミリアの患部に置く。

ステゴサウルスのエレナは巨大な木の葉っぱを口でむしりとって  
エミリアにおおわせる。

「コオ…」「キャオ…」「オオン…」

一仕事終わったゼット、ビームス、ランダ、ルーパーもエミリアの元へ駆けつけ、

エミリアの回復を祈っていた。

~~~~~

~~~~~宇宙にて~~~~~

星が周りに美しく散らばる宇宙。

惑星から出発したロケットは月へと向かっていた。

ロバートは宇宙船の窓から不思議な光景を見ていた。

「なんだ…あの円盤は…!?!」

無数の円盤が自分の惑星へと向かっていた。

ドオオオオン!!

「:!!おしおし」

ロケットに何かが激突した。

「ここは地下に作られた緊急用司令室。

「ロバートの宇宙船から衝撃と思われる音波を検知しました！」

「こちら司令塔、ロバート、応答せよ！ロバート！」

ジュン…

「…こちらロバートだ。」

「こちら司令塔、状況はどうした。」

「こちらロバート…こちらの…操作ミスだ。ロケットに異常なし…」

ロバートの背後には

宇宙人が浮いていた。

脳がむき出しのガラス張りで、顔や体の輪郭が曖昧の、人型の宇宙人。

「…バダ…ギッ…エルマ…サウイ…」

「…？…君は…何を言っているんだ…？」

ピチュウ…

宇宙人の脳に電撃が走った。

「言語の特定が完了した。…すまなかったな…エルマ星人よ…」

「！…！」

宇宙人はロボートの惑星の言語で話始めた。

どうやら、自分達の星を「エルマ星」と呼んでいるらしい。

「我々はインラール星から来た者だ…大事にはしたくないために君を脅し、他のエルマ星人には内密にしてもらった。」

「…何が目的なのだ？」

「…我々は、1000年前に我々のご先祖の星、デケル星をA 10星に襲撃された。」

我々は自分達の機械の文明を守るため、広い宇宙へと機械の種子を放したのだ。

我々は戦ったが敗れ、デケル星はA 10星に侵略された。予想通りデケル星の文明は滅ぼされ、A 10星の文明となったのだ。

法律により我々は渡星を禁じられ、エルマ星から機械たちを回収することが出来なくなってしまった。

それから867年が過ぎ、政権は変わり、渡星もゆるさるるようになった。

デケル星人の子孫である我々は早速、100光年先のエルマ星へと旅立ち、今に至るといわけた。

「…貴重で壮大な宇宙の歴史をどうもありがとう。」

しかし、君はまだ本題を話していない。君達の目的は何だ!?

ロバートは問う。

「たいした目的ではない。」

君は私の星から来たと思われるロボット達を知っているか?

我々はそのヒントが知りたいだけなのだ。」

ロバートは自らの記憶を探る。

「…すまない。残念だが心当たりはないな…」

「ありがとう。私達の質問に答えてくれただけありがたい。」

プププーププ…

宇宙人から音が鳴った。

「フェタ…ビス…ギエロ…ムル…エルマ…」

「ロル…クエンタ…ルード…エルマ…」

何か宇宙人同士で交信しているらしい。

プシュープシュー...

交信が終わったようだ。

「君達の惑星が…大変な事態に陥っているようだ。」

「何だって…!？」

宇宙にいたロバートは司令塔から何も知らされてはいなかった。

ロバートの家族からの願いで、司令塔からは何も伝えなかったのだ。

「一人のエルマ星人が自らの惑星を壊そうとしている。

…君はこれから、どうするつもりだ？家族に会いに行くか？」

ロバートは決断する。

「家族の願いは…」俺に宇宙を見て欲しい』ということだ。

家族だけではない。司令塔も、他の応援してくれる皆もそう思っている。

俺は月へと向かうよ。」

ンラール星人は無言になる。

「…エルマ星が、美しい理由がやっと分かったよ。  
君のような心から美しい者達がたくさんいるからなのだな。」

ロバートは少し照れて頬をかく。

「我々もそれに応えなければならぬな。  
君の星を宇宙から護衛しよう。」

ロバートはシラール星人と泣いて握手をした。

「ありがとう…どっかこの惑星を…守ってくれ…」

「…これはエルマ星での感謝の印なのだな。…了解した。」

ロバートの惑星は変わらず青と緑で美しく輝いていた。

## 54：防星近況

~~~~~鈍行世界にて~~~~~

鈍行世界には幾多の人々が避難していた。

アルガとブロッカスは人々に食事を配る。

サクラノ国の人々もすでに避難を終えていた。

タマベエとタネノスケに、

ウメと狼のユズもいる。

「ルーフスのあんちゃんたち…今どっしているのかなあ…？」

「クン…」

ユズは遠く見たステーラを心配しているようだ。

~~~~~

~~~~~

セルバースタウンにて~~~~~

ルーフスとチェリーの剣はウィザーをばさりと斬る。



ジャックのハンマーは強く鈍くワイザーに当たり、ステーラの牙も鋭くワイザーに刺さる。

「シュオオオオオオ…」

ワイザーは苦しむ。

大男は更に一発ワイザーに鉄槌打ちを喰らわせた。

ワイザーは頭蓋骨が割れ、地に埋まった。

大男はルーフス達の横に戻り言う。

「ガキのくせにやるじゃねえかお前ら…」

「そりゃどうも。」

「だが、そっちの嬢ちゃんは戦えないみたいだな！」

大男はココアを指差し言った。

「嬢ちゃん、戦えねえんなら逃げた方がいいぜ。ここじゃ足手まといだからな。」

ココアは一瞬言葉に押される。

ココアはまぶたを一旦閉めてから開いて言った。

「私…ジャックくんの側にいたいから！」

ジャックは赤くなった。

「まあ」

チェリーはハート眼で二人を見る。

ルーフスも少し照れるような目だ。

大男は呆れて言いになった。

「そうかい、それなら、俺は助けるつもりはねえからな。」

「元から要らないわよー!」

「コリアはベーと舌を出した。

「ちよっ」「コリア…」

大男は驚いて笑う。

「…本当に要りそうにねえな。

おい小坊主!」

大男はジャックに向かって言った。

「その嬢ちゃん、しっかり守ってやんな。」

ジャックは返す。

「…絶対に！」

ポオオオン…！

大男は振り返る。

さっきのウィザーが地面から浮き上がり、光で身を防護した。

そのウィザーだけではない。

世界中のウィザー達が一斉にバリアを張り始めたのだ。

それから

世界の人々が

異変に気がついたのだ。

ウィザーの切り傷は埋められ。

殴打のへこみは無くなり。

銃痕も全て埋められたのだ。

ウィザーは完全回復していた。

「…なんだと…！」

「今までの4時間は…」

「全く無意味だったと言っのか…！」

~~~~~

~~~~~地獄に~~~~~

水晶にはウィザーが映っている。

「…そうだ…これがウィザーの恐ろしい所だ。  
ウィザーは自らを回復し何度も蘇ってくる。」

ただただ、攻撃が強いだけではないのだ…!!」

ゾンビビッグマンは絶望に押され倒れる。

「人民達よ…どうか未来の為に…!」

~~~~~

~~~~~クレイソルジャーズの村より~~~~~

クレイソルジャーズ達は青、赤が一つになって戦っていた。

スチルもダイヤの装備で自らを包んで戦っていた。

「…何てことだ…回復しただと…!!」

クレイソルジャーズも何匹死んだことが。

「…だが…いつらのパワーもなめてもらっては困る!」



彼らは…！どんなに小さくとも『戦士』なのだ!!」

スチルはクレイソルジャーズ達を起き上がらせる。

ドスン…

ドスン…

スチルの体が小さく縦に揺れる。

クレイソルジャーズ達は大きく跳ねた。

「…！…違う敵か…!!!」

スチルは背後を向いた。

スチルは口をあけっぴろげにして汗を流す。

スチルに巨大な影が落ちる。

クレイソルジャーズ達も影の元を凝視した。

ウィザーも恐怖に震えるばかりであった。

「ヴォツホツホツホ…さすがに西の大陸に行くのは遠かったわい…」

巨人だった…!!

「ワシはお前らに会いたかったぞ…小さき戦士達よ…」

会えて光栄だ…共にお茶でもたしなみたいところだが…」

巨人は巨大な剣を肩に担いでウィザーをにらんだ。

「まずはこの炭をきれいにしなければな…!!」

~~~~~

~~~~~とある上空~~~~~

飛行艇は空を行く。

2体のウィザーが飛行艇に向かって射撃する。

ボツ…

ボツ…

ボツ…

「元気爆発!!」

「神の鉄槌!!」

「シンプル・イズ・ザ・ベスト!」

ドオオオオン!!!      ドオオオオン!!

ドオオオオン!!

「厄介な敵がでてきたものだ!」

モイラは顔をしかめて言う。

「でも中の乗客を守らなきゃねー！」

プルボネが返す。

「そうです！私たちは絶対に勝たねばならないのです！」

テンドロンも返した。

「正義は必ず勝つツッ!!!」

モイラ達は一心不乱に攻防を繰り返していた。

飛行艇の中。

中は400万人の人々であふれていた。

オリ は人々の対応をしなければならなかった。

オリーは外で守りたい気持ちを抑えながら心で言った。

(3人とも…どうかこの人々を守ってやってくだせえ!!)

「おじさーん、おなか減ったー、ソフトクリームちよーだーい。」

~~~~~

~~~~~セルバースタウンにて~~~~~

戦士たちは言葉にならない悔しみにてモンスターを見つめていた。

戦士たちの戦闘意欲がそがれようとしている。

でも…こいつらを倒さなければ…

世界は消滅してしまう。

「ダァー………!!」

バンプが叫んでウィザーに連続で殴り掛かる。

「おりゃぁ………!!」

「たあっ!!」

「はぁぁぁ!!」

「ガウ!!ガウ!!」

ルーフス達もそれに続く。

叫びながら戦士達に問いかけた。

「お前らぁー！相手が回復するからなんだぁー！」

戦士達は耳を傾ける。

「バンプ…例え私たちが悪あがきを続けても…

それはまた無駄になるんだぞ…」

「上等だ！」

バンプは大声で答える。

「世界が簡単に救えるわけねえんだ！

でもそれは一つのチャンス…！」

俺たちが『進化』するチャンスじゃねえか！！

お前らは惑星最後の日まで弱いままでいいのか！！」

戦士達はこぶしを握った。

戦士が一人…また一人とウィザーに向かっていく。

ウィザーの光が途切れようとしている。

「「「「「「「「「「「「「「「「  
俺たちは…『進化』してみせる!!」「「「「「「「「「

ウィザーの光は壊れるように放たれた。

## 55：防星近況

~~~~~宇宙にて~~~~~

無数のUFOが惑星を取り囲んでいた。

N0.01のUFOが連絡を受け取る。

「デバ…レリカ…フェッタ…ベガ…サウア…」

(こちらN0.98。太陽光エネルギーの充填完了。)

「ゲル…ドク…マツサ…グリド…ヘラ…テルモ…ルータ…エルマ…」

(これより攻撃段階に入る！エルマ星人を狙わぬよう照準を定めよ！)

~~~~~

~~~~~バルダン・オートリウム・シティより~~~~~

ビュンビュンビュン!!

ジシユ…

プラズマエネルギーの弾はウィザーに次々と当たる。



「シュオオオオオ!!」

ギユイイー…

ギユイイー…

ギユイイー…

ギユイイー…

戦闘民族達は力強く弓を引き絞る。

年老いた族長は命令を下した。

「マラーター！」（撃て！）

スウウウウ!!

シュウウ!!

スウウウウ!!

ビュウ!!

シュウウ!!

ドツ！ ドスツ!! ザシュ!! ドツ!!

無数の矢がウィザーに降り注ぐ。

「シュオオオオオ!!!」

ウィザーは辺りに爆弾を3発放った。

ボオ… ボオツ!! ボオ…

ドオオオオン!!

「うわあああ!!」

第一部隊が吹っ飛ばされた。

ドオオオオン!!

「グオオオオオオ!!」

戦闘民族達も吹っ飛んだ。

クリオブラスターを構えた軍人は舌打ちをして立つ。

「くそ…!! 私は救護へと向かう! お前たちはそのまま攻撃を続けてくれ!」

「おう!」「分かった!!」

「しかし…なんてしぶとい奴らだ…!!」

「我が軍の食糧も、もうすぐ底をつく…」

「食糧があれば…!」

ビュウウウウ…!!

バアアアアアアン!!

空から雷のよつなものが一匹のウィザーに降った。

それに続き、他のウィザーにも降り注ぐ。

「!!」

軍人達と戦闘民族達は驚いた。

「…なんだ…？まさか…戦闘民族達がやったのか…!？」

「いや…まさか…あの雷を呼び出す技術など…いまだ開発されていないはずだ…!」

「…まあいい！攻撃を続けるぞ!!」

~~~~~

~~~~~グレートスライヴシティ~~~~~

ドオオオオン!!

ガシャアアアアン!!

パライイン!!

この都会の被害は甚大であった。

あまりにも広いために、別方向からの攻撃を惜しくも防げなかったのだ。

ヴァイオレットは地下の会議室から軍指揮官に指令を出す。

「武器庫や調理場が攻撃されてはいけません。この近辺のエリア二つを重点的に守るよう軍の配置をお願いします。」

「はっ!!」

軍指揮官が去るのを見届けると、ヴァイオレットはため息をついた。

「トッ…」

「ヴァイオレットさん、コーヒーお持ちしました！」

まだ9歳程だろうか。小さな少女がコーヒーを自分より背の高い机によたつと置いた。

「ありがとう、リサ。」

彼女はまだ小学生でありながらも秘書の仕事についた天才少女だ。

「大丈夫ですか？ 疲れた顔になってます…」

リサは心配そうにヴァイオレットを見つめる。

ヴァイオレットはかがんで話をする。

「うん、大丈夫よ。」

…私は街の皆さんの期待に応えられなかった。  
こんなにビルや住宅を破壊されてしまったから…

だから、私はこれからの被害を最小限に抑えられるように、  
頑張らなくちゃならないの！」

リサはヴァイオレットを尊敬のまなざしで見ると、

「さすがはヴァイオレットさんです…」

「でも…ごめんね、あなたまでこの戦争にまきこんじゃって…」

「私はヴァイオレットさんといっしょなら大丈夫です！」

リサはえへへと笑った。

ヴァイオレットはその笑顔にひきつられて笑う。

「ありがとう。リサ…」

~~~~~

~~~~~ヘルタイルタウン（鉄道の町）より~~~~~

「おお…!!」

ヘルタウンの町長は驚く。

「おおお!!」

町長の地図を持つ手が震える。

町長はリナの手をがしつと握る。

「ありがとう！リナちゃん！君はさらに食糧を届けられる地域を増やしてくれた！」

「良かったです！お力になれて！」

「よし、食糧をもっと増やし…早速戦士たちの元へ届けよう！」

~~~~~

~~~~~サクラノ国より~~~~~

「殿…今治療します…!!どうか生きていてください…!!」

布団の上には目を閉じたままの道常がいた。

~~~~~

## 56：集まる戦士達

~~~~~魔法世界より~~~~~

気が屋根のように覆いかぶさる魔法の森。

遠くから砂埃を上げて走ってくる影が見える。

「大変だ！大変だよー!!」

「このままじゃ現実世界が…!」

「滅んじやうよー!!」

魔女の弟子達は城へと一目散に向かっっていく。

黒い狼達も声を耳にした。

「バウワウ…?」

(訳：現実世界が…?)

「バウバウ…?」

(訳：滅ぶ…?)

「ワオーーン!!」

(訳：俺たちもついていくぞ!!)



サッサッサッサッサッ…

「王様ー!!」

ドオオオオオン!!

魔女の弟子達と狼達は城の壁を粉碎して城内に突入。

「屋上で寝ていた王様は衝撃に体ごと浮いてたたき起こされた。

「おわあああ!!」

そこにテロリスト達が登場。

「お前ら無茶すんな!!」

「大変だよ!」

「異変に気づいた王様は話を聴く。」

王様は水晶で現実世界の様子を見ていた。

王様はウィザーを見て衝撃が走る。

「なんと…あれはかつてヴィンテンド・サロムが召還したモンスターではないか…！」

しかし…なぜ只の人間が奴を召還をしているのだ…？」

「たぶん師匠が教えたんだよ！」

「この頃は何度も現実世界に行っていたからね！」

「何を考えているんだろう…？」

「そつだな…奴の考えは私にも全く分からん…  
だが、まず心配なのは現実世界の住人達だ。」

王様は壁にかけたマントを手に取り、階段へと向かって行った。

「我々も加勢に行くぞ！」

狼達はナーガとヒドドラ…そしてあの男を呼んで来い！」

「バウ！！」

狼達は階段を降りていく。

「ロリエ！サフラ！シナモ！我々は先に向かうぞ！」

「分かった！」

「うんー！」

「行くっ！」

王様達も階段を下っていく。

~~~~~

~~~~~カラーリーオンズの飛行艇より~~~~~

シャッ！！

ドオオオオオン！！

「しまった！後ろから…！！」

テンドロンは端末で状況を確認する。

「左ジェットタンクが破壊されました…！」

左の燃料が漏れています！左ジェットエンジンが停止するのは時間の問題です！！」

「どつするのー隊長!!」

モイラは舌打ちをする。

「乗客達に避難準備をさせておけ…!!」

ヒュウウウウ…

ワイザーに砲弾が向かう…!!

ドオオオオオオオオオオオオ!!

砲弾はワイザーに当たって爆発した。

「!!!」

カラーリーオンズは左を見る。

視線はその影を追ってすこし上になった。

「おお…これはこれは…」

「…じんな…!!」

モイラ、テンドロンさえも驚嘆せざるを得なかった。

そこにはカラーリーオンズよりも更にはるかに巨大な戦艦が。

無限の空に音声が流される。

『こちらアルヘンシキ国空軍部隊Rose…英雄達、乗客達の救援をしにやって来た。』

そのまま浮遊状態で待機せよ。そのまま浮遊状態で待機せよ。…』

「助かった…」

「よかったあ…」

戦艦の前面の蓋が開く。

その様子を見ていた輩がいた。

「かーっかっかっか!!まさか空軍の奴らが自ら蓋をあけてくるとはな!

それに憎きカラーリーオンズも一緒とは!!なんたる幸運!!」

太った鶏の船長は笑いながら喋る。

「」「うわあ！鶏がしゃべってる!!」「」

「そのノリあきたっつーの!!」

鶏は鳴き…泣きながら語る。

「苦節4ヶ月…!!」「』と『ケ』から始まった発声練習の果て、  
よつやく元の言葉を話せるようになった…!」

鶏はいきなり怒り始める。

「っしかーし…!これも奴らの奇術が無ければ、  
私はふつーにビッグなねーちゃん達と

スイートな夜を過ごせるはずだった…!!」

「その怒りを私はこの鳴き声にこめる！行くぞチキン共！コケー!!」

((((案外気に入ってるんだな…)))))

船員達はそう思いながらエンジン全開で空軍の中へと飛び込んで  
いった。

カラーリーオンズが空軍の中へ入ると同時に  
空賊の一船も入ってしまった。

「かーかつか!!おらぁ空軍ども!金品を渡せ!…っつて」

空賊船長は辺りを見回す。

どれも女性船員ばかりではないか。

しかもほとんどが美人。

鶏の顔が赤くなる。

「なんと…ここは桃源郷か…!!」

カチャ

カチャ

カチャ

カチャ

空賊船に10万人程の銃が向けられる。

空賊たちは一斉に土下座をした。

「…………すみませんでしたすみませんでしたすみませんでしたすみませんでした…………」

モイラが呆れる。

「バカかよ……」

「のあと見事にお縄となった。

~~~~~

~~~~~地上より~~~~~

世界の地上では。

相手の勢力が衰退したため、バツダボーナ火山への行進が始まっていた。

「お疲れ……」

「ロリアがおにぎりとお水を配る。

「お、さんきゅーな……」

「ありがとう……」  
「……ロリアちゃん……」



「ありがとう！..」

ジャックがおにぎりを手に取るうとしたとき。

「あー..」

「コアがひよいとおにぎりを奪った。

「え？どうしたの？」

「ジャックくん手が汚れてる！えーつと水道は..」

周囲の人も歩いていてそのため掻き分けることもできない。

チェリーがキューピッドの助言を言う。

「コアちゃんが食べさせてあげればいいんじゃない？」

「あーそっか！..」

ジャックの顔が赤くなる。

「はい、あーん..」

「あー...」

ジャックの口におにぎりが入った。

「おいしー？」

「うん、おいしいよー…」

ジャックは照れながら言った。

「もう少しだよ！頑張ってねー！」

「コリアはこっつと笑う。

ジャックもこっつと笑い返した。

「うん！頑張る!!」

「ワオン!!」

ステーラも同調した。

ルーフスとチェリーもその光景をほほえましく見守る。

「…この戦いを…絶対に勝ち抜くぞ…！チェリー!!」

「…はい!!」

~~~~~

白く光る部屋で私は叫んでいる。

「ヴェロニカ…ヴェロニカ…!!大丈夫か…!水飲むか…!」

女性の口元は優しく私に笑う。

「まじっか…」

「この世界の何もかも……私達には敵だったんだ……」

「こんな世界なんて……無くなっちゃえばいいのに……」

白い光と彼女を、悪魔が引き裂いた。

「ああああああ!!」

M「Fはスレッドから起きる。」

「はあ……はあ……はあ……」

Mr・Fは胸を押さえて深呼吸をする。

今日もまたいつもの夢を見た。

今ではあの悪夢が俺の目覚ましだ。

Mr・Fは顔を洗う。

ウィザーもあと少し……

悪魔達はこの火山へと進攻中……

では、お次はミュータントモンスターズを放つとしよう。

この世界は 俺が変えるべきなんだ

## 57：ミュータントモンスターズ

ここはバツダボーナ火山。

今、世界中の戦士たちが集結した。

人々の色に、顔立ちに、服装。

どれも多種多様だ。

その戦士たちは巨大なモンスター達の前に立っていた。

ゾンビにクリーパー、エンダ マンだ。

世界中は沈黙する。

各国の長達も黙って立っていた。

敵が迫ってくるのをひたすら待っていた。

ガピー…

音声が流れる。

「諸君…よくぞウィザーを殲滅してくれた。

だが、最終局面はここから…  
はたしてこいつらに勝てるかな…？」

ルーフス達は気付く。

あの巨大な体躯をしたゾンビ…

メットとそっくりであったことを。

「…なんとなくそんな感じはしてたんだ…」

ジャックは歯を食いしばる。

「メット…力をくれ…!!」

ハンマーは青く光った。

「行け。」

Mr・Fの合図とともにミュータントモンスターズは咆哮を上げる。

「ヴァァァァァァァァァァオ!!」



「シューウウオオオオ!!」

「ヒュウウウウウ!!」

「「「「「おおおおおお!!」」」」」

戦士たちはモンスターへ向かう。

しかし

悲劇は始まったのだ。

ミュータントゾンビは10人を一気に薙ぎ倒す。

「「「「「うわああああ!!!」」」」」

ミュータントクリーパーは高々とジャンプをし…

一気に地上に爆風を落とした。

ポオオオオオオン!!

「「「あああああ!!!」」」

ミュータントトヘンダ マンは地上の岩石を4つ持ち上げた。

ザザッ…!!

4つの岩石は紫色の光とともに浮き上がる。

「コアアアアアアアアオオ!!」

岩石は一斉に戦士たちへと向かっていく。

戦士たちは血を流す。

「!!くそおおおおお!!!」

空からはウィザーの爆撃。

戦士たちは次々に倒れていった。

ルーフスとチェリーとステーラも一斉にゾンビにとびかかる。

2つの斬撃と一つの牙がゾンビに命中した。

巨大な男がさらに追撃を加える。

ドゴッ!!

ゾンビは倒れない。

「へへ…楽しませてくれんじゃねえか…!!」

マンティースの連撃はクリーパーを刺す…刺す!!

しかしミニクリーパーの爆撃に押し流される…!

ジャックはココアの前でハンマーで殴る。

エンダ マンの岩石がジャックに命中した。

「ぐっ…!!」「大丈夫!？」

「うん…まだまだ!!」

ジャックは上からの閃光に気付く。

バン!!

ココアを力強く押した。

「きゃあぁー」

「コアは後ろへと倒れる。

ドゴオオオオン!!

ジャックの上に爆撃が落ちた。

「ジャックくん!!」

ジャックは真っ黒になりながらゆったりと立ち上がる。

「よかった…当たらなくて…!!」

ジャックは回復ポーションを飲む。

(まだ戦える…!!彼女を必ず守るんだ…!!)

信じられない出来事が起きた。

30分で既に10000人が戦闘不能となったのだ。

苦しめているのは、自らの技術で作り出したしまった屈強なモンス  
ターたち。

私たちは…自分の作ったものに世界で戦っても倒せないものをつ  
くってしまったのだ…

「ハハハハハ!!素晴らしい!まさに世界の終焉にふさわしい!」

Mr・Fは火山のふもとに転がった人々の山を見て叫ぶ。

「平和な日常を送っているお前らの傍らで!!

俺はある人のために計画を準備してきたのだ!!

俺は…世界に勝った!!ハハハハ!!」

火山にMr・Fの笑い声が響く。

「それはとんだ勘違いだ。」

火山に別の音声が響き渡る。

Mr・Fは真顔になった。

「なんだと…!？」

「まだ世界中の人々は…」

「全員そろっていなかったんだよ!!」

そこにあっただのはルーフスの父の姿。

ルーフスは気が付く。

「親父…!!」

その背後にはたくさんの戦士たちがいた。

魔法世界より…

王様、魔法の弟子3人組…

ナーガにヒドラ…

黒い狼達に…赤い牛男…？

さらにはエンド世界の住人達にエンダ ドラゴン、

クレイソルジャーズに巨人、さらに狼男のビスト！

スターク海賊団に、エミリア率いる恐竜軍団…！！

ジョーに、アイアンゴーレム…！！

そしてかつて別れたライモンもいるではないか!!!

なんと頼もしい援軍であろうか…！！

魔法世界の王様は黄金の羽をかざす。

「…まずは戦士たちを戻さねばなるまい…！！」

ピーー ……！！

黄金の羽は光る。

人々の流れる血は止まり、

人々の傷はなくなっていく。

「…!!」

「なんだ…!!」

「うわーなんかいつぱいいるぞー!」

人々は次々に立ち上がる。

「馬鹿な…!!最悪だ…!世界にはこんな奴らがいるのか…!?!」

Mr・Fの瞳は恐怖の色に染まった。

「ミュータントモンスターズ!!何をしている!!早くやってしまえ!!」

チェリー!アーティクル!お前らも戦うんだ!!早く!!」

「はいはいー。」「了解だ。」

チェリーとアーティクルは飛行艇の外へと飛び出していった。

Mr・Fは本棚をあさりある本を手に取る。

「…なあに…大丈夫さ…俺にはまだ…この魔法がある…!!」

本には「Morrop」と記されていた…



バツダボーナ火山には世界中の戦士たちが集まっていた。

皆が皆、目的は一つ…!!

(((((Mr・Fを倒す!!))))))

~~~~~宇宙より~~~~~

「フェッタ…ベガ…リゲルバ…サウア…」

(太陽光エネルギー再充填完了。)

「ドク!!」

(撃て!!)

~~~~~

ビュウウウウウン!!

ミュータントモンスターズ達にまた雷が降り注ぐ。

「よし…謎の攻撃が効いた!!」

「われらも続くぞ!!」

「「「「 おおおおおお!!! 「「「「

~~~~~ステーラの戦闘~~~~~

ステーラがミュータントエンダ マンに噛みつく。

ただし振り落とされた。

そこにライモンが現れる。

「よう、お前がルーフスの新しい相棒なんだってな……!!」

「クウン?」

「…俺も昔は、お前と同じだったんだぜ…」

ま、説明は後だ、一緒に闘おうぜ。」

「おいおい、俺も外してもらっちゃ困るぜ!!」

巨大な狼男が現れる。

「ガウ!!ガウ!!」

(訳：待たせたな！ステーラ！)

黒い狼たちも。

「ほう…面白いな…ここに狼たちが揃ったってことか…」

「名付けて…『狼軍団』…だ!!」

狼たちに沈黙が訪れる。

「もっとマシなネーミングはないのかよ…」

「行くぞおおおお!!」

「」「ガウ!ガウ!!」「」

「バウ!!」

「>>>!!」

狼たちはミュータントモンスターを襲う。

ズシャ!!

バシユ!!

ガブチュ!!

牙や爪、剣はエンダ マンに深く突き刺さる。

エンダ マンは消えていった。

「ワン!!」「ガウ!!」「やったな!」「ああ!!」

~~~~~

~~~~~ルーフスの戦闘~~~~~

ルーフスと父はミュータントクリーパーに剣を浴びせる。

「ルーフス…強くなったな…」

「親父の血を引いたからな!!」

ビュン!!

ミュータントクリーパーは飛び上がる。

「やべえ!!」「逃げ…おわあ!!」

シュッ…

ドオオオオオオン!!

クリーパーが着地したところには誰もいない。

黒いドラゴンがルーフスと親父、周りの戦士たちを胸に乗せる。

「うわあああ!!」

「なんだこの竜は…」

「でも助かった…」

竜はルーフスに話す。

「父がお世話になりました…」

「お前…あいつの子供なのか!?!」

「はい…私は父が死んだとき、卵から孵ったのです。

暴君である父を倒していただき、本当にありがとうございました…」

「いや、そんな…こっちこそ助けてくれてありがとうよ…」

「では、片づけてしましましょう!!」

みなさん、しっかりつかまっています!!」

エンダ ドラゴンは高速に移動し、炎のプレスをミュータントクリーパーに浴びせる。

「シューウウウウウ!!」

ミュータントクリーパーは卵を残して消えた。

エンダ ドラゴンは背中から戦士たちを降ろした。

「ありがとうよ…」

「サンキュー…」

戦士たちはお礼を言って次のモンスターへと向かっていく。

ドオオオオン!!

「ぎゃああああ!!」

「うわああああ!!」

人々が次々に吹っ飛ばされていく。

「雑魚には何の用もない!!」

ルーフスに向かって突撃してくる影が見えた…!!

ルーフスはあわてて剣で受け身をとる。

ガキイイイイン…

ズザザザ…

ルーフスの体は5 m程吹っ飛ばされた。

そこには装備に身を包んだ大男がいた。

「俺はお前と戦いに来たのだよ…!!」

「アーティクル…!!」

~~~~~

~~~~~チェリーの戦闘~~~~~

ドシヤア!!

チェリーとマンティースと戦士達は見事ミュータントゾンビを倒した。

「腕を上げたな、チェリーよ…」

「マンティースさんも強くなりましたよ！」

ヒュウウウ…

「!!」

チェリーは咄嗟に弾を斬る。

バシヤン!!

「きゃあ!!」

「これは…負傷のポジション!!」

「ふふふ…バカねえ…投げられたものはちゃんと見ないと…」

「…あなたは…?」

「私はチェリー…純血の魔女よ…」

「…奇遇ね、私もチェリー。」

魔女はあざ笑うような笑みで言った。

「あなたここで何してるの？せっかく綺麗なお顔が汚くなっちゃっわよっ。」

「私はあなたたちの侵攻を終わらせにきたの…」この皆とね…！」

「へえ…あなたには何ができるのかしら！」

魔女とチェリーはにらみ合う。

マンティースと他の戦士はとも介入できなかった。

「…チェリー、健闘を祈るぞ。」

~~~~~

~~~~~列車の中より~~~~~

車内に少女の声が流れる。

「次は、サクラノ国、サクラノ国、お出口は左側です…」

小さなロボットは尋ねる。

「セカイ…オウル…？」



「大丈夫だよ、世界中の戦士達が今戦っているんだ。きっと救ってくれるさ。」

メディウス・ライブラリーに向かう避難列車の中で、クラブは考えていた。

(さっきのウォーカーの挙動はなんだったのだろうか…)

(一定時間経ってすっかり元通りだ。)

クラブには何か悪い予感がした。

もしかして、ウォーカーが来た宇宙から何かあったのだろうか。

ウォーカーは星へ返され      もう2度と会えなくなってしまう

んじゃないかと。

地上を走っていく列車を、昇りはじめた月は冷ややかに見ていた。

## 58・世界決戦

「：只今！バツダボーナ火山の様子を地上からお届けしております  
！！」

一人の記者が現場の緊張を話す。

「世界を守るため、ここに集まった世界中の戦士達が命を賭けて戦つております！」

我々は戦えません…が、応援をすることができます!!皆さん、戦士達を異次元から応援しましょう!!

負けるな—————!!」

記者はカメラも気にせず背中を向けて応援する。

異次元でも。

「がんばれ—————!!」

「!!」

「やっつける—————!!」

多くの人たちが戦士達を応援していた。

既に世界は一つになっていたのだった。

「オラオラ！俺達の炎をくらいやがれ！」

「これは美味しそうなモンスターだ……」

「早くくたばれよ……」

ヒドラの炎が舞う。

「ヴォッホッホッホ……」

巨人が巨大な剣でミュータントを2人串刺しにする。

クレイソルジャーズはエンダーマンに張り付いて攻撃する。

そして…赤い牛男は…

「へーい！戦いさ！俺の鍛えたマッスルが火を噴くぜ！！  
ウ……」

赤い牛男が引き気味のミュータントクリーパーに向かって拳を矯

める。

ボオオオオオオオオオオオン!!!

巨大なミュータントクリーパーが見えない高さまで飛んでいった。

「マッスウウル!!ハッハー!!!」

戦士達はひそひそと話す。

「…なんなんだあいつは？」

「でもすっげえつええな…」

アーティクルは白い鎧でダイヤの剣を振りかざす。

ルーフスは避けた。

ガキッ…

ボオオオオ!!

地面に当たった剣の先が燃える。

「…魔法か…!!」

「その通りだ…」

アーティクルは剣を振りかざしながら説明する。

「武器に魔法を施したことにより…!!」

炎の剣となったのだ…!!」

シュツ!!

シャクツ!!

シュツ!!

次々に連撃がルーフスを襲う。

「おりゃああ!!」

ルーフスも反撃しようとダイヤの剣で突く。

ガキツ…

しかし鎧に跳ね返される。

「さらに…これはガストの鎧だ!!」

防御力は抜群、さらに体の傷は癒えていく!

勝負あつたな!!ルーフス!!」

「そんなんまだ…わからねえよ!!」

ルーフスとアーティクルは刃を交わす。

強く、強く、ルーフスは押し斬っていく。

しかしアーティクルの重い一撃が…!!

ズバツ…!!

ルーフスのダイヤの鎧の肩を貫通した。

「ぐう…!!」

ルーフスはよろけながらも立つ。

アーティクルは剣を抜いて腹を狙って突いた。

ビュツ…!!

グラツ…!

ルーフスは間一髪でかわす。

だがそのまま地面に倒れる。

「チェックメイト…だな…」

アーティクルは剣をうつぶせになったルーフスの背中を狙って振りかざした。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!!

ゴオオオオオン!!

アーティクルの反応より先に金槌が横から頬に当たった。

「ああああああああああ!!」

アーティクルは横になりうつまくまる。

「…！スチルさん…!!ありがとうございます…!」

「…お礼はよせ。それよりお前さんに言いたいことがある。」

スチルは起き上がったルーフスに詰め寄り憤怒した。

「お前さんは私の説教を水に流してしまったのか!!」

「え…!？」

「さっきの剣はなんだ!!力をただ押し付けているだけではないか!!」

「す、すみません!ごめんなさい!…!!」

アーティクルが立ち上がる。

目は赤く充血し、顔は怒りで真っ赤に染まっている。

「このじじいが…!!」

「おっと…」

スチルは冷静になる。

「ルーフス、私の説教を思い返すのだ。

思い返せば、お前は必ず、強くなれる。」

思い返す…

スチルは逃げ出した。

「待て!!」

アーティクルは追いかけてよつとする。



ルーフスはアーティクルの肩に剣を置いた。

「待つのはお前だよ。」

ルーフスは真剣な目で言った。

「お前の敵はまだここにいるだろ？」

アーティクルは不敵な笑みで答えた。

「そこまで天国へ行かせて欲しいのだな……」

「ならば本望に行かせてやろう!!」

アーティクルとルーフスの斬りあいが再度始まる。

ルーフスはじりじりと痛む肩をこらえて考える。

思い返す……

(…これはひどい。なんて乱暴な斬り方をしとるのだ。)

乱暴な斬り方……って……？

キン!!

ルーフスの剣が弾き飛ばされる。

ルーフスは急いで剣を手に取り

アーティクルの剣を防いだ。

まてよ…？

チエリーにはなんて言ったのだった…

( 静、動の剣さばきはどちらも完璧、とてもきれいな傷み方をしている  
!! )

静、動の剣さばき…

そっか…

俺には『静』…これが足りないんだ…！

ルーフスはわざと目を閉じる。

アーティクルは剣を振った瞬間、ルーフスの行動に気づき目を丸くする。

アーティクルの剣はルーフスの頭へと向かう。

…感じない…

…まだ何も…

！

キーン！！

ルーフスの剣は光のごとく真上の攻撃を防いだ。

「何!?!」

アーティクルは驚く。

今…防いだ…のか…?

アーティクルは呆然とする。

信じられない…!この俺が…

このアーティクルが…!!

目をつぶった奴に勝てないだど!?

「…へへ、…出来た…」

アーティクル、次は俺から行かせてもらっぜ。」

アーティクルは初めて目の前の敵に本構えをした。

ルーフスが光となってアーティクルの胸元に向かって斬っていく。

アーティクルは気合でその一つ一つを防ぐ。

しかし間に合いそうにない!!

アーティクルはたまらず腰に挿したもう一つの剣を左手に持つ。

そしてルーフスへと押し斬っていく…

はずだった。

ルーフスの光撃は止まらずにアーティクルを押ししていく。

アーティクルはついに剣二本で守りに入った。



剣に力が集中した…!!

今!!

ザシュ…!!

アーティクルの胸にダイヤの剣が刺さる。

アーティクルは驚いた表情のまま後ろに倒れていく。

ドタ…

ルーフスはアーティクルの体から剣を抜く。

ルーフスは悲しい顔つきでアーティクルから去る。

「…敵がいるって…辛いな…」

ルーフスは涙を一筋流す。

しかし今は泣いているときではない。

ルーフスは涙をこしこしと拭いて目の前の巨大な飛行艇を見た。

後ろでは戦士達がまだ戦っている。

…

行くぞ…

ルーフスは飛行艇の扉を蹴破った。

「降りてきなさいー！私と勝負してよ!!」





魔女は得意気に笑う。

「足場をありがとう。」

魔女はドーナツを喉に詰まらせる。

チェリーが礫岩を踏み越えて跳びあがってきた。

「ん~~~~~」  
「!!!!!!」

魔女は詰まらせたまま驚いた。

スパツ…!!

魔女のほうきはスパツと二分割に切れた。

魔女はほうきとともに地面に落ちる。

ドサッ…

チェリーが魔女に詰め寄る。

「…で、どつするの？戦つもの？」

「へ!？」

魔女は口を歪ませて汗を流した。

「ホホ、ホホホホ…」

チェリーはため息をついた。

チェリーはドーナツを魔女の口に啜えさせる。

「それ、食べていいから。あなたの負けってことでいいわよね？」

「は、はい！私の負けです!!」

「本当に拍子抜けだわ…同名なのに只の卑怯者だったなんて…」

愚痴をこぼしながらチェリーは去っていく。

「…チャンスだけ…」

私じゃ勝てそうにないな…

59 : Mr・F

「そこまでだ!!」

チャカ…

ルーフスに5、6人の兵隊達の銃が一斉に向けられる。

ルーフスは黙ったまま瞳でMr・Fを探す。

「Mr・Fはどこだ。」

「奥の部屋で休まれている。我々はここで見張りを頼まれたのだ。」

兵隊達は円形の部屋で、半円のような陣を作って銃を向けている。

「残念だったな。君はこの危機から脱せられまい。」

ルーフスは言った。

「確かにそうだ…だけどやるっきゃないんだよ。」

兵隊達とルーフスは静止して睨みあつ。

ルーフスの放つ緊張感から、銃の引き金を引くことができないのだ。

ルーフスもまた然り。

複数の銃はいつ放たれるのか…

「…撃て！」

バン!!

バン!!

バン!!

バン!!

バン!!

バン!!

バン!!

・  
・  
・

・  
・

ルーフスは無傷。

隊員達全員の胸から血が噴出す。

ルーフスは目を開いて驚く。

「…分かっていたさ…お前らには到底倒せないよ…」

奥の扉が開いて白衣の男が現われた。

「…M r . F…!!」

Mr・Fは挨拶をする。

「わたしがMr・F…本名も教えておこう。フェリクス・ディールだ。」

ルーフスは倒れた兵隊達を見て問う。

「…なんで仲間を殺したんだ…？」

「簡単さ。使い終わったぼろ雑巾は捨てるしか道は無いだろっ？」

Mr・Fは更に続ける。

「…いつらもどうせ後に裏切るのさ。王の座を狙ってね。」

「…アーティクルやチェリーももう倒された。あいつらも私を裏切ったのだ。」

自分の力を過信しただけのただの悪魔なのだよ…」

ルーフスは何も言わずに聴く。

「…この世界の全て、皆皆、悪魔なのさ。」

悪魔のように救いはなく、醜いものさ。

俺はこの世界に捨てられたのだよ。」

ルーフスは言った。

「…で？…独り言は終わったのか？フェリクス。」

ルーフスは剣を構えていった。

『世界は悪魔だー』とか、『世界は醜いものだー』とか、

そんな自論を聴きにきたわけじゃねえんだよ。

要はよ…お前を倒せば、世界は救えるんだろ？」

フェリクスは舌打ちする。

「英雄ぶるなよ…」の悪魔め…!!」

ボアアアアア…!!

フェリクスの影が床から離れ、フェリクスの体にオーラのようにまとわりついた。

「…!!!」

(これは…魔法か!!)

「…さあ、私に食われるがいい…!!」

~~~~~

チェリーはステーラと共に飛行艇の中へ突入する。

ステーラはルーフスの飛行艇に入る瞬間を見ていたのだ。

入るとすぐにルーフスの姿が見えた。

「ルーフスさん!!」

ルーフスはこっちに振り向く。

「…今から突入するんですね!!」



「いや…終わったよ。」

「え？」

ルーフスは喜んで言う。

「全部終わったのさ！Mr・Fはもう倒れたんだよ！！

世界はもう救われたんだ！！

ほら、喜べよ！！お前ら！！

ルーフスは笑顔で話す。

チェリーとステーラはポカンとする。

チェリーはうつむく。

「……違っ」

ルーフスは心配する。

「ん？どっした、傷が痛むのか？」

ステーラもつなる。

「グルルルルル!!」

ルーフスは動揺した。

「な、なんだよ、お前まで、」

それが主人に向かってする態度か!?

「違つって言ってるでしょ!!」

「バウ!!」

ルーフスはチェリーとステーラの剣幕に怯えて後ずさりする。

「ルーフスさんは…例え…Mr・Fを倒したとしても…」

Mr・Fのことまで考えているはず…!」

(本当は敵として対峙しなきゃいけないんだ。…  
だから、あいつがこの旅で大きくなったら、自分の存在を考えるよ  
うになるだろう。)

「見えているものの裏まで…他人の気持ちまで考えちゃう人なんだ  
」!!

(強くなるために残しておいた命を…お前は全て踏みじめる気か!?)

「私はルーフスさんがそんな人だって信じてる…!!」  
「大好きだから」  
「!!」

ルーフスは真顔になる。

・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・  
・

・

ルーフスは赤い世界にいた。

ここは…フェリクスの記憶の中か…??

降りしきる雨の中。

空き缶が一つ置いてある。

知らない男。

こわい。にげたい。

ああ、けらないで…なぐらないで…おじさん。  
がんばるから。ぼく、がんばるから…

檻の中。

目…目…目…

汚れた少女。

ぼくとおない年。君はぼくに笑ってくれた。

きみを見たら、なんだかともうれしくなった。

また雨の中。

手を繋いで、裸足で走る少年少女。

逃げるんだ。しあわせになるんだ。

工場。

彼女のためだけに…

彼女が苦しまないように…!!

小さな部屋。

これでもう、寒くないよね…

君といつまでも一緒にいられるよ…

病院での指輪。彼女の泣いた顔。

何年かかって買えただろう…

遅くなったけど、これが僕の君への気持ちだ。

雨の中。

彼女がいなくなる？

彼女はいなくなってしまう？

そんなのごめんだ…!! 私は…!!

病院の中。

水が欲しいのか？それとも何か食べたいか？

なんでそんなことをいうんだ!?

お願いだ!!まだ私の前から消えないでいてくれ...!!

!!  
.....  
ああああああ  
!!!!!!!

憎い。

悪魔達が私を睨みつけている。

全てが私を嫌っている。

そうか、皆敵なんだ。この世界など消えてしまえ

消えてしまえ

消えてしまえ

消えてくれ...

皆...消えてくれ...



「近くになれそうな奴がいなかった。」

ルーフスの姿は黒い影となった。

そして中から

ルーフスとフェリクスが現われる。

ドサッ…

「ルーフスさん!!…はぁ…良かったですぐ!!」

チェリーが泣いて抱きしめる。

チェリーの胸が顔に当たる。

「ちょっと…チェ…チェリー…」

チェリーの姿のへろブラインは真顔で、顔にダラーと流れる涙をハンカチで押さえた。

ルーフス達は体制を立て直して言った。



へロブラインは言う。

「偶然にも、私はMorphの魔法を無効化できるのだ。

さあ、降参するんだ。Mr・F。」

Mr・Fは言った。

「……諦めるとしても……??」

Mr・Fは白衣の裾に隠したボタンを押す。

ビュウウウ!!

Mr・Fの乗っていた中央の丸い床が天井まで突き出した。

「しまった…!!外に出られてしまった!!」

既にミュータントモンスターの屍があちらこちらに転がっていた。

Mr・Fはバルコニーに立つ。

「いた！Mr・Fだ！！」

火山の戦士達はざわめく。

民族の長は命令する。

「矢を構えろお！！」

「……！待て、何か話すつもりだ。もしかしたら降参宣言かもしれない。」

Mr・Fはペンマイクで放送を開始する。

「君達、今から私は、この惑星ほしになろうと思う。」

「……何？」

「あいつ……とうとう頭が狂っちゃったようだ……」

「Mr・F!!お前の負けだ!!降参しろ!!」

「「「「「「「降参!!」」」」」」」

「「「「「降参!!」」」」」

「「「「「降参!!」」」」」

戦士達はコールをする。

Mr・Fはあざけ笑ってバルコニーから降りる。

中からチェリーの姿のへろブラインが叫ぶ。

「みんな!!逃げろおおおお!!」

ボアアアアアア!!!

「な…なんだあの影のようなものは…!!」

魔法の国の王様は気づく。

「あれは…Morphの魔法…!!」

…まさかそれを…惑星に適用するといつか!!

止める…!!」

魔法の国の王様は叫ぶ。

「私でさえ国を制御し大きな副作用を負ったのだぞ…!!?」

素人のお前では無理だ…!! 制御すらできなくなるぞ!!!」

「王様…!!」

サフラが心配そうに王様を見た。

バツ…

世界は光に包まれる。

60：結末

戦士達は目を開ける。

Mr・Fの姿が消えただけで、何も変化はない。

「……？……何も起こらない」

「Mr・Fは何をしたの？」

「さあ……まさか嘘言っただけで逃げ出したんじゃないの？」

「はは……所詮はチキンだったってわけか。」

「……違っぜ」

ヒドドラは足元の違和感を感じた。

ヒドドラは声を張って叫ぶ。

「お前らめ!!全員歯め喰いしばつとけ!!

これから来るのは…災害だ!!!」

『ははははは!!…さあ…戦士達よ…災害に耐えてみるがいい…!!』

世界に大きな声が響き渡る。

ゴトゴトゴトゴトゴトゴトゴト…!!

「うわああああ!!」

「コアア!コアア!!」

「オーーーン…!!」

「きゃああああ!!」

戦士達は悲鳴を上げる。

地面が大きく揺れだす。

バリ…バババババ…!!

火山に亀裂が入る。

バァァァァァァァン!!!!

火山が噴火した!!

火山弾に、大量の煙が向かってくる…!

「全員逃げろおお!!」

ルーフス達も飛行艇から飛び降りて逃げる。

「あんちゃん!」「チェリーさん!」

ジャックとココアはルーフス達を見つけた。

「おう!よかった、お前ら無事だな…」

逃げるぞ!!」

「恐竜たちはまた俺の船に乗るんだ!あわてるな!!」

スタークが誘導する。

「どこまで持つかは分からないが…我々はバリアを張るぞ!」

「分かった!!」「おう!」「うん!!」



ヒドラと王様、弟子三人組、ナーガは前に魔法で壁を作る。

煙はバリアに防がれ、上に向かっていく。

しかし火山弾は戦士達の頭上へと降り注ぐ。

赤い牛男がでしゃばってくる。

「俺の出番のようだな!! マッス…!!」

「待て! 壊したらもつと被害出るだろ!!」

「こっちは…避けるんだ!!」

「私がいこっ…」

名乗り出たのは巨人だ。

巨人は巨大な剣を腰に差して一つの火山弾へと向かう。

「こんなものなど…私の手のひらに劣る大きさだ…」

バシュッ…!!

シュウウウ…!!

巨人の顔がゆがむ。

熱さで手が少し焼けた。

巨人はがっちりと掴み、

近くの海へと放り投げた。

バシヤアアン!!

「「「「  
「「「「 おおおおお!!」「」「」

「いいぞ！巨人!!」

巨人は汗を流して答える。

「これで終わればいいがな…」

火山弾はまだ降り続ける。

「さすがにこの量は受け止めきれん…!!」

「やばい!! 次の奴が来るぞ!!」

火山弾は船に近づいてくる。

「まずい!!後退できるか!?

」間に合いません!!」

「トト...!!

「「「ん?」」」

船が後ろに動いた...?

「トトトトトトトト...

ジャバアアア...

船が勝手に後ろに動いている...!!

バツシャアアアン!!

間一髪。

火山弾は島の岸に落っこちた。

大量の水しぶきが船に降り注ぐ。

スターク船長は海を見る。

「おお!!シャー」じゃねえか!!」

そこにはたくさんのサメが船を押ししていた。

「久しぶりだな。今日は俺の友人達を連れてきたぜ。」

隣には照れながらあいさつする人魚がいた。

「おお、これはかわいい友達じゃねえか…

お前らありがとう!!恩に着る!!」

「船は任せとけ。俺らがうまく避けてやっからよ!」

「…あとは地上だ…巨人だけで防げるはずがない…!!」

「じっぢゅっじっぢゅ…

ブラキオサウルスのルーパが必死に海水を飲んでいる。

「ルーパ…あなた…何する気なの?」

エミリアは不思議そうに見る。

「じじぢぢぢぢ!!」

ルーパは口から水鉄砲を噴射する。

シュパアアアアア!!

火山弾の勢いが弱まり…

なんとかバリアの向こう側へ落ちた。

ドオオオオオン!!

グアアオオオ…

ドオオオオオオオン!!

火山弾にエンダ ドラゴンが突撃する。

シャアアン!!

火山弾は海へと落ちていった。

火山弾は次々に巨大な戦士たちに防がれていく。

「いいぞ!!」

「ありがとうー!!」

「…よし、もうバリアはいいだろう!」

「次はどうするぶん?」

「ん…そうだな…どうすれば…」

「おい、おっさん。」

そこにいたのはメイド服の娘。

しかし姿が変わり王様のすがたになった。

「お前は…ヘロブラインか…」

ヘロブラインは魔法世界の住人達に呼びかけた。

「みんな、魔力を充填させておけ。俺に策がある。」

『…ぐうっ!!…体が痛い…引き裂かれる…!!』

王様は惑星の声に気付く。

「副作用が始まったようだ…」

奴は制御できなくなるだろう。」

ヒドゥラは受けた。

「…災害が収まりや吉、災害の猛攻が始まりや、凶ってこつたな。」

「…神様…どうか…」

「…どうか幸運を…」

ヒュウウ…

ヒュオオオオオオ!!!

ビュウウウウウウウ!!!

突如火山のふもとに竜巻が出現した。

巨人が丸くすっぽり収まってしまつような巨大な竜巻。

戦士たちは絶望した。

「なんだと……」

「あんなもん……」

「どつちやって避けねばいいんだよおお……!!!!!!」

竜巻は「こちらに急接近してくる。

エミリアが叫ぶ。



「みなさん!!恐竜の足につかまって!!!」

巨人も叫んだ。

「俺にもじゃんじゃんつかめ!!!」

戦士たちは大きな恐竜と巨人の足を掴む。

「絶対に離すなよ…!!!」

ビュオオオオオオオオオオ!!!

火山は煙の混じった暴風に包まれて何も見えなくなった。

暴風がやっと晴れた。

戦士達は…

「…死ぬかと思った…」

どつどつやら全員無事のようだ。

『……………』

世界は静かに唸っている。

「…どっちら魔力が衰え始めているようだ。」

では諸君!!…へロブラインに魔力を送るのだ!!」

「OK、任せとけ…。」

へロブラインは呪文を唱える。

M o r p h の魔法を無効化する魔法を唱えているのだ。

しかしへロブラインだけでは魔力が足りない。

そこで魔法世界の住民が魔法を送っているのだ。

…!!

（何やら違う輩からも魔力が送られている…？）

船の上から。

スターク船長がヘロブラインに向かって手をかざす。

クレイソルジャーズ達も小さな手をかざしていたのだった。

（ありがたい…魔力は十分足りた…!!）

（今…!!）

世界はまた光に包まれた。

戦士たちは閉じた目を開ける。

大地にMr・Fが横たえていた。

「死んだのか？」

「動かないな……」

戦士達全員が駆け寄る。

Mr・Fは目を覚ます。

「……これで終わりだ……」

Mr・Fはふらふらと周りに落ちていた石を取る。

そして弱弱しくルーフスに投げつけた。

ルーフスの頬に石がぺしっと当る。

「…よせ、体に響くぞ。」

戦士たちはその反撃を沈黙してみていた。

Mr・Fはルーフスに殴りかかる。

ぱしん。

ルーフスの頬にごぶしが跳ね返される。

「…やめる。」

「まだだ…次で…」

フェリクスはもう一回殴ろうとした。

そのまま肩から崩れ落ちる。

ドサッ…

「はぁ…はぁ…」

フェリクスは震えながら右腕を持ち上げて殴る構えをしようとする。

「やめろ!!!」

ルーフスは怒鳴る。

フェリクスの体がびくつと驚き、腕が落ちていった。

「世界は消えないのか…世界は終わらないのか…!!」

消える消える消える消える!!みな消えてしまえ!!

このくそ野郎があああ!!!あああああああああ!!!

フェリクスは混乱しているようだ。

無茶苦茶に叫び始めた。

ちゃん…

ルーフスは人差し指でおでこを軽く突く。

フェリクスはそのまま後ろの大地へと開いた。

フェリクスは涙に染まった目を開く。

フェリクスは叫ぶのをやめた。

そこには無限に、壮大にひろがる星空があった。

こんなものがこの世界にあったなんて。

「どつだい…」の世界で、何よりも一番素敵なものだ。

ルーフスは笑顔で言った。



戦士達も星空を見上げる。

「おお…」

「すげえ…」

「戦いで気にも留めなかったが…本当に素敵な景色だ…」

フェリクスは違う涙を流して笑って言った。

「…なんて…最高な世界なんだ…!!」

私はこの世界の影しか知らなかったのだ。

私のこれまでには感動が無かったのだ。

だからくだらない計画なんか立てて。

くだらない計画をくそまじめに実行して。

くだらない敗北をしてしまったんだ。

もう世界が存在しようが、どつでもいい…

過去の悪い思い出などどついででもいい...

今私が思うのは、

なんて素晴らしい世界に、私は住んでいたのだろうか...

「その巨人よ。」

「…ん？」

フェリクスは巨人を呼ぶ。

「俺を連れて行ってもらいたい場所がある。」

巨人は不機嫌な顔をする。

「さっきまで世界をどうかしよつとしていた男の頼みを引き受けるバカがどこにいよう…」

「…自殺を懇願してもか？」

巨人は驚愕の目をフェリクスに向ける。

疲れ切ってるが、目はどうやら本気のようにだ。

「…分かった。」

戦士たちはフェリクスを運ぶ巨人の様子を見つめている。

「…火山の火口だ。」

「おうよ。」

ドスン…

ドスン…

ドスン…

「…巨人さん、ちょっと失礼します。」

「おう。」

ルーフスは勝手に巨人の腕に乗る。

「なんで自殺するんだ？」

「俺にはこれから生きる義理はないよ。」

「…そうか。」

フェリクスは笑う。

「まさか俺を止めに来たんじゃねえだろっな？」

「別にとめないさ。お前の決断だ。それに…」

「彼女もあっちにいるんだろ？」

フェリクスは笑う。

「ハハ…どうせ会えねえだろうけどな。」

「そうか？俺は会えると思うけどな？」

火山の火口に到着した。

「お前らには迷惑かけちゃったな。」

「なあに、旅には刺激が必要さ。」

「…よく聞かせ。」

フェリクスとルーフスは笑いあう。

人生最後の笑い。

巨人が問う。

「お二人さん、もういいか？」

「ああ。」

「わかった。」

「あはよ。」

巨人の手のひらがひっくり返される。

フェリクスは火口へと落ちて行った。

フェリクスの目には星空が映る。

ありがとう、世界…

フェリクスは笑ったまま溶岩に包まれていった。

こうして、フェリクスの野望は打ち砕かれ、

世界は救われたのだ…

最終回：The beginning .

「やったああああ!!」

「勝ったぞおお!!」

「世界の勝利だ!!」

「ジュウウ!!!」

戦士たちは騒ぎ始める。

我々は世界の危機を見事脱して見せたのだ。

世界中の。

いろんな肌の色の。

いろんな瞳の色の。

小さい者、大きい者。



さらに恐竜やモンスターまで。

全員が喜びを分かち合ったのだ。

ルーフスは巨人の肩から降りて火山を見た。

そして火山に背を向け、悲しみを含め笑ったのだ。

「ルーフスさん！」

「あんちゃん！」

「ルーフスさん!!」

「ワオン!!」

4人が飛びついてきた。

「おっと、ははは、お前ら…」

ルーフスは笑う。

チェリーが泣きながら笑う。

「よかった…誰も…失わなかった…!!」

「全員が無事でよかったよ！」

「私も…とっってもうれしいな!!」

「ワン！ワン!!」

ルーフスは幸せそうに笑った。

「本当によかった…！」

シャッシャッシャッシャッシャ…

ポー…!!

見れば草原を走る長い機関車には大勢の人が乗っていた。

さらに巨大な軍艦に飛行艇も泊まる。

「ありがとうおおおお!!」

「かっこよかったぞおおおお!!」

「お疲れ様〜!!」

戦士達に避難していた人々がお土産を持って駆け寄ってくる。

戦士たちは力強く手を振った。

火山はすぐに人でいっぱいになった。

人々は互いにハグをし合った。

世界は一つに集まっていたのだった。

「世界の人民たちよ!!」

スターク船長は船の上から大きな声で叫ぶ。

世界中の人たちがスタークに注目する。

「ここに、世界の人々が集まった!一部ではない、全員だ!!」

これから私たちは、復興などいろいろあるかもしれん。

しかしこの時を見過ごすわけにはいかないだろう！

皆で宴を！始めようではないか！！」

『ワアアアアアアアアアアアアアアア…』

全世界の人々が賛成する。

さっそく準備が始まった。

舞台は火山近くの真っ平らな草原の上。

世界中の大工たちが屋台やステージを建て。

世界中のシェフ達が腕によりをかけ料理を作る。

世界中の大道芸人たちは自らの芸を練習し。

世界中の医療関係者たちは道具を揃えていた。

世界中の一般市民たちは飾り付けを手伝い。

世界中の戦士たちは力仕事を手伝った。

これは『世界』が主催する、『世界』の宴である。

全てのセッティングが終わった。

いよいよ宴が始まるのだ。

司会がマイクのテストをしてから、

「全世界のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、  
おねえちゃんお兄ちゃんに妹さんに弟さん、戦士達もモンスターも  
恐竜も!!

ただいまより「世界の宴」が始まるよー!!

『ユトー

』!!

『ワアアアアアア!!』

どっと歓声があがる。

「この中央のステージでは、世界中の芸人たちが自分の芸を見せてくれるぞ！」

有名なアーティストも出演しちゃうだろうな!!

さらにここでは世界中のいろんな屋台も食べられるぞ!!

体調悪けりゃ救護テントへ急ぐんだ！それだけ！

さあ、じゃあみんな、めいっぱい楽しんで行けよー!!

『ワ

』!!

「あんちゃん、僕たちはどっするぞ。」

「そうだな、みんないろんな人に会いたいだろっ。」

「ここは各自解散ってことで…でもそっだな、時間経ったらまた集まるっ！」

「はい!!」「うんわかった!」

「ワオン!!」「了解!!」

ルーフス達は各自散って行った。

~~~~~ココアの冒険~~~~~

私はチェリーさんの後をついていく。

「チェリーさん!」

「あら、ココアちゃん。」

「私、チェリーさんと一緒に歩きたいな!」

チェリーさんはほほえんでくれた。

「私もよ。」「ココアちゃん!」

「チェリーさんは誰に会ったつもりなの？」

「そうね…まずはヴァイオレットかな？」

「ヴァイオレットさん？」

「うん、私の親友なの！」

「チェリー!!」

噂をすればスーツ姿の女の人が涙ながらに駆け寄ってきた。

その女の方はチェリーさんに抱き着いた。

「よかった！チェリーが無事で…！」

「えー？まさかヴァイオレット、私が死んじゃうって思ってたの？ふふ…！」

「そうよね！チェリーなら死ぬはずもないわ！」

チェリーが抱き着き返した。

「私も、あなたが生きてて本当によかった…！」

チェリーさんの瞳がすこしうるんだ気がした。

「ヴァイオレットさんー速いですよー…！」



後ろからとことと私と同じくらいの子が近寄ってきた。

女の子はチエリーさんを見かけるとペこりと挨拶する。

「いんにちはー」

チエリーさんは笑って答えた。

「いんにちはー」

「？」「？」

目が合う。

私は恥ずかしながらに咄嗟に目を地面にそらしてしまった。

顔があつくなる。

私は同年代の女の子とは話したことがないのだ。

「わたしはリサっていうんだ！あなたは？」

女の子は元気に話してくれた。

「…わ、私は「コリア」っていうんだ…よろしく…！」

恥ずかしながら話す私とは対照的に女の子は笑顔で答える。

「一緒にまわるー！」

「…！…ひんー！」

でも私は、この時初めて友達ができたと分かったのです。

「チェリーさん、ごめん、リサと遊んでくるー！」

チェリーとヴァイオレットさんは笑顔で送ってくれた。

「いってらっしゃいー！」

~~~~~

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

「いやーあの子かわいいねー。新しい仲間？」

「うんー最近であった仲間なんだけど。」

「…あの子はね、私と同じ境遇なんだ…」

「…！…両親がいないの？」

チェリーはうなずく。

「だから私は、あの子の気持ちがわかるんだ。

自分は独りなんだってさびしい気持ちがね。

だから私は、あの子の母親の存在になりたいって、  
あの子を守りたいって思ってる。」

「…偶然だね。私も同じ。」

「え？リサとヴァイオレットも？」

「そう。私はね、昔っから勉強熱心で、学校の休み時間でも勉強してたんだ。

それで、ほかの女の子たちは私に近寄りづらくなっちゃって、友達なんてできなかった。

彼女はね、まだ10歳なのに私の秘書さんなんだよ。」

「そうなんだ…。」

「そして、彼女も同じだったんだ。だから私も、彼女を守りたいって思うっちゃうの。」

「ふふ…お互い、頑張らないとね。」

「そうだね。」

私とヴァイオレットは微笑みながらリサとココアを見つめていた。

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

ジャックは両親とともに行動していた。

「ジャック、何が食べたい？」

「うーん…そうだな…ハンバーガー食べたいな！」

「よし、じゃあハンバーガーの屋台へ行こう！…」

えーっと…あれ…これは…こっちな？こっちな？…」

「お父さん、貸してみてください。」

ジャックは父から地図を受け取る。

「こっちの方角だね！」

「まあ…」

お母さんは僕の成長に驚いたようだった。

僕は少しうれしくなる。

ハンバーガーの屋台のとなり。

「グラス・ガビアーノ・レストラン」と書いてあった。

「あ、アルミロさんのレストランだ！ごめん、母さん、父さん、こっちに変更するよー」

「いらっじゃいませー」

「このしゃがれた独特の声は…!!」

あの『ネズミのお助け屋』のデブではないか！

「ああ!!ネズミ男!!」

「げ!?あんさん私だちのごと知っでんのかいな!？」

「今度は騙されないぞー」

ジャックは鞆を警戒する。

店内からアルミロさんが出てきた。

「久しぶりだね、ジャックくん。」

「あーお久しぶりです!…:何でこいつらここにいるんですか!？」

「ああ、それはね。」

彼らはやっと改心したそうなんだ。2週間前にこのレストランに弟子入りを求められてね。

料理を教えながら、ウェイターとして雇っているんだ。」

「!…へえ…:そうだったのかー」

細いネズミ一人も駆けつけて3人で照れた。

「さっきはごめんね、疑っちゃって。」

細いネズミが答える。

「いやいや、元は俺たちがすっかりしてなかったただけですから。」

俺たちはこのレストランで皆に罪滅ぼしをして、同時にシェフになる夢をかなえたいと思ってるんです。

ネズミは食べ物が好きですからね!!」

アルミロは自慢の弟子だといわんばかりにうなずく。

「おおー応援するよー3人ともー」

「へへへ…ありがとうございます。…おおっ、そっだし注文をどうぞー」

「じゃ、ハンバーガーセット3つで!!」

「かしこまりました!!」「お手拭きおもちゃもどうぞー」

ネズミたちは元気よく駆けていく。

泥棒の時よりも目が一段と輝いていた。

僕には、分かったのだ。

~~~~~

~~~~~ステーラの冒険~~~~~

「狼軍団！バンザイ!!」

狼達は互いの皿やグラスをぶつけ合う。

ビストは元の人間の姿に戻っていた。

「がっはっはっはっはー!!」

ビストとライモンは互いに酔いながら笑いあう。

「いやー！あっぱれだ！こんなたくさんの仲間と話し合えるなんてな  
「!!」

「ワオン!!」

「ガウ!!」「バウ!!」

「……?……?……?と……?でお前はどこが狼なんだ?」「ガウ。」「訳……そうだよ」

ビストはライモンに尋ねる。

ライモンは少し考えた。

「うん…どこから話そう…ん？」

ライモンが遠くに見える狼を見つけた。

ステーラ達も見る。

みると頭にゆずのワンポイントをつけたかわいい狼だ。

サクラノ国のミネゴロウの家に住む狼、ユズだ。

「ガウ!?」

魔法の森の狼達とビスト率いる狼たちはハート眼になった。

「ワン!!」

ステーラが近づく。

「キャン!!」

ユズとステーラはうれしそうに回る。

ビストとライモンは互いに笑う。



「おう！嬢ちゃんもこっち来て話し合おうじゃねえか！」

「ガウガウ！ガウガウ！」（訳…こっちだ！こっちだ！）

「ワン!!」

ステーラは「行こう！」と誘う。

「…キャンー！」

ユズは少し赤くなって「うん！」と答えたのだった。

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフスは人ごみをかき分けて探す。

どこだろう。

無事なのだろうか？

無事でいてくれ…!!

…



「…なんか食うか…」

「そうだね…」

ルーフス達は屋台を歩く。

「…久しぶりだな。こうやって親子で平和に歩くのも。」

「だね。確かに、前に会ったときもごちゃごちゃした最中だったからね。」

「こうやって…確か昔は、ホットドッグを丸かじりしてたっけな。」

「はは、懐かしいや……そうだ！ホットドッグ食おうぜ！」

「お、いいな。じゃあその屋台にしよう。」

見るとエプロンと三角巾をつけた女性がソーセージを焼いていた。

「すみません…！」

「はい、何個にしましょう…」

父と子はぽかんとした表情になった。

なんと。

お母さんではないか。

「!!!」

お母さんはびっくりしたようだ。

顔に手を重ねて声もなく驚いた。

ルーフスと父は先に、仲良く吹き出してしまった。

「はははははは!!そりゃ見つからないわけだ!!」「はははは!!」

母はきよとんとしていたままだった。

店の番を近所のおばさんに代わってもらって。

ルーフスは親子三人で仲良く話をした。

「ルーフス…本当におつきくなったね。」

「はは、まあ食って寝てうごいてりゃそのうちね。」

「いや、外見だけじゃないぞ。最初は弱弱いヒヨッコだったのが、いまじゃ力強い獅子のようだ。」

「…それは俺だけで成長したわけじゃないよ…」

旅で、いろんな仲間と出会った結果が、今の自分になっていると思うんだ。」

母と父は互いに顔を見合わせて笑う。

「はっはっは!!」「ふふふ!!」

「?…なんかおかしい」と言ったか?」

「その言葉、俺も昔に言ったことがあるんだよ。」

「お父さんにそっくりなんだから!」

ルーフスは照れてきた。

「ルーフスさん!!」「あんちゃん!」「ルーフスさん!」「ワン!」

チェリーとジャック、ココアにステーラが走ってくる。

皆もう個人でいっぱい遊んできたようだ。

「お、母さん、親父、俺の大切な仲間達だよ。」

チェリー達はルーフスの父と母の前に立って挨拶する。

「はじめまして！チェリーと申します！」

「ジャックです！」「ココアです！」「ワオン！」

「こいつは、ステラっていうんだ。」

「まあ！ルーフスがお世話になってます！」

「いえ！私達のほうがお世話になっていきますから！」

「すまねえなーこいつ俺に似てバカだから!!」

「う、うるせえ親父!!」

「ハハハハ!!」

「よっしゃ！君たち、これから私たちといっぱい話そうじゃないか！」

「はい！」「俺たちの旅の話聞いたらびっくりするだろうな！」

「ふふ！そうですね！」「あっちのテーブル空いてるよ！」

「ワオン!!」

ルーフス達と父と母は楽しく、夕方まで話したのだった。

ルーフス達だけが楽しんでいたのではなく。

他の場所でもいろいろな出会いがあったのだ。

~~~~~桜ノ道常の冒険~~~~~

「道常様、お体は大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

私はへマをして戦士としてほとんど戦いには出られなかったからな。

せめて戦士達をたたえる宴には参加したいのだよ。」

「承知しました。」

「おおおお道常様!!」

見ると小さな老人が手を握りに来た。

ハヤブサだ。

「おおーよかった…よかった…!!道常様!

桜ノ国の戦況で道常様の負いた傷を聞いたとき、じいやはもう心配で心配で!!」

「はっはっは…心配をかけたのう。だが大丈夫だ。傷は浅かったからな。」

「ふん、天下の桜を治める国の長なるものが、なんとつぎまた。」

そこにはわが宿敵、松原郷玄がいた。

ハヤブサは激昂する。

「郷玄！お前はまた道常様の悪口を!!このじじいの拳で成敗してくれよ!!」

「待て待て待て、抑えるのじゃ。今回は全く、おぬしの言う通りじゃ。

私は少々油断していたのだよ。」

「そんなお主に、今日はいいものを持ってきてやったぞ。ほね。差しだせい！」

「はは!!」

侍は私に皿に乗ったお揚げを渡した。

「ザラメユキ国名物、お揚げじゃ、侍たちはみんな、これを食べ戦へと向かう。」

「いわば戦のために作られた料理というわけじゃのうーわっはっはっは!!」

「郷玄…!」

ハヤブサは驚く。

私はお揚げをもらつと郷玄に背をむける。



そして一生懸命に涙をこらえた。

なんとという情けじゃ…!!

憎いぞ郷玄よ…なぜ面と向かって渡すのか!!

お主はそこまで私の泣き顔を見たいというのか!!

「ここで退いてはならぬ…!!退いたら男がすたるといつもよ!!

「おぬしは…敵に塩を送ったというわけだな!!!なんたる侮辱!!

「これは宣戦布告とみた!!次の召し物祭ではサクラノ国が見事!一位の旗を取ってやるさ!!」

「がっはっはっは!!無駄にあがくがいい!!」

郷玄は道常の芝居に乗って去っていった。

ハヤブサはボソツと話す。

「ずっとこの関係で、やっていければいいものですな。」

「ああ…全くじゃ!!あっぱれ!今日は誠に天晴れであるぞ!!」

道常はお揚げをかじる。

その味は、雪に似合わず温かい味であった。

~~~~~クラブの冒険~~~~~

僕はワーカーと共に屋台を歩く。

やっぱり、世界が集まるところまで活気に満ち溢れるものなんだな。

シューウウウ…

…!?

周りの世界が止まっている？

気付けば皆がみんな動かないのだ。

「クラブ、クラブ、ミナ、ドウシタ？」

「…わからない…一体何が!？」

そのとき。

上空にUFOらしきものを見た。

「なんだよ…」

UFOの中から宇宙人が舞い降りる。

まさか…世界が救われたと思っていれば…今度は宇宙人だと…!!

自分の足が勝手に揺れるのがわかった。

怖い。

この宇宙人はいったい何をしでかすのだろう。

「…Z o o 0 2 6 4 7。やっと見つけたぞ。」

僕はワーカーを見ていることを知り、自分の胸にぎゅっと締め付け  
る。

頬に汗が流れる。

「クラブ、クルシイ、クルシイ……」

宇宙人はこちらによって来る。

「さあ、私の星に帰ろう。No.002647。」

踏み出さなきゃ。

ここで踏み出さなきゃ。

ワーカーとは永遠に離れ離れになる気がする。

そして、ワーカーはまた同じ恐怖を味わうことになるんだ。

そんなの、絶対にごめんだ。

「教えてください。」

「……？」

「教えてください!!ワーカーをあなたに渡したら、どうなるのですか!？」

「……それは我々ランラル星人の役に立つロボットとして……」

「……それを強要して、また捨てるつもりなのですか？」

…彼のログを見ました。彼の映像には悪口しかありませんでしたよ。

…そのログを見る限り。僕はあなたたちを信用なりません。」

「……………」

「僕なら、あなたたちよりワーカーを大切にできる自信がある。」

「ボク、ココ、イル」

「…!!」

ワーカーが自分の感情を言った。

「クラブ、イッショ、イチバン」

僕はワーカーを強く抱きしめた。

よかった。

ワーカーも同じことを言ってくれた。

僕と戦ってくれた。

「…だめだ。私はこの地球上のロボットをすべて回収するためにここにきたのだ。」

聞き分けるわけにはいかない。」

僕は悟った。

やっぱりだめなのかな…

「クラブ、アンシンシテ。」

ワーカーが自分の手を振り上げる。

カン!!カン!!

自分の頭を殴り始めたのだ。

「!?!…:No・002647!?!何をしている!?!しっかりしろ!!」

「ワーカー!?!」

ガン!!ガン!!

ワーカーの画面表示がゆがむ。

「やめろ!!私はお前の傷つく姿を見に来たのではない!No・002647!?!」

私は呼んだ。

彼の『名前』を。

「ワーカー！やめるんだ!!」

ぴたっ！

ワーカーは止めた。

宇宙人は打ちのめされたみたいだ。

「ボク、キク、クラバダケ。」

「…分かった。命令の聞かないロボットなど、いても仕方がない。好きにするがいい。」

宇宙人は怒ってUFOに乗る。

「最後に一つ。私たちの話をしたとき。その時は君達の地球によから

ぬことが起こるであらう。」

バシユウウウウウウ...

宇宙人はそう言つとすぐに上昇して消えて行った。

ガヤガヤ...

周りの景色は動き出す。

「...どうやら戻つたようだね。ワーカー。」

「クラブ、クラブ。」

見るといつのまにやらケーキを持っていた。

「ケーキ、ケーキ!!」

「...ははは、いっしょに食べようか。」

一件落着...か...

またワーカーと一緒に、仲良く暮らせるんだな。

ワーカー。これからも、よろしく頼むよ。



~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフス達を含む戦士達は大きな町で休息を取るために寝台特急を手配された。

部屋は4人ずつの一室で、ルーフス達は別れることなく座ることができたのだ。

ココアとジャックとステーラははしゃぎ疲れたのか、もう寝てしまったようだ。

ルーフスとチェリーは窓の外の夜景を見ていた。

チェリーが話し始める。

「ルーフスさん。」

「ん？」

「最初のルーフスさんが私にかけてくれた言葉、覚えてますか？」

「ん？…なんだっけ？」

「えー？忘れちゃったんですか!？」

「あははは…「じめん」」

チェリーはぶすつとしながら言った。

「ルーフスさん、私に『お前の太陽が見たい』って言ってくれたじゃありませんか!」

「あ、そっぴやそっぴやだっ たな…」

チェリーは首をかしげて確認する。

「私は、ココアちゃんにジャックくん、ステラにヴァイオレット…  
今までの皆の太陽になっているでしょうっか?」

ルーフスは笑って言った。

「叶えられてるよ。みんな、チェリーのことを好きなんだ。

太陽を嫌いな奴なんて、この世界にはいないだろうっ?」

チェリーは笑う。

そしてからかった。

「ルーフスさんは、私の事好きですか?」

ルーフスは赤くなってから笑った。

「大好きだよ。」

チェリーとルーフスの唇が触れ合った。

チェリーの顔が一気に赤くなる。

ぶはっ…

ルーフスは唇を離す。

「へへー！からかい返し！」

と言ってチェリーに笑った。

チェリーも笑う。

「わあー…！」

びくう！！

見ればココアだけ起きていた。

「ココアはどきどきしてるよじだ。」

「「「「ココアちゃん？」「」「」「これはね？」」

「「「「そそそそそうだ、ココア、」「」「」「これはだな」

「ルーフスさん、チェリーさん、…ラブラブだね！」

「「はじっ！！」」

ルーフスとチェリーは汗を垂れ流す。

「でも…」

ココアは続けた。

「私、ルーフスさんとチェリーさん、

とっても似合ってると思うよ！！

だってルーフスさんとチェリーさん、

私のお父さんとお母さんみたいなものだもん！！」

ココアはえへへと笑った。

チェリーは涙を流す。

ルーフスもなんとか涙をこらえていた。

チェリーはココアを抱きしめる。

「…ありがとう…」ココアちゃん!!!

ココアは幸せそうに笑い続ける。

ルーフス達を、満月は温かく見守っていた。

翌朝。

目覚ましを止める。

服を着替える。

ご飯をかきいれる。

荷物を詰める。

カバンのチャックを閉める。

そして、ルーフス達は外へ飛び出した。

「よっしゃ!!次の場所!行こうぜ!」

「はい!」「行くぞー!!」「うん!」「ワオン!」

5人の元気な声が、街の中に響き渡る。

ここで5人の旅を語るのはおしまい。

しかし、彼らの旅はまた、『始まり』なのである。

終わり

## エピソード：地獄にて

ここは地獄。

地上世界の崩壊も免れ、ゾンビピッグマンやブレイズも監視を終えて

いつもの仕事に戻っていた。

ゾンビピッグマンが十人の罪人達を歩かせる。

彼らが向かっている彼方には灼熱の炎があった。

ここで罪人達は身を燃やされ、魂はガストと化し地獄をさまよつただ。

その中にはフェリクスもいたのだった。

ガチャン…ガチャン…

足かせが重く地獄に響く。

フェリクスは苦悶の声を上げる。



熱い。苦しい。

「助けてくれえ……」

「……その痛みは、今までに犯した罪の大きさを表している。

お前は世界規模の罪を犯したのだからな。痛いのも当然だ。」

ゾンビピッグマンは冷静に答えた。

バアアアアン…！

ガラガラガラ…

「!?…地獄の天井が…!!」

地獄の天井が壊れ、赤い空が見えている。

天の音が響く。

「エーテル(天国)から一人の天使が…自ら墮天使と化して地獄を目指している…」

「なんですと!!!」

空いた天井から黒い羽根をした女の墮天使が舞い降りた。

ブレイズ軍団が動き出す。

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

炎の弾丸が墮天使を襲う。

シュウ!

シュイ!!

シュウウウ!!

墮天使は機敏な動きでそのすべてを避け罪人に急接近する。

「JG...!!」

ゾンビビッグマンが剣を振りかぶる。

ドン!!

堕天使はそのままゾンビピッグマンの顔に足蹴りをくらわす。

「ぶほあ!!」

バタン!!

カララン…

金の剣が転がり、

ゾンビピッグマンは伸びてしまった。

堕天使は一度勢いをつけるため通り過ぎる。

そして罪人にむかって高速で飛ぶ。

そして一言叫んだのだった。

「フェリクス!!腕あげて!!」

罪人の中の一人が反応し、咄嗟に手を上げる。

墮天使はその手を掴んだ。

ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ…

しかし手かせが十人についている。

「おおー！いいぞ！！姉ちゃん！」

「そのままここから連れ出してくれ！！」

他の罪人たちが騒ぎ立てる。

墮天使は倒れたゾンビビッグマンの金の剣を持ち、他の鎖を断ち切った。

チャキン！！

墮天使とフェリクスは赤い空へと向かっていく。

「JJ…」



俺はくだらないことやって、結局負けたんだ。

でもそのおかげで、俺はこの世界が素晴らしいって気付いたよ。

君には、最後まで助けられてしまったね。」

「…フェリクス…!!」

周りが光で包まれた。

そこにはエーテルの広大な空が広がっていた。

ヴェロニカは話す。

「…あなたと、この景色を一緒に見たかったんだ…」

「…そうだったのか。」

「この後は、私もあなたも、地獄へ落とされることになっちゃうけどね…」

ヴェロニカは悲しい表情を浮かべる。

「俺は、今が一番幸せな時間だよ。」

ヴェロニカはフェリクスを見る。

「世界一素晴らしいものを、僕にとって世界一きれいな人と一緒に見られるんだからね。」

ヴェロニカはフェリクス笑顔に、つられて笑う。

「私も！」

分厚い雲に、くつきりと二人の影が映し出されていた。